

奇譚クラブ

1953-12.



新時代の風俗雑誌

奇譚クラブ

12

定價 百円



女側に皆様のお手元へ届きます

画帖
時代

従来本
望をと
て、こ
見まし
ざる様
愛好の
御求め

畫帖
時代物責繪卷

○裝針

縦六寸横八寸五分
横卜子豪華美本

極彩色美術オフセット
多色印刷特アート使用
繪の大きさB6版
画帖の大きさB5版

淒艷！

從來本誌に寄せられました多数愛読者の要望をとりいれました時代物の貴の画家として、定評のある三条春彦氏に委嘱いたしました。こゝに八枚の極彩色の貴絵巻の完成を見ました。何れも同好者の垂涎おくあたわざる傑作揃いであります。広く本誌読者の愛好の方々へ頒布いたします故何卒一本を御求め下さるよう、お待ちいたします。

三條春彦・画

○各葉説明文句入り○
○絶対市販は致しません○

一、山法師と靜御前
二、女スリと岡引き
三、淀吉と千姫
四、犬公方と侍女
五、八百屋お七の最後
六、新撰組と芸妓
七、十郎左エ門と腰元
八、小紫と惡旗本連

五百部限定版・限定番号入

特價 三百円

(送料五十円)

縛られた女ばかりの十六態

豪華
アルバム

美



15

縛し
ま

あ

美濃村 晃・構成

塚本鉄三・撮映

頒価 一冊 五百円 (送料六十円)

一、內容

工 足 高 腰 芋 蠟 滑 床 鯢 紅 荒 目 撥 雁 猿
ビ 小 手 打 虫 燭 さ 車 吊 念 と 白 綾 牲 欄 ぐ づ
賣 柳 手 手 虫 賣 り 物 置 念 白 絞 台 目 つ ね

【全部未発表の特写】

四人のモデルを駆使した縛られた女の集大成、優美さと緊縛感の秀れた代表的責め写真、痺れるような妖しい雰囲気は素晴らしい反響を呼んで瞬く間に限定部数を突破、ここに同好者の為に増刷分の分譲を致します。

(各葉説明入) 美術コロタイプ印刷 豪華アルバム

堺市菅原通四ノ三〇

賣切れぬうちに

曙
書
房

お早く！

(振替大阪第三四九五六番)

本誌に三回に亘り連載した“クリスチーナの
受難”キドロドシュトツク・著 吾妻新・訳

全譯

ク　リ　ス　チ　ー　ヌ

サディズム文学の最高傑作の全訳成る

再版出來！

定価 三二〇円

送料 四〇円

B 6判 二二六頁 上製函入

ボール表紙 押絵 十五葉入

可憐なる美女クリスチーナに對する
緊縛と狼ぐつは汚辱と鞭打と凌辱の
地獄図繪サディズムの粹をつくした
クリスチーナの全訳、画壇の一方の
雄某氏のアブノーマル挿繪と相俟つ
てこゝに完全なるサディズム文學の
金字塔が打ち樹てられた。

本誌愛読者に大好評を拍したクリスマスチーマの全訳を是非御一読下さるようお願いいたします。代理部へお申込み下されば早速嚴重荷造りの上急送申し上げます。

申込所

曙書房代理部

◆基盤責め◆

キャビネ版
三枚一組 三百円

◆ビニールの女◆

キャビネ版
三枚一組 三百円

◆溪流の飛魚◆

キャビネ版
三枚一組 三百円

炎責の三態
キャビネ版
三枚一組 三百円
(共)

◎鞭打ち三態◎

キャビネ判
三枚一組 三百円

川端多奈子嬢
悦虐姿態集
典型的マゾ女性多奈子嬢
の好みに従って強烈きわ
まりない縛りを敢行して
得た貴重なる悦虐姿態集
手札型七枚一組 三百円

制服の女学生

キャビネ判

三枚一組 三百円

野外全裸の縛り

キャビネ判

三枚一組 三百円

灼熱の夏の陽の下にびち
くとはねる白魚の如き
肢態にからみつく縄、野
外の傑作中より選り出し
た快心の作品揃い！

〔急襲〕連続十五枚続き

手札判十五枚一組 五百円

本号口絵の女が縛られるまでの六枚
に更に九枚追加して十五枚一組とし
た女が縛られて完全に自由を奪われ
るに至るまでの過程を活写した興味
溢れる傑作、どこよりも安い価格、
鮮明にして恰も自ら手を下す如し。

申込所

大阪府堺区区内菅原通4ノ30

曙書房代理部
振替大阪34956番

分譲

断然卓絶した特写

群を抜く素晴しき傑作

類例のない犠牲的安価

◆女体悦虐寫真集◆

◎緊縛美写真集
光沢面焼付 手札型
印画紙焼付
五枚一組(一集分) 二百円
第六篇(五十一—六十)十集
第七篇(六十一—七十)十集
第八篇(七十一—八十)十集
第九篇(八十一—九十)十集
(本誌九月号口絵参照)
新篇(本号口絵参照)
第十篇(九十一—百) 十集
感々分譲開始！

大好評！他に類のない本
誌独特の素晴らしい写真集を
是非お求め下さい。すべて
直接印画紙に焼付けたもの
で印刷ではありません。今
度新しい作品を多数発表い
たしました。今後毎月新作
を発表の予定です。従来絶
讃を拍した信用の歴史を以
つて鳴る本誌代理部へ是非
お申込み下さい、必ずお氣
に召す逸品を急送申し上げ
ます。

襲われる女 シリーズ十二態集
十二枚一組

手札型 五百円(送共)

此れは暴漢に襲われる美少女の恐怖の
姿態を縄を用いて幻想的に表現して極
度の緊縛感を誇張した得難い珍しい作
品です。

絶讃！ 未見の方は是非

吊り三態特選集 (キャビネ判)

第一組・第二組・第三組 分譲中

新版第四組分譲開始！

トリックでない本当の吊し責めの姿
態必ずや皆様を魅了し尽すでしょう。
各組(キャビネ)三枚一組五百円(共)



☆ 奇譚クラブ ☆ 十二月号 目次

断然群を抜く豪華な口絵

図解	柱とテコを用いた縛り方	滝 麗子・画
絵物語	女囚處刑の図	大川由紀子・案
責絵	美女折檻図	都築 峰子・画
写真集	羞らひ、女の立腹、野外の縛り	南川和子・画
責め写真のアルバム	〔ビニールの紐と鎖の応用〕	塚本鉄三・撮影
新しい縛り繪・強制・馴致		辻 村
瀧麗子画集	兄妹・悦唐遊戯(シーソーゲーム)	杉原虹児・画
近作選	表情 三題	伊藤晴雨・画
写真	棒責め二態・吊り人形(三人の女の縛られしヨ)	

縄とマゾヒズム

責め場の挿絵

淫 (みだらび) 火 (第十二回)

伊藤晴雨	(96)
松井籟子	(70)
栗原伸画	

映画に現れた猿轡
春風座秋の旅路

鳴山能平	(83)
青山三枝吉	(88)
杉原虹児画	

リ女同志の鶯の谷渡り	沼田扶二世	(32)
ヘアの憧憬	住田弘志	(37)
早熟なる少年の幻想	芳野眉美	(40)
切腹遊戯の告白	川合伊都子	(45)
紅花草紙の中	多山 皓	(48)
偏執の女 神体	若杉早苗	(51)
色街の女の日記		
野 三つの色の交錯		
お臍の魅力		
不見転藝妓		

残酷なる女性達 (独文絵入単行本より)	森本愛造・訳	(104)
サティズム 感情教育 (二)	吾妻 新	(110)
栗原伸画		

MSバンド	獄 收一	(120)
怪奇曼陀羅教		
悦 虐に咽ぶ	川端多奈子	(103)
らぶ・すれいぶ (第12回)	鬼山 絢策	(150)
現代文藝に現れた責め	村田 誠一	(144)
甘美なるアリスの降伏	寒川 緑・訳	(161)
飛田良二		
方 金三・画		
古川 裕子		
栗原伸画		
亀岡絃七郎		
三條春彦・画		
沼 正三		
前島 芳雄		
北山カオル		
沼 正三		

告白	凌辱の幻想と期待	(168)
八景切	婦道 一路	(178)
或るマゾヒストの手帖から		
中共引揚者の手記		
虐待の記録		
女奴隷の手記		
吾妻新氏に最後のに答える		



方縛いた用テと柱 子麗瀧

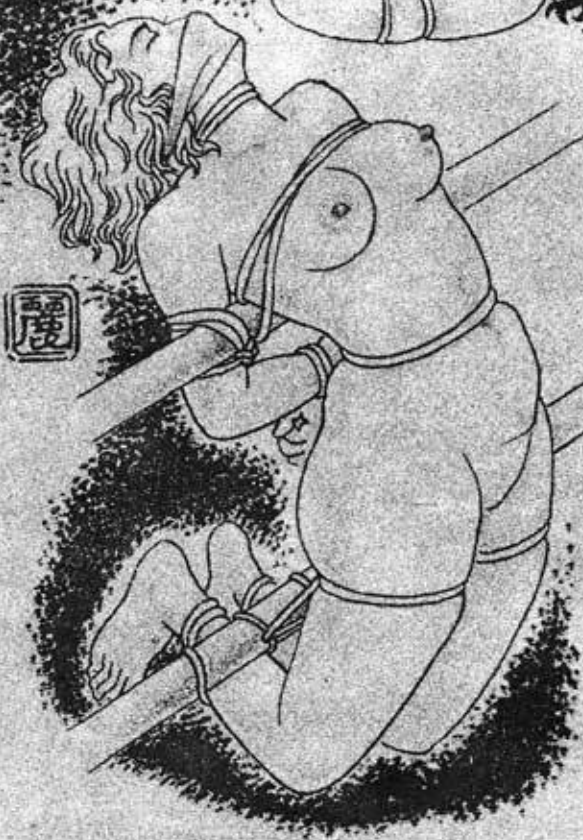
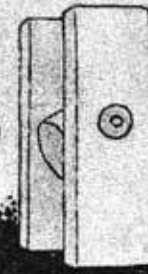
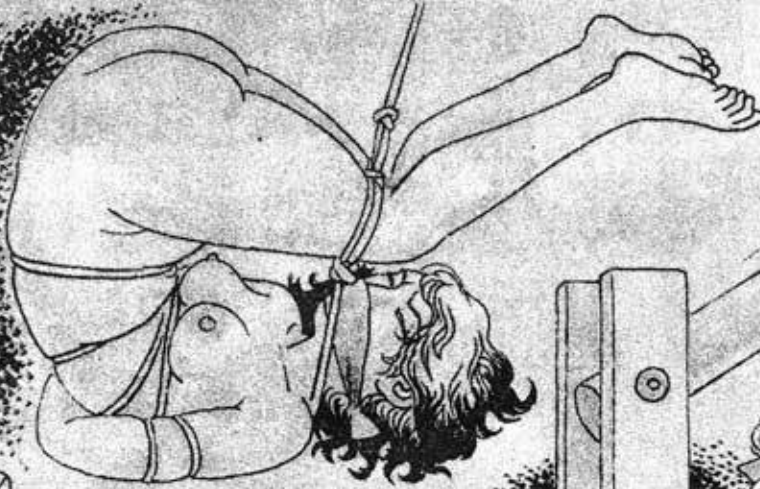
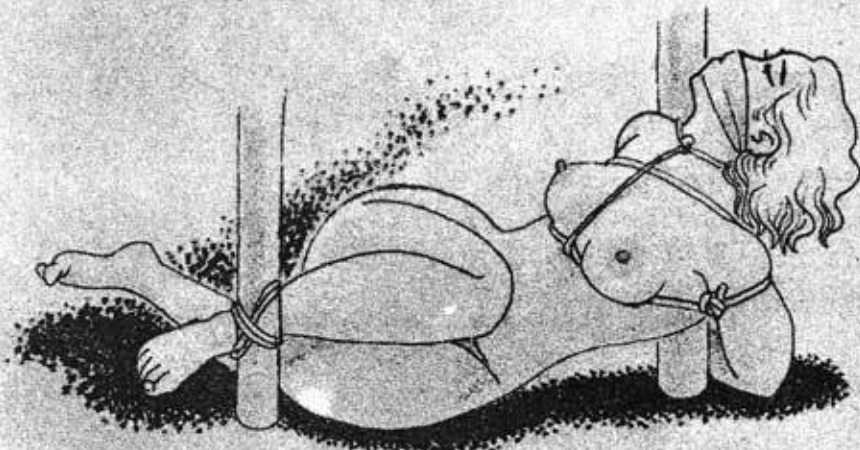
足首はX
印に組み
もも足
とを緊縛
する
大体両足は
一直線に並い
型になる

しごきを股の
間を通し腹縄
と柱にくくりつける

吊り縄を矢印の方向に
引き上げ変態吊りにして
責める方法である

足首を引き上げる縄は
縛った手首より腕を這って
引き上げる

横棒二本の上棒を背負う様に
上は吊り上げる様に両腕を縛り
下棒は両足首をくくりつける
ももを
縛った縄は下棒に
つなぐ



★ 緊縛による或るポーズ ★

—
羞^{はじ}
ら
い
—



辻村 隆・構成

塚本 鉄三・撮映

モデル・中富綾子嬢

国知州の国

都築峰子・画

引立て



大川由紀子・案

晒し

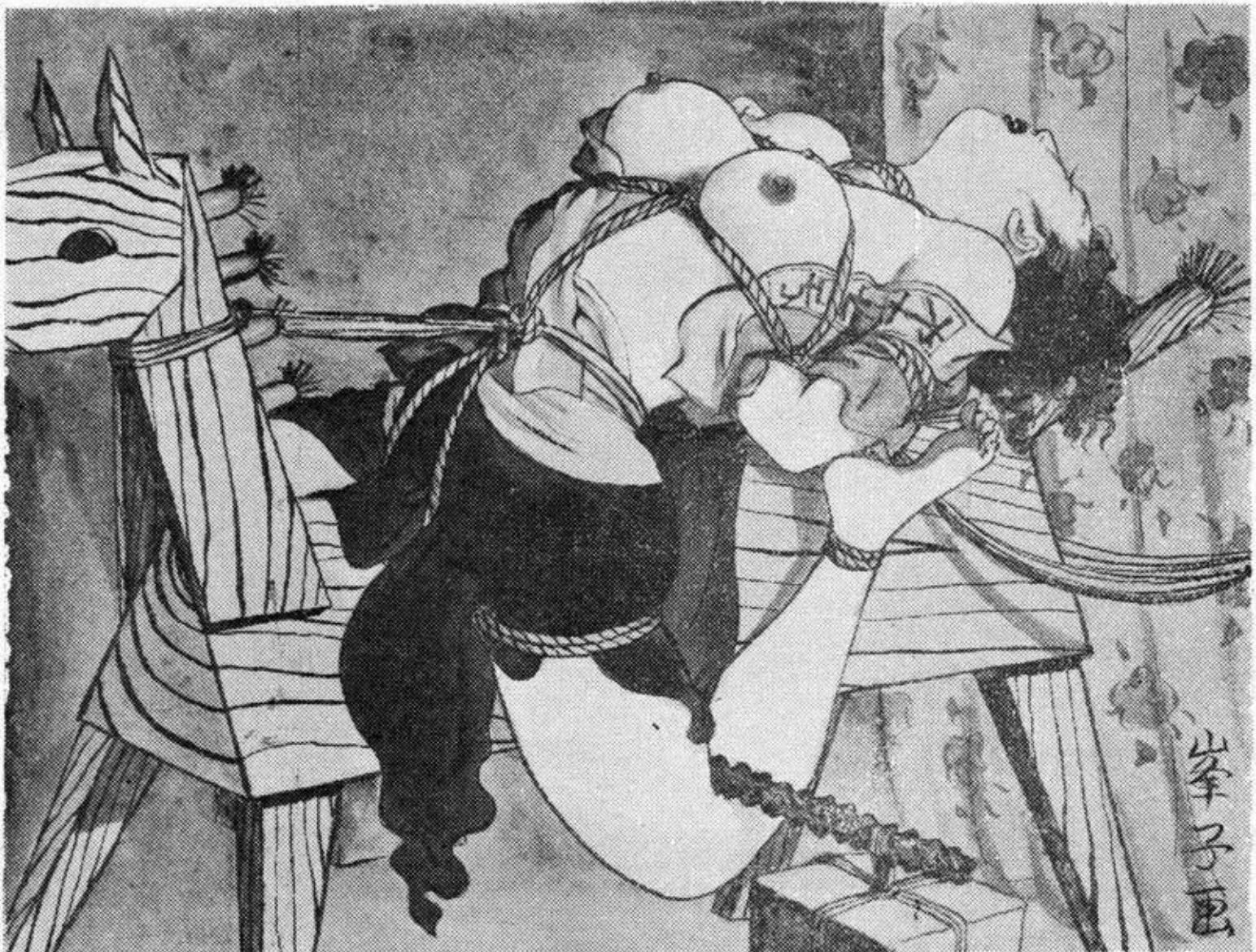
私は綾子様と二人でいろいろと工夫してお仕置の遊びをいたしておりますが、私達の刑場では柱をもたらす所がありませんので磔は駄目だと綾子様が申されます。そして或る日二人で相談して、私達

のマゾヒズムの気持をもつとはつきり表すことの出来る筋を考えてみました。一人の乙女が楽しい幸福な生活をしている中、急に捕えられて、いろんな刑罰を受けた末身に死刑を命ぜられて最後に観念して死んでゆくというのです。こうした乙女の死刑囚の気持は私達



山子画

引き廻し

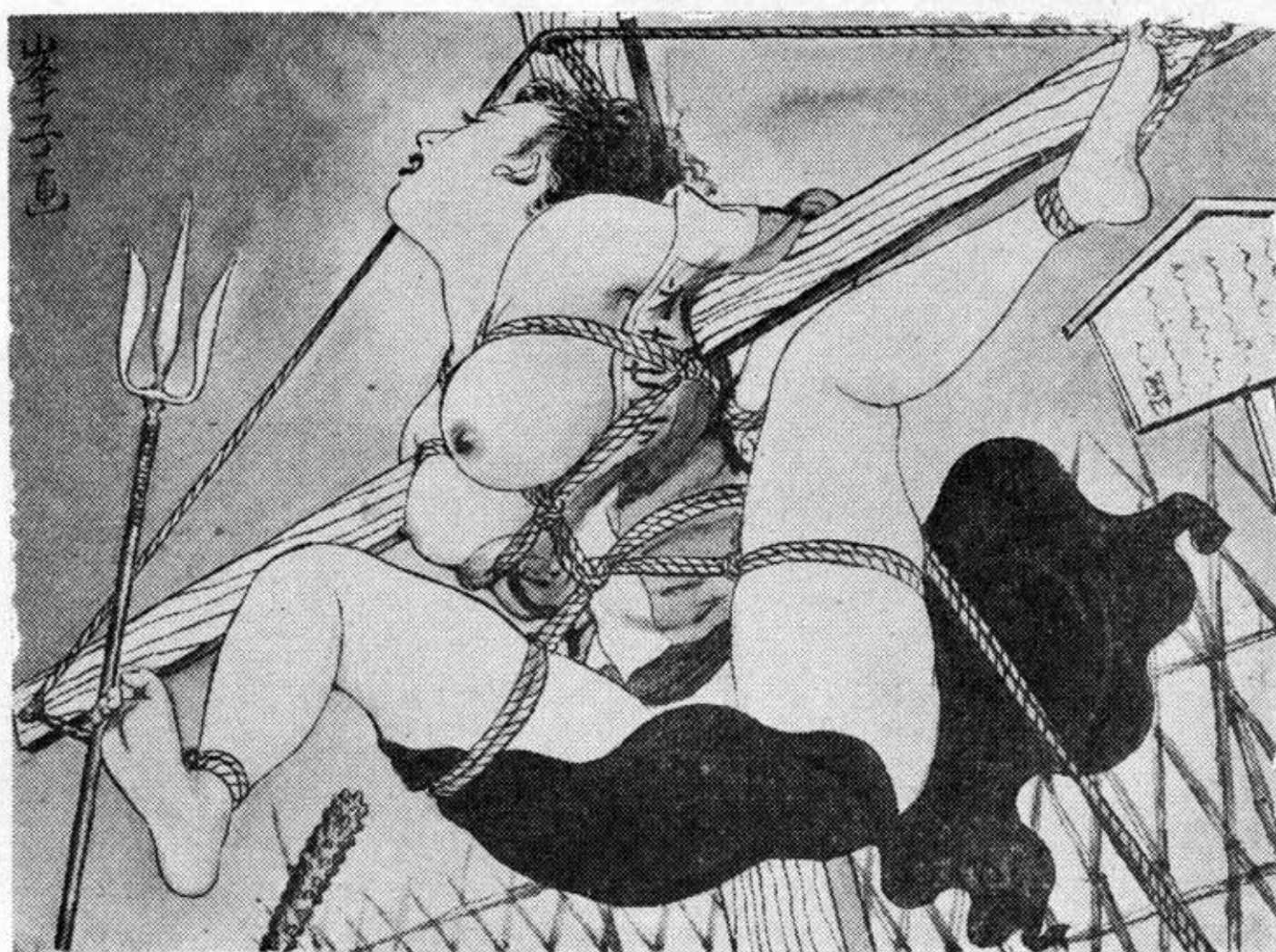


山子画



にとってもぴつたりとするのです。私達は恋愛やセックスの事は書けませんので、こういった女性の心理の変化を書いてお送りしたいと思いますが駄目でしょうか。若し私の大好きな晒しやお磯等のお仕置の絵や写真を載せて下さつたらどんなに嬉しいことでしょう。ではこれから私が処刑される迄の事

を書いてみましょう。先ず私はうす汚れた囚衣を着せられたまゝ獄舎から出されます。勿論高手小手に縛られ、縄は胸から胴、太股にまで嚴重にかゝつています。足首には鉄のくさり、こんな哀れな姿で私は皆の視線を痛く感じます。そして晒し台へ連れてゆかれます。両足を思い切り開けた恰好で私は



股ざき磔

磔

その高い台上へ置かれるのです。見物人はじろじろと私の身体を穴のあくほど見つめます。

この羞しい晒しの刑罰がすみますと、愈々刑場へ行くための引廻しです。由紀子は身動き出来ない位固く

火 灸 り

縛しめられて裸馬に乗せられます。この時も出来るだけ両足をひろげた恰好できつくきつく縛り上げてほしいのです。私達のお遊戯の時は台の上へ跨らされるのですが本当の裸馬だつたらどんなでしょう。

愈々刑場へ着きました。磔柱の正面へ十文字に縛りつけられた私は、

両脇下の囚衣を左右に押しひろげられて、大きなおっぱいが見物人の見ている前にさらされるのです。竹槍が私の眼の前に差し出されました。こうして私は衆人環視の中で槍に突き刺されて苦悶しつつ死んでゆくのです。なんと素晴らしいことでしょう。脇腹をグサツと突かれると思つ

ただけでも身体中がぞくぞくします。

次に私の大好きなのは股ざきです。両足がもうこれ以上どうしてもひろがらないという迄左右に引っぱられて、その力が遂に私の身体の抵抗に打ち勝つて、ばりばりと二つにさけてしまうなんて空想するだけでも嬉しいのです。最後は火灸りです。本当に火に焼かれたらどんなでしょう。私が柱の上の方に括りつけられ、その下へドンドン薪が積まれてくる。火がつけられて身体中へ燃え移ってきて私も私は身動き出来ない程、ありとあらゆる所を括られていくのです。相変らず変なことばかり書いてしまいました。本当に恥しくてたまりません。でもこうして書いていくだけでも気持ちが安まる感じがします。お許し下さいませ。こんな気持は死ぬまで直らないかも知れませんが、でもいつか直る様努めたいと思います。



山手子重

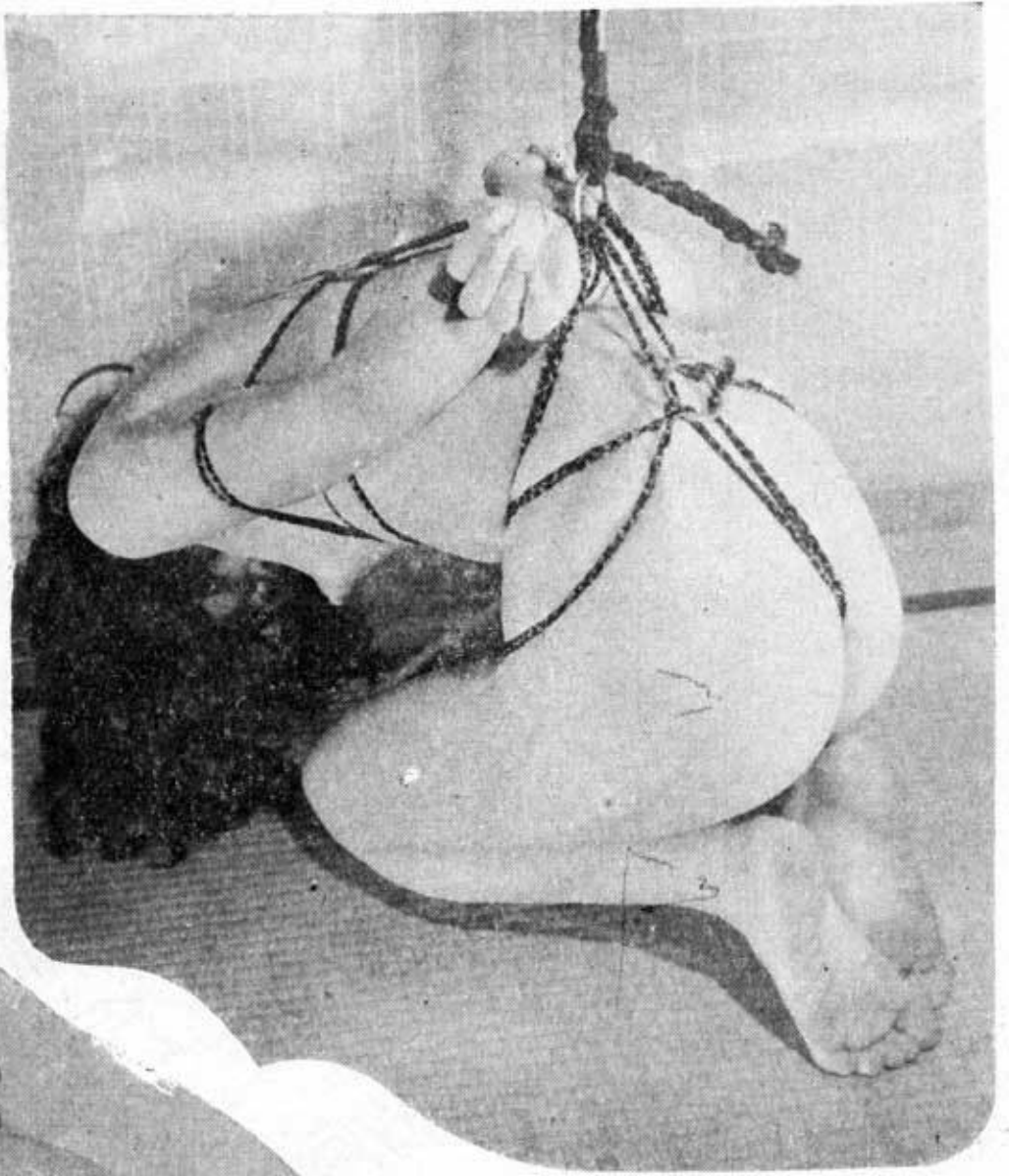


伊藤晴雨
近作選

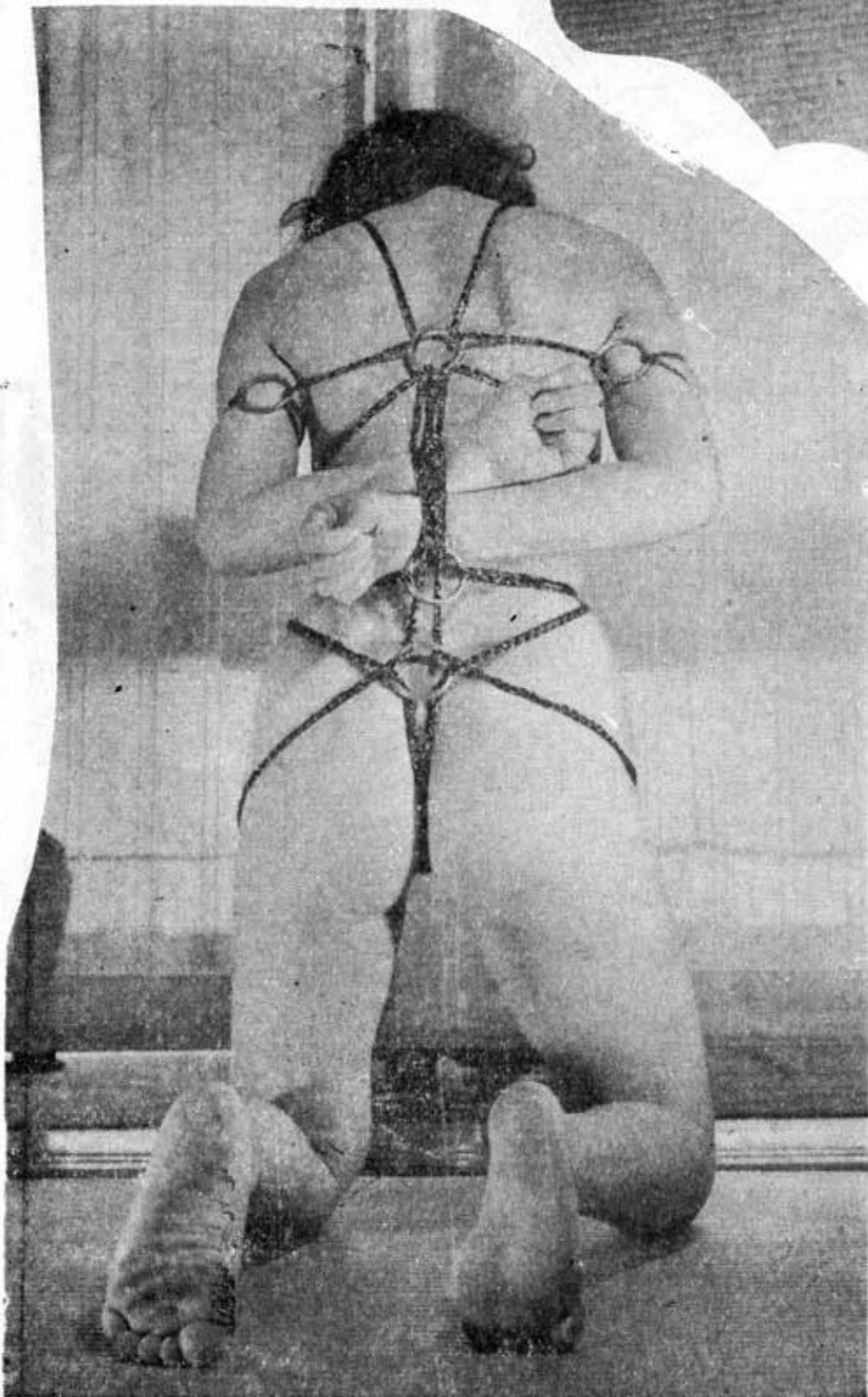
表情三題







光沢があつて適度の弾力性を持つビニールの紐を作つてみた。そのまゝでは細いので六本を編んで一本の紐にした。この紐は肌には極めて柔かく当るし、伸び縮みするから、緊縛遊戯の紐としては最も適當していると思う。それに色彩も好みのものを選ぶことが出来るので今日は何色を使う、明日は何色と ×



責め寫眞のアルバム

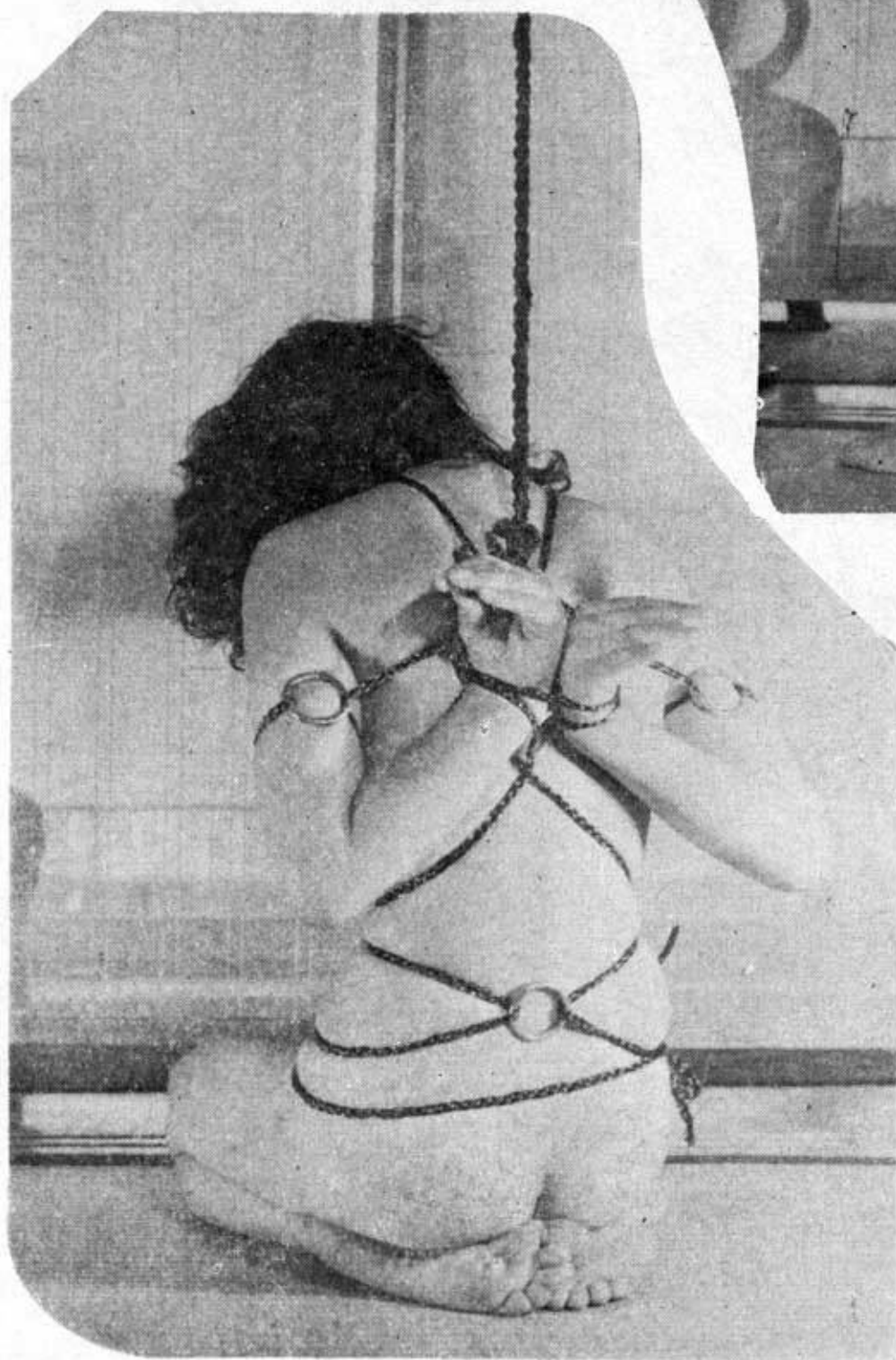
(一) ビニールの紐と鑲の應用

辻村 隆・考案



× 変えて用いるのも面白い。耐水性だから風呂場でも使用して重宝である。責め写真のアルバム第一回として小生考案の鎖を利用してみた。

普通の金物店で売っているありふれた直径四、五センチの鉄製の鎖であるが、これをうまく用いると縄の掛け方が大変スムーズにゆく。縄を締める際にもこれがアクセントとな



ってジワジワと締つてゆく。未使用の方は一度試みられるといふと思う。これが両の乳房の間やお臍の上あたりへ位置するとまるで白い肌に金の飾りでもついたやうで面白いではないか。次は又新しい小道具や縛り方について御披露することにした。御気づきの点はドシドシ御連絡下さるよう御待ちします。

強 制
きょう せい

「いや。いやッ離して……」
「何にを言ってるんだ
お前はこうされるんが
嬉しいんだろう？ さ
アおとなしく縛られる
だ！」



虹児画

致 馴
ち じゅん

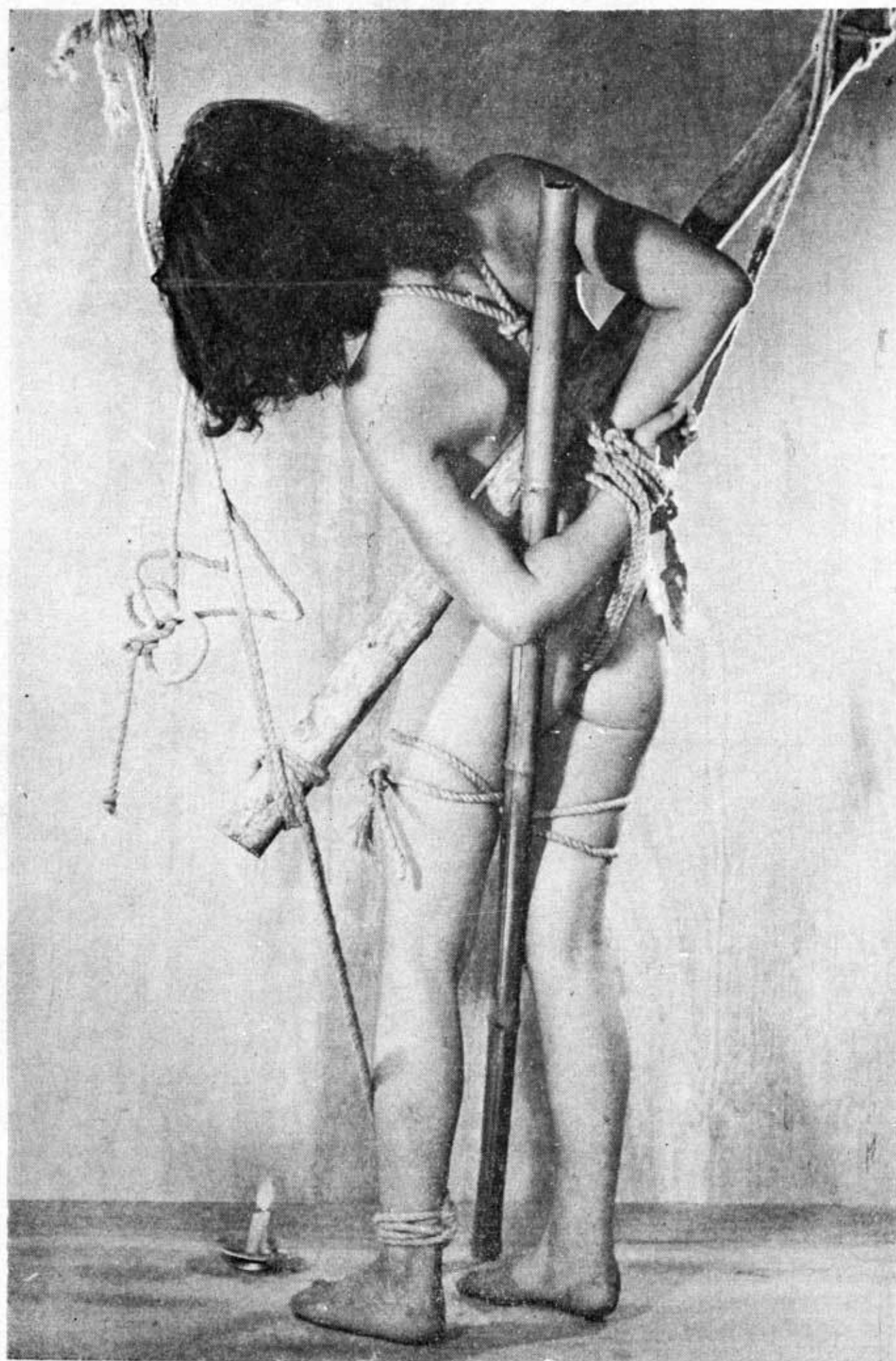
「それ、首縄だこれで
もこたえないかッ！」
「あゝ苦しい息がつま
る」
「じたばたするナ今に
お前の好きなようにし
てやるからな」



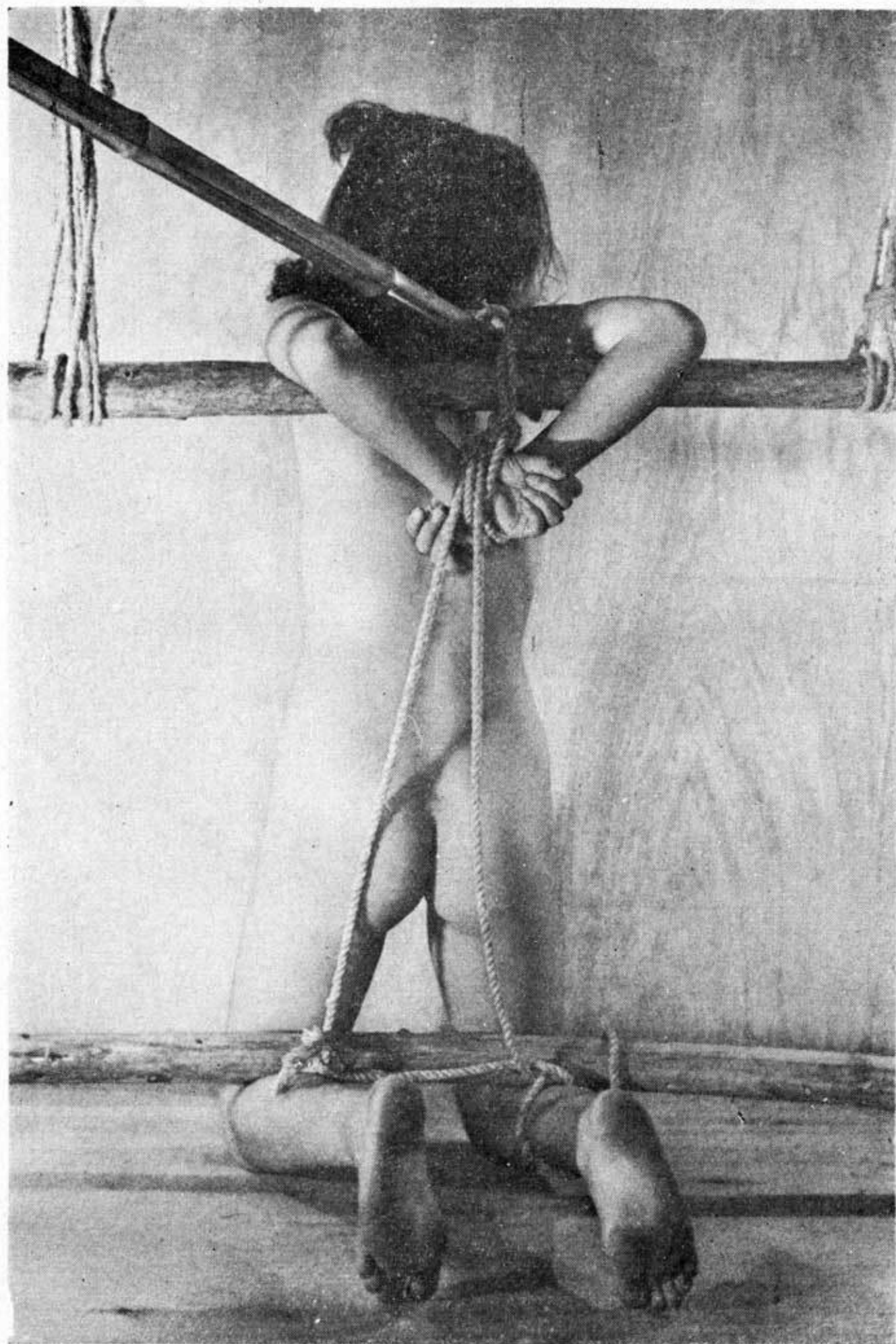
虹児画

二

態



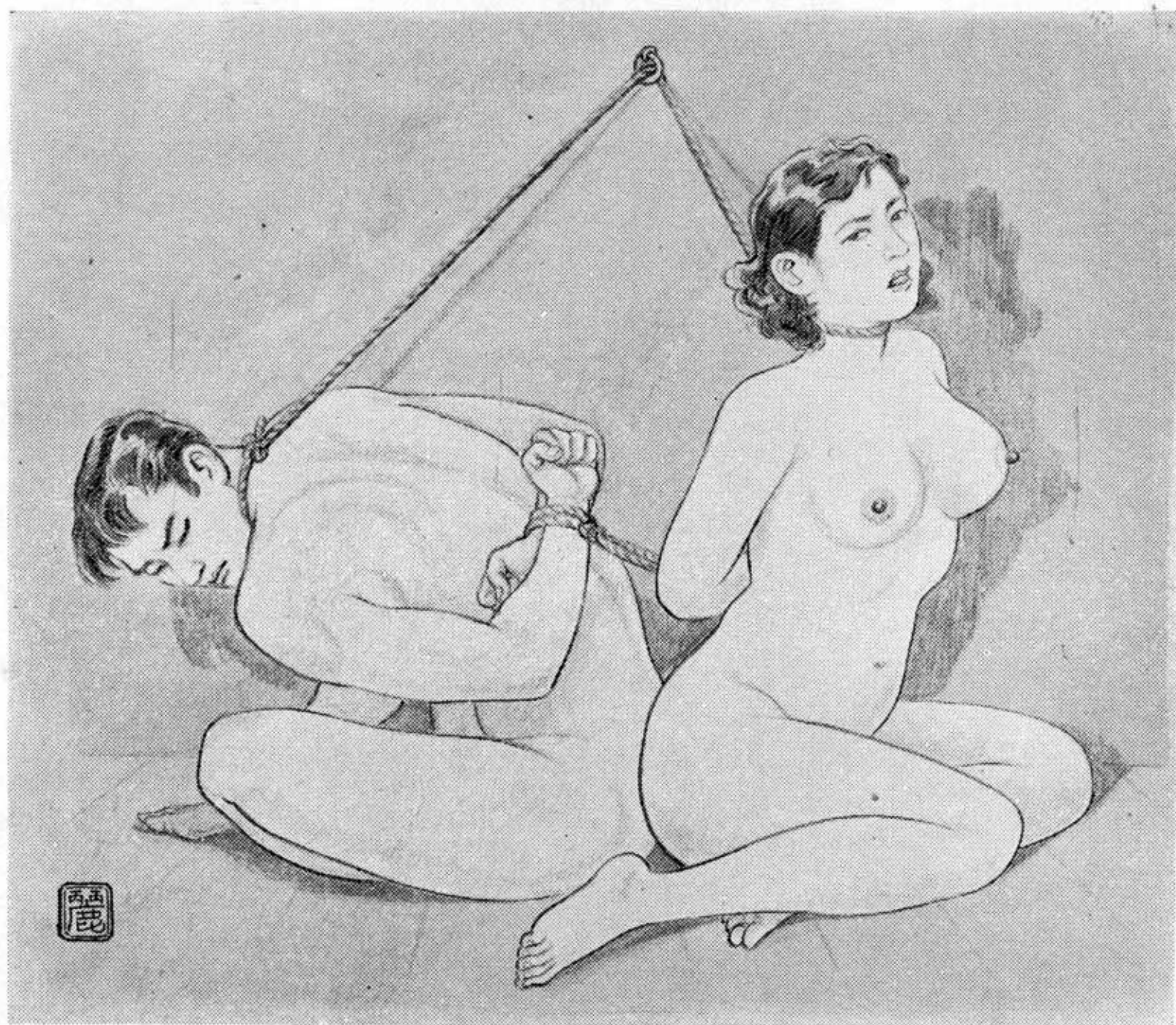
責 棒



新しい悦虐遊戯

シーソー・ゲーム

瀧 麗子・画



「兄さん、いや、いや、そんなもの見
せちゃ、いや」

「これを見るのをいやつて知ってるの
がおかしいな、こつちを向いて見てご
らん」

兄
きょう

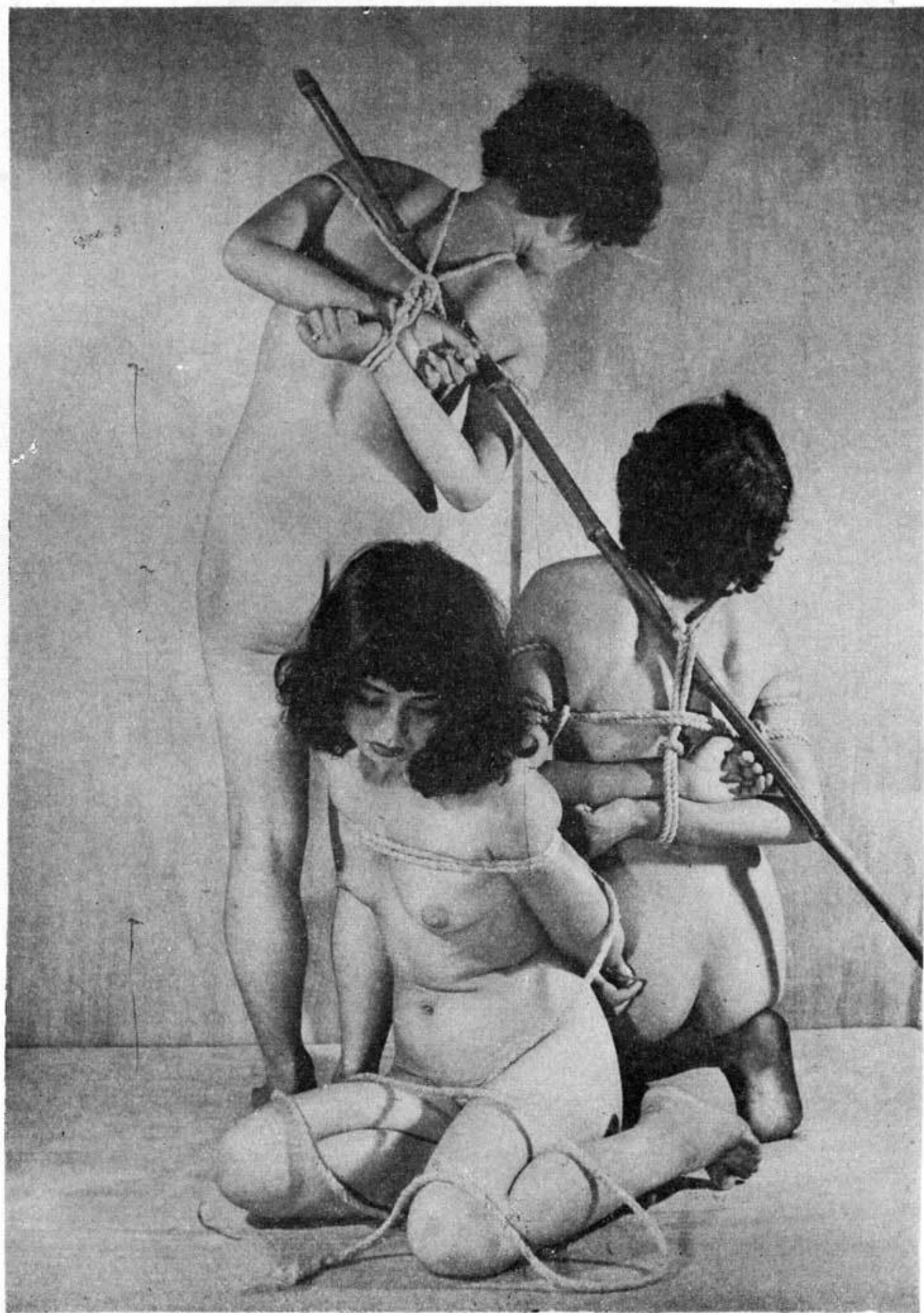
妹
だい





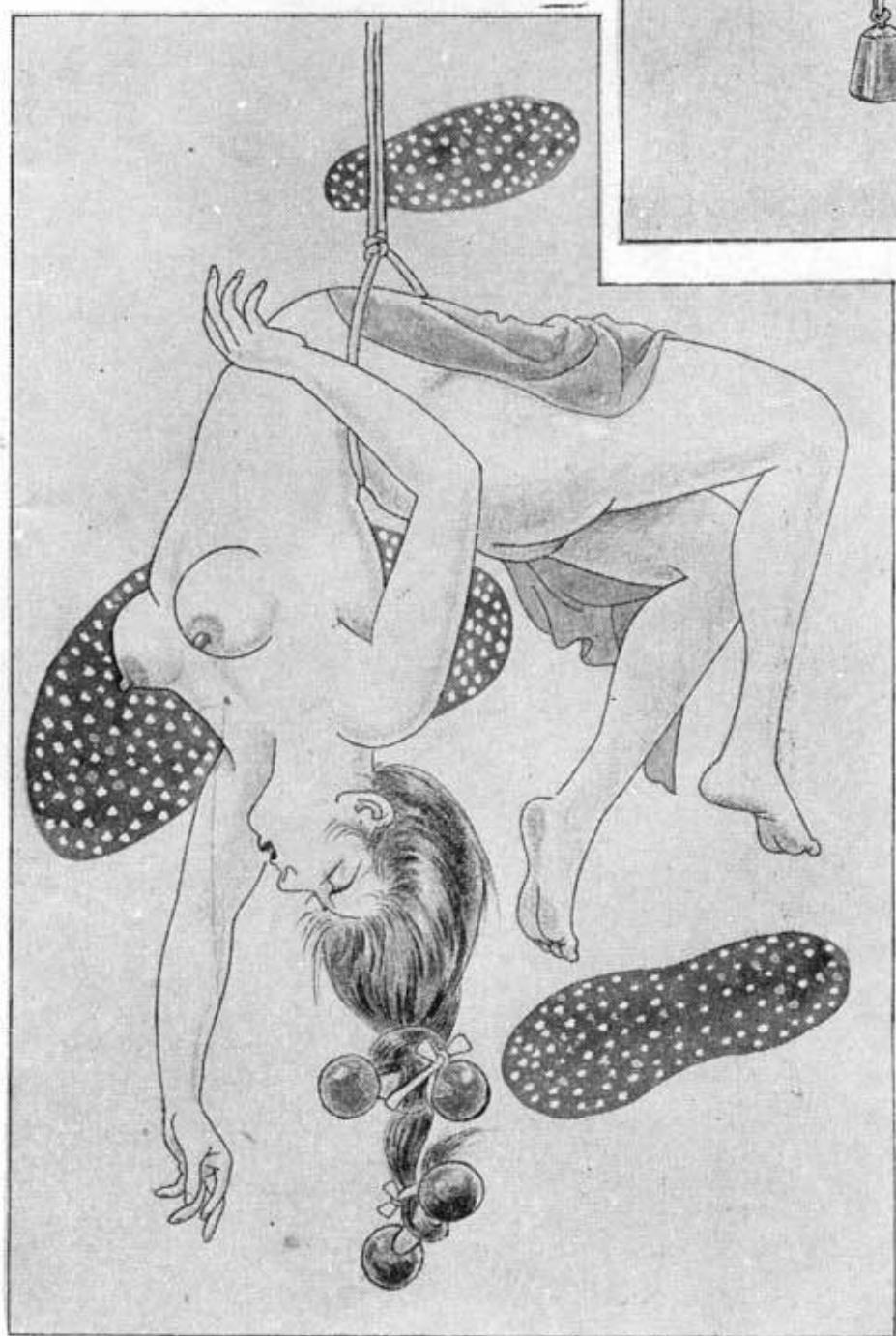
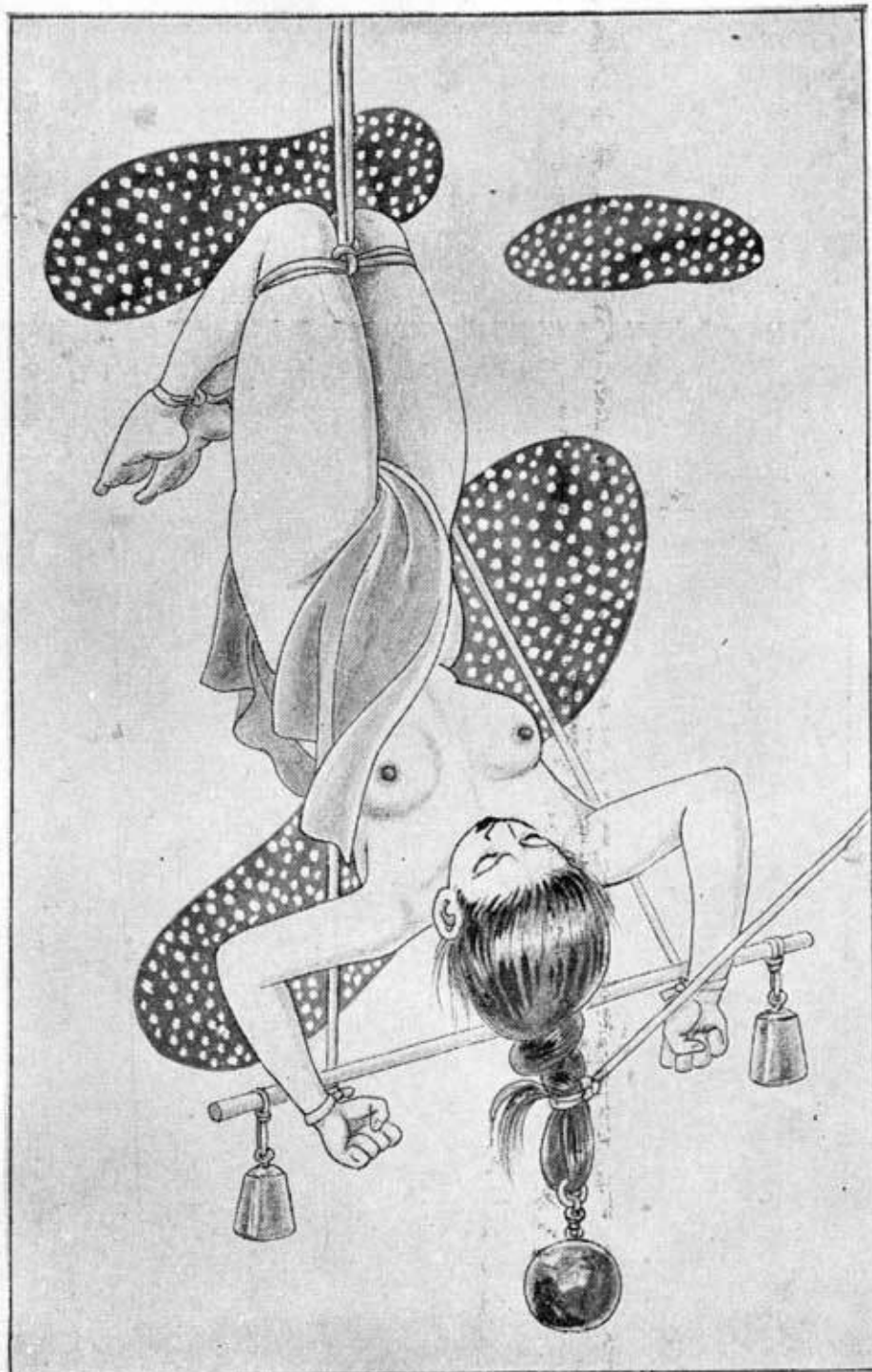
吊
り
人
形

三人の女の縛られショー



美女折檻圖

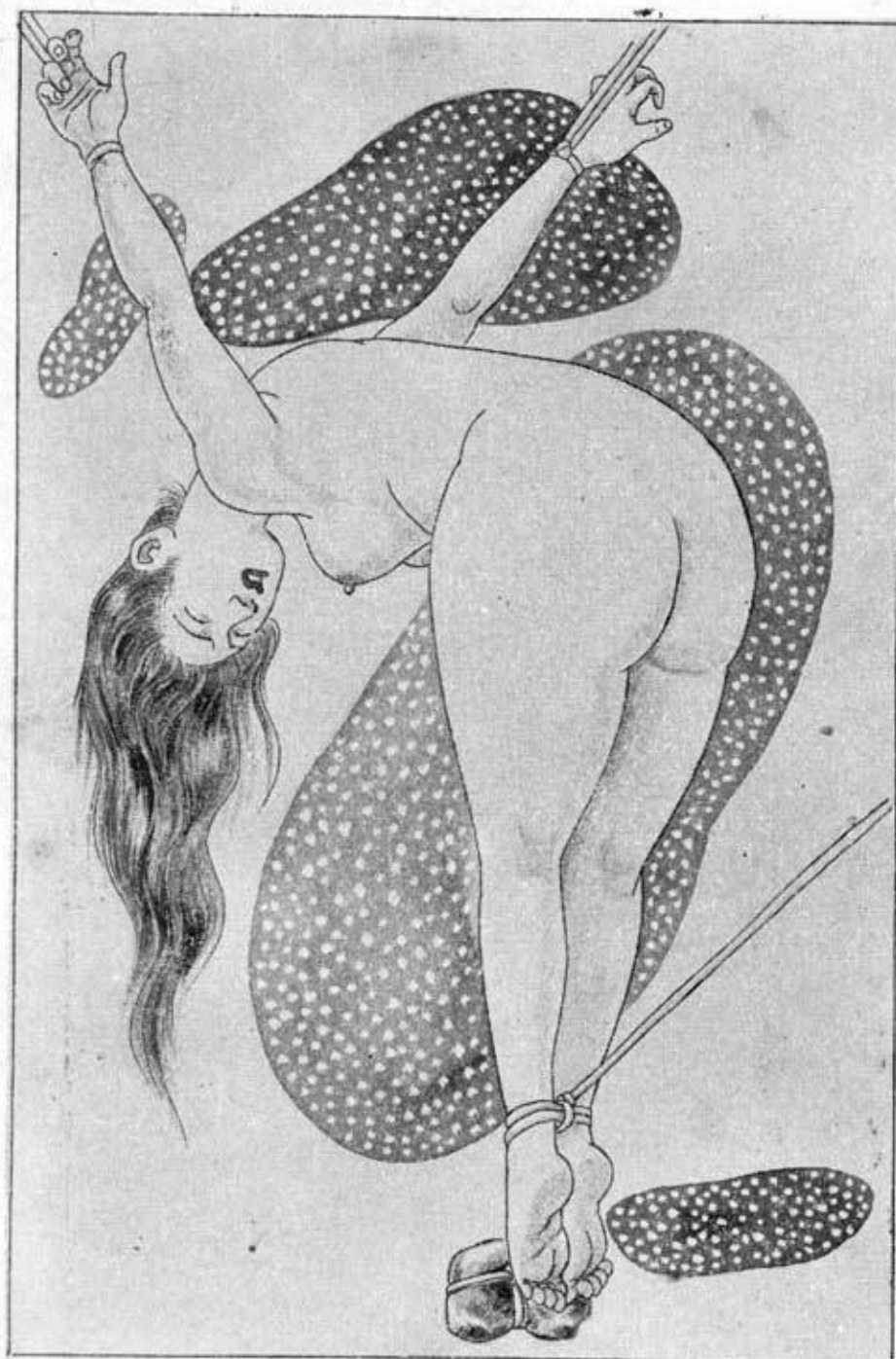
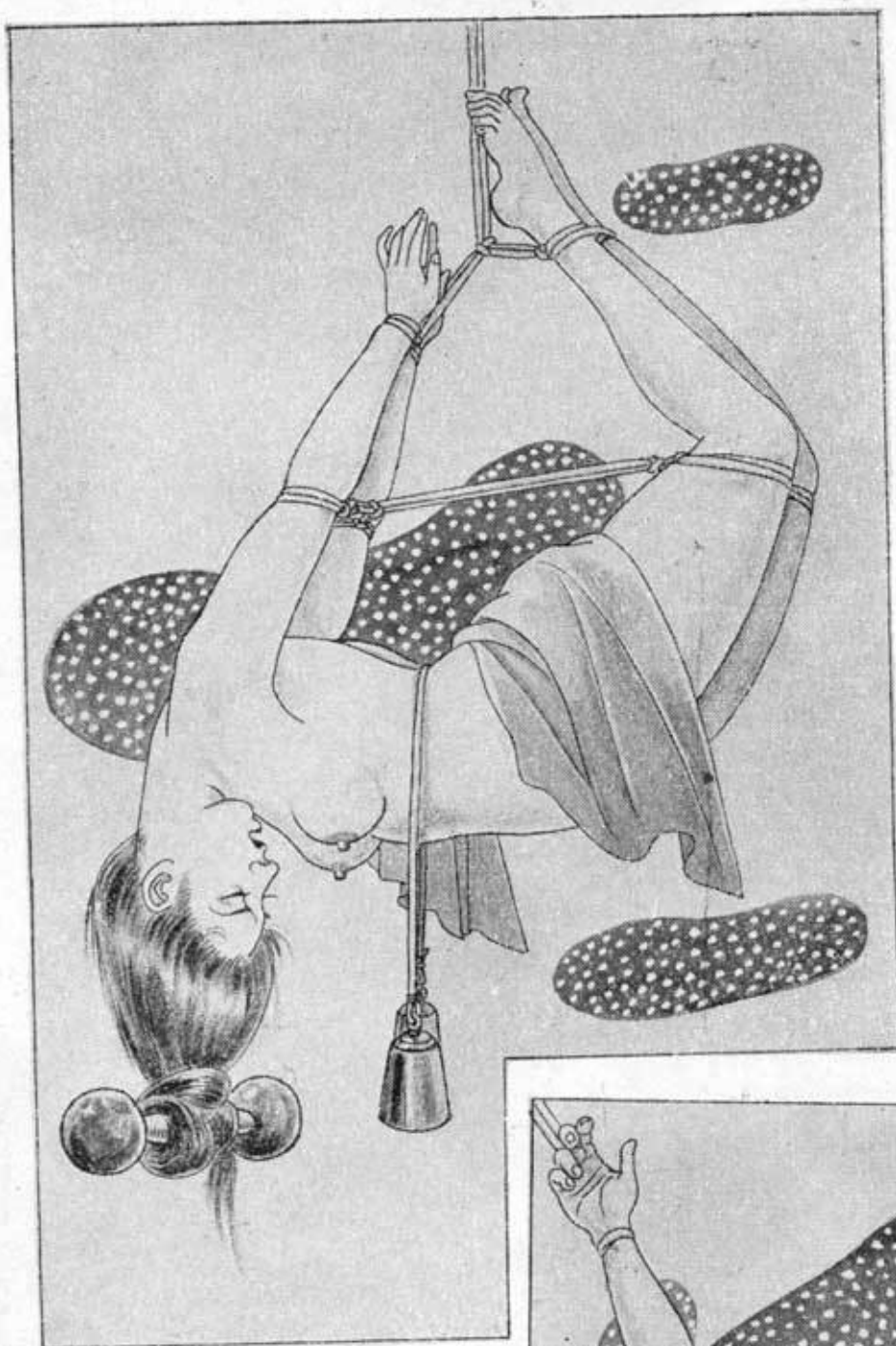
ブランコ吊リ



胴吊リ

案と画 南川 和子

逆手吊り



蜻蛉吊り



女の切腹

(立腹)





甘美なる倒錯の花園

鶯の谷渡り

沼田扶二世

お臍の魅力

多山 皓

剥 玉 子

住田 弘志

三つの色の交錯

芳野 眉美

野 薊(紅花草紙)

川合伊都子

不見転芸妓

若杉 早苗

新時代の風俗雑誌

奇 譚 ク ラ ブ

1953年 12月号 (第七巻 第十二号 通刊第六十二号)



女同志のリン
チの体験記

鷺の谷渡り

沼田扶二世

今日のお昼奇ク十月号を買つて参りました。拝見させて貰つてゐる中に七五頁の読者通信の所に私のさゝやかな便りが載つておりましたのでうれしくてうれしくてたまりませんでした。あの時は私の告白でも一寸、ほんの一部だけざつと便せんに書かせていたゞいたのですが、あつかましくも今日は私の経験した事〃をちよつと書きたく思います。私、今日夜十時迄にお客を一人とりましたのでもう後は自由なのでございます。たゞ今十一時を少し廻つていますがスタンドをつけて書いております。朋輩の人達はもう

大方寝たようですが、まだ起きてお客さんと話してゐる人もあるのか時折嬌声が洩れてきます。

原稿用紙がございませんでこんな紙に書くのをお許し下さいませ。このように纏つた文章を書くのは一生一代の初めてですから面くらつてゐます。いつか貴誌のような雑誌があれば発表したいと思つておりました私、それがかなえられそうな今、まつたく期待と恐怖のようなのがいりまじつて複雑な気持です。でもこんな事を書いた位で雑誌にのせていただけるものかしら、というあわい不安が

たちのぼつて参ります。

私は昭和八年、大阪南河内郡登美岡で現在の両親の四女として生れました。今でもこの地方は不作にでもなれば、娘を売る位平気な土地柄です。私はあの不良からいたずらされてけがされてからヤケになり、梅田で少年保護法でつかまつてから一度は自宅へ帰りましたが、又飛び出して盛り場をうろくしてゐる中、こゝとわれぬ借金が出来、親も承知でこゝに働いてゐるのでございます。

こゝへ来ましたのは去年の四月で丁度十八才になつた新制高校を二年で退学し

たばかりでした。処女は失つていると申しまして、もまだ娘々した私でした。現在は身長五尺二寸足らずなのに体重は十三貫五百もあつて肉づきもよくなつていますが、その頃は十二貫そここのほつそりした身体つきでした。来ました所は接客婦が十人ばかりのこの界限では中位の大きさのお店で私が当てがわれた部屋以外にまだ三つ、四つの空部屋がありました。

終戦迄は聞く所によりますと、「ヤリ手ババ」のような者も公然といて、「折檻部屋」もあり少しでも主人(楼主です)に反抗しさからうものなら立ちどころに折檻を加えられたそうですが、現在ではこういった楼主の不当な圧迫は人権何とか云うものゝおかげでしょうか一応その筋からも禁じられていますからございませんが、遊廓内の女同志のリンチと申しますのは、まだ／＼行われております。盛りを過ぎた年増たちがしめし合せて、若い来たての女を苛めるのです。氣にいらぬ女が売られてきた場合、又馴染の客を寝取られたり、又競争した年増女が恋に破れたりした場合の同性によるリン

チの凄さは、本当に女の残虐性というものをつくづく知らされました。

こんなことは世の常識ではちよつと考へられないことですが、一般家庭とすつかり隔つた里の事柄ですのりつぱに通用するのです。そして金で自由になる女というだけに、闇から闇へほうむられてゆくのです。社会との間に大きなへだてがある中へ入つてしまえば、それこそ何をされようと、まつたく口出しは出来ず閉じこめられた密室で同性の苛酷な責めに身をゆだねるより仕方がないのです。その日はまだお客の来ない昼頃でした姉さん株のお雪(二十八才)につれられて私は奥の離れ座敷につれてゆかれましたそこは庭を一つへだてた所で大きな樟の木が窓のそばにあつて昼でも薄暗い部屋でした。

今から思えば「お前も私にさからえよこの通りだよ」という威嚇だったのでしょう。部屋は八帖位の広さで畳はなく板敷なのです。昼の里というものはガランとして只さえ淋しいものですが、こゝは尚更シンと静まつています。丁度私が勤めに出て一カ月位経つた頃です。

部屋へ入るなり、私の耳に若い女の耐えられないような「うーうー……」という声が聞えました。中にはお時という四十八の姥桜を筆頭にお市(三十八才)お梅(三十二才)園子(三十才)政子(二十六才)の五人の女が一人のまだ少女とも言いたげな女を取り囲んでいるのです。私は何故彼女たちがこんなことをしているのか良くわかりませんでした。その場の雰囲気は何か私のいたゝまれないような冷酷さに満ちていました。

取り囲まれて悲鳴を挙げているのは民子と呼ばれる私と同年輩といつていましたが、何んでも家がひつそくして東北から大阪のキヤバレーへ働きに来ていて、借金が増えて仕方なくこゝへ身を沈めたという娘でした。私より一廻りも小柄で細つそりとした肉つきは同性の私にも魅力的でした。雪国の生れのためか色は抜けるように白く、十日程前初めてこゝへ入つてきたときから好感が持てゝ仲よくしていたのです。

私は心の中で思わず「民ちゃん」と云つてしまいました。民子は素裸にされこちら向きに爪先立つて立たされていまし

た。顔一ぱいに汗の粒を浮かべ目からは涙がこぼれていました。私はお雪のうしろで小さくなつて眺めていました。今迄民子は一体どんなことをされていたのでしょうか。

「さあ、なんだね、もうお疲れかい？」

お梅が言います。さつきから責めたてゝいたのでしょう。右手にはお裁縫に使う物差しを持っています。

「まだ、まだ、今までは序の口さ」

政子はさも憎々しそうに手にした糸のついた縫針をふりまわしながら言いますあとで聞いた所によりますと、政子のだんなであつた男が新入りの民子を好きになり、民子にいろ／＼な装飾品を買つてやつたりしたのを、政子が「自分の悪口を言つて寝取つた」とリンチを加えていたのだそうです。

部屋の角から角へ斜めに行李を縛るに使う太い麻縄が一本ピンと張つてあります。縄の高さは民子が立つて丁度股にすれ／＼なのです。彼女はその縄を股がつて立たされているのです。部屋の隅には彼女のはいていたシユミーズ、ズロースブルーマ等がまるめて放つてあります。

「まだ、まだ、もう一度渡るんだ」

よく見ますと民子の両足首は左右一緒に十纏ばかりの間隔で足枷のように紐で結んであるのです。そしてその麻縄を股の間に挟んだまゝ歩けというのです。股が開かないのでいくらせかされても彼女はソロ／＼と小刻みにしか歩けないのです。

「くくくく！ ひゝゝゝ」

麻縄が股の間をこする痛さに民子は身をよじつて泣くのですが、そんな哀れな姿に五人の年増たちは面白そうに手を叩いて囃します。

「まだ／＼、もう一度渡つたら許してやる」

つまづいた民子が思わず両手でその麻縄を握かむと

「驚の谷渡りに手をつかうという事があるかい、横着な女だよ」

と寄つてたかつて、両手を後手に腰紐で縛り上げてしまいました。

「罰にもう一度渡つて貰おう」

再び無理矢理片隅へ追いやられた民子が向うの隅からこちらへ向つて歩いて来ようとした時です。園子が縄の端を持つ

て揺つたのですからたまりません。痛さに耐えかねた民子が「あゝゝツ」と魂消たような悲鳴を挙げると平均を失つて膝のあたりに縄をひつかけたまゝ白い全裸の身体が宙に躍つてドシンと大きな音を立てゝ逆さにひっくりかえつてしまいました。

民子は起き上ろうとしますが、後手に縛られている上、足が麻縄に引掛つているのでまがくばかりです。

「ウグイスがこんな短い谷を渡るのに、落つこちるようでは、もつと仕込まにやいかん」

と政子は手に持った針を民子の太股やお尻へチクリチクリとさしてみます。

「ウウウ……」

民子は足先を天井へ向けたまゝの恰好で呻めています。他の女たちは煙草を口にくわえながらそのさまを冷やかに眺めていました。実際「ウグイスの谷渡り」とはよくつけた名前でした。これなどはんの軽いものだそうです。

それから二月程経つてから今度は私が苛められる番となろうとはなんとという運命の皮肉でしょう。これもパトロンを横

どりしたとかおまけに悪口を私が言いふらしたとかいう難くせを園子がつけてきたのです。それでなくても五尺そこそこのちんちくりんの身体で歩くたびに肥った肉つきがブヨブヨする豚のような園子を最初から好きになれなかつたのですが、同様に園子も折があつたらと狙つていたのでしよう。終

戦間もなく天王寺公園で夜の女をしていたというパンパン上りの色の黒い女です。数日前、お風呂で石鹸を使つたとか使わないとかいう事で口ゲンカして以来睨みあつていましたが、その日客が帰つてからとうとう爆発してしまつたのです。

彼女らにとつては女学生上りでインテリ臭く、

それに自分達より若く美しく、来るなり早くも売れ妓になつた私の肉体が嫉ましかつたのでしよう。そうとは知らずに殊更敵を作つて彼女らにリンチの口実を与



えた私は本当に世間しらずの浅墓な女だつたのです。

その時お市は外出していませんでしたが、そのかわり楼主のおかみさんの君江(四十三才)が舌なめずりして私のリンチされるのを待つていたのです。私がこゝへ来て最初に楼主のものになつた時からシツトで事毎に私を憎んでいた君江だつたのです。

「さあ、寝とつたと思つて素直にあやまれば簡単に許してやろう、さあ白状おし」と詰め寄つてきたのは園子です。

「あら、私、何も知らない事よ、お園さん」

「なんだつて? 白パツクレルのもいゝかげんにおし、あたしや気が短かいんだよ、白状しないんなら出来るようにしてあげるよッ」

それを合図のようにパツと私の胸に飛

びついて来ましたので、私も背の低い園子の髪を両手でワシ掴かみにしてその場に捻じ伏せようと思いました。この時誰かが私の帯に手をかけましたので思わず後を振りかえるとそのすきに横から出た手で頬を思いきりぶたれました。それからもう無茶苦茶でした。いくつもの白い手が私の眼の前で躍つたかと思うと、着物をはがれ、下着も次々と取られてしまいました。次にはお腰が、そしてズロース一つになつてしまつたのです。

彼女らはいつもズロース等はかず腰巻だけでしたから今私がつけているズロースにも淡い嫉妬を感じたのでしよう。ジュパンとズロース(私はいつも小さ目のをはいていました)だけになつて転つている私をぐるりと取り囲んで睨みつけていました。

「許して、かんにんして、私は何もしませんから……」

と言うのを尻目に垢じみた園子の足でぐいツと乳房を踏みにじられました。捻じられるような乳首の痛さ! あゝ、なんという恥辱でしよう、こんな女に踏みつけられようとは、私の股から下腹部にビ

ツタリと喰い込んだズロースを皆で面白
半分につつ張つて脱がしてしまいました
普段私と水上げを張り合つてゐる政子が
「まあ、なんて汚れ方、女学校ではズロ
ースの洗濯の仕方、習わなかつたのかい
？」

「驚いた、その前のシミは何にさ」
と云われて私は、ハツとしました。な
る程うつかりしてゐたので少し汚れて黄
いろくなつてゐるのです。恥しさで顔が
真赤になつてゐる私は園子の提案で、主
人の目の前でそのズロースを立つたまゝ
で洗濯させられたのです。勿論ジユバン
一枚の姿で。

「後で洗いますから……」
私は哀願しましたが許してくれる筈は
ありません。机の上へ金だらいを置くと
無理矢理、その前へ立たせられました。
彼女らは私の前に腰を下して車座になる
とむき出しになつてゐる私のお尻を平手
でペタ／＼叩きながら、私の身体の品定
めのするのです。なんという羞しさでし
ようか。

やつと洗濯の刑を許されて、手を
拭いた私は余りの口惜しさに目の前にア

グラをかいてゐる園子にむしやぶりつい
てゆきました。然し多勢に無勢のため、
忽ち打つて蹴る毆るで身動きする出来な
いようにされて、後手に縛られた上、コ
ロリと板の上へ転されてしまいました。
「何さ、生意気だよ、こいつ、女学校位
なんだね」

「もつと、ヒドイ事してやろうヨ」
それから身動き出来ない私を蹴る蹴る
掴る、さんざんな眼にあわした拳句の末
園子とお梅はぐつたりとなつた私の顔の
方へ自分の背中を見せて馬乗りとなつて
小箱から何かとり出しました。「何にを
されるのかしら？」という不安におのゝ
く私を尻目に「マツチ、マツチ」と言つ
てゐる声が聞えます。仰向けに寝かされ
てゐる私には二人の大きな背中中、前の
方が見えません。暫く静寂が続いて、突
然シンと響く下腹部の熱さ。

「ウウ、ハ、」呻めいてもがく私、それ
を馬乗りになつて押えつけるお梅と園子
私の下腹部へのせたモグサに火がつけら
れたのです。シリシリとしみるような暑
さ、いや、それよりも皆の眼の前で熱さ
にもだえる自分の裸を見られる恥しさ、

「ク、ハ、ハ、」私は両足をバタ／＼させて
暴れましたが、膝頭を押えつけられて、
太股に容赦なく針が突き立てられず。然
し、この熱さもモグサが燃えきるとすぐ
おさまりました。もうこれで許されるの
かと思つてゐると、今度は私の両足を二
人がかりで大の字に開こうとしてゐるの
です。

何にをされるのかしら？ 彼女らの今
からしようとしてゐる事を覚つた時の私
の驚き、取り出してきたのは戦時中、よ
く使われた直径三厘ばかりの豆電球で、
それにはちゃんとコードまでつけてある
のです。

これが終戦後彼女らの仲間の間で発明
された「玉ハサミ」という刑罰であると
知つたのは後日の事でした。私の最初に
加えられたリンチはこんなものでしたが
まだ「若草山」「毛焼き」「乳首ひ
ねり」「太もも乗り」「肛門いじめ」「
穴責め」「尻アイロン」等があります。
特に私に加えられた「肛門いじめ」の素
晴しさは前にお便りしました私の性癖に
びつたり一致してゐましたので苦しさも
人一倍ながら、快さも大変なものでした
次にはこれを書きたく思つてゐます。



アーヌス
への憧憬

剥

玉

子

住

田

弘

志

一

茹玉子を剥く、白磁色のつやゝかですべくしたその表面は、粗い外気に慄えるように指を触れるとプリン／＼と揺れる。虫ピンを突き刺す、玉子の表面に張られた膜が針先きの圧力に抵抗してそこだけ窪んだまゝ一瞬、表面全体が緊張する。ほんとに眼に見えぬ、瞬時のそのデリケートな情景の後、針はブスツと気持ちよく突き刺さる、抜こうとすると周囲の身がピツタリと密着して来る、粘っこい抵抗、それはそのまゝアーヌスへの幻想そのもの。玉子を消しゴムにしても、羊

羹にしてもよい。パンをかじる時にさえずりとして嗜虐の衝動を感じる私のサディステイツクな空想の一つ。

わあ／＼と叫び合う空虚な歓声、断末魔の悲鳴を上げる女の声。ナチ親衛隊の軍曹フリッツは村の広場の木椅子に腰掛け、ビールをあふり乍ら眼前に悶え苦しんでいる裸の女の群をモノメニアツクな瞳を輝かして見入っている。血の匂い、遠くで燃え上っているのは村の教会。砲声。フリッツは内気で真面目な青年だったが体内にはサディストの血が燃えていた。今遂に不可能と思つた彼の夢が実現

しているのです。

第二次大戦末期、フランスのアルザスローレンで敗色濃いナチス・ドイツ軍が惹き起したという大虐殺の記事を読んで私の空想はその翼を拡げる。

——彼の指揮する分隊が受持つている一部落は彼の思いのまゝに料理出来るのだ。村を焼き払い住民を殺す前に、彼は若い女達を数百人、村の広場に狩り集める。今しも繰り拡げられているのは射的競技だ。的は裸体にして後ろ向きに縛り付けた女達、アーヌスを露わすために、臀の双丘を両側から絆創膏で引つ張つて

あり、的の中心はアームスなのだ。少し離れた所から兵隊達が短剣を投げる。アームスに突き刺さるとフリッツから賞品を貰えるのだが、そんな事は忘れてしまつて、兵隊達の眼は完全に発情したオスのそれだ。的にされた女達は恐怖に身をよじり、悶え動くから中々命中しない。必死の悲鳴、流れる鮮血、悶え苦しむ呻き声。これは中々興深いゲームだつたのだが更に、こんなゲームもある。女達を二組に分け、一組には浣腸をし、もう一組には塩水を口から注ぎ込む、そして裸体で仰向けにして所謂「常識的」でない排泄の姿勢にしてずらつと広場に並べる我慢し切れなくなつて一番早く排泄した者が死刑にされるのだ。死刑は一人々々兵隊達の恣意に任してあるのだがフリッツは次のようなのを好む、アームスに、二三人で各々指をかけて桃か枇杷の皮を剥ぐように、てんでの方向に引き裂いて殺す。石油かアルコールをアームスから腹一杯に詰め込んで置いて、布をくるくる巻いてアームスに挿し込む、そしてそのはみ出た切れ端しに点火すれば体腔は火の海だ。獄舎につないで置く時は重い

鉄の玉をぶら下げた鎖の端をアームスの中にさし込む、端はゴム風船になつていてさし込んだ後、送風器で空気を送ると腹は妊婦のように膨らんで（羽村さんの空想を借りた）彼女等は身動き出来ず完全とその自由を奪われる。

二

羽村京子さん、お返事下さつて誌上でしたけれどほんとに嬉しいでした。十月

号を手にし、やはり貴女の文章が一番すくれていると思ひます同じアームスを愛する徒——それを腹腔を愛する人と共に Clouicist クロエシストと呼びたいと貴女は仰言るのですか？——ゆえの讚美ではなく、冷静に考えて貴女の逞しい空想、貴女の現実にすぐにも実行出来そうな精緻な具体的行為の説明、正確な知識は



すぐれています。今は貴女と吾妻新氏、この二人の文章と、そして美しいグラビアに接することが私にとつて奇クの唯一の楽しみとなりました。因みにこんどの都築峯子さんの絵はまっげの長い愁い顔の少女趣味の顔と云いすばらしく美しく描かれた肢態と云い官能的でピタリと私の好みに合っています。京子さんは如何ですか。それはとにかく貴女が、アブの

群雄割拠する奇クの中で一番刺激的なそれでいて品格のある美しい文章を書かれることを、私は同じクロエシストとして喜ばずにはいられません。

さて、京子さん、案の定私の文章のお終いの所の不穩当、不遜をお叱りです。ね実はあれが掲載された時、読み直してこの所を書かなければよかつた、と慚愧

に堪えませんでした。貴女が不快を感じられること、誤解されることを惧れてすぐおわびの手紙を書こうと思つた程です。私が京子さんに温い深い親愛感を抱いているのは事実です。貴女を知つた時、恐らく現実の世界でめぐり合うことは不可能だろうと思つていました、セクシュアルに全く私と同じ傾向の異性を見出したという喜び、しかもその人はセンスのある、魅力を持つた人と想像される喜びに私は狂わんばかりでした。又余りに奇蹟的なこのめぐり合いに、実は羽村京子というのは男でサディストで自分の慾望を裏返しにして女のマゾヒストを仕立て上げ、その空想の上の作家に色々なことを書かして、満天下の同じサディスト達を興奮させ悩ましていたのだらうと貴女の存在を呪つても見ました。とにかくそのような狂喜の余り、貴女にお会いしたいという意味をあのよう書いてしまつたのです。

そも／＼サディストというのを精神の働き方も世間的の行動も嗜虐的なものだと考えるのは非常な俗説です。よく新聞が、「サディスト云々」という見出しで

粗暴な夫が妻をなぐつた事などを扱つてゐるのがその誤解のよい例ですが、サディストがもつとデリケートで潔癖な趣味の上に立つた空想的、感性の人であつて気の強い行動家でないことは吾妻新氏が云い尽されている所です。私が「羽村さんを不倫な妻にしたい。幸福な生活を破壊したい……。」と書いたために私という人間を誤解しないで下さい。因みに最後の「それがサディストとしての私の宿命でしようか。」という所は編集部が付け加えられたもので私の書いたものではありません。私の文にまとまりを付け感興を盛り上げて下さつた編集部の好意は理解出来ますが、私は「サディストは性生活以外の社会生活に於てもサディストクなものだ」とは考えていないことを京子さんへのお詫びに云い添えておきます。貴女と同じく私も「時たま誘惑して、見たい気持ちになることはありますが実行に移すことはとてもため」な人間です。

貴女はお返事の中で自虐者としての私を想像され、ゴムまり愛用云々から果ては受身の鶏姦者 (Passivepederast) という言葉まで持ち出しておられますね。こ

れには今度は反対に私から貴女の不遜を詰らなければなりません。私にとつて何が不快だといつて凡そPassivepederastの男の存在ほど不快なことありません。それを私をそうなるかも知れないなんて想つただけでも嘔吐を催します。貴女は男と女の体の本質的な相違を見逃しています。女の人は体が美しいのです。女の人が自分の体で性的遊戯をやつてゐるのを私は美しいと想像出来ます。しかし、男の場合は烈しい嫌悪を感じます。

と、云つて私が生れてから今まで自分の体で性的遊戯をやつたことが全然ないと云い切れないのが残念ですが、少くとも貴女の「生活と意見」を読んで自分の体を実験して見ようなどとは思つても見ませんでした。私が自分の体に魅力を感じ性感を唆られたのは十二、三才の頃までです。男と女の肉体と生理の相違でしょうが、今は余り自分の体に興味を持ちません。奇クを読んだ時などに覚えるセックスへの渴望も女の体がなくては絶対に満されません。代りに自分の体を使つたりなんかしません。

貴女はエキシビショニストですね。デ

パートのシヨウウィンドウの空想は素晴らしい。しかし、それなら如何ですか？ 私に会つて下さいませんか。そして、奇巧に書いておられる色々な遊戯を御主人のいらつしやる所で私に見せて欲しいと思います。勿論このためには慎重な準備が必要です。貴女がた御夫婦の危惧をなくすために私は次のような方法を践む

ことを考えました。場所と日時、そして私が貴女方に識別出来るような服装とを先ず指定して下さい。そして私にはあなた方が判らず、あなた方には私がすぐそれと分るようにして会つて頂きたいのです。初め貴女がおいやなら御主人だけが来て下さつてもよいのです。私を指定の場所に見出された後も、尚御主人には私

を捨てて会わずに去る自由があるのです。こう云う会見を繰り返して、私という人間を充分に知られた後、貴女にお会い出来、貴女とお話しし遂に貴女の遊戯を見せて頂けるほど貴女方御一家と親しくなれたらどんなに楽しいでしょう。貴女に会いたい、という渴望に日も夜も苦しんでいる男より。



早熟なる少年
の幻想より

三つの色の交錯

芳野眉美

白い妖花

性の芽ばえは、もつれあうふたつの異つた肉体を見たときの、異常な程の嫌悪と憎悪とから始まるのを、この少年は気

がついていただろうか。

大都会の真中にひとつの森がある、わずかに武蔵野の面影を残すこの森は、月の光がわずかにその葉の間からもれて枯葉でうずもれた、小路に一条の白い線を

つけるほか、そこには何もなかった。ただ、不思議な程の静寂が森の詩情を深めていた。

そこで、少年はかすかに人のあえぐ声を聞いた、それはあまりにも苦しそうな

息遣いだつた、少年ははつとした、この深夜に、この森の奥で、少年の足は小さな繁にむけられた、そこに何かうごめいていた、少年は一瞬立ちすくんだ、そこに少年は白い影を見た。少年はふるえた少年は思った、若い女であることを。

女はズロースをはいていなかった、その白い股に一筋の青い月の光が反射した少年はそれを美しいと思つた、森の小陰にまどろむニンフを見つけた半獣半身の性神サチールの狂喜した叫びを聞いたと思つた。

少年はふと目をそらした。そして、無気味な暗黒の穴が点々としてこの森にあるのを見た、それは戦時中掘られた防空壕の空しい残骸だつた、夏のうつそうと茂つた草にさえぎられ、外は勿論この森の小路からも視線を遮断していた、そこに強烈な勢でひかれたとき、その暗黒の穴からもつれあう白いふたつの肉体がくつきり浮かびあがつたように思えた。それは少年の錯覚だつたのかもしれない。しかし、少年は激しい憤りを覚えた、かつて街の路上で犬の交尾を見た以上に、この男と女のみにくい裸像に異常な程の

嫌悪と増悪にもえた、何故か、それはわからない、それはあくまで性の未知数に對する少年の一方的な衝動だつた。しかし、性神は微笑むだろう。この衝動の影にかくれて性の神秘性が無意識的に少年を支配したことを。

少年はしやがんだ、石をぶつけてやろうという衝動が無意識にそうさせたのだそれはあまりにも子供供した仕草だつたが、この異様な光景に直面した少年の心は、すでにあるたえがたい圧迫に息をとめられたような錯乱におちいつていたが、少年の手にさわつたのは石ではなかつた、それはやわらかな紙だつた、まるめられた白い紙だつた、少年は手になにかぬらりとした液体がついたのを感じたまるで死に絶えた軟体動物の感触に似た無気味さをもつて。そして、勢よく握られてつぶされた紙から異様な臭気が少年の鼻孔をつゝんだ、少年はなにか自分を支えている堅固なものだ一度にくずれ去つた様な気がした、少年はあわてゝその紙を地面にたゞきつけた、月の光をあびたその白いまるまった紙は、死の世界に咲くひとつの淫花のように、無気味に鋭

く少年を射殺した。

少年はあわてゝ立ち上つた、かけだしだ。怖しい化物があとから追つてくるような錯覚に悩まされて、少年はやたらに走つた、まるで夢でうなされてる様にその白い妖花の恐怖はたえずつきまとつた、森を走りぬけて街の灯を見出だしたとき、少年は自分の左手にひとつのやわらかなものがにぎられているのに気がつた。それは、よごれた女のズロースだつた。

紅の香

街灯のないこの橋は恋人達のひそかな憩いの場所だつた。夏の夜など、谷間を通る八本の白い鉄道の線と、山の小さな教会の十字架に、森の陰からぼんやり浮かびあがつた古風な木造建の西洋館とが、なにかロマンチックな夢をただよわせた少年はこの橋が好きだつた、夜空の星を数えながらいつもその西洋館を神秘的な目で眺めていた、森の小路を歩いていけば簡単に西洋館の裏にでることは知っていたが、少年にはむしろ遠くから見てい

る方が好きだつた。それは、近くに寄つ

てせつかくの美しい幻影をこわしたくない為でもあつたが、その朽ちれた様な古ぼけた木造建に一人の美しい少女がいることを友達から聞いたとき、まるで童話にでゝくる魔法使の老婆が住んでいるように思えてならなかつたからだ。

それがどういふ具合にでか、偶然少女の弟と遊ぶ機会を得て、云われるまゝに少年は木造の西洋館にあそびにいつた、弟の名は信吉といふ、少年より下級のクラスの生徒だつた。そして、その美しい少女は信吉の異母姉にあたることを知つた、少年よりずっと年上ですでに女学生だつた少女は、少年にとつてどんなに美しく見えただらうか、少女は、貴美子といつたが、少年の来宅を非常に喜んだ、無理に留守を強いられて、たいくつで困つていた矢先なのでか、それともすでに異性を意識し、ある好奇心からこの少年をもてあそぼうと思つたのか。

貴美子が急に「鬼ごっこ」をしようと云いだした。

—私が鬼よ、貴方達逃げなさいな。

貴美子はそう云つた。

信吉がすぐ賛成して逃げだしたので、

少年も信吉のあとに従わねばならなかつた。信吉は逃げながら少年に云つた。

—姉さんにつかまると、とてもひどい目に会うんだぜ。

それだけ云うと、信吉は一人で姿を消した。少年はとまどひした。どこか、とにかくかくれなければならぬ。しかしこんな広い家で勝手はてんでわからないのだ。まご／＼しているうちに、少年はいやという程片腕をつかまれた。貴美子だつた。

—さあ、つかまえた。

貴美子は微笑みながら云つた。

—乱暴しちゃいけないのよ。つかまえられるたら、もう私の奴隷なんだから。

奴隷なんだから——と軽くひびかせる貴美子の声を、少年はとても美しいと思つた。かかえこまれてふと白粉の香をかいだ。貴美子は薄く化粧していた、その小さな唇にはほんのりと紅が映えていた。

少年がつれこまれたのは二階の貴美子の部屋らしかつた、森に面した窓のところに机と椅子、壁ぎわのベットが少年の目を伏せさせた。その夜具は、美しいというよりはむしろ少年には妖しく輝いた

そこに貴美子のすんなりした美しい肢体が横たわつてゐるのを想像したとき、少年は一人で頬がほてるのを覚えた。貴美子はドアにかぎをかけた。その音は信吉の言葉を急に少年によみがえらせた。

—とてもひどい目に会うんだぜ。姉さんにつかまると。

少年はそつと貴美子の顔をのぞいた。

—むこうをむいて。

貴美子は微笑をくずさなかつた。貴美子の手にいつのまにか一本の紐がにぎられていた。少年はおず／＼うしろをむいた。

—うしろ手にして。手をくんで。

矢継早やの貴美子の命令がその微笑に似ずびしびし胸にひびくと、うしろ手にした手に女の力とも思えぬ程きつく紐が幾重にもまわされた。少年は顔をしかめた。

—いたい？

貴美子の声は割にやさしかつた。そのとき、窓から信吉がのぞいた。屋根づたいにきたものだつた。外から窓をこじあけると、

—助けてやるぞ。

と叫んだ。

信吉の足が窓にかかったのに気づくと、貴美子はあわてて信吉を窓の外に押しやつた。屋根という不安定な場所だけに、信吉は簡単にしめだされた。窓はしめられた。その上、カーテンが窓一杯にひかれた。部屋は一瞬薄暗くなつた。

—もう誰も来ないわ。

貴美子は少年の足をしばらくと無造作に床にころがした。

—貴方と私だけだわ。

そう云つて貴美子は少年を足でこづいた。

—綺麗な顔している。

貴美子は膝まずくと少年の顔をのぞきこんだ。少年はまぶしように貴美子の視線を逃れた。

貴美子はタオルで少年に目かくしをした。口はそのままだつた。少年は貴美子の手が足をしきりにいじくるのをくすぐつたそうにこらえた。それは、なにかをやるうとして躊躇しているかの様なのろいいらだつた指の動きのように感じた。



少年は深い貴美子の嘆息を聞いた。

やにわに貴美子の細い指がズボンのバンドにかかった。少年は身をふるわした。少年の心は、見知らぬ奇妙な恐怖におののいた。しかしそれはほんの一瞬だつた。貴美子の手がパンツにさわつた。少年はぞつとした様に身体をすくめた。声はでなかつた。いや、ださなかつたのかもしれない。

少年は下半身に熱い息を感じた。丸裸にされたんだ—と思つた。少年はタオル

の下ではつきり目を見開いた。暗黒に何かを見つめていた。そして、声をださない自分を不思議そうに見つめていた。

—可愛いいの。

そう云う小さな声がして少年は貴美子の手がさわつたのを感じた。少年はかつとした。血が激しく逆流した。やめさせようと身をもだえた。貴美子の指はまるで妖麗な小蛇のようだつた。

—やめて。

と叫んだ。と、貴美子のやわらかな手が少年の口をふさいだ。貴美子の手でなでまわされ擦つたく嬉しく甘美な快感がじんと少年の骨の髄までひびき渡つた。

ドアが激しくなつた。どなつていのは信吉だつた。少年は貴美子に抱かれたそのままベッドへ押しあげられた。タオルがはずれた。視界がはつきりとしたとたん、貴美子の手がそこにちらばつていたガウンにかかった。少年は顔からすつぽりとつつまれた。少年は異様な程の強烈な女の香をかいた。それは貴美子の寝巻らしがつた。よごれてくちやく／＼にしたままほつておいたものらしかった。激しく少年はわなないた。軽く頭をたたく

貴美子の手を感じ、その上からどきりとかかった重い蒲団を感じた。

——どこにいたんだ。返事しろ。

信吉が貴美子と争っているらしかったその声を少年はにくりしいと思つた。貴美子は意識的に寝巻をかぶせたのだから。それはわからなかつた。貴美子の艶やかな肌の香と、貴美子から放出された臭物とのミックスされた香に、少年はいつまでも陶醉していた。貴美子の夜具に貴美子の寝巻にいつまでもそのままのままだいと思つた。いつまでもそのまま。

黒の感触

恋人達の利己的な足で無慙に踏みこまれた草はうなだれたままだった。誰がこの野原の雑草に憐憫のひと雫をかけるものがいよう。根こそぎむしられたあとには白く乾ききつた土がみにくく露出していた。雨はなかつた。少年は不思議に思つた。

小さな繁で囲まれた草はあざやかな緑をただよわしていた。ひとつ／＼の草に可愛い水滴が玉を結んでわなないていた。そして、わずかに草の群から顔をのぞか

せた白い土は、そこだけが雨を浴びたようにしつとりぬれていた。

少年はふとぬれた土の上にひとつの白いやわらかなかたまりがあるのに気づいた。それはまるめられた薄紙だった。異様な戦慄が少年をおびやかした。少年はそつと手をのばした。ほのかなしめりが少年を魅惑した。

しめりの重いところに一本の毛を見つけて少年は啞然とした。それは黒くちぢれていた。そのとき、少年は人の気配を感じた。あわてて紙を投げ捨てた。知らぬ顔をした。しかし少年の外その野原には誰もいなかった。少年はもう一度自分の手を見た。左手の指に悪魔のようなその短い毛はしつかり握られていた。

少年はこの小さな繁にかがんだ人を出そうとした。少年が公園のこの野原を横切つていくとき、あわてて飛びだしていつた人を見たように思えたからだ。確かに——少年はそうつぶやいた。右手の親指と人さし指にはさまつた毛は、真昼の太陽に輝いた。少年は何か新しい恐怖におびえた。その見知らぬ人の毛は少年をぐん／＼圧倒した。

確かに、もう一度少年はつぶやいた。それは若い人妻のようだった。人妻——少年はそう思つた。美しい人妻だった。少年はそうきめた。これには理由があつた。少年がまだ小さな頃のことだった。一人の人妻が放尿しているところをちらりとのぞいたことがあつた。彼女の……が非常に……で掩われているのを見て、その人妻に淡い恋心を感じた、それが少年の初恋だった。

その人妻はあでやかな和服姿だった。いかにも春らしいさわやかな息吹き黒地に多彩な織模様を点てつしたお召の茶羽織。着物はやわらかいピンク系。丈の短い羽織の粋な姿——過去と現実が少年の頭でミックスされているのに少年は気がつかない。どこか劇場からの帰りだろうか。繁の外で最愛の夫がまぶしい顔をしながら新妻のはずかしそうな小用の音を聞いていただろうか。

少年はしらす／＼のうちにその毛を口に含んでいた。あの美しい若妻の白い肉体を自由にする男への淡い嫉妬を抱きながら。



切腹遊戯の告白
紅花草紙の中

野

薊

川合伊都子

桜もすつかり散つて新しい葉が貝細工のような美しさを見せる頃の風のある夜でした。雨戸をびつたりと立て切ると寝室にあてゝいる六帖の座敷はほつと生温かいくらいで、何とはなしにそぞろ心を誘います。

「ねえ、今夜は何か別の趣向を立てようよ」

と夫は言いました。

「そうね、何かすばらしいのあるの？」

と伊都子は夫の傍へ寄りそいます。

「そう、雷神山女腹切、あれがいゝ、あれやろうよ」

「知らない、どんなの？」と私は尋ねました。無論最後は伊都子にお腹を切らせることになるのはわかってはいますが、それにしても夫の意気込んでいる様子が強いのでどんな筋か早く聞きたかつたのです。

「ねえ、どんなの？」とじつと考えている夫にせつきました。

「主役は女郎蜘蛛のお千代つていう、そう、二十三、四という所だろうね、素晴らしい美人なんだよ」

「女賊ね、それでどんなことやるの？」

私はもう女賊と聞いて諸肌ぬぎの裾を

踏みしだいて立ちながら切腹する嬉しさでわく／＼してしまつて、「その前のくどく／＼しい筋なんかどうでもいいわ、簡単にしてね」と云いました。

「いや、今夜のは伊都子を縛ることもあるんだよ」

「でもあたし縛られちやつたら切腹出来ないじゃないの？」

「うゝん、つまり捕方が縛ろうとするのを振り切つて大格闘をやるうつつてわけなんだよ。結局お千代がもう逃れられないというんで松の木に寄りかゝつて立腹を切る、引廻しかけているところへ情夫の



新十郎とかつていう浪人がこれも追われ
て雷神山へ逃げ込み、お千代に出会う。
そこで情死するということにしよう。」

「素敵、いゝわね、であなた仕度はどう
するの」

「あゝ、まず刺青をするんだけど、割に
簡単なんだよ、そう、早速書こう」と夫
は青と黒の油絵具を持ち出し、筆の動き
のいゝように、又乾きの早いように油で
薄めて伊都子の肌を脱ぐのを待つていま
す。伊都子は帯を解いて着物を肩から滑
らせ上半身を露わにして夫に背を向けて
坐ります。

「刺青は少し痛いよ」と夫はにやつと笑
いましたが、私は絵具で画くのにどうし
て痛いだろうと不思議に思っていますと
「いゝか、我慢するんだぜ」と急に伝法
な言葉遣いになり、肩先へチクリと痛み
を感じました。続いて背中へ向つて次々
と針を束ねて刺される痛みが移動して行
きます。何ともいえない心地よさ、伊都
子は刺された部分から何か熱いものが身
内に流れ込んで、それが腰の辺まで伝わ
つてゆくのを感じました。
しばらくして

「さあ、背中では仕上つた。腕をやるう
ぜ」と刺青師は伊都子の腕をぎゅツと引
いて、綿花に浸したアルコールで二、三
度きゆう／＼と拭い、右手に絵具筆を持
ち左手に針の束（と思つたのは錯落しに
使うワイヤブラシだつたのです）を持つ
て居住いを正しました。

刷毛をぎゅつと肌へ押しつけられ、そ
れを取ると跡へ青黒い絵具で木の葉を散
らし書きにします。それからちく／＼と
一筋に長く刺されたと思うと蜘蛛の巣が
さつと引かれます。

「姐さん見ねえ、いゝ刺青だぜ」と刺青
師の言うまゝに三面鏡の前へ立つて見ま
すと、脊中の真中に無気味な女郎蜘蛛が
一匹、それを中心に背中いつぱいに蜘蛛
の巣が張られ、処々に落葉が纏りついて
いる図柄です。

「素敵だわ、親方、腰の方はどうするの
？」

「あゝそうか、でも腰巻で見えないんだ
から、だが、そうだと内股はやらなくつち
や」

伊都子は思わず失笑しました。
「変な刺青師ね、でも内股はきまりが悪

いわ」

「おつ、女郎蜘蛛の姐御、きまり悪いも
ねえもんだ」

と刺青師はいきなり伊都子を仰向けに
押し倒して顔を股に近づけると針の束を
内股へ刺します。

「あゝ」と伊都子は吐息をつきました。
背中とはまるで異つた快よさがじんと下
腹へ伝つて来てすき間なく針を刺して貰
いたい気持です。刺青師はこの刺青を一
層有効にするためには今度は右、今度は左
と交互に針を刺します。私は下半身が快
感に痺れて下腹の中で熱い血がくる／＼
と廻り、手近に刃物があればお臍の下へ
突立てゝ柄をのの字型にぐい／＼抉り廻
りたい気持になりました。

「さあ刺青は出来た、後は着付けと髪だ」
そこで伊都子は鶉色の長襦袢に黄色つ
ぼい着物を選んで、帯は黒襦子です。お
端折と下締を兼ねて紫の扱帯をし、帯が
解けると前がぐず／＼に乱れるようにし
ます。髪は鬘を使いたいのですがないの
で、根髻と鬘簪を使つてそれに鶉色の絞
りの手柄をあしらひ、丁度結綿のくずれ
たような風にこしらえます。

お腰は着けず晒をお乳の下から腰のあたりまで巻き、その間へ、氷嚢に入れた糊紅を用意するのです。部屋に電燈はスタンドの行燈に切り換えます。これで私はもう伊都子ではなく女郎蜘蛛お千代になつてしまいました。

◇

お千代は長火鉢に凭れてくの字型に坐り、男の帰つて来るのを待ち侘びています。かたという物音がしたかと思うと、お千代の前へ荒々しく現われた男、いきなり

「お千代御用だ！」と十手を振りかぶつて打つて掛ります。

「え？」とお千代が立上ろうとすると、捕方はもうお千代の後からむづと組付いています。お千代はパツと組付いている捕方を振りほどいて逃げようとしています。それを逃すまいと捕方は帯を掴んで引戻しますが、帯が解けてお千代はするりと捕方の手から逃れます。そして晒の腹巻の間から七首をさつと抜き逆手に振りかざします。着物が両肌とも脱げて上半身は長



襦袢だけになつたお千代の後からはつしと縄が投げられそれが頸へかゝつてそのまゝ逃げようとすれば首が締めてしまいます。七首で縄を切ろうとしてひるむ所を捕方は手早く縄を乳の辺へずらし、ぎゆつと縛りますが、お千代が必死に暴れるので手首を縛れません（この辺は二人とも本気になつて格闘します）。捕方は勇を鼓してお千代の刃物を掻き取ろうとして争う内に七首は捕方の脇腹へ突刺さり「ギヤツ」と悲鳴を上げて倒れます。

お千代はその死骸を押片づけ（夫を次の間へ私が転がし込むのです。そこで夫はその後の伊都子の独舞台を隙見するので）てほつと息をつきます。

お千代は床柱に凭れて立つたまゝ、「もう逃れられない、年貢の納めどきだ」と呟いて長襦袢の諸肌を脱ぎすてます。今の乱闘で心臓は早鐘を突くように激しく鼓動しているので左の掌で乳房の辺りを押えてその静まるのを待ちます。右手の七首を腹巻の上から当てゝ見ますが、呼吸が弾んでとても突立てられません。左掌で乳房を押えるように撫で上げ、七首を口に啣えて右掌で腹巻の上からお腹をゆつくり撫で廻します。心臓の鼓動も平らになり呼吸も整つてくるにつれて両掌で乳房やお腹を撫で廻す心持よさがはつきりして来ます。左掌で左の下腹をぐつと押さえ、逆手にとつた七首を腹巻の上から思い切り突立てます、晒がピリツと裂け、その下でブスツという音がすると血糊がどくつと迸るよう流れ出します。（腹へ銅板は入れ

ません。後で腹部から銅板など引出したら興ざめてしまいますから」よろ／＼とよろめき傍の台へたと腰を落し足を八文字に開き左手を膝頭にほつと息をつきます。ぐつと刃を右へ引こうとする瞬間「お、お千代！」

情夫の新十郎が抜刀のまゝ駆け寄りま

まみれた手で新十郎にすがります。

「抱いて、抱いて、殺して」

お千代は燃えるような眼で新十郎の顔を見入り、力の限り彼に抱きつきます。

紅の紫の乱れの中に白い太股も露わに、野薊の花は崩れ散るのです。



私の女体
偏執行脚

お 臍 の 魅 力

多

山

皓

人間の体の凡ゆる部分——顔も手足もそして生殖器も全部含めて——の中で私が一番魅力を持つのはお臍である。これはどういう原因なのか自分でもわからない然し私自身、これはおかしい現象だと思つてゐるし、理窟から考えてもお臍とセックスは余り関係がなさそうだから、とにかく一風変つた私一人だけの偏執であ

るかもしれない。

大体私が人間のお臍に興味を持ちはじめたのは、中学生時代の事であつたと記憶している。その頃から私は相撲が好きで野球界の各場所毎に出る相撲特集号は毎回欠かさず買つていた。その特集号の昭和十一年の春場所号だつたかの口絵の中に、当時十両のドン尻だつた北海とい

う力士（後に幕内に入つた四海波好一郎）の写真があつた。彼が中腰で腕を組んでいると禪の上から身体に比較して非常に小さいお臍がへの字型にのぞいている。それが如何に可愛らしくいつまでも飽かず眺めていた事を覚えてゐる。これが私の臍礼讃の魁であつたように思われる。そんな事があつてからは新聞や雑誌に

男子の裸体の写真の中でお臍をのぞかせているのがあるとたまらない気持ちになった。その時分は多くの人達が経過する同性愛的傾向の強い時代であつたし又折柄戦時中であつて女性の裸体写真等見たくも仲々見られない時代でもあつたので銭湯へ行つた時など専ら自分より年少の男の子のお臍を眺めて満足していた。時には下級生の中で色白の可愛い、顔をした少年があると冗談半分にお腹へ手を突込んで楽しんだ事もあつた。M検などは嫌がる者もお臍なら嫌がらずに触らせてくれたので相当に楽しめた。

その中大相撲を砂カブリで見た事があつた。豊島(空襲で死んだ)や備州山などの廻つた力士が仕切ると、股の下から逆さまになつた臍が見えるのも大きな魅力であつた。本場所ではその時一回きりだつたが、それ以後花相撲では二三回砂カブリで見た。いつも私の見るのは相撲そのものでなくて、力士のお臍を見に行くのであつた。

終戦後、靖国神社では本場所代りの大相撲が行われた事があつた。その時にま



だ取的だつた速浪武夫(現幕下)のお臍もやゝ私の好み合つていた。然し彼は一向に強くなならない。男のお臍を漁つていたのはその頃までである。

私の同性愛的な傾向もその頃を境として終つてしまつた。終戦後のエロ氾濫時代で若い女性の臍露出が公然としかも堂々で行われる様になつたからである。何にも同性のお臍を見なくても、ストリツブ劇場へ行けば、女のお臍がいくらでも見ることが出来た。私が初めて異性のお臍に接したのは、写真ではあるが、初代天勝のサロメである。その頃日本では女の腹部露出など、夢にも想像出来なかつた(昭和十一年頃、松竹歌劇で生徒八

人が臍を出して踊つて当局から始末書を取られている)ので、最初はつきり写真のキズ位に考えたが、よく見てみるとどうも位置からいつて臍に間違いのないようだつた。外国での公演だつたからよかつたのかもしれない。

次に写真ではなく、実物に接したのは昭和二十三年十一月に初めてムーランに行つた時だつた。当時のムーランはストリツパーは出ていなかったが、ナンバーワンであつた中井満佐子がパンツの上から僅かにお臍をのぞかせて踊つていたしアクロバットの工藤姉妹がこれはハッキリと臍を大きく出して踊つていた。殊にアクロバットの中で、一人が上になつて丁度相手の口の所へ臍をつけるポーズがあつた。この時にお臍に口紅の跡がはつきりといつた。これは私にはたまらない魅力的なシーンとなつた。そのシヨ一の題は東京シヨ一ポート、お臍の魅力に憑かれた私にとつて忘れることの出来ないシヨ一でゆつくり二度繰返えして見た。

その翌年の八月に日小がエキサイトシ

ヨーと銘うつて大勢のストリツパーを並べる魅をなしたが、その前に私は名古屋へ商用で旅行して黄花園劇場で新宮舞踊団というのが十人以上の裸女を出して「肉体の悪魔」とかいふ公演をやつてゐるのを見てドギモをぬかれた。東京ではその頃、パルナスシヨで三人のストリツパーを出しているのが最高で、大抵は一人づゝしか出してゐなかつたのであるから、とにかく、ずらりと並んだ豪華なお臍の陳列にはさすがの私も堪能させられる程だつた。終戦後私が初めて満足する位お臍を見せられたのは黄花園劇場だつたのである。

もうそれから以後は、どこもかしこもお臍の安売りとなつてしまつて、私も只のお臍では驚かなくなつてしまつた。

形のいゝお臍、私の好みに合つたお臍といへば、面長で余り大きくない恥しうなのがいゝ、適当に腹部に脂肪がつて、臍窩が凹んで微笑んでゐるようなのも悪くない。例えばストリツパーの福田はるみのように余りにも大きいのはごめんである。フリーダ松木や邦ルイズ等は私の大好きなストリツパーであるが、お

臍を見るとガツカリする。余りにも大きすぎるのである。

最近のように至る処で堂々とお臍の展覽が行われるようになると、返つて私も余り魅力を感じなくなる。禁じられていた時代にはあれほど熱狂的に執着したのにと皮肉にさえ思われてならない。そうなつてくると、パンツの上から本当に申訳のようにのぞいたお臍、見えるか見えないかのお臍、そういつたものに強い魅力を感じるようになる。殊に普段ストリツプをやらないダンサーが何かの拍子に偶然見せるお臍こそ、私の最も渴仰するものである。

今でも覚えてゐるそういうお臍としては、ムーランで白鳥の死を踊つたときの小沢珣子のそれ、今、河上五郎の所でスペイン舞踊をやつてゐる沢千恵子がムーランにいた頃、時々見せられたそれ、殊に昭和二十四年の大晦日にアトミック・ボン中で、今テレビで活躍してゐる市村ブーちゃんに似たそれ、つた時のそれは忘れられない。

そしてその翌年の大晦日に私は大好きな東山ふさ江さんのお臍に接した。彼女

のお臍は大変位置が低くて、大抵の人からお臍が見えてしまふ位短いパンツをはいていても、決してお臍を見せた事がなく私は一度でいゝから見たいゝと思つてゐた。所がその日、得意の「パリの空の下」といふアパツシユの中で、計らずもお目にかゝる事が出来た。勿論彼女は慌てゝ衣裳を引き上げてしまつたので、私の眼には瞬間しか見えなかつたわけであるが、私はこの秘仏の開帳には全く感激してしまつて、家へ帰つても寝る迄忘れずその後二度も夢に見た程だつた。

私はヌード写真や責の写真を見てもお臍が見えていないと少しも楽しめない。だから本誌九月号の縛られた女の座談会に出た高瀬忍さんの写真などは最も興味を持つて見た。あんな無雑作なお臍も実に珍しいものだ。

私のこういうお臍偏執は極めて変つたケースだと自任してゐるが、然し奇クの数多い愛読者の中には私と同じ趣味の人もきつとおられる事と思う。学問的には何かと理由があるのだらう。同好の方の御意見なり告白なりを承りたいと思う。



色街の女の
赤裸々な日記

不^み見^ず転^{てん}藝^{げい}妓^ぎ

若^{わか}杉^{すぎ}早^さ苗^{なえ}

こんな恥しいことは、出来るならば私は私達だけの内輪話にとめておきたかったのです。でも私達と同じ年頃の世間の人々は立派な奥様になつたりそうでなければ清らかな娘としていられるのにどうして私達だけが人にも云えない悲しい目に会わねばならないのか——幸せな同性の皆様には是非考えて頂きたいのです。いゝえこんな可哀そうな職業の女性がいるという事を知つて頂くだけでも有難いと思うのです。次の文は私の日記をもとにして綴つたものでございます。文を書くのはなれませんが大へん下手ですのでどうか御判読下さいませ。私は女学校ま

で出ましたが、ある事情で今湘南のある市で芸妓になつております。

三月一日(日)

なじみの客の一人Kに呼ばれた。Kは三十五、六蒼白いインテリらしい男である。いつもの通りお床入になるとすぐに口をよせてくる電気はつけたまゝ、これが此の人の好みである。少し酒くさい恥しようにしていると腰紐に手をかけすつとほどいて長襦袢の前をひろげるお腰もついでにすつかりとられてしまう。

おかあさんの話によると昔はおなじみさんでもなかなか裸にはならなかつたし一現のお客などしごきも解かなかつたそ

うだけど此のころは凄いい人ばかり——肩を抜かないのが関の山で襦袢の前をすつかりはだけられてしまうのも我慢しなければならぬ。Kさんはそれが癖で頤の下から下腹部まで三回すうつとなでてからお乳を………た。乳首が………恥しい。でも私たちは一晩に一人それもお約束以外はめつたに転ばないので話にきくパンパンがショートで一日に十人も相手にするよりずつと楽だと思う。Kさんは酔つていたので仲々………らない念入りに………を………から………又大へんだつた。

三月五日(木)

「むろまち」へよばれて七時頃ゆく、客はMだつたMは私の嫌いなお客の一人である。イヤだなあと思つたけど断るわけにもゆかない、部屋にゆくとMは待ちかねてシリシリしていた。

「おそいじゃないか、早苗」

「ごめんなさい、でも……」

「何がでもだい……まあいゝや一ぱいこよう」

と杯をさす。しばらくするとMは果して例の病氣を出した。

「おい早苗、帯をとけよ」

「あら、また？」

「いいじゃないか、さあ早く裸になれよ」

Mはいつもの通り私を湯文字までとらせて素ッ裸にすると目を細くして眺め乍ら呑み続ける。いやな人――

「おい酌をしろよ」

「ハイうつかりして……そんなに見つめちや嫌よ」

「いい体だなあ早苗、こつちへ来いよ」

ぐつと私を抱きよせると全裸の体をなでさすり乍らお酒を呑む。買われた体で一晩中何をされても黙つていなければなら

らないのだ。春とは言え未だ寒く裸に鳥肌が立つ。こうやつて裸のまゝMに抱かれて愛撫され乍らお酌をしている所へ仲居さんが入つて来て驚いた。仲居さんも驚いて逃げ出したが後で考えるとMがこつそり呼鈴を押したらしい。

三月十八日（土）

暖くなつた、明日の日曜にはAさんがお花見に連れてゆくと言つてくれた。楽しみだ。

四月六日（月）

此の職業に入つて一年始めてサディズムという性質のお客（私はそうだと思うんだが）に呼ばれた。以前和子さんが教えてくれた事があつたけど自分がやられてみてたゞびつくりするばかりだつた。イーさんというその客に呼ばれた部屋にゆくと四十位の温和しそうな人が待つていた。挨拶もそこそこイーさんは「君、早苗ちゃんかきれいだね。気に入つたよ、これから時々呼ぶよ」と云つた

「有難うございます」

「君、僕は一寸変つたことをするんだが何でも云うことを聞かないか」

「ええいゝわ」

私は不安な気がしたけどそう答えた。イーさんはちびりちびりと杯をなめ乍ら「じゃ先ず腰巻一枚になつてくれないか」

「あらイヤよ、こんな明かるい所で」

男つてどうして皆女を裸にしたがるのだろう、この人もやつぱり同じだ。でも初会のお客の前で裸になるのは嫌だ、私はどうしてもいやだと云うと、イーさんは急に飛びかゝつて来て私の両手を後へねじ上げポケットから麻紐を出して縛り上げた。思わず声を出そうとしたが、まさか待合で芸妓が悲鳴をあげるわけにもいらない。

「イヤーかんにんして」

「じゃ裸になるか」

「えゝなるわ」

仕方がない解いてもらつて裸になつたイーさんは腰巻一枚の私をじろじろ見ていたが、

「ね、早苗もう一度縛らしてくれないか」

「あらどうして？ 私いやだわ」

「僕はね女を縛つてからでないと気分が

出ないんだ。頼む痛いことしないから」

「じゃ、そつとね」

ころび芸妓のつらさ、イーさんの真剣な顔に私はやむなく両手を後へまわして今度は赤いしごきで縛られた。イーさんは腰紐をつなぎ合せて両腕から胸へぎりぎりと巻いた乳房がくりつと飛び出して妙な形になる。少し苦しい。

「苦しいわ、イタイイタイ」

「もう少しの辛抱だよ」

今度は腰巻を無雑作にはぎとられて真裸にされてしまふ。さつきの麻紐を後手の手首につないで縄尻を持つと、

「さあ、お前は罪人だよこれからお引廻しになるんだ歩けッ」

という。私は本当に悪いことでもしたような錯覚に落ちた。それは一



片の布もつけない裸体でしかも両手の自由を失っている為顔から足迄前身がむき出されてどうにも防ぎようがないということである。たゞ普通に裸にされたのと全く違った恥しさだった。私がいじめられていると、イーさんは麻縄の縄尻で私の白いお尻をピシツと打った。

「早く歩け」

部屋の中をぐるぐる廻る私はうつむいて前かがみのまゝ歩く、イーさんは大満悦で

「どうだ早苗、いゝ氣持だろう」

などと云つてい

たがしまいにとうとう廊下へ出ると云い出した。それだけはかんにんしてと随分駄々をこねたけど許してくれない。お尻を散々打たれて廊下へ出た。偶然仲居の加代さんが隣の部屋から出て来て

「まあイーさんひどいじゃありませんか早苗さんは未だ初心なんですよ」

と云つてくれた。私は恥しさに体中が真赤になつた様な気がした。

「まあまあ黙つて——さあ早苗歩けよ」

イーさんは平気で全裸の私の縄尻を取つて歩かせる、部屋へ帰る迄の間に女将さんや仲居や他のお客さんにまで見られてしまつた。顔から火が出るような思いでシクシク泣いていると、イーさんは隣り座敷の布団を運んで其のまゝ………始めた。明方まで私は寝かされなくてクタクタになつてしまつた。もうイーさんだけはこりごり。

四月十五日（水）

昨夜のお客さんは何んとか変つていたことと今思い出しても妙な氣分になる——お部屋には一間の押入があるがそこへ入つて細いすきまからのぞきたいと言つた私が寝まきに着かえる所である、お安い御用なので云う通りにしてやつたらとても喜んでいた。そしてお床へ入つたら今度は………せろと言う。嫌といつてもきかない結局やらせてしまつたが私は本当に何ともいえない氣持だった。お客さん

はそれだけやると寝てしまつて朝帰つて行つたが私にまたくるよと笑つていた。

四月二十八日（火）

昨夜はイーさんが又見えてひどくいじめられまだ体の関節が痛い。エビ責めというのをやられてしまつたのだ。素裸の私にあぐらをかゝせると首と足首を縄でつないでギユウギユウと引ぱり縮めたのである。しまいには足首があごの所へついてしまつた。イーさんは私に猿ぐつわをして叫べないようにした。両手は勿論後へ高手小手に縛られて動けない。こういう形にエビ責めにした私の体を仰向けに押し倒すと思ひ切つてひろがつた……イーさんは持参の筆でくすぐつた。私は七転八倒の苦しみを味わされたのである。特に……筆の柄を……時の氣持……金で買われた体ゆえ何をされても文句は云えない乍ら世の中には随分ひどいことをする男もいるものだと思つた。もうイーさんだけはお断りしよう。いくら金を二倍にしてくれても体がもたない。責め（イーさんは遊戯だと云つてゐる）が終つてから……又人一倍だから。

五月三日

（日）

久しぶり

にAさんが来て下さつたお花見以来のことだ思わず泣いてしまふ。「どうしたんだ、早苗ちゃん」

Aさんは優しくきいてくれる。私はAさんの



の前に出ると本当に子供の様に甘えたいのだ。私はAさんに参つてゐるのかしら。Aさんはあつさり遊んで帰つて行つた。あの人一だけとても初心だわ、今度いつ来て下さるかしら。未だ独身だと言つてゐるけどあんまり来ない。ひと月に一度来くればいい方である。奥さんがいるんじゃないかなあ。何だか寂しい。

五月八日（金）

Mだつた。例によつて直ぐに私を裸にしたがる。一条まとわぬ裸にされ膝に抱き上げる「早苗、いい体だなあ芸妓にしとくのは惜しいよ」「じゃ何にしたいの」「ストリップガール」「ウフフ……」「ハツハツハ……」Mはストリップ劇場の事務員か何かやつてゐるらしい。道理で私はばかりでなくこゝへ来ると呼んだ女をすぐに裸にしなければ納まらないのだそうだ。人間社会で一番美しいものは女の裸体だといつも云つてゐるストリップは乳首と前を隠して、しかもたゞ体を人に見せるだけなのに私たちはと思うと情けないやら恥しいやら……。Mはその中カメラを持つて来るから撮らせてくれないかと云つた。無論ゼンストをである。私は嫌だと云つた。するとMは小遣を相当出

すという。私達の商売は結局金に負けるのだ、半日五千円でという約束がきまつてしまった。少し安いかしら。

五月十三日（水）

昨夜はKさんである。故郷に帰るとかでもう会えないからと随分しつこい。電氣をつけっぱなしで私に——らせる。亡くなつた夫に教えられて勿論知つてはいるけれどこゝへ来て——せる客は案外少いのである。そんな私の裸の体を下からじつとKさんは見つめているのだ。終つたら汗びつしよりで大層疲れてしまった

五月二十一日（木）

いい人からと電話で呼ばれたので、てつきりAさんかと思つて出かけて座敷に入つたら例のイーさんだつた。がっかりして逃げ出そうと思つたけど、もう遅いママヨと覚悟をきめるイーさんはニヤニヤ笑っている

「早苗どうだ、今日は何をして遊ぼうか」

「知らないツ」

「ハツハハ……そう怒るなよ」

結局「おひきまわし」それも座敷の中

だけでという条件でしぶしぶ着物を脱ぎ始める。イーさんは鋭い目で私が一枚一枚脱いでゆくのをじつと見ていた。素ツ裸になつてから着物たゝんで乱れ箱へ入れたり何かするのは私たちでも大へん恥しいものである。ペツタリ坐つてうなだれるとイーさんは満足そうに後へまわり手をねじ上げて細紐で高手小手に縛り上げ首縄をし乳房の上下へ二度程廻わして固く結ぶ。縄尻をとると「さあ立て」といつた。部屋の中をぐる／＼まわり時々平手で私の豊かなお尻をピシヤツと叩いて喜んでゐるまるで蚊でもつぶす調子だ約束通り部屋の中だけで「おひきまわし」はやめてくれたけど、それから後が大へんだつた。座敷の大きなテーブルを仰向けに倒してその足に私の四肢を縛りつけた。体は仰向けであるこの時ばかりは、私も必死になつて抵抗したけど力及ばなかつた。とう／＼大の字という浅間しい恰好で口にも猿ぐつわをかまされた恐怖にふるえていると、イーさんは恐しく興奮して真赤な顔に薄笑いを浮べて

「さあ早苗、可愛がつてやるぜ」

と云つた。私の体は彼の射る様な目に

さらされ全身羞恥と恐怖のかたまりになつた。イーさんは徐々にズボンのバンドを持つて来ると私の乳房へふり下ろしたピシツという音、痛みが体中を駆けめぐり続けさまに全乳房へピシツ／＼と皮のバンドが食いついてきた私が体をくねらせて痛みをこらえようとしているのをイーさんはつかれた様な好色な目で眺めて笑っているのだつた。バンドの鞭は両方の脇の下へ移り更に両の太腿を責め抜く、乳房を打たれる痛みは筆にも口にもつくせない程だ、そしてとう／＼両股の間へ鞭がふりおろされた時私は気が遠くなつて行つた——。

気がついてみると私は裸のまま蒲団の中にねかされていた。

「おい早苗、さつきテーブルに縛つたまま一度可………たんだぜ。知らないだろう」

私はイーさんの言葉に体中がカーツと熱くなつた。あの大の字に縛られたまゝで……。

「早苗、俺はお前が大好きなんだ。好きだからこそこんな事するんだよ、これが俺の病気でなあ」

イーさんの終りの言葉には何かしきじみとした調子があつて、私は一がいにイーさんを憎めなくなつてしまつた。でも鞭で打たれたあとはヒリ／＼して一週間位人に見せられないだろう。

五月二十三日（土）

イーさんに責めぬかれた体が痛くて動かせない。昨日は一日ねて暮したのでおかあさんから嫌味を言われてしまつた。

でもイーさんであゝしなければ女を可愛がれないなんて一寸気の毒だと思つた。私は鞭で打たれた乍ら何だかもつ／＼いじめられたい様な氣持が心の何処かにあつたのを思い出す。私にもあゝ云う病氣があるのかしら。マゾヒズムという――少しこわいみたい。

六月一日（月）

Mは忘れずにカメラを持つて朝からやつて来た。Mのとりたいヌード写真なんてどうせエロ写真にきまつている、約束はしたものゝ氣が進まない。昼間の明るい座敷なんて妙なものである。待合の離れである。

「さあ早く脱げよ」

「恥しいわ、明かるくて」

「何を云つてゐるんだ今更」

仕方がない、言われるまゝに全裸となる。陽のあたる縁側でとることになつた。始めは直立不動の姿勢で正面から

「オイ／＼手でそこを隠しちやダメだよ」

「だつて」

「いつもお客に見せつけてゐるんじゃないか――手は両脇だよ」

Mは近よるとポケットから髪油を出して………秘密エロシヨウの時によく使う手だそう。私は横ばかり向いて

た。そのまゝパチリ／＼二、三枚とるとこんどは後向き椅子に腰かけた所、長々と寝そべつた所、などをとられた。此の辺まではよかつたけどだん／＼ひどい恰好にさせられて、しまいは大の字に両足をひろげた間からうつされたり、椅子で思いきり両腿を開いた所を、正面から接写されたりした。裸のまゝ四時間もアクロバットみたいに動かされてすつかり疲れてしまつた。終つてからMはたまらなくなつたのか………来た。私はもう約束が違うと云うのさえも大儀になつていたのでぐつたりされるが

まゝになつていた。

六月五日（金）

イーさんが暫く見えない。この前責められたあとはすつかり癒つたけど何だかイーさんが忘れられない。もう一度責められて見たい様な………もう絶対イーさんとはつき合いたくない様な………複雑な氣持である。そして普通のお客さんのする事が物足りない。

六月十三日（土）

やはり私は買われる身体、いやだ、いやだと思つても呼ばれてみると出てゆかないわけにはいかない。そんな哀れな自分の身体をいとおしいと思う。でもそのいとおしさは嫌な氣持でないのが不思議だ。変つたお客にはやはりなんとなく興味を持つようになる。この頃なんだかへんな私。

あれから二週間、もう来ないんかしらと思つたイーさんがくる。又いじめられるのいやだわ、という氣持の底からそれと反対の氣持も湧く、でも今日は縛られなかつた、何んだか、あつけない位

①

欧米に於けるマゾヒズムの絵画に婦人が臀部を鞭打たれている場合が圧倒的に多いのは恐らく、あちらでは小児が悪戯などをした場合に罰として尻に鞭を加えられる、そう云う伝統的な習慣が彼等のマゾヒズムの基底をなして居る為ではあるまいか。

之に対して我が国の所謂責絵の大部分が縛られた女を取扱っているのは何故であらう？ 私はその理由として次の様な事を指摘する事が出来ると思う。

(一) 打躰、或は

ナグると云う様な事柄は吾々の間ではどちらかと云えば日常茶飯事であつて、特別に屈辱的な感情を誘発する事は稀であつた。

(二) 家庭に於ける、或は私的な刑罰、又は懲罰の方法として縛ると云う事が江戸時代(或はそれ以前)から明治にかけて可成り広く行われた。

(三) その際多く用いられた緊縛の方式

(私は之を日本式後手と呼ぼうと思う)が被縛者に一種の肉感的な被圧迫感を与える。

(マゾヒスチックな被縛者は日本式後手の緊縛の下に自己の縛られた手首と手首、上膊と胴側間等々の皮膚の接触、或は縄による圧迫

し得ない様だ。而してこれらが縄によつて自由を奪われた者が感ずる屈辱感、被征服感、及び肉体的な被圧迫感と何か一脈相通するものがあると考えらるならば縛ると云う事が屢々行われた長い封建時代の空気の中で被縛者達が屈辱と絶望の彼方にフト緊縛その物に対して

倒錯的な性的快感を覚える様になつたであらうと想像するのは誤りであらうか。

私はこの様な倒錯が最初に女性の心の中に起つたものであらうと思う。頭には重い髪をのせ、不自由な着物に大きな帯その上更に扱帯や細

に対して特殊な肉感的な魅力を感じるのが普通である。

由来ノーマルな人々にあつても自己の肉体に加えられる適度の圧迫(例えば異性との接触抱擁等による)又特に女性にあつては異性による被征服感、被汚辱感等々がある場合には性慾と関連して一種の快感である事是否定

縄とマゾヒズム

那須不二夫



紐で幾重にも体を締めつけられて、ヨチ／＼とわずかに身をくねらせる、その様な点に女らしい喜びを感じずる事を強いられて来た古い日本の女にはそれ丈で既に何かマゾヒスチックな匂いが感じられるのである。そう云う当時の女性が更に刺戟の強烈な緊縛の洗礼に遭つてその心の中に縄を対象とするマゾヒズム

の祕密の花園を繰り展げて行つたのではあるまいか、江戸時代の女は男に対する制裁、春強要その他の性的問題に絡んで縛られるチャンスを持つて居た様に見える。

この様にして形成されたマゾヒスチックな素質は的確にはわからないけれども、男にも女にも等しく或る程度遺伝するものの如くである、遺伝した素質は更に環境、教養、知性の相違などに応じて色々な形に發展する事と思われるが、或場合には早い時期に幸福な結婚をしてノーマルな性生活に入つたと云う様な原因で表面に現われる事なく体内に眠つている事もあるであろう。自他共に何等変態的なものを有して居ないと許している人々の中にも責絵の類に対して一時には単に縛ると云う言葉に対してさえ――漠然と何か異常な心の動きを感じる人々が案外少くないのである。これらの事柄はサディズムについても大体同様であると思う。サディズムとマゾヒズムとは多くの場合紙一重の相違に立つ裏返的存在であると思われ、同じ素質が環境、性別等の影響によつて異なつた形態を取つてゐるに過ぎない場合が多い様である。而して特に日本的な緊縛を対象とする倒錯に於ては殆ど例外なく常にマゾヒステックなものがその底

流をなくしてゐると私は信じて疑わない。繩とマゾヒズム、この二つは我が国に於ては不可分の関連があり、日本的なマゾヒズムの主体は「繩のマゾヒズム」であると思ひ得るのではなからうか。

㊦

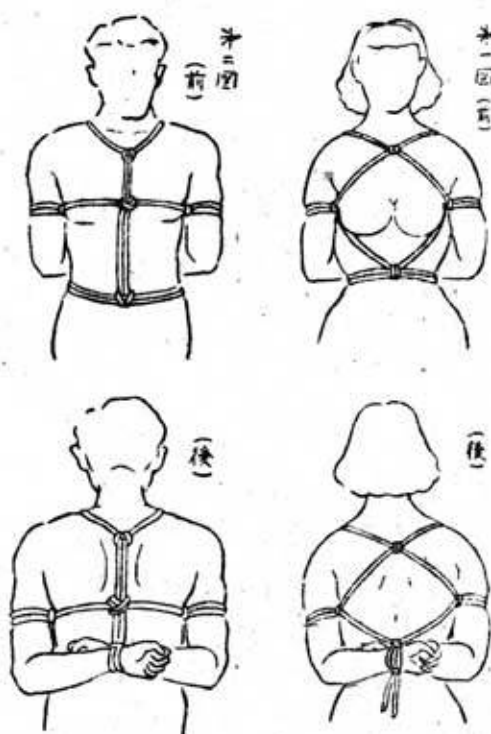
日本的な繩のマゾヒスト達に取つては單なる緊縛と云う概念以外に「後手」と云う日本的な繩の形式が大きな魅力となつてゐる事は本誌の読者諸氏の間に「後手」「や」「高手」手々の讚美者が甚だ多い事によつても裏書きされてゐると思う。本誌二月号で浮家氏が「……裸にやなるが縛られるのは後手じやねい両手を上に挙げて、吊されるのも一寸背延びをした恰好ですまして了うんだし、あれじや縛られた女の魅力つてものはゼロと迄は行かねいが……」と作中の源さんをして叫ばしめて居られる通り折角の繩も後手でない西洋風のもののは「玉の盃底無きが如き」感じである。

更にもう一つ「繩のマゾヒスト」達に取つて缺くべからざる魅力はその繩が本式であり如何にもがいても脱けられない、所謂「自縛」に依つては容易に実現し得ない程の「厳しい縛め」である事であらうと思う。しかし、

責絵や緊縛写真の中には、肝心の繩の掛け方が極めて不自然、且つ不合理なものが少くない。例えば殊更に径が二〇ミリ以上もあるロープ様のものを用いて見たり、単にグルグル繩をヤタラに巻きつけて、それで「厳しい縛め」を表現し得たりとじてゐる様なものは写真と云う観点からは荒唐無稽な感じがして生々しい実感が殺がれる場合が多い様だ、何故ならば単にグルグルと巻きつける限り、多く巻けば巻くほど縛めの厳しさが却つて失われるものであるからである。尤もこの種の絵画及写真は現実を離れた一種の象徴芸術と見る場合には問題は自ずと別個のものとなるのは云う迄も無い。歌舞伎に於ては被縛者が一筋の繩を胸に巻きつけ、両手を単に後へ廻して繩の端を握つていても充分目的を達してゐるのである。さてそれならば本式の繩とはどう云うものであるか、縛しめの厳しさとは如何なる点を指すのであるか、この問題について若干の考察を行つて見たい。

日本式後手の繩の中、最も本格的と考えられてゐるのは江戸時代に罪人を縛するに用いられた所謂「本繩」であらう。之には各種の流儀があり、また被縛者の身分、身柄等に依つて実に多種多様の方式があつた事は古書に

も見え、その内のあるものは既に本誌にも紹介されている(五月号、嶽氏寄稿)がそれらの個々の形式について論ずるのは私の目的ではないのでこゝには只その内の代表的なものと考えられる菱縄と十文字の二つを例に取って見よう。



第一図及び第二図から明らかな様に之等の名称は何れも縄の形状から生じたものと思われるが、縄としての効果は双方共似た様なものであり、菱縄の方は乳房を避ける為に女に多く用いられたらしく、この形式のものに、乳掛縄と称する女人専用のものもあつた由である。しかし前面を菱縄式に、背面を十文字縄式にすると云う様な掛け方をした所で効果に於ては別にどうと云う事は無い様だ。

要するに所謂本縄には色々な名称のものがあるけれども少数の特殊なものを除けば大体菱縄或は十文字縄の変形であり、緊縛効果も大同小異であつて、何れも次の三つのポイントに重点を置いている事が見られるのである

(イ)、小手。後へ廻した双方の手首の緊縛

(ロ)、肘。被縛者が括られた手首を脱し様として肘を左右へ開くのを妨げる為に被縛者の肘に加える補助緊縛。

(ハ)、吊り。被縛者が括られた小手をある高さよりも下げ得ない様にする第二の補助緊縛。

以上三つの内、(イ)は後手に縛ると云う事の根本であるし、(ロ)も映画、演劇、絵画等に屢々その形が現われるので一般によく知られているが(ハ)の吊りに至つてはその意味と重要さをはつきり認識している人が案外少いのではないだろうか。

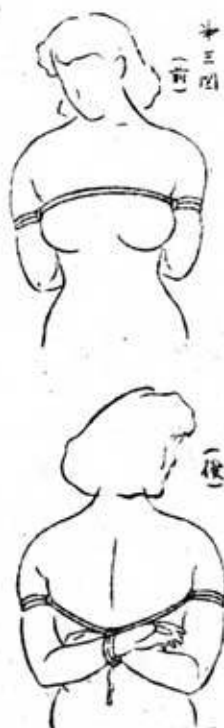
何故「吊り」が重要であるかと云うと——被縛者が後へ緊縛された両手を尻の辺迄も下げる事を許される場合には帯よりも上の辺でするのに比べて比較にならない強い力で手首に掛つた縄をコジる事が出来る。従つて長い時間の後には縄に弛みが出る事もあるのであるし、更にもつと致命的な事は、或種の被

縛者は後へ括られた儘、両手を尻の下を廻して前方へ持つて来て口で縄を解いてしまう。そう云う事さえ可能であると云われているのである。こう云う理由から本縄では「吊り」を完全にする為、特に被縛者の首へ縄を掛け之を前後に振り分けにして小手を縛つてあるのであるがその繁を厭わぬ物々しきを見て如何に「吊り」と云うものが重視されていたかが窺えると思う。

結局、日本式後手には小手、肘、吊り、の三つのものが必要であり、この三つが揃つて始めて完全な厳しさが具現するわけである。

◎

それならば本縄式以外には完全な縄は無いかと云うと必ずしもそうではない。



第三図及び第四図に示すのは総括的に「高小手」と呼び慣らわされている古くから広く用いられている縄で、本縄に比べれば簡単であるが注意して掛けたものは本縄と同様、まず脱ける事は不可能である。



質を理解していないと往々にして「吊り」の点に弱点を現わして不完全な縄になる惧れがある様だ。



例えば第五図は、小説やその挿絵などではよく「厳しい縛め」として扱われる所謂「グル／＼巻き」と云う縛り方であるが実際はこの縄は可成り不完全なものである。今便宜の爲第五図の縄のグル／＼巻いてある部分を取り除けて見ると第六図の様になる小手を緊縛されていても或程度手首は動かせるし、指も使えるから被縛者が縄を脱し様とするならば先

この縄では本縄の様に首縄は用いず、二の腕と手首とを図の様に連結する事によつて「肘」と「吊り」の効果を同時に発揮せしめて居るのが特徴である。しかし縄と云うものの本



ず近くの縄に指をかけて上半身に「タガ」の様に掛つて居る縄を下方へずらす努力をするのは当然である。実際に試みて見れば解るがこの作業はそれ程困難なものではなく、少し時間をかければ概して成功する。而して「タガ」の外れた瞬間に「肘」と「吊り」の機能が失われるので縄は単に「小手」丈の脆弱なものになつてしまふ。例え、第五図の様に縄を沢山巻いてあつてもその内の一本が外れればあとは他愛もなく弛んでしまふ（総じて縄を単にグル／＼と巻きつけるのはその内の一本でも切れるとか外れるとかすれば忽ち全体がグワ／＼になつてしまふので見掛けの効果が無いばかりで無く、縄のある面積が広い為に却つて弱点を現わす事が多い様である）但し被縛者が女である場合には乳房のフクラミが邪魔をする為に「タガ」を外す事は相当困難であつてよく見掛ける図であるが扱帯などで女が第六図の形式に縛られて居る挿絵などには可なり頷ける点がある様だ。

しかし、何と云つても「吊り」を完全にする為には第三図及び第四図に示す様に被縛者の上膊に縄を巻きつけて結ぶ事が必要である第七図及び第八図は



その際の縄の運びを示すもので、第七図の様に「本結び」にするのはむしろ本格的ではあるが第八図の様に「半結び」にしても目的は充分に達せられる上に被縛者が跳ぐ度にこの部分の縄がきつく締まつたり弛んだりするのが却つて「縄のマゾヒスト」に取つては甚だ魅力的である様である。

既に述べた様に本縄では「吊り」を完全にする為に被縛者の首へ縄を掛ける事が一つの特徴となつて居る為、昔はよく「悪い事をすると首へ縄がかかる」等と云つたもので、この方式の縄を不浄縄と呼んで一般にはその使用を忌んでいたらしい。

次にもう一つ忘れてならない事は、本縄は既に逮捕されて公然たる抵抗力を失つて居る犯罪人、即ち囚人の逃亡を防ぐ為に用いる公式の縄であつて決して捕縛用の縄ではないと

云う事実である。従つてその縄の掛け方も普通に人を縛る場合とは逆に「肘」「吊り」等を先にし、最後に小手を緊縛して、食事、用便等の際必要に応じて随時小手を解放し得る様にしてあるのが一般である。むろん之と反対に最初に小手を緊縛して逆の順序に本縄を掛ける事も可能である事は容易に想像されるけれ共、何れにせよ、その方式の煩雑な点本縄は飽く迄公式の縄であり、捕縛用としては「早縄」と呼ばれるもつと簡単な方式が採用されていた事は文献などに見えている通りである。

即ち「早縄」とは犯罪の現場などで犯人を捕縛する為の縄であり、被縛者の抵抗を予期すると共に出来る丈短時間の操作を必要とする關係上、之にも各種の流儀があり、各自の研究による色々の方式があつた様であるが、その方法は大体に於て次の様なものであつたと考えられるのである。



第九図

先ず、被縛者の何れか一方の手首を捕えて後へ廻し之に捕縄の先端に予め作つてある環の部分の掛け、縄を首へ廻して引締める（第九図）この

状態となれば暴れば暴れる程首に廻した縄が締るので被縛者の抵抗は次第に衰える、その機を外さずもう一方の腕を後へ廻して括つた上、適当に肘を緊縛する。以上で捕縛は完了する訳であるが練達の場合はこの作業に二三十秒位しかかからなかつた様である。第十図



第十図

はこの種の「早縄」の出来上りを示すもので肘の縄が簡単な「タガ」になつて居るのは施縄の時間を成るべく短縮する為である。早縄では一般に「吊り」が強く利いているので之で充分であるが余裕があれば第七図、或は第八図の方式に従う場合もあるであらう。それらはすべて施縄者の考えに依るところで本図は只その一例を示した丈である。

本縄も早縄も首へ縄を掛ける点は同じであるが早縄では「吊り」が直接被縛者の喉にかゝる為、被縛者に苦痛を与える事が多い、この事は捕縛の際の抵抗が大きければ大きい程烈しい道理で格闘の末捕えられた盗賊が岡ッ引に引立てられ乍ら縄を少し弛めて欲しいと

懇願する場面が古い講談などにあるのはこの間の消息を伝えるものであると思う。

この様な難点はあるが早縄は本縄と同様に「吊り」は確かであり、縄として完全である上にその本来の目的上、被縛者の抵抗を屈服して施縄するに適切である所から一般にもある程度用いられたらしい。しかし前にも述べた様にこの種の縄を不浄縄、或は科人縄として忌む傾向が多少共あつた事は否めない事実である。従つて姦通、盗癖に対する私的な懲罰、又は継子苛め等の様な一種病的な憎しみの伴う場合などに用いられる事が多かつた様だ。事実、首にかけるこの種の縄は明治、或はそれ以前の人々には何か犯罪的な匂いと独特な残酷味を暗示した様であるが現在では果してどうであらうか、「マゾヒズム」もまた時代と共に進化する。上記の犯罪的な匂いや残酷味が現在の「マゾヒスト」達の心に郷愁的な魅力となつて蘇つて来ても不思議ではないかも知れない。

四

以上述べた所に従つて日本式後手の三つの要素の中に「吊り」「及び」「肘」について分類を行つて見ると次の様になる。

(一) 吊り、

(イ) 本吊り、本縄式に首へかけて前後に振り分けにするもの。

(ロ) 片吊り、早縄式に喉へかけるもの。

(ハ) 半吊り、第三図、及び第四図の方式

(ニ) 肘

(イ) 本肘 第七図及び第八図の方式

(ロ) タガ 第六図の方式

更に「小手」についても次の二つの方式が考えられる。

(三) 小手

(イ) 束ね 第十一図に示す様に二つの手首を束ねて緊縛するもの。

(ロ) 筏 第十二図に示す様に二つの手首を別個に緊縛して束ねるもの。

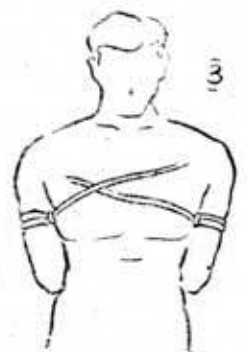


この内、第十二図に示すものの方が確かである事は一見して明かであるが、第十一図の方式でも別

に致命的な弱点を現わす事は無い様で実際には以上の方式の中から「吊り」「肘」及び「小手」について夫々適当なものを選んで施縄するわけであるが、その際の縄の運び方にもまた二つの方式が考えられる。

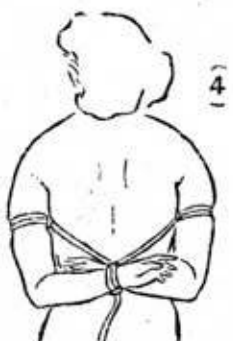
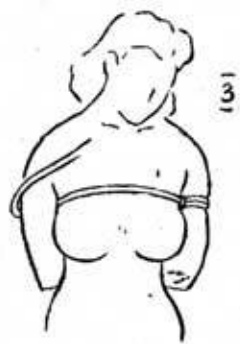
第十三図も第十四図も縄の形式は共に第三

オ十三図



図に示した「高手小手」であるが第十三図では縄が二本になつていて、それを左右対象に図に示す様な順序に運んで行く、之に対して

オ十四図



第十四図では一本の縄で運んでゆく。前者を「複縄式」後者を「単縄式」とでも呼ぶべきものであろうか。

図から明らかな様に「複縄式」では「単縄式」に比して縄が沢山必要であるが、本縄式の施縄には便利であり、「単縄式」の方は「高手小手」或は早縄式の施縄に適している。

オ十五図(前)



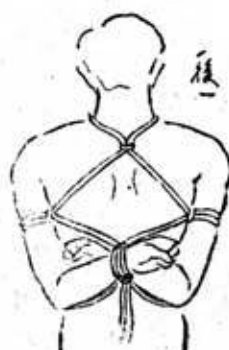
(後)



オ十六図(前)



(後)



第十五図には「単縄式」による早縄形式、第十六図には「複縄式」による本縄形式のものを例示したが縄の形式と施縄方式を適当に組み合わせる事によつて色々違ったものが得られる、縄に興味を持たれる読者は試みて見られるのも一興であろう。第十六図では「小手」の緊縛を最初にしてあるが純粹の本縄式に之を最後にしようと思えば施縄の順序を逆にすればよいわけである。

(五)

施縄の際、手首や肘にかけた縄を弛まぬ程度に引締めるのは常識的にも当然な事である

しかし縄は前に述べた「小手」「肘」「吊り」の三つが完全であれば左程きつく緊縛しなく共決して脱け得ないものであつて、極度に強い緊縛、或は極度に強い緊縛に依存しなければならぬ様な縛り方は縄として一種の邪道であると云わねばならない。

ある古書に従えば血液の運行が止る程の強い緊縛をその儘長時間放置すると緊縛した個所よりも先の部分が遂には腐つてしまふと云う。事実とすれば恐ろしい事である。この種の事柄は容易に実験などする訳に行かないので吾々にははつきりした事は云えないけれども補給を絶たれた血液と、その附近の肉体組織はある時間の後には一種の死滅状態に達するであろうと想像されるが緊縛を解かれた後、その様な血液が何等のトラブル無しに再び体内に復歸し得るか、同時に変化した肉体組織は元通りに回復し得るものかどうか、そう云う点を考える時、古書に述べられている事柄が或程度迄真実ではあるまいかと云う気が多分にするのである。

大体人を縛ると云う事の目的は被縛者の自由を一時的に拘束する事であつて決して之に肉体的な危害を加える事ではないのが通例であろう。江戸時代の本縄があの様に手の込ん

だ形式を敢えて採用しているのも恐らく一つには「大切な囚人」たる被縛者の体を損傷する事なく、しかも完全にその自由を拘束すると云う意図に依るものであると推測されるフシが少くないのである。

この点は吾々の所謂「マゾヒズム」或は「サディズム」の遊戲に於ても原則的に同一でなければならぬと思う。

一口に「サディズム」或は「マゾヒズム」と云つてもその種類は千差万別の様であるが若し相手に実害を加え、流血を喜ぶと云うものであればその実演はも早「サディズム」の限界を越脱した Atrocitism (残酷症) と呼ぶべきものではあるまいか。この二つを常にはつきり區別し得るかどうかは疑問であるが Sadism の底流をなすものはある特定な相手に対する一種の愛情であり、その変態的表現として加虐が行われるが Atrocitism は單なる本能的加虐陶醉であつて概して相手を選ぶ事もないし、相手の人格を認め様ともしない大体こんな風に云えるのではないかと私は思つてゐる。

この様な残忍性はしかし、單に所謂アブノーマルな人々丈にあるのではなくしてもつと広汎な人間性の一部をなしている事が今日で

はよく知られている。所謂ノーマルな人々も戦場などでは屢々婦女子殺戮などに耽ると云われているし、善良な人民も無警察状態の下では時に残酷眼を覆わしめる様な事を平気でやる、あらゆる人間に共通であると云われる幼児の残酷性が社会的拘束から脱れた瞬間にその本然の姿を現わすのであらう。彼等の多くは自分自身の中にある所のものを自覺してない、丁度幼児が何とはなしに虫などを殺して廻るのに似ている。

その幼児の残酷性は個人の生長と共に色々な姿に進化するものであらうと想像されるのであるが其儘の本能的な姿で残つてゐるのが Atrocitism であり、社会的拘束、及び知性の抑圧の下に変形したものが Sadism 或は masochism であるとするのは誤りであらうか。

(六)

マゾヒズム、或はサディズムが上に述べた様に人間本来の残酷性から進化したものであるならばその進化の過程に於ける諸条件、即ち各個人の在る社会の風俗習慣、環境、知性等々の相違に従つて雑多な形態に進展する事が想像される。これは吾々の「縄のマゾヒズム」に於ても同様であつて、使用する縄の種

類からその結び方、着衣、結髪の末に至る迄
各人各様の好みがある様であるが総括的に見
て「縄のマゾヒズム」には擲打その他の加虐
を受ける為のアクセサリとして被縛を要求
するものと縄以外の加虐を受ける事は従であ
つて魅力の大部分を被虐そのものに求めるも
のと二つの傾向があると思う。

前者には常に加虐者の存在が必要であるけ
れ共後者は被縛の際以外は必ずしも之を必要
とせず単独で縄そのものを楽しむものである
から、ある意味で縄が加虐者であると言う事
が出来ゐる。つまり此場合には被虐を快感とす
る倒錯と、縄を加虐者として擬人化する倒錯
とが二重に行われて居るとも考え得るわけ
である。

この種の「マゾヒスト」達に取つては、縄
そのものが重要であり、彼等は各独自の好み
と共に真に迫つた緊縛を求めるばかりでなく
多くは単なる緊縛以外、更に柱への緊縛等に
よる完全な被征服状態を理想とする。猿轡も
また概して大きな魅力である。而してこの様
な傾向こそ日本に於ける「縄のマゾヒスト」
達の本来の姿であろうと私には思われるので
あるが果してどうであろうか。既に述べた様
に江戸時代には人を縛ると云う事が

(イ) 苛責、拷問等の前提として

(ロ) 懲罰の手段として

(ハ) 監禁の手段として

頻りに用いられたものゝ如くである。従つ

てその目的も多くの場合、被縛者がある一定
の場所に拘置する事にあつたわけであるが之
は単に被縛者を緊縛した丈では達成し得ない

大正の終り頃だつたか、関東のある小さな

港町の娼家で抱え主に折監されて居た娼婦が
深夜、後手に縛られた儘逃げ出して救いを求
めた事件があつたのを記憶して居るが、如何
程厳しく両手を縛られていても単にそれ丈で
はこの様な事が可能であるのは当然であろう
またたとえ両足迄も縛られていたとしても、
室内を転げ廻る事は出来るので長時間に亘つ
て監視の無い様な場合には何かと縄を脱する
方法を発見する事も多いわけである。従つて

完全に被縛者を一定の場所に拘置する為には
被縛者の体の移動を完全に拘束する事が必要
になつてくる。その方法として、昔の番屋
(現在の警察派出所)などでは柱へ打込んだ鉄
環へ被縛者を繋いだ事が古書に見えているが
一般的に広く用いられたのはむしろ、柱への
緊縛であつてこの事が今日尚、「縄のマゾヒ
スト」達の血の中に郷愁的に残つていたので

はないかと思う。普通の柱への緊縛の仕方に
ついては取り立てゝ云う程の事も無いけれ共
縄の如何なる部分へも被縛者の齒が届かない
様にすることが必要である。責絵や小説の挿絵
などでよく、まるで犬でも繋ぐ様に縄の端を
長く延して緊縛してあるのや、物置きなどに
監禁された女が後手猿轡と云う姿で柱へ繋が
れもせずにおとなしく坐つて居る所などに出
会う事があるが、どうも物足りない感じがす
るのは筆者丈であろうか、尤もこう云う場合
でも近くに監視の者が居るとか、被縛者が色
々な理由で逃亡を企てないと云う様な註釈も
成立つてであろうし、必ずしも不合理であると
云うつもりは無いが、特に写実を眼目とする
様な作品ではこう云う点がより合理的である
方が強く同好者にアツピールするのではない
かと思う。

猿轡については既に本誌上でも屢々論じら
れて居るのでこゝでは単に普通に猿轡と云わ
れているものでは完全に被縛者の口を押さえ
る事は出来ない。大抵の猿轡は被縛者が少し
努力すれば外れてしまうものである事を指
摘して置く。

緊縛の方法には以上の外、特殊の道具を用
いるものや、柱を抱かせる式のものもある。

縄についても所謂縄抜けの方法、それを防
ぐ緊縛の仕方「留縄」と呼ばれる被縛者の脚

部に施す縄、一部の「マゾヒスト」の間に行
われる「自縛」の方法等の話題も残っている

がそれらについては暫く措く事にする。

(完)

読者通信 (投稿歓迎)

あく迄も潑刺とした新鮮さをも
つて各種の強烈なサド、マゾヒズ
ムを盛り上げエロチックな雰囲気
をも内包し更に加うるに美の追求
誌としての貴誌に心からなる祝福
を申し上げます。最近頃に充実を
加えた巻頭口絵には全く魅了され
ます。あの口絵が実写でされたら
尙生々しい実感を呼ぶことでしょ
う。私は殊に切腹に関した記事や
図案写真をウンとのせてほしいと
お願いします。特集号としてやら
れる文献的な価値も高くなると思
うのですが。(青森 岸田映子)

貴誌益々御隆盛の由お慶びいた
します。類似誌続出の中に敢然と
して長年の地盤を守つて愈々充実
ぶりを示していられるのは心強い
限りです。クリスチーナの全訳、
息もつがせず読了、吾妻新氏の連
載、感情教育には大きな期待を持
つています。貴誌の各作品が真面

目で読みごたえあるのには實際感
心しています。最近貴誌を真似た
或る雑誌なんか内容が空虚でつま
らないなアと思つていけると、案の
定、もうゾッキ本に出して叩き売
られていました。幾月経つても値
うちの下らないのは貴誌だけです
ね、大いに今後の発展を期待いた
します。(東京 大森生)

十一月号、胸を躍らせて拝見し
ました。十月号に男性マードの予
告があつたからです。つくづく手
にして男性被縛とマード写真を倦
かず眺めています。此の種の写真
が堂々と口絵に発表されたのは御
誌が初めてでしょう。僕も見ると
は全く初めてなんです。永い間の
念願がかなつた様なうれしさで
何卒今後共素晴らしい男性写真を
是非お願いします。嶽氏の「MS
バンド」は鶴首して待つています
(大阪、M・N生NO二五二〇)

買つてくると先ず写真、口絵、そ
して家へ帰つてゆつくりと本文を
大体一晩中で読んでしまふ。あと
は解本として各区分毎に自分で綴
じてしまつて、それをあとで次号
が出るまで何回も読み直すのが楽
しみである。小生の最も歓喜する
のはやはり女の責めに関するもの
である。(神奈川 T・O)

拷問部屋は全く素晴らしい絵物語
でした。以前K通で読んだ時は文
章の割に絵が貧弱でしたが、今回
は文字通り十二分に満足させられ
た形です。都築女史の縛り方はど
れも自分の好みになつています
特に最後の半吊りの恰好なんか
股へかけて縄を通してあるのは単
なる緊縛ではなく、凌辱といつた
点で万点だと思います。今後とも
こういったフレッシュな緊縛の絵
物語を企画して下さい。蛇男の幻
想は説明が不十分で物足りません
でした。絵は妖艶きわまりないタ
ツチでゾクゾクさせられました。

その中私も何か珍しい案を送らせ
て貰います。(大分 坂一平)

川端多奈子さん、貴女の「悦虐
に哭く」の写真は私が今迄見たあ
らゆるマードや責めの写真の中で
これ程美しいと思つた事はござい
ません。クリムよりも柔く雪よ
りも白い肌、均整のとれたスタイ
ル等実に素晴らしい、カメラ雑誌は
じめ他の雑誌では絶対に見られな
い情感と雰囲気が出ています。
私の好みでは折檻を暗示する棒が
ない方がもつと良く貴女に接し得
るのでいいのですが、反つてその
為に対照的に引き立つて良かつた
のかもしれない。(君村英美)

滝麗子さんの柱と棒を用いた縛
り方はよい企画でした。この様に
図解で示して頂くと大変よくわか
りますし、それに絵に情緒があつ
て、奇抜なポーズもきわめて楽し
く拝見出来るのがなんといつても
うれしいです。滝さんの御精進を
祈ります。(具 正木盛)

其頃を語る

責め場の挿絵

伊藤晴雨

咄しは又其の頃に返る、其の頃と云つても明治の大昔で愚老十二三才の頃の事である。

曠原千里、数万の兵馬其の間に進退し云々と記したる少年の演習見物記あり、或人を見、原野の広さ方一里と云い、誇大に失するに非ずや、生徒考えて曰く、是作文なりと、問う者啞然として云う処を知らず云々

これは明治始原の著者研堂、石井民司氏が明治二十二年、神田区錦町二丁目五番地学齡館発行の少年雑誌、小国民の少年の作文が誇張に失せるを慨き、作文欄の冒頭に記したもので、明治時代の小学生の作文といふ当時の文壇の小説といふ、実に不自然極まる描写法であつた。

吾れ某山の勝を聞く事久し焉、【中略】某月某日、一瓢を携え家を出づ【中略】薄暮家に歸りて此の記を作る。

こういう文体が当時の千遍一律の漢学教師に依つて、生徒の頭に叩き込まれていた頃向嶋の寺に花見に行く生徒も、品川の海へ釣りに行く少年も作文の上では、残らず一瓢を携えて行くのだから面白い。漢文には一定の型があるから、惣じては「一瓢を携えて」書けてと教えていたものと見える。その頃の教育(?)を受けに愚老の一文がどうも近來の人に読み難いから僕が書き直してやろうと、親切に忠告してくれた社会的には大先輩がいた。広い範囲の読者の中に或は同感の方が無いとも云えないから

事の序を以つて云つておくが、私の愚文は全く現代の標準とはかけ離れていることは百も承知で文部省の新仮名遣いでは、私には手紙一本書き能わないのである。朝令暮改のお役人様の御都合主義の新仮名遣いでは、何としても私には原稿がかけないので折角大先輩の御忠告もその儘お志し丈けを頂いて矢張り、私独自の文字を使わせて頂く事にする。私は原稿を書く場合差し向いで咄しをしているつもりで筆を走らせているのだから、一つも文部省のお役人の鼻息を伺つては居られない。思い出した儘をその儘並べるに過ぎない事を貴重な紙面を拝借して断つておきます。

女の責め場の挿絵と云つても何もそれは女の責め場に限つた事ではないのだが、黒井珍平さんや、泉としを画伯の様な青年諸君が、大昔の写実を全然無視した愚老の作品に何等感銘も無いと云うのは御尤も千万である。竊木清方氏は曾て私に「形だけ描かせたら今の若い者は皆んな昔の大家ですよ」と云つて笑われた事を思い出した。全く明治時代の挿絵は写意一点張りで、多少の写生法で描写された当時の挿絵は写実という点からは不完全で全くゼロである。試みに明治三十八年頃に春陽堂から発行された、泉鏡花の風流線の口絵

に就いて見よ、上の巻の口絵は齋崎英明、下は錦木清方で下の巻の口絵の人物を今の写真一点張りの画家に見せたら恐らくあつたというだろう。十数人の主要人物を狭い場面に集めた構図の妙を賞讃する以外には全く、デッサンは無視して描かれているのである。明治時代には生徒の作文も空想であり、画家も空想半分の描写が多く世間でもそれを怪しまなかつた（茲で私は自己の拙劣な絵の弁明の予防線を張つておるのでないことを断つておく）曾て私が有楽町の有楽座（現在の東京朝日新聞社の所在地）にあつた頃、大阪の文楽が東上して人形芝居で、^{あけがらす}明烏花濡衣山名屋奥庭雪責めの段を初日に出した事があつた。浦里の体を細引で喰い込む程縛り、手摺りに横倒しになつた浦里の形は、私が今迄何十回か見た浦里の中で一番実感が出ていたのを今に忘れ得ない。その時私が考えさせられたのは、責めの絵は形而上の問題では無く全く精神的なもので、写生から入つて写生を出なければならぬ。彼の画聖ミケランジェロがアダムの創造を描く場合にモデルを使わなかつたと同様で、モデルに依つて製作された女の責め場では、文楽の人形に及ばないであろう……。

そうした考えから当時東京美術学校の日本



画のモデルで唯一の美人と評判のあつた秋田生れの嘘つきおかねという、本名鈴木かねよという女で三年許り専属モデルとして写生をして残らず絵巻物にしておいたのを、戦火で焼失してしまつた。正口蓬春君が未だ私の家

へ来て遊んでいた頃のこと、山口三郎時代のことで此の女は縛られるのが大好きで、日本髪に結わせると新橋へ出しても恥かしくない程の美人、帝展審査員で、洋画界の大御所藤島武二氏が駒込のアトリエに同女の姿を見ない日はなかつた。当時私は読売新聞と、やまと新聞の挿画を担当していたので新聞社から貰う月給で、モデルの妾を一人位おくことはいと易かつたので、嘘つきと評判を百も承知で三年間写生をする可く、同女の田端の借家（と云つても二階借りだが）へ通つた。後にこの女は竹久夢二君が誘惑してしまつた。馬鹿を見たのは愚老で夢に三百落したような気がした。因果応報の譬洩れず、天才竹久夢二君は外国の放浪生活が祟つて、晩年富士見高原の肺療養所で死ぬし、嘘つきおかねは又麻布六本木の某酒屋の女房となつたが、その女房になる条件というのが「浮気御免」というのだから生来の淫婦であろうが彼女の明眸たるや実に天下に冠たるもので、蓬春君の「賢明なる兼公はすげえから」といつて敬遠していたのは、先見の明ありと云う可しである。この女を縛つて写生をする時は（荒物屋の二階）先ず女の母親を湯にやつてしまひそれから、二階の梯子を外すので外すといつても、ギシ

くときしむ段梯子を引つくり返しておくのである。梯子が引つくり返つて居れば、女が裸体で縛られている事を階下の荒物屋の主婦が心得ているので、二階へ上つて来る者は一人も無いので、安心して写生をすることが出来た。その時は、私は必ず座右に酒を買わせて置いて、チビ／＼飲み乍ら向うの肴屋から取り寄せた刺身か何かで一杯やりいい気持ちになつた処で、手足を縛つた女を自由にしたことを正直に告白しておく。この頃愚老を責め場の記事の専売局とでも心得たか間拔けな雑誌記者が「惨虐美人の快感の告白」なんていう題で原稿を書いてくれと申込んで来た。コイツスの風味なんてものを一々雑誌に告白する奴があるもので無い。

閑話休題として、女を縛る気持と縛られる気持と相合して、縛られてからの女の体温が写生をしている人の腕に頭脳に電気のように伝わつて来るようにならなければ写生などは出来ない、私は思う。幸いにして嘘も方便品とやら、三年にして私の写生帳には、千を以つて数える程の縛られた裸体画が残されたが女の写生というものは（男でもそうだろうが）写生をしている間は、肉体の感覚が筆端に出て来るが、少し休んでいると又々元へ戻

つしまうものである。

或洋画家が、裸体の写生を専門にやつていて癖に想像では、日本服の絵が描けないといつて困つていた。これは誠に無理からぬことである。昔の五性田芳柳や故人和田兼作氏などの様に和洋両方の絵で叩き上げた人とは、年功が違うのである。画論を闘わせれば日本一のようなことをいう人が何も描けない人もあり、無名な田舎廻りにも名人に近い人もあるが、扱本筋へ出すとどうもいけない、田舎廻りの名優に檜舞台を踏ませたようなもので貫祿が違ふんだから仕方がない。いやこれはとんだ横道へ這入つた。

彫型界の大御所、朝倉文夫氏と同期生で東京美術学校を出た彫型家に、清水彦太郎という人が愚老の親友で、愚老が未だ女の責め場を世間に発表しなかつた頃、この人も女の責め場に異様な関心を持ち、彫型を応用して石膏を以つて、縛られた人形を作つて市中へ売り出した。未だ縛られ気分が薄かつた大正十年頃でも好奇心（？）に駆られたのと、その形の美しさに魅せられて、浦里の人形は羽が生えて飛ぶように売れた。天此人に歳を借さず三十余歳にして、昭和八年三月肺を病んで歿したが、その遺作「くしけず縛る女」は大正博覧

会に出品されて優賞を得た。彼をして今日あらしめば幾多の縛られ美人の人形を作つたことであろうと、愚老は残念に思つてゐる。

縛られた美女に興味を持つていた彫刻家は愚老の記憶には至つて少いが、これの製作を奨励した一人の貿易商があつた。現在では西両国三丁目となつてゐるが、若しくは横山町一丁目明治時代の輸出商に姓を鈴木、商号を菱屋という横浜行のアンチモニーの製品を米国を主として取引先を持つてゐる商人があつた。明治二十五、六年の頃であつたと覚えるが、その頃の貿易商は相当利益があつたものとみえて、花柳の巷で年中暮し、今日は新橋明日は柳橋と毎晩々々の駄々羅遊び、愚老の父は、毎度も云う通り、その頃菱屋の職人であつたから時々お茶屋のお供を仰せつけられていた。この鈴木さんは料理屋の女中を縛つて、女の髪をメチャ／＼に壊す癖があると、面のおいゝ女中は皆んな恐れをなして、引つ込んでしまふというのである。この人に妙な癖があつて、料理店などへ行つてイザ會計となつて勘定を支払い（それまでに女の祝儀をワザとやらすにおく）それから幾らかの紙幣を丁寧に紙に包んで、その頃未だ有名な料

理店では電燈などを使わず八百膳形の燭台へ百目蠟燭を差して使っていたから、その燭台の足へ態と紙に包んだのを入れて「御祝儀はこゝへ置くよ」という嫌な遊び方である。女が札を云つて之を取ろうとすると、この時早くも猿轡を延ばして女の鬚を掴む、女があれ何なさいますと云つて髪をこわされまいと手を挙げる、その手首を素早く取つてアツと云う間に用意の細引で後ろ手に縛り上げる。

その手際はいとも鮮やかであつたという事である。愚老の父も最初は驚いたが、慣れては左のみ驚かず傍で笑つて見ていたといふ咄しだ。こうした評判は花柳界には電光石火のように拡まり、しまいにはコーさんのお座敷だよと皆んな先に／＼で、来る女の妓がなくなつてしまつたので、芸妓から娼妓と河岸を變え吉原の品川楼の花魁で、これは自ら進んで縛られるのが好きという詭え向きの妓と深くなつて、これを落籍させて、川一つ向島の社葉神社の森影のさる百姓家の離れに囲つておいたと聞いたが、その後の消息を聞かないから判明しないのが残念で若し同氏が生きていたら、今は百才以上になつてゐる筈である。阿々

アンチモニーの製品は、明治二十六年の米

国セントルイス万国博覧会に日本製品が多数輸出され、日本の売店で好評を博したと聞いたが、その出品物の主なものは会場の建物をインク壺やペン置き盆（ペン盆と云つていた）にレリーフで彫刻した原型へ、アンチモニー（合金）を注ぎ込んで、これに鍍金したものである。

これが素晴らしく売れた。この下絵彫刻の下絵を一枚二十五銭宛で描いたのが、今の小林古経氏の先生の梶田半古氏であつた。半古氏の女の責め場は、明治三十年頃の紅葉山人作、半古氏描く金色夜叉の好評以後（作者失念）某氏作の小説の挿絵にあり、早稲田大学で賛否両論のあつた胡蝶の挿絵（渡辺省高）の跡として茲でも大問題を起したが、その図柄は炭部屋の中へ湯もじ一枚にされた女が炭俵の中へ倒されている図で、恐らくは半古氏が妻君を写生したものであつたという評判であつ



た。この時の半古氏の月給は七十円、紅葉山人が金百円であつた。これから思うと今の文士諸君は恵まれてゐるもので、愚老などは全く今昔の感に堪えない次第である。

画家の月給を素ッば抜いた罪亡しに、愚老が明治四十二年頃、読売新聞社から貰つた月給は一ヶ月十五円也、挿絵の画料一枚八十銭也で、やまと新聞社では一枚五十銭貰つてゐた（このことは曾て一度は書いたかと思つてゐる）後に帝展の審査員になつた平編石穂氏が国民新聞社の月給が四十円で、婦人の友の表紙の画料が五円であつた。推して知る可し當時の画家生活！併し暮しよかつたには違ひなかつた。

淫火

(みだらび)

(第十二回)

松井 籟子

栗原 伸画



(1)

「もし、あなた、もし……」

ゆりうごかされて、貴船一郎は深い眠りからよびさまされた。体を動かそうとしたが手はまだ縛られたまゝだった。

「お氣がつかしましたか？」

そばに若い女の顔があつた。

貴船がまだ、夢の残つてゐるような重い頭で身を起こそうとするのを、女は後からささえるようにして、後手に縛つた縄を切つてくれた。

「こんなひどいことを……」

女はひとり言のように言いながら、彼のいましめを順に切つていったが、

「お痛みなさいますでしょうか？」

と、彼の腕をさすつていいものか、どうしようかと、とまどつていた。

貴船一郎はやつと自分が芦屋の小百合夫人の家の、地下の防空壕にいたのだと氣がつく程、あまり意外な今日のしぎだった。

「どうぞ私がお助けしたなどとは仰言らないで下さいませ、今のうちに……」

そううたがつた人が、やつと此の家の女中だったと氣がついた。貴船一郎は立ち上ろうとしたが、再びクラクラと目まいがして、片膝ついてしまった。体中がぎしぎしとひしめき合うように痛い。それに、ズボンもシャツも濡れぞうきんのようになつてゐる。

「これはお客さま用のお寝巻でございますが、数多い中から、一枚



そつとぬいて参りました。これをお召しになつて、私が御案内申上げますから、そつとお庭さきから抜け出して下さいませ」

お君さんは良家の召使いらしい丁寧なものいいで言つた。

「私にはどういふわけであなた様がこんなひどいめにおあいになつたのかわかりません。でも、私、あなたを悪い方だとはどうしても思えないのです。さつき此の防空壕へ三人でお入りあそばしたのに、出ていらしたのはお二人で、あなた様のお帰えりになつた御様子がありません、それに旦那様も南部様も、いつもと違つて妙に血

走つたような顔をなさつていらつしやいました。何かただごとではない胸さわぎがいたしまして、私、そつと見に来たのでございます。そうしたら、まあ、こんなひどいことを……」

そう言いながらお君さんは、激しい苦痛のあとで蒼く澄んだように見える貴船一郎のほりの深い顔を、惚れ惚れするようにつめた。美しい人についている美の女神は、こんな時にいつでも救いをよんでくれるのかもしれない。貴船がもし、村山のような武骨な男だつたら、お君さんという救いの手を得られなかつたらう。

「有難う」

貴船はお君さんをとおして、自分を救つてくれたみえない力に感謝した。萎えたような体に血がたぎつてきた。

出された浴衣に着かえると、お君さんはズボンとシャツと手早く丸めて

「洗つてさしあげるとよろしいのですが、ここでは洗つても干すことも出来ませんし、もつてお帰えりになつていただかないと、あとで、私……」

言われなくても、貴船はこの女中に迷惑をかけたくなかつた。用意してくれたナイロンの風呂敷につゝむと、案内されるまゝに部屋を出ようとした。しかし、歩き出してみると、足は思うようにはこんでくれない。一步一步が全身にこたえて痛かつた。邦彦にそうされたと思う憤りより、この苦痛は小百合夫人に結ばれる洗礼なのだと思ふ希望の方が大きい。それが彼の体を支えて苦痛を耐えさせていた。

「あの……これ……」

お君さんはスタンドへ走つていくと、並んだ瓶の中からウイスキー

「を新しくコツプに注いでもつて来た。
「もし、途中で見とがめられたら酔つてい
る風に……」

女は恋をすると、その人の為にはよく氣
がつくものなのだ。貴船一郎はお君さんの
好意によつて理不尽な虐待から脱れること
が出来た。

しかし、それにしても、小百合夫人はど
こに、どうされているだろう。貴船一郎は
酒に酔つたように、塀をつたわつて歩きな
がら、こんなめにあつた以上、誰が雄作の
手に夫人を戻してやるものかと思うのだつ
た。

(二)

貴船一郎を責めても無駄と知ると、雄作
は暗い谷底へ落ちこんだような虚脱感に、
ものいうのも億劫だつた。

しかし、それにしても、妻を救つてやらなければならぬのだ。
警察の手を借りれば簡単にことははこぶかもしれない。しかし、も
しどんなことで、妻の生命がうばわれたら……。あゝ、どうして小
百合夫人はあの写真の様な姿にされているのだろう。人にうらみを
うけるようなおぼえは雄作自身には何もなかった。小百合夫人とて
同じことだ。

もう一度邦彦に案内してもらわなければならない。あの迷路のよ

前号迄の梗概

上流家庭の夫妻として、富と美貌にめぐま
れている小百合夫人の肉体の奥底に、夫にも
いえない慾望の火が燃えていた。ある日、姿
を変えておとづれた新世界という、大阪の下
町の盛り場で、村山富男というマゾヒストと
知り合う。夫人は東京から来た不良少女でつ
る子というのだとでたらめを言つたのを村山
は信じてしまう。更に村山の情婦の松枝や、
画家くづれの青年、貴船一郎やその内妻順子
も知る。その人達の生活は、小百合夫人の求
めていた悦虐の世界だつたのだ。しかし、彼
女はそれによつて自分の肉体の火が燃えさか
つて、身を焼き亡しそうなのをおそれて、夫
の雄作を旅に誘う。雄作は妻の誘いに応じ
て、学友の南部邦彦との男同志の情交を清算
しようと思つた。しかし、邦彦は二人の旅
先まで追つて来て、小百合夫人を無理やり木
蔭へ縛りつけて、雄作との関係を見せしめ
う。雄作は妻に自分の性癖を知られたことを

羞じ、夫人に虐待されることを望み、夜更け
の浴室で、折檻される。かくて小百合夫人
は、常日頃被虐の夢に身を焦していたのに、
加虐のよるこびを知り、自分自身を見失う思
いで再び貴船一郎に会つてみようとする。し
かし、途中、村山夫妻や順子の為に、貴船一
郎の留守宅へ監禁されてしまう。そして毎日
毎夜、玩具のように苛めぬかれ、縛られたマ
ゾド写真のモデルにされる。そんな事とは露
知らず貴船一郎は彼女の面影を求めて、順子
の許には帰えらず、探し廻つてゐる。一方旅
から帰えつた雄作は妻の失踪を知り、邦彦と
二人で尋ね歩く。たまたま新世界近くに住む
男娼の家で、小百合夫人の縛られた写真を見
せられ、邦彦は中学時分同級だつた貴船一郎
が、責めの絵をよく画いていたのを知つてい
る為、小百合夫人を虐待しているのは貴船だ
と誤解してしまふ。そして、雄作の家の防空壕
へ貴船をつれこんで、雄作と二人で、貴船を
拷問して、夫人の行衛を聞き出そうとするの
だつた。

うな街に男娼の家をたずねることは、雄作ひとりでは不可能なこと
だつた。

邦彦はその晩、雄作に……せまつた。貴船を責めて、異様に燃
えていたのか、雄作が疲れているといつてもきかなかつた。その邦
彦の要求をいれてやらないと、小百合夫人の行方を探す手だてが切
れてしまふ、妻の為に、自分に自分を言い訳して、雄作は邦彦と
褥を共にしたのだつた。そして、

「どうして奥さんを探そうとするの？　こんなにいいのに」

邦彦に甘くささやかれると、雄作の手は思わず強く邦彦を抱いてしまふのだつた。

あくる日二人はもう一度男娼の家をおとずれた。

貴船が誰かに助けられて、防空壕を逃げ出していたと知つたが、深くせんさくはしなかつた。それより一日も早く、小百合夫人を探し出さなければならなかつた。

男娼の君ちやんは二人の顔を見ると

「何か用なの？」

と、つつけんどんに言つて、部屋にはいれとも言わなかつた。この前「警察」という言葉を小耳にはさんで、警戒しているらしい。

「あんたは誤解しているのよ」

と、邦彦は言つた。

「今日はいいお土産を持つて来てあげたんだから、一寸、中へ入れてよ」

邦彦は見せびらかすように、風呂敷をといて、中の浮世絵をちらつとみせた。国貞の筆で、松葉いぶしの絵だつた。馬琴の「新編金瓶梅」からの抜萃で、仕置柱の様な庭さきの四角い柱に後手に縛られた男の前に大きな鉢がおかれ、生松葉がくすぶられている。その煙がもうもうと男にせまるのを、目をつぶつて苦しうに顔を上げ向いている図で仲間が大きなうちわで、煙がいくようにあおいでいる。あぐらをくずしてなげ出した男の足の指さきにまで、いつぱいに力が入つて、苦悶をよくあらわしていた。

「まだ他にもあるのよ。なにも私達はサツの廻し者ではないことよ。その証拠にこんな絵だつて持っているのよ」

邦彦はまた一枚出して見せた。春信の男色の絵だつた。

男はやつと気持をほぐしたのか、それでも急にあいそよくするの
もてれくさいといった風に

「まあ、おはいんなさいよ」

と邦彦にいうと、うしろに立つている雄作にも

「どうぞ」

とうながした。

「この間一寸警察なんて言葉を出したのはあの写真にうつっていた男が、いつかこの人のうちへ入つた泥棒とよく似ていたので、それで……」

と、邦彦は、なかば君ちやんを言いくるめる口実で言い出しながら、「ああ、そうだ」と手を打つた。小百合夫人と一緒に縛られていた男を、どこかで見たようなと思つたのは、芦屋の入つた泥棒に似ていたのだ。

「そう、そうだつたの？ 失礼したわね。気にかけないでね、本当にこれいたゞいていいんですか？」

君ちやんはお土産が気に入つらしく、嬉しうに聞いてみていたが、

「いつぞやの写真ね、もつとすごいのが出来たのよ。みせましようか」

そういうと、お土産の錦絵をしまいながらに、手文庫をあけて、又、数葉の写真を取り出した。

猿ぐつわをはめられていないその写真はまさしく、小百合夫人だつた。囚人の様に首に板をはめられていた。みかん箱のふたでも作つたのだろうか、薄いけれど、とげが立ちそうにざらざらした木肌の板で、首を前後からはさむようにした二枚の板を、左右からも

う二枚の板で釘づけにしてあつた。本当の刑具の様に、二枚の板の真中へ、丸く首穴をあける道具がなかつたのだらう。江戸時代の首枷は、楯製で、長さ一間巾八寸の板を二板合わせたというから、随分長くて首にかけられたら重さだけでも苦しかつたかもしれない。しかし、まさか素裸で首かせをかけられることはなかつたらう。囚衣の上から縄がかけられていたかもしれないが……。

小百合夫人は素裸にされていた。素裸の上から亀甲型に縄をかけられ、罪人の様に座らされているのだ。前には見えていなかったのどの下の骨が、はつきり見えるのは、痩せたのだろうか。首かせの上を目をつぶっている顔も、頬がおちて、憔悴の色をみせていた。座らされている足の下は細い砂利がしきつめてあつて、白いふくよかな脛に、小砂利がくいこんでいた。小百合夫人は白洲にひき出された罪人が観念したように、白日の下に、みじめな裸体をさらしているのだ。

もう一枚の写真は、そのまゝ前かどみに、顔が砂利につきそうに体をまげた背中の上に、荒縄で縛つた大きな石を、松の枝からさげておかれているのだつた。後手に縛つた縄目が痛々しく、石の下から見えている。石は夫人の肩を押しつぶしそうにしていた。そんなしながら苛責の手はまだ満足しないのか、割竹のさきで、お尻を突つき、脇の下を突つつい



ている。

「ねえ、すごいでしょう?」

君ちゃんと言つた。

「本当に……」

と邦彦はわざとあいずちをうつて、

「僕も一枚欲しいな、どこで売っているの?」

「欲しけりや頼んでおいてあげるわ。それよりね。会員組織でこんな芝居をみせる所があるんですつて、一寸高いんだけど、私にも見せてくれるんなら、紹介するわ」

「この人が出るんですか?」

雄作は息をはづませた。

「さあ、はつきりはわからないけれど、いつも此の写真を売っている人の話だから、そうじゃないかしら? 本当につれていつてよ。私、見たい見たいと思つていたんだけど、高級な料亭でやるつていうんでしよう。料理だけでも一人前二千円以下はないというのじゃ、一寸私には手がとどかないもの……」

「そんな料理屋で、どうやつてこんな芝居をやるんです?」

「なんでも、その家の主人というのが此の道の大家でね、友達同志で秘密クラブみたいなものを作っているんですつて、だから人数もほんの五六人で、その芝居

の御礼を負担するので、一人前が高くつくんですつてさ。そのかわりあとのお料理は実費つてことになつてゐるらしいわ」

「とにかく行つてみよう」

雄作は邦彦に言つた。小百合夫人が出て出なくても、そこから又何か新しい道がひらけるだろう。雄作にとつて、その位の散財はわけのないことだつた。

(三)

こんな家だと思うような、高級らしい料理屋だつた。

大広間の中程に、幕が引かれている。

幕の此方側は普通の酒席の様に、真中の大卓を囲んで座蒲団が数枚おかれ、客は盃を手にながら、見物出来るようになってゐる。

雄作や邦彦達が案内された時は、すでに三人程の人が雑談をしてゐた。重役タイプの太った男と、痩せてはいるが氣品のある教授とでもいうような男と、今ひとりとは和服の着流しで、宗匠とでもいうような男だつた。邦彦と君ちゃんをのぞけばみんな四十前後という男盛りの人達だ。あとから画家らしい二人づれと、女将らしい女がくると、それで一応予定の人は揃つたらしい。ひとりひとりの前に料理とお酒がはこばれた。料理は幕の内の様に、重箱に色どりよく入つてゐた。



一とおり並び終ると、女中達は遠ざけられて、いよいよ幕があいた。

金屏風を前にして、厚い座蒲団の上に座り、脇息にもたれているのは松枝の扮した後室風の女だつた。その前に、後手に縛られて、座らされているのは、鎌倉時代の腰元風に、髪は下げ髪にしているのが、順子だつた。

雄作は幕があいた瞬間、縛られた女が目に入ると、それがもしや小百合夫人ではないかと、どきつとしたが、夫人ほど美しくはなく、別人なのに、安堵と失望と入り交つた溜息を洩らした。

「そちはどうしても知らぬと申すのじやな」

松枝が順子に芝居のせりふらしい、はつた声で言つた。

「存じませぬ」

「ええ、強情な……。そちが此の家の重宝を盗みと、琴姫と腹を合わせて、お家横領をたくらむことを知らぬと思うか。それ程この目はふし穴ではないぞえ。さあ、どこへかくした。きりきり白状せよば痛いめをみせるがよいか」

「お許し下さいませ、私は琴姫さまなどという方を存じ上げも致しませぬ。又、そのような宝もの、盗んだおぼえもございませぬ」

「まだそのようなことを……」

松枝は立つてくると、順子の横になげ出してあつた弓の折れたの

をとつて、順子の背にふりおろした。
「っ！」

と順子が前かゝみになるのを、

「ビシッ！ ビシッ！」

と、弓がなつた。

そして、弓のさきを、順子の背の上にたてると錐をもむように、ギシギシと背をこづいた。

「さあ、これでも言わぬか。これでもか」

「ああっ！」

順子は悲鳴をあげて、身をくねらせたが

「存じませぬ」

きれぎれにいう。

「よし、それなら他のきき方をしよう。今、そちに見せるものがある。そちがどんなに強情を張つても、今度は言わねばなるまい」

と、松枝は言うど、脇息のわきの鈴をとりあげて、ならした。

「お召しで？」

出て来たのは村山だつた。髪をつけて、時代風に扮装していた。

「さき程あずけたものを、これへ」

松枝が目くばせしながら、村山にいうと

「ははあ」

と、村山は引込んだ。

そして、下げ髪で、裾を長く引いたお姫様風の女の縄尻をとつて出て来た。女は口に猿ぐつわをはめられていた。

「あつ！ あなたさまは……」

と、順子が芝居がかりに言つた時、座敷では雄作と邦彦が「あつ

！」と声をのんだ。しかし、すぐにとび出してもいけなかつた。又しても、雄作の地位が邪魔をした。座敷の人達は、これからという芝居に、かたずをのんでいる。そこへ邪魔しに入つたら、どんな結果になるか……。雄作は卓の下の手を握りしめた。もう少し待つてみよう。

舞台では芝居がつづけられていく。

「そちは今、琴姫など知らぬというたな。知らぬものなら、そちの目の前で、この女がどんなめをみようど、知らぬ顔でいられるはずじゃ。今、そちに面白いものを見せようぞ、そちが白状すればやめでもよい。どうじゃ」

順子は頭をたれて、だまつてしまつた。

「先ずそちが逃げぬように、こうしておこう」

松枝は順子を、舞台の上手へ引いて行くと、もがくの無理におさえつけて、座つた膝の下へ縄をまわし、腿を二重にも三重にもぐる廻して縛ると、その縄を順子の首に一と巻いて、後手に縛つた結び目と一つにして、しつかり結えた。

「さあ、そちはそれで動けまい。今はこつちの方だ。その女を裸にするのじゃ」

村山は小百合夫人の縄をいったんといふ。縄をとかれたとたん、逃げようとする夫人の帯をむんずとつかんだ。くるくるくると、夫人は廻つて、村山の手に帯が残り、バラツと着物の前が開いた。それを手で押さえて、再び逃げようとする後から、松枝が、薙刀をとつて、その柄で肩を押さえて引き戻す。村山が前へまわつて、着物の衿に手をかけた。させまいとして、小百合夫人はもがいたが、絹の着物は肩からすべり落ちた。下に緋ぢりめんの長襦袢を着てい

る。

松枝は薙刀の柄を後から夫人の首にかけて、うなじをぐつと押すと、夫人はへたへたと前かきみに膝をついてしまった。そして、片手を置へつき、片手で薙刀の柄をはずそうとするのを、村山が逆手にとつて、押さえつけ、長襦袢の上にしめたとき色の紐をするつとぬくようにとつて、口にくわえた。はだけた衿から白い胸が見え、村山が逆手にとつた手を後手にねじり上げると、

「ううっ！」

と、肩をよせて、小百合夫人は客席にまともに顔と胸を見せた。

すでに乳房があらわになった。

長襦袢をはぎとると、村山は口にくわえた腰紐で、先ず後手に夫人の手を縛った。緋の腰巻と、とき色の紐が金屏風にうつて、なまめかしい。長い下げ髪が、白い肩に波打つ、小百合夫人の切れ長な目は、錦絵の様に美しかった。

客席からひそやかな吐息が洩れた。

雄作は握りしめた手に、じとつと汗がういていた。自分の目の前で、妻が虐げられている。なぜ、それを救いにとび出していけないのだらう。雄作の足は萎えたように、動こうとしなかった。

「さあ、どうじゃ、そちがあくまで知らぬというなら、そちの目の前で姫を責めるぞよ。よいか」

松枝は順子にいう。

それが芝居のすじ書きなのだらう。順子は心苦しそうに

「存じません」

と、声をふりしぼるのみだった。

上半身を裸にされた小百合夫人に、新しく、ひしひしと縄がかけ

られた。

「足首も縛るのじゃ」

松枝に言われて、村山は夫人の足首を縛った。

「さあ、その最後のものもとつてやるがよい」

村山の手が腰巻にかゝる。小百合夫人は身悶えしたが、絹の腰巻をはずすのはわけなかった。劇場でやるストリップショーとは違って、小百合夫人の体をかくすものは、何一つとてなかった。

雄作は自分が裸にされたような、居たたまれない恥しさを感じたが、中座することも出来ない。今、中座すれば、舞台の夫人の目に、自分の姿がうつるだろうと思われたのだ。といつて、全裸にされた夫人を、救いに立つていくことはなお恥しかった。このような羞恥は、今まで雄作が経験したこともない。その羞恥に耐えるのは、たゞじつと、身をかくしているよりないのだ。邦彦が、そんな自分を勝利者の様な目で嘲笑っているのも知っている。しかし、雄作は化石したように動けなかった。

小百合夫人は脇息の上に寝かされた。腰の下に入れられた脇息は、丁度夫人のかくしておきたい所を一番高くして、横たわらなければならぬようにしてしまつた。起き上ろうとしても、首を薙刀の柄でしつかり押さえられているから、起き上ることも出来なかった。白い体が弓なりになつて、お腕をふせたような乳房のさきに、乳首がピンととがつていた。

「どうじゃ、苦しいか」

松枝は小百合夫人の美しい体の線をねたむように見ていたが「くすぐつてやれ」

と、村山に命令した。

村山は鳥の羽で、夫人の脇の下から腹へかけてくすぐった。後手に縛られていても、腰が高くなっているから、手は脇の下から浮いている。スー、スーと、撫でられると、

「ううっ！」

と、猿ぐつわの下から呻めき声をもらして、夫人は身を悶えた。

首は客席を向けて、松枝がしつかり押さえているから、苦悶はただ胸の筋肉の動きだけに表われる。胸が上下に大きく揺れ、腸がのたうつかと思うようにみぞおちから腹にかけて、肉がおどつた。

「そちの主人がこのようなめにあわされても、そちはまだ知らぬというか」

松枝は又順子に言った。

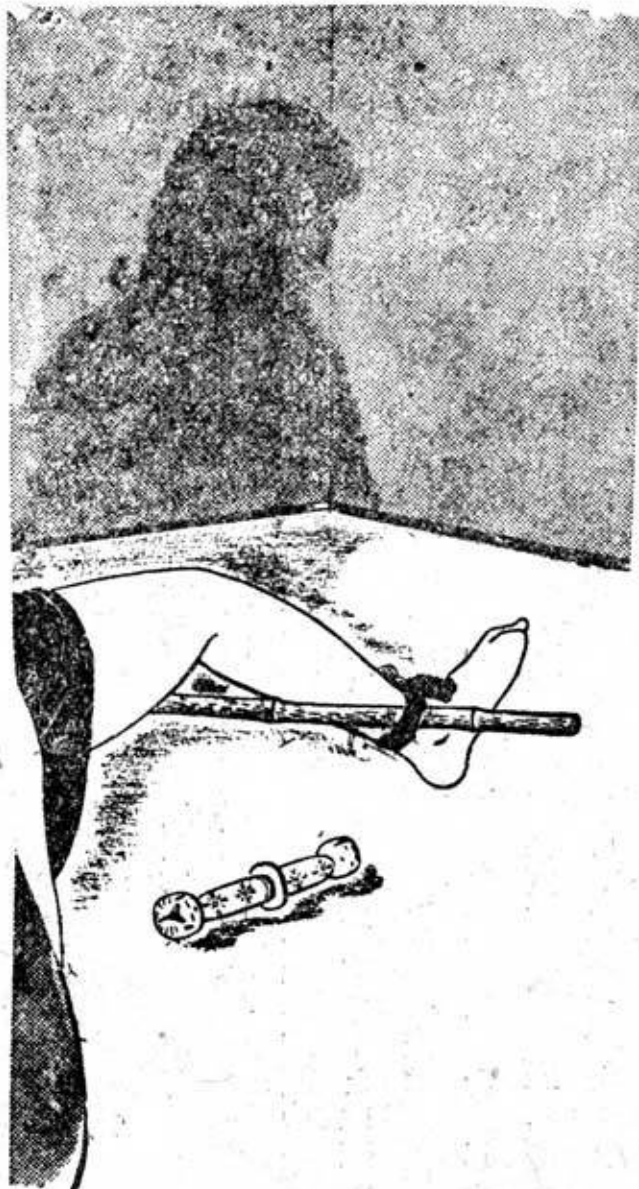
「存じませぬ。けれど、罪もない方をお苦しめにならずとも、責めるなら、私をお責め下さいませ」

順子が答えた。

「よし、よういうた。主従一緒に責めるのも一興じゃ」

と村山に命令した。

村山が三尺程の太い竹を持つてくると、松枝は順子の膝の縄をほどいて、足を開かせて、足の間に棒を入れて左右別々に、棒のはしにくくりつけた。そして、順子の着物もはぎとり、後手に結え直した。そして、………の底と底とを二つ合わせて、そこへ、刀のつばをはめこんだようなものを取り出した。そして、先ず順子の××に××××。順子はそれを………と身悶えしたが、両足は開かれて、棒に縛られ、手は後手に縛られているので、どうしようもなかった。



松枝は小百合夫人の足首を縛った縄をほどき、順子の上へ、無理にうつつむかせた。村山は後から小百合夫人をかかえるようにした。

雄作の額から汗が流れ、顔は蒼白に血の氣を失ってきた。妻の冒されるのを目の前に見せられたのだ。たとえ相手が同性であろうと、妻は冒されたのだ。しかし、妻は無理じいにそうされた。自分は自ら求めて、同性の相手と情を交したではないか。美しい妻を得たのに、妻を本当に愛しきれなかつた雄作に対して、誰かが復讐しているような気がする。もしかしたら、妻はこうして無理やりにはずかしめられることに喜びを感じているのではないか。どういう風に監禁されているか知らないが、逃げられぬはずはない。他のことには鋭く頭のきく小百合夫人が、救いの手を求める策を考えつかないとはおかしいことだ。

舞台では更にそうして、二人は後から弓の折れで打たれている。

猿ぐつわをはめられていない順子の口から、苦痛を歓喜と交々の呻

めき声が、見ている者の官能をゆすぶるようにひびいているのだ。猿ぐつわの下で、小百合夫人の呻めく声の中に、苦痛だけではなく歓喜の訴えがないといいきれない。

雄作は息苦しくなってきた。

その時邦彦の手がのびてきて、雄作の手をしつかりつかんだ。

突然、電気が消えた。

「どうしたんだ？」

あわてたような声が方々から起った。

してはいけないものをしていて、そしてそれをみていたといううろたえが皆にあつた。

「早く、早く」

そこに演じられていたことを、早くやめろというのか、早く灯りをもつてこいというのか、ただ「早く、早く」とわめく声が聞えた。雄作と邦彦も思わず立ち上つていた。

雄作が暗いのを幸に、小百合夫人を救いにつけようとしたが、邦彦の手がつかまえてはなさなかつた。邦彦は暗い中で雄作の唇を求めていた。

舞台では村山夫婦が、小百合夫人と、順子を引きはなし、手さぐりで順子の縄をといっていた。電気はなかなかつかなかつた。誰かがろうそくを持つて出て来たが、横から風のように急ぎ足で来た人として違つて消えてしまった。

村山夫婦は順子の縄をほどくと、小百合夫人はそのまゝにして、手早く衣裳をまとめると、逃げるように去つてしまった。誰も小百合夫人の縄をところとする人もない。それぞれ、帰えり仕度になつた。



雄作がやつと邦彦の手を振り払つて小百合夫人の縄をほどこうとした時、それを押しのけるように近付いた人があつた。

その時、ボーツと瓦斯燈がついた。停電に瓦斯燈の設備があつたことを、瞬間忘れていたらしい。

青白い灯の下で、縛られている小百合夫人の中に、雄作は貴船一郎に相對していた。

「あつ、あの人です」

女中が貴船をさして、主人らしい人に言つた。

「あの人が台所から入つて来て、いきなりあぶないといつて、スイ

☆ 作者の言葉 ☆

一年にわたって本誌に連載いたしました「淫火」も本月をもつて完結しました。御愛読下さいました方に厚く御礼申し上げます。新年号から再び新しく、ひとりの女をえがいていこうと思つて居ります。最初私はこれを松井籟子の

新年号よりの新連載

仮題 私の求めた男

まつ
井
籟子

自伝小説として、書いていこうと思ひました。しかしそうすると、反つて嘘が多くなりそうなきがしてためらわれるのです。曾つて私が作品を通して知り合つていた或る既成作家に、はじめて顔を合わせた時、「女つて、やつぱり嘘つきなんだね」と言われたのです。「何故？」

だと思つていた方が多ございました。そんな例は他にもよくあるので、籟子の自伝小説と銘打つても、本当の自分は書けないような気がします。ですから私は、別の名のひとりの女を登場させ、その女を通して、私のいろ／＼な

も、それは籟子の心の中では本当のことなのです。そして又、もし、本当のことを書いても、あるいは心の中で嘘なのかもしれない。淫火と同じように御愛読いただけたら幸いです。

と、私が聞くと「だつて、君の作品を読んで、とてもエネルギー感を感じたんだが、会つてみると君のどこからああいうものが出てくるんだらうと思う」そう云つて笑われました。この間の読者座談会でも、私を太つた女

面を出来るだけ明らかにしていった方がいいのではないかと思うのです。どんな女が出て来ますか？私であつて私でなく、私でなくて私である女性……。そしてその女が半生をかけて求めに求めている男とは、どんな男なのでしょう？悦虚に泣かしたいのか、泣かされたいのか？

ツチを切つたのです」

「あつ、あんたは……」

客の中の女将らしい女が声をかけた。

「一郎さん」

貴船は女を見たが、それが父の妾だつた旅館の女将と知ると、力を得たように

「僕はあやしい者ではない、サツの手が入るといふ情報があつたら来たんだ。とに角この人の縄をとかなければ……」

と、ズボンのポケットからナイフをとり出して、ブツン、ブツンと、縄を切つた。

「お母さん、何か着るものを……」

女将は急いで、自分の単衣羽織をぬいで渡した。

「一郎さん、その人……」

猿ぐつわをはずされた小百合夫人の顔に、はじめて女将は気がついたらしい。

「わけはあとでゆつくり話す」

と、一郎がいうと

「じゃあ、と角にうちへ行つていらつしやい。私はこの後始末をつけて、すぐに帰えるから……」

女将はその家の主人の方を振り向いた。

「いや、マダムのお存知の方なら、わけはあとで聞きます。一緒にお歸えりになつた方がいいでしよう。後の始末は私がつけます」

「いいえ、それでは……」

押し問答している間に、煌々と灯りがついた。

羞しさに、誰が誰やら見定めようともせず、下を向いていた小百合夫人は、貴船にうながされて立ち上つたが

「小百合さん」

呼びかけられて、はじめて夫がそこにいるのに気がついた。

「あつ！」

と、夫人はかけよるようは、むしろ身をひいた。夫婦の中に、いつも一枚立てられているついたてのようなものが、この場合でも、小百合夫人が夫にすがりつくのをさまたげた。

「行きましょう」

貴船一郎は雄作を無視して小百合夫人をうながした。

「奥さんをどうするの？」

邦彦が横から割つて入った。

「奥さん？」

他の人が聞きとがめた。

「ええ、そうよ、れつきとした旦那様が……」

ここに……と言おうする邦彦を、雄作が制した。

「違う」

雄作がうわ言のように言った。

「違う……僕の妻ではない。よく似ているが違う……」

「あら、そう、ごめんなさい」

邦彦は口もとにうすら笑いして、誰にともなく、自分の言つたことを失言としてわびた。それから急に

「ホホ、ハ、ハ」

と、女のように声をあげて笑つたが

「雄ちゃん、歸えりましょう」

天下はれた、女房になりましたというような、邦彦の明るい顔に引きかえて、雄作は囚われ人のような暗い顔で、再び口を開こうとはしなかつた。

(四)

窓の下を、道頓堀の川水が濁つて流れていた。濁つていても夜の川は美しい。

小百合夫人は肩をふるわせて泣いていた。そばに人がいるのも忘れたように、泣けるだけ泣くと、涙の中に、少しづつ胸のしこりとけていくようだった。

貴船一郎はそつと小百合夫人の肩に手をおいた。

「もう泣かないで……。僕はあなたを、どんなにでもして、幸福にしてあげたいと思つています」

貴船は静かに、力をこめて言つた。

小百合夫人はもう一度激しく泣き出した。そして、涙でかすれる声で

「私、私はもう、どなたにも愛していただけないのです。愛される

資格がなくなりました」

そう言う、悲しさがこみ上げてくるように嗚咽した。

「何をいうのです。たとえ、あなたの御主人があんたを見捨てても、僕は見捨てません。でも、僕のような者が、こんなこと言つては無礼なのかもしれませんね。あなたは僕とは境遇の違う方です」それを思うと、貴船一郎は、自分こそ泣きたいと思うのだ。幸福にするといつても、自分にはそれを裏づける何の財力もないのだつた「僕は貧しい男です。ただ、愛情だけはあなたの御主人よりも富んでいると思つています」

「そんなことおつしやらないで……。私主人はありません。夫だと思つていた人は私の目の前で夫ではないと言うのですもの……」

小百合夫人は唇を噛んだ。泣き声が洩れそうなのをこらえたからだ。妻ではないと云われたことを、夫に対する愛情で泣くのではない。あの場合、妻だと言われたら、よけい居たたまれなかつたろう。くやしきで泣くでもない。

「私はもう、人の妻にはなれません」

「それはあんな見世物に出されたからそう考えるのでしょうか？ 僕はそんなこと気にしていません。どんなあなたでもいいのです。問題は過去にはない筈です」

「いいえ、違うのです。私は、私は……」

小百合夫人は自分で自分の肩を両手で抱くようにした。

「私の体は駄目になつてしまつたのです。もうきつと、普通の愛され方では満足出来なくなつたのではないかと、それが……」

みなまで言わせず貴船一郎はいきなり小百合夫人を抱きしめた。

「僕がなおしてみせる。もし、なおらなければ二人で溺れよう。僕

は順子とあんな生活をしていたが、一緒に死ぬ気はなかつた。だんだんあそびが深くなつて、死を招きそうなのをたえずおそれていた。けれど、あなたとだつたらおそれない。一緒に死んでもいい。あなたの望むようにしてあげる。もしそれで二人の生活が滅茶滅茶に破壊されていつたら、その時は喜んで死のう。僕はもうあなたをなさない」

貴船一郎の腕が、痛い程に夫人の体をしめつけるのに、酔うような瞳にみいつた。そして、二人の唇はどちらからともなくびつたり吸い合わされて、離れることを忘れたように、いつまでも一つになつていたのだつた。

(終)

◆責めのアイデアを募る◆

責めのアイデアは読者諸氏から奇抜なものがドシ／＼送られ、既にその中のいくつかは写真となつて発案者の手元へ送られています。撮映困難にしても優秀なる発案には類似写真を贈呈いたします。アイデアには是非略画をお添え下さい。皆様の発案による構図やポーズによつて責写真を作つてゆきたいと思ひます。優秀なる企画並に採用の分には画稿又は写真を差し上げます。

■告白と手記を募ります■

- 一、文章の巧拙や用紙、書き方等は一切問いません。
- 一、投稿者の本名其の他個人的の秘密は厳守します。
- 一、誌上の発表は匿名にて結構です。
- 一、掲載の分には謝礼を差し上げます。
- 一、原稿の御送付は開封の上第五種郵便（百瓦まで八円）にてお願いいたします。
- 一、皆様の投稿をお待ちいたします

映画に現れた

猿ぐつわ

文 と 絵

鳴 山 能 平

アジャパー氏即ち伴淳三郎が、昭和十年極東映画で撮った「怪傑、鉄仮面」なる映画のフアーストシーンである。松並木にお休所なる茶屋があつて、其処に伴淳の浪人が酔いつぶれている。前にピタリと止った駕籠一挺二人の雲助が此の浪人を蹴飛ばして、酒を注文する。浪人はヨロ／＼と道の片隅に置いて

日活京都作品千恵蔵主演の映画があるが、中に光岡竜三郎扮する浪人の掌で口を塞がれ、家の中に連れ込まれ、縛手猿轡で蹴くシーンの遠写が三分程あつた。(昭和十一年)之は小生の記憶する古いものであるが、寢室を襲われて叫ぶ口を男の手が押え、次のシーンは寢巻姿のまゝ床の上に縛手手拭の猿轡で逃げ

ある駕籠の垂の中に首を突込むと、中に美しい娘が後手で猿轡の身を蹴いている。それこそアジャパーなる眼付顔付で、浪人は此の猿轡の怪美人に、見とれてしまう。雲井美代子の扮する此の娘はそれから二度、三度と拐かされるのであるが、その度に白布の猿轡であり、伴氏が鉄仮面で現われ之を解いてやると言う映画であつた。

女優の中で一番多く猿轡のシーンを撮られた筆頭は、花井蘭子である。

開巻劈頭、手拭の猿轡で老中田沼意次の供物として駕籠から転び出る「血煙天明神」

んとするのを、黒装束に抱き下げられてしまふ、右門捕物帳「伊豆の旅日記」(昭和二十四年)がある。連れ去られる途中出現した右門によつて、悪人共の手から逃がれるが右門は飛来する弓矢の為、彼女の縛を解く事が出来ない。尚も手剛く反抗する一人の黒装束と右門を目掛けて矢が喰る、危機をみかねて、猿轡のまゝ争う二人の間に割つて入る場面など、正に絶品であつた。花井蘭子の猿轡のシ



ーンは大概手拭が彼女の唇だけでなく、常に鼻から上を覆っていたものである（因みに洋画は「縛られた女優」に紹介のシーンでもすべて猿轡にハンカチか、白布で歯と歯の間に掛けるのであり、良くて唇だけであり鼻孔を塞ぐ芸当は、フェミニストの外国では出来ぬらしい）戦後派で割合に多いのは、ヴァンプ女優又は官能女優なる日高澄子である。死美人事件では、江川宇礼雄の怪人に墓地で襲われ、ハンカチで猿轡を嵌められるアツプがあり、画面全体に彼女の顔が映った後、さらわれる途上、河津清三郎の記者が難を救い、顔のハンカチをとつてやるシーンがある。「七つの宝石」では叫ぶ口を数人の不良で囲まれ、塞がれ、大阪志朗にグルグルとタオルを廻して嵌められ、更に縛しめのまゝも掻くの蹴飛ばされる所がある。（やがて不良共が去った後※



※気を失っている彼女を連れさる高田稔が屋根から入ってくるが、其時彼女の猿轡は、タオルから日本手拭に変つていたのに驚いたものである。）

「銭形平次地獄の門」等々が更にあるが、猿轡のシーンの最も長く鑑賞出来た映画を挙げて見よう。何といつても時代物が多く本誌三月号、四月号の「縛られた女優達」の紹介で重複の難があるが、「天狗の安」阪妻、入江タカ子で、阪妻の死後、商魂たくましく再上映されたものである。之がまず小生の見る所では一であろう。

薄暗い土蔵の二階。長襦袢のまゝ柱に縛られている芸者お静。そこへ親分進藤英太郎の命を受けた用心棒戸上城太郎が上ってくる。「親分の命令だ！。悪く思うなよ」と豆しほりで口に猿轡を嵌める。

（どうも映画の猿轡を嵌めるシーンであるが

皆キユーツと素早く。てな表現であり。しつかりと堅く嚴重にという感じが無いのはいささか残念であり、ゆつくりとて遊ぶ如く力一つぱいに噛ませて貰い度いものである。只エノケンの「ちやつきり金太」（昭和十五年）でエノケンが松に山県直代と一緒に縛りつけられている女賊に、手拭で「えゝこん畜生く」とグイ／＼と猿轡を締めるシーンがあったのみである）

用心棒が芸者に猿轡を嵌める前に、親分が天狗の安に悟られぬ様

「此の手拭でな、お静の奴に猿轡を嵌めて来い」

と云いつける。此の猿轡と言う言葉が画面の登場人物から洩れるものに一番古くはトッキーになりたての頃、阪妻、森静子主演の「砂絵呪縛」があり、最近では千恵蔵、花柳小菊の「はだか大名」の中に原健作が、小菊の芸者小品を襲い、

「エ、な、な、何、何をしてやがんでエ、早くさささるぐつわをはめちまえー」

というせりふがあつた。大分脇道にそれたが次のシーンは、天狗の安と歩いている児分水原洋一が見世物の絵看板浦里の責を見て、お静を連想し「ああつ」と声を発するや、ク



ローズアツプで入江たか子の猿轡の顔が映るというわけである。親分が来て猿轡を解き口説くが、又直ぐ手拭を巻きつける。同じ場所
で猿轡を解き、口説き又怒つてはめ直して行く。同じく親分が手燭を持つて上つて来て、
先ず猿轡を外すし、今夜こそ身体を貰うと言
う所へ、阪妻の天狗の安サンが現れる次第。
次に主役女優の美しいのが二人共猿轡で映
る「銭形平次」大映第一回作品がある。

香川良介扮する亀蔵が地下室へ降りて行く
と、三条美紀の大きい眼が猿轡の下から、憎

悪に燃えて光る。亀蔵は同じ様に手拭で、顔
の半ばを掩う猿轡の、平次の女房のお静に話
しかける。

「お静さん。苦しいだろうが今暫く、お前さ
んを出してやる訳にはいかねエー」

そして身蹴く、美紀の縛しめの身体を無理
矢理に、連れ去ろうとして猿轡を解く。そし
て行燈を横倒しにすると、忽ち紅い火焰が上
る。「嫌です〜。姐さん助けて〜」

と叫ぶのをどうする事も出来ず、長谷川裕
見子のお静は、柱に縛られたまゝ次第に烈し
くなる火勢の前に、跳き苦しむ上半身のアツ
プも素晴らしいものであつた。

嵐寛寿郎の「鞍馬天狗、大江戸異変」は
沢村昌子の可憐な姿がある。恋人黒川弥太
郎に逢い度い一心で馳せ込んだ屋敷は、何
と清川莊司扮する色魔の巢窟であり、やが
て縛手猿轡のまゝ柱につながれている娘を
色魔の情婦が短刀で殺そうとして、誤つて
娘の縛めを切り、娘は夢中で騒ぐ、それを
聞いて現れた清川にすがりつく。その娘を
今度は清川が縛り直して蚊帳の中の床に入
れ、猿轡のまゝ犯さんと迫るシーンがある
監督は並木鏡太郎でこの人はこういったシ
ーンが案外好きらしく、右門捕物帳等前に

紹介のを含めて、三四ある様だ。殊に蚊帳、
布団と道具立の中で猿轡後手の身をあとずさ
る姿は、若いだけに色気はないが、良いもの
であつた。

吉川英治氏の無明有明を日活で映画化し、
月形竜之助、大倉千代子で昭和十五年上映さ
れたが、此の中で大倉千代子も大分縛られる。
自分の子を探し求める薄幸の人妻であり、又
突然のショックによる盲の彼女が、横恋慕す
る団徳磨の一味に、担ぎ上げられやがて顔一
ぱいの手拭の猿轡で、家の中に荒々しく連れ
込まれ、畳の上に猿轡の頬を当て、泣くク
ローズアツプがあり。やがて此の一味と共に



後手猿轡のまゝ何度か運ばれ、団徳磨と襖一枚をへだて、男は何となく照れ臭く、女は憎い恋仇の此の男の入ってくるのを、恨みをもつて猿轡乍ら、キツトした眼付で見守る、カット／＼の連続せる心理描写があつた。

此の映画には男の猿轡も出てくるが、猿轡は矢張り女の然も美人に限り、ババアの猿轡など乙なもんじやない所か薄汚い感じがする昔美男で女形もやつた沢田清。今じや鶴田浩二に張り飛ばされる三下役でカムバックしているが「十万両秘聞」なる右門映画に、恋人役の深水藤子と扮かされ、侍姿に猿轡をされていたが、あんまり感心しなかつた。(長谷川一夫の「けんか黨」ですら可笑しかつた)

同じく戦前に市川右太衛門主演の新興映画宝の山に入る退屈男も、其頃のホープ甲斐世津子が、悪人共に捕れて後手のまゝ責められしばらく猿轡の場面がある。退屈男来たと知るや、兎分の一人は娘に之も素早く手拭で猿轡を嵌める。退屈男が悪人共の住居にふみ込んで見ると、天井に猿轡後手の娘がつり下げられているそして悪人共は退屈男の懐中の宝地図を娘の命と交換に求める。此のつり下げられた娘が次第／＼に降りて来る。

矢張り新興に大谷日出夫と言う男がいて、

最近大菩薩峠で端役をやっているが、彼が主演の白頭巾三部作の二部高山広子の姐さんが大木に太い縄で縛られて、手拭で猿轡の姿が長い事続いた。その前には大勢の悪人共が此の女のおとりに白頭巾を待つていたのである。やがて現れた白頭巾は、白馬よりサツソーンと降り立ち白刃の中に斬り入りバツタ／＼とやる。何

しろ悪人共が多いので仲々姐さんは解放されない。やがて縄に白頭巾の刀が当たると、彼女は乱刃の中でしばらく

猿轡のまゝ彼氏の背後についたが、やがて手拭をかなぐり捨てると言うシーンがあつた。

扱紙数の関係もあるので、駕籠の中に猿轡の娘。押入の中に、又柱に、括られてと言う場面より一寸毛色の変つたのを紹介するならば、どうも「縛られた女優達」に恐縮です「春風無刀流」千恵蔵、小菊ですが、小菊姐



さん扮する所の江戸前お銀という威勢の良いのが一つ目御前と呼ばれる大友柳太郎一味に誘拐され、毛唐共に売られる破目に成り、今度は黒布で猿轡後手のまゝ、兎分に庭の中を裏木戸までこずかれて、よろ／＼しながら歩かされるシーンは不思議とチャーミングだつた。

「二十一の指紋」に於ける喜多川千鶴、即ち彼女が悪漢共に捕えられている。千恵蔵の伴内探偵勇躍乗り込んで見ると、空部屋ばかりその中で人の気配する部屋の中を鍵穴を通して見ると、彼女が長椅子の上に縛られて、白布で猿轡の姿を横たえている。扉を開けて躍り込んで見ると、丁度彼女の真上にナイフが紐でつるされておりその紐を正にろうそくが燃え切らんとしている。彼女は必死で眼で伴内探偵に教えるというのがある。



マキノ智子という無声映画時代に活躍していたヴァンプ型の女優が日活で大河内伝次郎と共演した映画「薩摩飛脚」で山本礼三郎扮する所の生臭坊主の為、グル／＼巻の猿轡で舟に乗せられ大川を流される。一方此の姐御の児分がブラ／＼と大川端まで来ると、一寸した入江に泊った小舟の中に姐御が縛られている。そこで此の乾分はさん／＼手を打って笑う、ところが姐さんは大河内の演ずる神谷なる侍に、彼の危機をしらせ度く、小舟の中で必死になつて跳く、乾分はそんな事は知らず口もきけない姐御をじらし抜くと言う面白い場面もあった。

お千代傘」である。之は尾上菊太郎、高津けい子主演であるが、幕府のスパイお千代を菊太郎の勤王志士が見破り、後手のまゝ家より連れ出し手拭で鼻口の猿轡を嵌ませ、小舟に乗せ流してしまふのである。半ば観念した女の目が長くスクリーンに映つていた。最後に猿轡のシーンの出てくるものと思いつくまゝ書き並べて見よう。

○橋公子「神変じやこう猫」手拭で鼻口、伝馬舟で運ばれる。昭和十四年日活

○市川春代「鰐鳴浪人」志村喬の為、黒布で鼻口、椅子に振袖のまゝ縛られて跳く。昭和十五年と、「風雲将棋谷」で尾上華乗の為、豆しぼりで、猿轡を嵌められ様とする。昭和十六年

○星 令子「槍の権三」志村喬の為、神社で襲われ駕籠で運ばれる際、黒布の鼻孔を掩う猿轡

○大倉千代子 千恵プロ「三ツ角銀平」駕籠で拐かされる際

○轟夕起子 日活多摩川の昭和十七年「電撃二重奏」此の中に三回程猿轡

のシーンがある。山賊に家来諸共捕まり、お姫様の彼女だけ猿轡をかけられ足をバタ／＼させるが、やがて縄じりをとられて引立てられる。城中より闇夜引出され、裏門が開いて黒覆面に引立てられて橋の上をヨロ／＼と歩かされる轟の縛姿を、顔の半ばを白布の厚い猿轡が強烈な印象を与えやがてグ／＼と猿轡のアツプとなりバラリと白布がのどへすべり落ちる。今一つは駕籠の中。

○野上千鶴子「千里の虎」昭和二十五年。同じ長屋のゴロツキに「どうせ散るなら此のわしに」てな文句で口を掌で塞がれ、やがて気絶した身体を抱きかゝえられる際、手拭の猿轡。

○岸 恵子「鞍の火祭り」昭和二十七年、之も氣を失つた身を顔に猿轡の手拭が巻かれていた。其他「お洒落狂女」東映「鳴門秘帳」日活「旗本伝法」新興「山岳武士」新興「まぼろし城」極東「首売り三太郎」新興「弥太郎笠」大都「千葉周作」阪妻プロ「丹下左膳」マキノ映画「真田八勇士」極東「奇傑白頭布」日活等がある。

× × ×

春風座秋の旅路

青山三枝吉

杉原虹兒・画



(1)

ひるまから、こおろぎが鳴いていた。

「どこで鳴いているのかしら？」

と、マリが、まだ眠りから覚めきれない、かすれたような声で云った。

「さあ……」

私は、枕もとの煙草を臥たまゝ手探りでつかむと、一本をぬいた。

「壁の中にもいるんだろう……寂しい声だな」

私は腹這いになって、フウと煙を吐いた。シミだらけの破れ壁に、煙草のけむりはあたつて消えた。ゴミゴミした裏町の、三等アパート。こおろぎが生れ、育つには、あまりにも適当でない環境である。朝から腐つたような空気が漂う、この建てこんだ大都会の裏町から草一本みつけるのも容易でない。しかし、こおろぎは生きてコロコロと鳴く。そして私は、私とマリは

東京の秋も、もう深いことを知るのである。

東北地方の巡業から戻ってきたのは、秋といつてもまだ残暑はきびしかったが、この頃はガラス窓の隙間から、四畳半の部屋に吹きこむ風も、肌寒むかつた。

「あたしにも煙草一本ちようだい」

肉付きのよいマリの腕がニューとのびる。

「勝手にとれよ」

白蛇のようにマリの腕がくねくねとそのまま私の首にからむ。

「よせよ」

私は、煙草の火を、からみつく真白い二の腕に押しつける。

「アツツ」

大げさな悲鳴をあげたマリは、起き直ると薄い寝巻の上から私の肩をいきなり噛んだ。

「痛い！」

こんどは私が悲鳴をあげる番である。

「痛いなア。つまらないことをするなよ」

「カタキウチよ。煙草とつてくれないんだもの。」

「だから勝手にとれつて云つてるじゃないか」

私は、つい口調が荒くなつた。マリはふと黙つた。もそもそと、また布団にもぐりこむ気配がした。私は放心のまゝ、二本目の煙草に火をつけた。にがく、からかつた。空虚だつた。視界が全部灰色だつた。身体までが灰色の雲に包まれて、あてどなく漂っているようだつた。

ふと、マリの布団が小刻みに動いているのに気づいた。

「どうしたンだい？」

私は、マリの肩に手をかけて、こつちを向かせようとした。マリの肩は拒んで動かなかつた。私はマリの顔を両手ではさむと、強引にこつちを向かせた。黒い大きな瞳から涙が溢れていた。泣きじやくつていたのである。

「どうした？何が悲しい？……」

マリは、じつと私の眼をみつめると、又、咽喉の奥でヒクツとしやくり上げた。

「バカだなア……子供みたいに」

私は、マリの額に乱れている髪を、てのひらで撫であげてやる。ゆえ知れぬ愛しさがこみあげて、マリを抱きしめる。赤ン坊のように私の胸の中に顔をうずめるマリ……。

「どうしたンだよ、ええ？」

マリは、赤くはらした眼をあげると、

「あなた、今、なにを考えていたの？」

「……」

「ねえ、何を考えて居たのさア……」

「……」

「あたしにも云えないことなのね。わかつた。あたしとの、こんな生活、いやになつたンでしょう？……」

マリは女の敏感さで、私の心の端に計らずも触れた。東北の旅先で愛し合うようになってから、ズルズルと深みにはまりこんだ私達……。マリの肉体は、私の若い心をしびれさすに充分であつた。情痴に明け、情痴に暮れた日毎。人間の愛慾というものは、かくも理性を踏みにじるものなのか。私はマリの豊かな乳房に顔をうずめて呻いた。私には、もつと他にやらねばならぬことがあつたのだ。

若い私には、女の肉体に惑溺することよりも、もつと他に、取組まねばならぬ仕事があつたのだ。新しい文学の探究……新しい時代を造るものの、限らない喜びと建設の歌。……だが、このようなたゞれた生活の中に居て、どうして、明るくたくましい文学に情熱を燃やすことができる。

「マリ、今朝の新聞に、俳優座の研究生募集の広告が出ていたの、読んだかい？」

マリは首を横にふる。

「読んでごらん。君は、はじめから新劇の女優を志望していたんだろ？」

「あたしに今更、新劇の研究生になれつて云うの？」

「……………」

「第一、新劇の研究生になんかなつたら、一銭もお金が入らなくなるわ。あなたの原稿料だつて頼りになれる程のものではないし……」

「それを云われちゃ、おしまいだな」

私は、さびしくわらつた。

(2)

その日は、午後から銀座へ出た。せまいアパートの一室にゴロゴロしては、気がふさいでやりきれない、とマリが云うのだ。

相変らずの雑踏を、人の流れに押されて歩く。この喧騒の街にも秋の匂いがあつた。黄色い都塵を透して、深く澄んだ秋の空が建ち並んだビルの中に拡がっていた。

腕を組んで歩いていると、マリの体温が私の腕に伝わる。それを温みと感ずる程、空気の冷える季節になつてゐるのだ。

コーヒーを飲み、ホールで踊る。

黄昏から、いつせいにネオンが点つた。

「へええ、あんな中間色もだせるようになったんだな。」

去年までは、どぎつく光るばかりのネオンだつたが、最近では落ち着いた美しい色が輝くようになった。都会は、昼よりも夜のほうが明るい。

映画を一つ観る。外国の悲恋もの、私は主人公の悲しい運命に涙をこぼした。恥しい程、頬に溢れた。いぶかつてマリが、

「どうしたの？」

と訊く。

「いや、あまり可哀想だから」

マリはかすかに笑つて言つた。

「あなたらしくないわ」

私は画面をみつめたまゝ答える。

「秋の感傷さ」

その夜、疲れて帰つた。寝巻に着替えて布団の上に転がるとマリも又、私の身体にぶつかるとして寝転んだ。私の首に両手を巻く「キスして……………」と眼を半分閉じてマリの要求。私は、口紅のはげかゝつた唇に軽くキスする。重いマリの肉体が、私におおいかぶさる。息のつけない程はげしいマリのキスに、私は思わず抵抗する

「重い、おりろ」

「いや」

「苦しいよ、もうやめろ。」

「いや」

私は、満身の力でマリをはねのける。なおも搦みつくのを、私は布団の上に組み敷いた。と、私の手は自然にマリの手を後ろにねじあげて居た。手際よく両手首を背中中でひとつかみにつかむと、あたりに落ちて居る布紐でグルグルと巻いた。マリは形だけの抵抗でちよつと身悶えたが、すぐぐつたりと頬を布団につけて眼を閉じる。浴衣がはだけて、盛り上つた乳房が呼吸の度に動く。マリの息使いは次第に荒くなつてくるのだ。

私は縄尻をグイとひく。

「起きろ」

よろめきながらマリは起ち上る。私は細引を一束、ふところに入れると、縄尻をもつたまゝ、マリの肩を小突きながらドアを開け、廊下に出る。ところどころに暗く光る電燈を頼りに、私はマリを階段に追い立て、上へ上へと登らせる。アパートの同居人達は完全に寝静まつたこの真夜中。私は、女を誘拐してきたギヤングのような錯覚を抱いて、朽ちかけた階段を一步一步屋上へと登つて行く。

冷たい夜気が頬を撫でる。雲一つない夜空に星が一面にまたゝいている。街のネオンはまだ消えない。或いは一晩中点いているのかも知れぬ。時折、汽笛がボォーと鳴るだけで、あとは死んだような静けさ。屋上には、ボツンと裸電燈が点いているだけである。私は後ろ手のマリを引き立て、その裸電燈の柱まで歩かせる。柱は三寸程の太さ。私はマリの手首の紐をほどくと、その柱にマリの背中を押した。そして、両腕を柱の中にして再び後ろに廻し、その手首を縛つた。柱をひき抜くか、紐を切るかしなければ、もうマリは動くことができない。私は、くくられたマリの前に、両腕を腰にあてゝ立つた。

「どうだい、マリ、もうお前はこゝから逃げ出すことができないんだぜ。お前は、おれに何をされても抵抗することはできないんだ」夜は人間の神経を異常にする。私は現実と自分の演技との区別がこの妖しい雰囲気の中に自然に解けこんでいくのを感じた。マリとて女優である。私の脅迫に眼を大きく見開くと恐怖の表情で身を悶えた。私はマリの首をかき抱く。そして動くことのできないマリの唇に自分の唇を押しつけると、はげしく音たてて吸つた。

「ムムツ」と身をよじつたマリ、私はマリの横面をパアンと叩いた。

軽く叩いたつもりだったが、静寂の空気にひびいて、その音はびつくりする程大きかった。私は、持つてきた細引きで、柱につないだ女の両足を揃えてギユツと縛つた。そして、余つた縄をしつかり握ると、柱の周囲をグルグル廻りはじめた。私が一回柱を廻れば、縄はマリの身体を一廻りするわけである。私は胸もとを突き上げるような快感を覚えながら、柱の周りを「えい、えい」と、小さな掛け声をかけながら廻つた。一寸した力の加減で、マリの肉体をしめつける縄の強弱を決めることができる。足首から膝、膝から股へ、股から上は縄を肩にかついで船を曳くような恰好で縛つて歩く。少し力をこめると、マリは「ああ……」と、身体をのけぞらせる。腹を縛り、胸を縛り、首にかかるのと丁度縄が終りになった。裸電燈の鈍い光りの下に、ギリギリとくくられた女体。

「痛い」

マリは、かすかに首を横にふる。

「苦しい」

女の唇は半開きにひらかれ、小さい白い歯並がのぞく。眼は閉じられたまゝ、しかし苦悶の表情はない。

「マリ！」

私の強烈な愛情は、せきを切つてほとぼしり、柱ごとマリの肉体を抱くと、はだけて露出した肌に、ところ嫌わず唇を押しつけるのである。頬に、肩に、胸もとに、太股に、夢中で吸引した為に残る赤紫色のアザ、巨大な白桃のような乳房の上と下に縄が喰いこむと真白な肉塊は締めあげられ、盛り上げられて、ひよつこりと隆起した薄紅の乳首の愛らしさ。私の掌は乳房を握り、もみ上げ、指先は小さな乳首を執拗にもてあそぶ。私の鼻孔をマリの熱い吐息がおおる。深夜の屋上の、この奇怪な情景を見る者は、一体私達の行為を何とみるであろう。細い電柱に縛りつけられた半裸の女、明滅するネオンが、この痴戯に狂う男女を、赤く、青く照らしている。私は、細長いベニヤ板片を探してくる。マリのフトモモをそれでビシリと打つ。音は高く夜風に響くが、それ程痛くない筈だ。「ムウ……」と呻くマリ、ビシリ！「ムウ……」ビシリ！「ゆるして……」「まだまだ」私は、ハアハア息をはずませながらベニヤ板を振りつつける。力尽きて私はフラフラになつた。どつかりと屋上の床に腰を下ろす。身体を投げ出し、俯伏せになると、額から垂れた汗がポタリと床に落ちた。夜風が熱い身体を吹きぬける。私は首をあげてマリを見た。乱れた髪をぐつたりと前に落して、死んだもののように動かない。

「マリ！」

私は小声で呼んだ。マリの髪が揺れたように感じた。私の胸の中に、歓喜のあとの、云いようのない悲しみが、頭をもたげはじめた。夜眼にも白く、霧が流れていた。霧はかなり濃く、私の肌を濡らした。私は何時までも、冷え冷えとした床に俯伏していた。

こおろぎが、ここでも鳴いていた。

(3)

春風座の座長、谷村が、何時ものように私の部屋を気軽に訪ねた「やあ、元気だね。おや、マリちゃんは？」

「今ちよつとそこまで買物に」

「そうかい。………どうかね、よろしくやつているかね？」

苦勞人の谷村は、そこでアハハハ、と笑つた。

楽屋内の恋愛沙汰はとかくうるさい。それを蔭になり日向になつて、何かと面倒をみてくれたのは谷村であつた。私とマリとの異常な性愛も、谷村は或る程度知つていた。が、変人の多い舞台人のこととて、マリが完全に私のものになつたと知ると、他人のそんな私生活に余計なクサバシを入れる者もなかつた。谷村は四十を二つ三つ越して、酸いも甘いも噛みわけた分別盛り。家には十五を頭に五人の子福者であつた。

「ところで、又、君に骨を折つてもらふ仕事ができただ……」

「はア、ぼくに出来ることでしたら、なんでも……」

「いや、君でなくてはできない仕事なんだ。実は、君も知つている通り、あと半月もしたら、又、春風座は旅に出る。今度は東海道を順に打つていくらしいのだが、それで新しい脚本を、又、君にお願いしたいのだ。というのはこの前の例の責めの芝居ね、あれを今度は現代劇でやつてくれと、これはまあ、興行師の大川さんの意向なんだがね。ぼくも賛成して、せいぜいガンバりますと、返事をしてきたんだ。どうだね、こゝらで眼先きを変えて現代活劇の責めの台本を書いてくれないか。江戸情緒的な美しさは出せないが、反対に相

当迫力のあるリアルな責めができると思うんだが」

「ストーリーイは？」

「それはよく今更考えなくとも、君にまかせるよ。少し位辻褄が合わなくなつて、そこはそれ、軽演劇だから、要するに見て面白ければよいというわけだ。大川さんも君に大分期待をかけていたよ。これ少ないけど今度の原稿料の一部だ。大川さんからもらつてきてあげたよ」

「いつもすみません」

私の頭の中に、今、谷村から話のあつた現代劇のストーリーイが、もう湧然と芽生えはじめていた。ギヤング、酒場の女、ピストル、血、密輸団、地下室、それらの言葉が次々に脳裏に浮び、その連想からくるストーリーイの組立てに心をうばわれていた。

私はその晩から、新しい脚本に着手した。

半月後には、又、旅。私は急に旅の敘情が恋しくなつた。旅は全ての焦りを忘却へ運ぶ。原稿紙に向うと、私のペンは、勢よく走り出した。

——東都のS繁華街に最近になつて急に隆盛を誇るようになつた「ナイト・クイン」と呼ばれるキャバレーがあつた。このマスターは田村といつて戦争中は軍隊で鬼中尉と呼ばれる程の残忍さで鳴らしていた。鬼中尉とは敵に対して勇猛なのではなく、部下に対して極めて苛酷な待遇を強いた為に呼ばれた異名であつた。

戦後数年たつて、戦犯のほとりもさめた頃、東京の盛り場に忽然と現われた田村は、その辣腕をふるつて、たちまち「ナイト・クイン」という、S街でも一、二を争う大キャバレーのマスターにのし上つてしまつた。

或る夜、「ナイト・クイン」のネオンをくぐつた、野間という若い男が居た。一ト眼その男の顔をみたマスター田村は、持つていたグラスを落す程驚いた。田村が鬼中尉と呼ばれ悪事を働いていた頃シンガポールで原住民の商店に押し入り、多額の金品を強奪したことがあつた。それを偶然目撃した野間上等兵は、椰子林の中で田村のためにピストルで射殺されようとしたが、幸い肩を射ぬかれただけで逃れることができた。それから終戦まで野間は原住民の中に潜伏して、田村への復讐をねらつていたのである。

かくて月日はめぐつて、東京「ナイト・クイン」での再会。田村が旧悪の口封じに分厚い札束を野間に渡そうとするが、拒絶する野間。そして女給の中に、十年前まだ学生だつた野間の恩師の娘、早苗が居るのをみつける。恋仲だつた野間と早苗は再会を喜び抱き合う。それを冷たくみている田村。田村はミドリという情婦がありながら早苗に魔の手をのぼそうとしているのである。

「ナイト・クイン」は一ト皮むけば外人相手の大掛りな賭博場である。巧妙に造られた地下室には、富有な外人や日本人が、日夜巨額な勝負を闘わせているのである。

早苗は田村の強引な誘惑に地下室に閉じ込められるが、その時「ナイト・クイン」が賭博場であることを知る。驚いて逃げようとするが田村の残忍な手に引き戻される。田村の情婦ミドリは嫉妬と口惜しさに燃えて、早苗を責め折檻する。

そのミドリも、田村の手下の中井と通じているのである。まだ二十を二つか三つしか越していない中井は、何とかしてこの悪の巢から離れようと機会をねらっているが、田村一味の眼がきびしいので逃げられない。ミドリは田村にかくれて中井との愛慾に溺れている

が、その密会の場を田村に発見され、早苗の縛られている部屋に、同じ様に縛りあげられる。

「ナイト・クイン」を怪しいと睨んで探索を続けている野間は、早苗の姿の見えなくなつたのに不審を抱き、変装し、客を装つて、賭博場に乗り込む。

早苗達の捕われている部屋を探りあて、三人の縄をほどく野間。

その時、ピストルを持った田村一味が三人を包囲する。野間の手にもピストルが握られ、ここに壮烈なピストル戦が展開される。中井は腕に弾丸を受けながらも包囲を脱出。警察へ知らせる。女二人をかばいながら野間の奮闘、しかし、田村の射つた一弾はミドリの胸に命中。ミドリはバツタリと倒れる。その時、中井の知らせで警官隊が駆けつけて、一味は逮捕される。硝煙漂う中に、野間と早苗の固い抱擁――

このストーリーも前回の「娘捕物、江戸のまぼろし」同様、大衆

小説や活劇映画によくあるヤツだが、たゞ舞台は映画と違って時間的にも場面の接続においても、かなりの制約を受ける。まして旅公演ともなれば舞台装置にも出来るだけの簡略化が必要である。谷村の言葉では旅立ちが半月後ということだが、けいこにどうしても一週間位の余裕はとりたい。私は予定を立てると夜を日について机に向つた。



そして丁度五日目の夜、現代活劇「悪魔の拳銃」六場を苦心惨澹書きあげたのである。

翌日、私は早速、浅草千束町の谷村の家を訪ね、脚本をみせた。可と決つたので配役を検討する。その結果、野村には座長谷村、その恋人早苗には、まだ入座して間もない花房悦子を抜擢することになった。悦子はまだ十九才の初々しい娘で、その可憐な容姿を買つたのである。敵役「ナイト・クイン」の田村には老練な関根一郎、その情婦に春木マリ、中井青年は若手二枚目の利根達夫に、それぞれ落着いた。あとの軽い役にはいつもの通り研究生の若い男女優に二役も三役も受持つてもらうことにした。

けいこも一通り仕上げて、春風座が第二回目の旅興行に出たのは十一月上旬の、或る薄ら寒い日であつた。

(4)

東京駅を朝発つて、一行が東海道線K駅に着いたのはもう夕方。紫色に黄昏れた富士が大きな眼の前にそびえていた。

「静岡つて、寒いところね」

と、マリが私に寄りそい、寒そうに声をふるわせて云つた。

「静岡は東京より暖いんだよ。今日は気候がこんなだから寒いのだよ」

「これから先が思いやられる

わ

「弱音を吐くなよ。まだ旅の第一歩じゃないか」

私は、マリの肩を抱いて慰めるように云った。旅館までの道を私達はそれぞれの荷物を抱えて歩いた。又、当分家を離れての旅生活である。これから先の新しい仕事に対する意欲と、その反面、浮草稼業の寂寥さが一様に皆の胸に迫つて、黙々と昏れかけた道を急いだ。そんな私達の前に原色を明確にほどこした春風座来る、のポスターが眼につくと、「ホウ」とか「へエエ……」とか、言葉にならない感嘆が皆の口を出る。例によつて私がデザインしたポスターが街中至る所に貼つてあるのだ。地下室に閉じこめられ、天井から吊るされた娘。美しい顔は苦悶にゆがみ、裂けたスカートから太く白い腿があらわにのぞいて、ボタンをひきちぎられたブラウスの胸からムツチリと飛び出している乳房その乳房を猥猛な顔をした男がギユツとつかみ、右手のピストルは女の下腹にもぐりこむ程強く圧しつけている。

「青山さん、又、描いたね」

「相変らず、エロっぽい絵だね」



いたのである。立看板には、

——東都の人気劇団春風座来る

ここに赤裸々なる人間性の解剖、官能の探究を目指す劇団来る。しびれるような興奮、妖艶なる美の極致に陶醉する二時間半。壮絶なる都会の拳銃戦、春風座の新作「悪魔の拳銃」六場に絶大なる御期待を乞う——

——と書いてあった。

「経験者は、えがく、か」

座員たちの遠慮ない冷かしに私は柄になく照れる。マリは怒つたようなツンとした表情で聞えないフリをしている。古い俳優の関根までがいい年をして「あの縛られている女の顔はマリちゃんそつくりじゃないか。それにしても、あの男のほうは俺だろうが、ずい分悪党面に描いたなア」

などと云う。私達が明日初日を開ける劇場の前を通つた時、大きな立看板が夜眼にも判然と突つ立っていた。一見して私はゆえ知れぬ苦笑がこみあげた。マリの脇腹を思わずひじで小突

そして初日――

今度はいい期間があつたので、セリフもよく入つていて、危ない気のない舞台の進行であつた。

第三場、キヤバレー「ナイト・クイン」の地下室。上手に物置に使つてある汚ない部屋。下手には賭博場に通ずる廊下があつて、客が時折往來する。始終にぎやかな音楽が聞えてくる。階上に登る段が半分みえていて、手下が見張りについている。やがて早苗が、酔つた田村に手を取られて階段をおりてくる。逃げようと懸命にもがくが、田村のがつしりした手は鉄のように早苗の二の腕から離れない。

早苗「おねがいです。離して下さい。あたし、あなたにこのようなことされる覚えはありません」

田村「ウフフフ。そつちに覚えがなくても、こつちにやちやんとあるんだ。そう嫌わなくてもいいだろう。俺はこのキヤバレーのマスターなんだぜ。お前の心次第で、明日からもうんとゼイタクができるんだ」

早苗「いやです。あたしは女給で沢山です。ゼイタクなんかしたくありません。おねがいです。離して下さい。ミドリさんに叱られます」

田村「ミドリ？ アハハハハ、あんな奴がこわいのか。俺はもうミドリなんかにはねえんだ。あんな腐つたような身体の女より、お前のその青リングみてえな身体が欲しくなつたんだ」

早苗「いやらしい、放して下さい」

早苗、必死で身体をひねると、はずみに、つかまれていた手がスルリとぬける。勢余つて田村の横面をピシヤリとなぐる。

田村「イテツ、……おや、なぐつたね、中々元気がいいじゃねえか
そうこなくちや面白くねえ」

田村、再び早苗に襲いかゝる。早苗逃げるが再び手をとられて物置部屋の中へ突き飛ばされる。田村、ドアをうしろ手でゆつくりしめる。

田村「へへへへ。もうどんなに暴れても駄目なんだよ。この部屋はいくらわめいても、外には絶対に聞えないんだ。ここらでおとなしく眼をつぶつたほうが、お前の為だぜ」

早苗、今は声なく眼だけギラギラさせて逃げる隙をうかゞつていゝる。せまい部屋の中で追いつ追われつする二人。力尽き、つまづき倒れる早苗、田村はあたりに散乱している縄をつかむと、早苗の両腕をうしろにねじ上げて手首を重ね、キリキリと縛る余つた縄で一捲き二捲き三捲き、乳房の上から縛り上げる。ハアハア息をさせながら田村の好色そうな眼はニタリとわらう。もがく早苗、しかし縄目が固いので苦痛に耐えるのが精いつぱい。

田村「おとなしくしていりや、痛い目にもあわずに済むものを。ウフフフ」

と舌なめずりしながら、俯伏せに倒れている早苗を抱き起し、無理矢理立たせる。部屋の中央の柱まで歩かせると、胸と柱をグルグル縛りつける。もうぐつたりと反抗の力もない早苗。田村、縛りつけた早苗の頬を思いきりなぐる。早苗、蒼白な顔で男を睨む。

「ハハハハハ。お返しだよ。だがこれでお返しが済んだと思つたら大間違い。これから本当のお返しが始るんだぜ」

田村、女のドレスに手をかけると、下から力いっぱい引き裂く。下腹のあたりまでピリリと縦に裂けるドレス。膝までの下着が、ま

だ処女のフトモモをおおつている。その下着にも男の手がかゝると再びピリリと音がして裂かれる。まつ白いフトモモが露出、ズーロスのみが最後の空しい抵抗。

「アアツ……」

咽喉の奥に鳴る早苗のせつない呻き。田村の非情な指は、更に、破れた下着を思い切りまくりあげ、左右におしひろげる。そのまゝうしろへ廻し、衣裳の端と端を柱の後で結んでしまう。ズーロスを残して下半身は裸となる早苗。贅肉のないブリブリした処女のフトモモ、形のよい足が田村の欲情をそそのめるのだ。

「いい肌をしていやがる。フッフ……たまらねえな。」

煙草をとり出すと、眼を細めてうまそうに吸う田村。ふと思いつくと煙草の火をそのまゝ早苗のフトモモに押しつける。

「アツツ……」

と今はもう髪は乱れ、動けぬ身体をふるわして責苦に耐える早苗「熱いか、こんなにスベスベした冷たい色の肌をしているくせに、煙草の火ぐらいで熱いか。」

田村の口もとが、来るべき女の降伏を期待して卑しく歪む

悶える半裸の女を、スポットライトが青く照らす。観客席の静かな興奮。息をのんで客の眼は、縛られた花房悦子の姿態をむさぼっている。

私はマリと舞台の袖で、二人の熱演をみていた。

「なか／＼やるじゃないか、花房悦子……」

「そうね。……でもなんだか可哀想な気がするわ。まだあの娘若いんだもの。ずい分苦しうだわ。」

「うん……関根さん、又ずい分固く縛つたもんだな。あんな薄い衣

裳の上から、ああギリギリ縛られちや、花房悦子は始めてなんだから、かなり辛いだろう」

「でもすぐ馴れるわ。痛いだの、恥しいだの云っているのは最初のうちだけよ」

「ちようど、誰かさんみたいだね」

マリは横眼で睨むとギョツと私の腕をつねつた。

「さ、マリ、今度は君の出だぜ」

田村の情婦ミドリが地階におりてくる。誰かを探している様子で二、三度物置部屋の前を往き来する。賭博場の入口に立番をしている若い男に「マスターは？」ときく。男、黙つて物置部屋のドアを指す。ミドリ、そのドアをノックなしにあける。ぎくりと振り返る田村。

ミドリ「なんだ、こんなところに居たの。おや、そこに居るのは誰？……お前、早苗じゃないか。（キツと田村を見て）さては。あんな、又、悪い癖がでたのね」

田村「チエツ。いやな所へ来やかつた。何か用か。ミドリ」

ミドリ「いやな所へ来合せて悪かつたね。上に税務署が来ているのよ」

田村「税務署？（一寸考えて）おいミドリ、お前この女を見張つていてくれ。こいつは俺達の秘密をバラそうとしたんだ。俺は一寸行つてくるよ……」

急ぎ足で出て行く田村。あとに残る女二人。

ミドリ「あんな、このバグチ場の秘密知つていたの？」

早苗「違います。あたしはたゞマスターに……」

ミドリ「マスターに?……ええ?マスターが何したつて云うんだい?畜生!云わないな、云え、云え、云わないと……」

ミドリ、あたりに落ちてゐる縄切れを拾うと早苗の身体をピシリと打つ。「ムム……」耐える早苗。

ミドリ「云いなよ。マスターがお前に手を出したのか、お前がマスターをたらしこんだのか……」

早苗「あたしは、無理矢理にこんな所へ引ばられて来たんです。マスターがいやだつて云う私を……」

ミドリ「そうかい、よく白状したね。それというのも、お前がそんな可愛い顔をして、きれいな肌をしているからだろうよ。あたしの大切な金づるを盗もうとした畜生に、あたしがどんな仕返しをするか、よく見ておくんだよ」

早苗「違うんです、マスターが無理矢理に……」

ミドリ「うるさいッ!」

ピシヤリと早苗の頬をうつ。早苗、がつくりと首をたれる。口惜し気に首筋がふるえている。縄切れを持ち直すと、狂気のように早苗の肌を打ち続けるミドリ!ピシリ!「ムウ……」ピシリ!「ムウ……」縄切れがフトモモに勢よく弾むと、早苗の全身がヒク、ヒクと痙攣する。やがて気を失つたのか動かなくなる早苗。ミドリ流石に肩で荒い息をつきながら気絶した早苗を見ていたが、やがて柱のうしろへ廻り縛つた縄をほどく。バツタリ前にくずれ倒れる早苗。何を考えたかミドリ、後ろ手に縛つた早苗の縄を解き放つ。そしてその縄で今度は早苗の両手首を前に揃えて縛る。気を失つたまま、ミドリの自由になつてゐる早苗。ミドリ、両手首を縛つた縄の先端を、正面の壁に打ちこんである鉄製の丸い輪に通す。

「おい早苗、起きなよ。まさか死んだんじやないだろう」

ミドリは靴の足を早苗の盛り上つた尻の上に踏まえると、グイグイと揺する。それでも動かない早苗。焦れたミドリ、抱き起すと早苗の両乳房を両手でギュウとつかみ、力一杯乱暴に揉みはじめる。たつぷりとふくらんだ乳房がブリブリとミドリの掌に弾む。

「ムムウ……」とかすかに早苗の呻き。ミドリ、乳房を離すと、いきなり早苗の横腹を蹴飛ばす。

「アアツ……」とのけぞつた早苗、かすかに眼を見開く。

「ゆるして、ゆるして……」

ミドリ、早苗の両手首を縛つた縄をグイと引く。早苗の両手がサツと上に吊られる。

「アアツ……」よろよろと縄に曳きずられて腰を浮す早苗。汗みどろになつて縄を引くミドリ。よろめきながら全身で抵抗するが、ズル、ズルと壁際に曳きずられていく早苗。女と女との陰惨な争闘である。ついに壁際に両手を高く吊られてしまふ早苗。足先がやつと床に届く位まで吊られた半裸の処女。

「いい恰好だねえ早苗さん。お前はまた男の肌を知らない」という噂だが、男に身を辱しめられるより、ハタカに剥がれて豚のように吊るされたその姿のほうが、女にとつちや余ツ程恥しいことなんだよ」

ミドリ、悪魔の笑みを浮かべながら、乱れた早苗の胸もとに手をかける。無抵抗の女の、わずかに胸乳を覆つたブラジャーをひきちぎる青白いスポットがさつと早苗の全身を照らす。純白に成熟した処女の乳房。ポツチリと盛り上つた薄赤の乳首がやゝ上を向いて、未だ手を触れぬ果実の如く、光沢を帯びた美しい乳房……。大胆な演

技に息を吞まれた観客席は、寂として声がない。

再び縄切れを手にしたミドリは、血走つた眼でカツと早苗を睨むと、「畜生ツ！畜生ツ！」むき出しになった早苗の胸乳を打つて打つて打ち据えるのである。今はもう、嫉妬よりも復讐よりも、同性の女を責め苛む興奮に憑かれたミドリである。

「アハハハ、アハハハ、……」

髪ふり乱し、狂つたようにわらい続けるミドリ……。かくて第三場は静かに暗転。

私は舞台に飛び出していく。熱演に困憊した悦子の縄を手早くほどき、よろめく身体を抱きとめる。

「御苦労さん悦ちゃん。痛かつたろう、でも大成功だったよありがとう、ありがとう……」

私は悦子を背負うと、いたわりながら柴屋まで連れて行く悦子の胸がピツタリ私の背中にくつついて、乳房と乳房との間の心臓がドキドキと高鳴っているのが分る。（可哀想に、今迄にない経験で、さぞ刺激が強かつたろう）私はそんな慰さめを胸の中でつぶやきながら、ポリウムのある悦子の身体を柴屋まで運び、畳の上におろしてやる。

「何もしないで、そのまゝ暫くねて居な。又第六場で縛られるんだからね」

(5)

春風座の「悪魔の拳銃」は、かなりの興行成績を維持して巡演を



続けた。もつとも、時々地方の新聞にでる劇評などでは、なんののかんと悪口を云われ、叩かれた。しかし、新聞の評がよくても、客が入らなくては何もならない。悪口や攻撃を、私は笑つて黙殺した春風座の名が新聞に載るだけで、結構宣伝になるのだ。

旅に出て、半月ばかりたつて困つたことが起きた。

田村を裏切つてミドリと通じる中井の役を演る、二枚目の利根達

夫がドロロンしてしまつたのである。原因は、こうした社会にありが
ちの女と金であるが、人情派の谷村座長はカンカンになつて怒つた
しかし、いくら怒つたところで飛び出した者は、おいそれと帰ら
ない。さし当つて困るのは利根達夫の演つていた中井の役である。
谷村は流石に弱つて腕をこまぬいて考えていたが、思いつめた様子
で、

「青山君、中井の役、君、演つてくれないか。」

突然なので私もあわてたが、谷村の身になつて考えてみれば、中
井の役に適するのは、無人の旅一座を見廻して、私位かも知れない
私とて、自慢のできる程の演技力はないが、まるきりの素人ではな
い。私は意を決すると、

「やつてみましょうか、谷村さん……………」

と答えた。この至難な役を引受けた心の裏には演出ばかりでなく
私もまた、悦虐の舞台に立ちたいという慾望が、悪魔のようにひそ
んでいたのだ。

作者であり、演出者である私には、幸い、けいこも不要な程、セ
リフも動きも頭に入つていた。

久し振りの舞台で、さすがに私は緊張していた。順調に幕はすゝ
んで、いよいよ第六場。第三場と同じく、地下室。

前幕で密会の場を押さえられたミドリと中井が、背合せに縛られ
ている。そのそばに、これもがんじがらめに括られた早苗が、ぐつ
たりと横たわつてゐる。

答を片手に、田村の残忍な微笑。

「どいつもこいつもぶざまな恰好だな。おい中井、俺達の掟を破つ

たからにや、覚悟はできているだろうな。おまけにミドリまでたぶ
らかして俺を警察に密告しようとしていやがつた。飼犬に手を噛ま
れるとはこのことよ。」

私は、腕に喰いこむ縄の痛さを耐えながら

「おれは、おれは悪事の仲間から脱けたかつたんだ。たゞそれだけ
だ。」

「ウフフフ。たいそう立派なことを云うじゃねえか。その舌の根
の乾かねえうち、それッ！」

私の皮膚にピシリ！と答が鳴つた。

実際は舞台の床を打つか、道具の蔭で効果係が鳴らすのであるが
打つ者と打たれる者の少しの誇張をまぜた巧みな演技で、観客には
実際に答が皮膚を打つとしかみえないのである。

仮借なく振る田村の答。呻き、のけぞる私。ミドリに扮したマリ
が、必死になつて私をかばう。

「この人を打たないで。打つなら代りに私を打つて」

「畜生！きさま、俺に向つてよくもそんなことが云えたな。望み通
り打つてやる。こうかッ！」

ピシッ！とマリの素肌に鳴る答。背中合せに縛られているので、
ピクリと痙攣するマリの肉体が、直接私の身体に伝わる。ムツチリ
と白いマリの二の腕、ゴツゴツと黒い私の腕。きつちり縛り合され
た対照の妙。キツと唇を噛みながら田村を睨む、マリの凄艶な横顔
「フン、口惜しいか。よし、もつと口惜しがらせてやろうじやない
か。」

田村は答を捨てると、声もなく倒れている早苗に歩み寄つた。背
中に括られている早苗の手をつかんで、ぐいと引き立て、柱まで歩

かせると、立たせたまま縛りつけた。やがて不気味な微笑みを口もとに浮べながら、私のそばに戻ると縛り合せた私とマリとを別個に引き離した。マリの恐怖の眼が追うまゝ、田村は私を引き起すと、早苗のつながれた柱に突き飛ばした。早苗と向い合つて立たされた私は、あつという間に今度は早苗と向き合つたまま縛り合わされてしまつたのである。ムツクリと盛り上つた早苗の乳房が私の胸に息苦しい程密着した。

「ハハハハ。おいミドリ。お前の可愛い男が、早苗と抱き合つてゐるぜ。乳房も腹も一分の隙もない程くつついたまゝで……。俺が男の頭をチヨイと突けば、早苗の顔に、男の唇は否応なしに触れるんだ……」

いいながら田村は私の頭をグイと小突いた。早苗は、わずかに顔をひねつて私の唇を避けた。私の唇は早苗の髪に触れた香油が、私の鼻を強烈に刺激した。

「成程。早苗のほうが大分背が低かつたんだな。よし踏台を入れてやろう。」

田村の陰險な計画は執拗にすすむ。早苗の両足をかき抱くと、強引に踏台を入れた。私の額が女の額とぶつかる位の高さになる。

「うめえ、うめえ、それでOKだ。」

私の後頭に再び田村の手がかゝると避ける余裕をゆるさず、前に押しやる。顔をねじつて避ける早苗の頬に、私の鼻と唇が触れた。

「ウハハハハ。みる、みる、ミドリ、ウハハハハ……」

悪鬼のような田村の哄笑。この時、耐えかねたマリが、懸命に立ち上ると田村の身体めがけて必死の体当りを企てた。どんとぶつかる女体。不意をうたれてよろけ、壁にしたゝか頭をぶつけた田村。

しかし、それも自由を奪われた女の線香花火的な攻撃にすぎなかつた。田村の怒りは頂点に達した。

「生意気な女め。うぬ！こうしてくれるツ！」

マリの髪をつかむと、一気に床の上にひき倒す。宙を蹴上げたマリの両足をつかんで揃え、ギリギリ縛ると、鉄の輪の下まで引きずつていく。縄を輪に通すと力いっばい引つ張る田村。形相凄くグイ、グイと引く度にマリの足首は次第に高く吊られていく。逆さ吊りである。マリのスカートが、ハラリとめくり落ちる。膝が、フトモモがムキ出しになる。縄は容赦なくひかれ、吊り上げられた脚はフトモモまでが床から離れる。必死にもがくマリ。然し、もがけばもがく程、腰を覆う布はまくれるばかり。やがて、尻までが床を離れる。背骨が今のマリの身体を支えている。二本の巨大なローソクのように、薄暗い地下室の中に吊られているマリの脚。そしてついに頭までが完全に床を離れ、後ろ手に縛られ、足首から吊られたマリの裸体は、強烈なスポットライトに映えて妖しくも又、美しく光るのである。――

(6)

白粉や化粧油の香が湯気にまじつて鼻をつく。ばんやり点つた楽屋風呂の灯。破れ窓から晴れた夜空が見える。

もう夜も遅い。私とマリは、汗にまみれた身体を、せまい楽屋風呂で流していた。

ねぼけたような電燈が、マリの身体を仄白く照らしている。

「ホラ、こんなに縄のあとが……」

肉附きのよい手首に、紫色の縄のあとがしみついていて。連日連

夜の休まない縛しめの旅である。縄目の痣は、二重にも三重にもマリの手首に、腕に足首にしがみついている。

「これ、もうとれないかしら……ねえ、揉んでよ……」

「揉んだつてとれるもんか。」

「でも、ねえ、揉んでよ……」

私はせまい湯舟の中で、マリの腕をさすり脚を揉む。

破れ窓から夜気が忍びこむ。私は星空を眺めた。風流、と云いたいが、何故か自分の身がわびしくてならぬ。遠い異郷の地に、一人流されたような錯覚。

いや孤独ではない筈だ。この腕の中にはマリが居る。私を狂おしい程愛してくれるマリが居る。だが、だが、この寂漠とした胸の中はどうだ。旅の感傷というには、余りにも沈鬱なこの寂寥。私の若さは、こうした浮草ぐらしに、空しく燃え切ってしまうのか

「あら、流れ星よ」

マリの無邪気な声が私の思いを断つた。濡れたような黒い大きなマリの瞳。私に身体を揉ませながら、無心に星をみつめる女。

かなしい程の愛しさがこみ上げて、私の腕は思わずマリの肩を抱きしめるのだ。
(おわり)

私が縄の味を知つてからは、もう毎日のように縛られたり、時には吊られたりして四六時中縄が身辺から離れたことはなくそんな私の縛られたいろ／＼の姿態はカメラに次々とおさめられてゆきました。新しい姿態を命ぜられる度に私は新しい期待に胸は妖しくときめきました。着物を着ていてさえ肌寒い冬の日、裸にされたこともありました。湯上りの肌に赤錆のくさを直接巻きつけられた時は流石の私も全身の皮膚に鳥肌が立つたこともあります。しかし私は

どんな道具を用いられてもどんなポーズを命じられても嫌だと思つた事もなく、嫌だと云つた事もありませんでした。縛られる事に対する限らない憧憬が私をして、その一時、一時を恍惚境へさそい込んでいたからです。

そんな私でしたのに次第に責めのモデルに対して不満を感じて来たのはなんとした事でしよう。それは写真を撮すための準備に時間がかゝり、そしていざ撮映となれば数多くの変つたポーズをとる為に縛られても又直ぐ解かれてしま

つて一つのポーズで長く縛られていることがないため、成長してきた私のマゾの心が承知しなくなつたのでしよう。

そんな時偶然なことから、私が悦虐の泥沼の中に咽び泣く事件が起つたのです。今年の六月から七月にかけて殆んど毎日のように雨の連続でしたが、晴れ間を見て野外撮映を行うことになつたのです。午前中は煙るような小雨でしたが午後になつて申訳のように晴れたので生い茂つた草原の中へ全裸で縛られてこゝろが虫責めの趣向を

撮ることになつたのです。そんなわけで出発する時刻が晚かつたので目的の場所へ着いた時は、暮れなずむ夏の陽も傾きかけた頃でした。早速裸になつた私は後手に嚴重に縛られ、特に太股から胴のくびれへかけて雁字搦目に縄をかけられて、草の中へ転がされました。背中にある草の芽が痛いので身体をよじると咽喉にかゝつた首縄がジーンと締つてきて頭がぼうとなります。

樹立の中で殊更薄暗いのでフラツシユの準備がされます。その間

私は身動きならぬ私身体を反らしたまゝで草の中へ埋れていました次第に薄暗さは増してきますが、まわりの背丈の高い草が邪魔になるらしく中々カメラの角度がきまりません。ピントを合するため懐中電燈が縛られた私の胸の上にのせられます。この時でした。すつかり黒一色に変つた空からぽつりぽつりと大粒の雨が落ちてきたのです。本当によく降る雨です。あれだけ降り続いてまだ降り足りないようです。どうするか考える暇もありませんでした。忽ち篠つく大雨です。彼はカメラが大事らしく、自分の身体で陰にしながらバッグの中から引き出したビニールの風呂敷で包んでいます。フラッシュガンを取りつけたカメラが大きな音になつてゐるのが寝ころんでいる私の眼にもよく見えました。私を縛つた綿ロープは雨を含んでぎゅつと肌を締めつけます。太股から胴胸、それに二の腕から後手、あゝ、なんという強い緊縛感でしょう。私は彼がちらばつた道具をしまう間中、じつとその恍惚感を

楽しんでいました。「すまなかつた」走り寄つた彼は私を膝の上へ抱え上げて結び目を解こうとするのですが、一旦水を含んだ縄は中々解けそうにもありません。雨は益々ひどく、稲光が夜空に閃めいてさえいます「もつと、もつと、このまゝで縛られていたい」そんな私の気持でした。しかし、どうしてそんな事を口に出して云えま

こつたような顔付きでまだ降りやまない雨の中を歩き出しました。あんな風にして一晩中でも縛つておいてほしい。猿ぐつわも口がさける程物を押し込んで。……私の気持がわかつて貰えないんだろうか、でも、私のこの切なる願いはその夜かなえられたのです。それも私の思っているよりもつとヒドイ方法で――。

悦 虐 に 咽 ぶ

むせ

川 端 多 奈 子

しよう。彼はジャックナイフを取り出して縄をバラ／＼に切つてしましました。

ほつとして息をついた私の心の中に、物足りなさが寒々として通り過ぎてゆきました。所詮彼は写真を撮ることだけが目的で私の心の中なんか判つてくれないんだわ――そう思うと私は慌てゝ、濡れたワンピースを身につけると、お

「私、雨で縄が濡れて締つてきた時たまらなかつたわ」

帰り道、私は恥を忍んで彼にその告白しました。それにどう感違ひしたのか「そう、だから、僕はナイフで切つて上げたじゃないか」彼は慌てゝ何か忘れ物でもしたと思つたのでしようか、そわ／＼しています。折角、こゝ迄来て一枚も撮らなかつたので、何か撮り

たいと思つていたのでしよう。濡れた服を乾かすんだという口実で一軒の旅館へ入つてゆきました。湯殿で一風呂浴びると果して彼は撮ろうと言ひ出したのです。「いや、いや、私、もう縛つた写真なんて撮るのはいやヨ」今迄になかつたことです。初めての拒絶です。一瞬ケゲンな顔付だつた彼の穏和な顔が紅潮して私をにらみつけました。

「何故、今更そんな事言うんだい今迄一度もいやつて言つたことないじゃないか」

「何故つて、只イヤなの、無理に縛つたら、わたし帰るわよ」

「君は今日は九時頃迄ならいゝつて約束で出てきたんだらう？」

「でも、途中でイヤになつたの」そんな問答を繰り返している中に、私はなんとなくイヤなような気持ちになつてきました。と突然彼の粘つこい指が私の手首にかゝつてきたのです。

(未完)



Das Grausame Weib

△ 残虐なる

女性達 △

1901年刊行の独文絵入単行本より

森本愛造・訳

序

世に多くの被虐愛好の男性の存在することは否めない事実である。然し、一方加虐愛好の女性達も亦尠くないことに私達は注目する。

本書は古今東西の歴史的事実にその範例を求め、只管に、一般女性の中に秘む加虐愛好の念が、如何なる環境の許に如何に発現するか、或は先天的にかゝる傾向を所有する女性達が逆に現代の常識的社会通念に依つて、如何にその本能的愛好を妨げられつつあるかを探究している。

訳者、こゝに考えるに、泰西の性文化が如何に開放的なを以つて有名なりといえども

本書の如くに其の意図真剣且つ正確なる判断と龐大なる努力の累積されたる例を知らぬ。敢て同好の士に、本書の完全無缺なる翻譯を提供し、加うるに訳者の必要或は、難解と思われる処に註解を付して参考に資する所以である。

因みに世の感傷的なる芸術の根底に、秘かに流れる被虐愛好の念は、最も高貴にして、尊重さるべきであり、その性愛が常人より見て如何に奇妙、滑稽であるとしても、その意図と精神に於て清純神聖に近い魂の具現である事を信じて疑わない。

第一章 支配者としての女性

世界史を見わたす時、私達は非常に屢々、女性達が男性を支配した事実、奇異の念を起すのである。それが性的階級の觀念からして当時、女性が常に蔑視された時代の出来事であるために、私達は時にその念を深くするのである。この例外的な事実は只「男性支配が既に變則的であるとする、女性達の觀念が伝統と政治とを打破する程に強烈であつた」ということによつて一部説明を為し得ると思ふ。(本書者は「女性支配が正統」という仮説の上に基いている)

或る国々で国王が進んで女性に屈従したという事実があるが、之は彼等が王者としての魅力よりも（マゾヒスティックな）男性としての魅力を重大であると考えたからに他ならない。亦戴冠や即位を女性に勧めた男性達の心の中に、私達は彼等がその行為の中に一つの「理想像」を描いていたと考えるのである。殊に中世吟遊詩人（Troubadour）の時代や近代アメリカに見られる女性尊重或は、古ゲルマン民族の持った女性崇拜等はマゾヒズム的な観念の連合と考えられる。亦こう云った観念の流通する時代と地域で、女権主義は何等の抵抗なく発展し得るのである。しかし乍ら之等の女権主義も、少数の例外を除いては、女性が男性達或は同性達の上に揮う権力の快美感に耽溺し、遂には無制限な暴力政治に陥つたという事も明白な史実がある。これから引例する幾つかの実例はこの事を完全に証明するであらう。



Einleitung の第一字イニシャル

引例（一）

プロコーブ氏の記述によるビザンチン王朝のテオドーラ女王

彼女が賤民の出であり乍ら、その性的魅力の故に王妃となり遂にビザンチン王朝の主権を握つた。彼女の政治は正に恐怖と暴力とによつて実行された。彼女は第一に東方の奴隸制の儀式をビザンチンの宮廷に移植した。この冒険的な女性は、専制君主の権力を充分に發揮して彼女の昔の同僚、即ち新しい臣下を残酷に取扱つた。例えば彼女の友人を侮辱した一上院議員は首に綱をつけたまゝ、秣槽に繋がれた。又彼女の意志に反し邪魔となる人

間は、公開非公開あらゆる方法で無制限に死刑に処した。彼女は或る高貴な青年貴族が彼女に反対した時、直ちに彼の男根を切り取り死に至るまで放置したという。

引例（二）

ユリアヌス、アポスタータの妻、ヘレーナ王妃について

彼女は、彼女の単なる楽しみとして、屢々若い女奴隷達の中で、特に肉付きのよい娘を——彼女達は多く肌の白色のゴール人の娘であつたという——鞭打たせて眺めた。

引例（三）

古代フランス王朝のフレーデグンデ女王

彼女は、全欧の最も血に飢えた女として有名なブリュンヒルデ女王をすら凌駕する恐怖的存在である。彼女は屢々些細な過失或は氣紛れによつて、目下の者達を習慣的に拷問にかけた。或者は生き埋めに、或は焚殺され車裂き、又舌を抜き殺す等の方法が用いられた。彼女の奴隷は簡単に手足を切落され、又死ぬまで鞭打たれた。彼女は之等の状景を眺め、指図して歓喜したという。罪なき臣マシヨールドムス・ムンモルスは彼女の手で、拷問にかけられた。木釘を爪の下に打ち込まれたのである。彼女は復讐の女神であつたと史

家は記している。(この女王については後程トウールのグレゴールの記事で読み直して頂きたい)

引例(四)

一〇世紀、スイス国、ホーエントヴィルのハーダヴィク公爵夫人

彼女はサン、ゴール僧院年代記の「国と人」によれば鞭打の愛好者、皮剥、髪抜きの常習者であるとされている。因みに髪抜きと



Masochistische Zeichnung aus einem ungarischen Magazin

は、罪人を革鞭で思い切り打ち据えて身体の自由を奪い、その後で木製の鉗子で毛をむしり取るのであつた。

之等恐るべき女主人の中で、特記されるべきはイタリアのカタリイナ・デイ・メディーチである。

引例(五)

カタリイナ・デイ・メディーチ(メディーチ家はフイレンツエの旧家にして権力甚大なる有名な豪族である)

彼女は夫の死後、息子フラソツ二世、マリア・スチュアルトの夫、及カルロ九世に代つて支配権を行使し、カルロ九世の成年宣告の後も事実上、政事を支配した。彼女の鞭打好きについては、ブランドオムの「艶婦伝」は次の通り述べている。

「私は上流社会、それも最も高貴な社会の一員であり乍ら自然的な(正常な意)情慾では満足しない一人の女性を知っている。(著者註、正にカタリイナ・デイ・メディーチである)彼女は特に淫逸な性格を持ち、後家

であり且美しかつた。自分を此の上ない昂奮に導くために、彼女は美しい夫人達や娘達を全裸にして喜んだ。そして、自分の手で彼女等の尻を叩いた。何か咎をうけた娘達は遠慮なく彼女の鞭で打たれた。彼女は娘達が苦痛の為身をよじらせるのを見て喜び、又鞭の痕で真赤になつた尻を愛好の念を以つて眺めた時によつては、娘達の(當時はズロースはなかつたので)スカートをまくり上げさせ、彼女のその時の気分如何で、その尻を手で打つたり、或は鞭で打つたりした。こうした艶笑劇によつて、彼女の昂奮はたかまりその後で、誰か逞ましい男が彼女の昂奮を鎮めねばならなかつた。」

・彼女は、女官や小姓達を鞭打つ機会を熱心に捉えた。

或る時、アンヂユウ公夫人の訴えによつて多くの小姓達が、カタリナと女官達の面前で徹底的に殴打された。年代記者は「その時、一方ではひどい叫び声と、片方では大きな哄笑とを聞いた」と述べている。通例そうした懲戒は台所で行われた。鞭打ちは殆んど毎日行われたにも拘らず、カタリナは彼女の女官達の懲戒の場に居合さなかつたことはなかつた。かゝる状態にも拘らず、カタリナには加

虐慾望の更に強い慾求があつた。そこで、法律上の被疑者や罪人達を流血の刑に処して見たいと常に待ちかまえていた。

ユグノオ教徒戦争時代のピエール・ド・レストワールはその年代記の二六——二七頁に次のように報じている。

「彼女（カタリナ）の目を楽しませる為に、女王と母君はコリーニ將軍の死体を見にやつて来た。死体はモント・フォーコンの絞首台にかゝつていた。カタリナは息子達や娘、婿を案内して見せた。」

カタリナが一五六〇年にアムプロワーズ城にいた時、無数の叛徒が処刑された。彼女は淋しい城で退屈していたので、その退屈を紛らわせる為に、処刑される人々は昼食後の或る一定の時間までしまつておかれ、その時間になると、カタリナと女官達が窓口に倚つて彼等の斬首の状況を楽しむのであつた。

彼女が血に飢えているという例証について最後に、更にもう一例を追加しよう。これはブリザールの引用した事実である。

カタリナは、彼女の息子カルロ九世に容易に死刑執行に対する愛好を芽生えさせる為に幼時から、人間の屠殺を見ることに馴れさせた「即ち、カルロ九世は遂に、動物の首を一

撃で切り落すことに興味を持ち、更に人間の血も見ることに馴れた彼の母（カタリナ）は息子達に死刑執行を見せるべく、あらゆる機会をつかまえた。カタリナは、そうした流血の光景を眺めることによつて、息子達の身体に堅固な雄々しい感情を注ぎ込むのだと主張した。

英国の歴史も亦その残酷な行為が、性的感情と関連している女君主達を記している。それは有名な血を好むマリイだけでなく、エリザベス女王も屢々加虐の発作を示している。

引例（六）

スエーデンのグスタフ・

アドルフの娘クリステイヌ

彼女は残酷と非情との独

特なる混合である彼女は既に少女時代に、當時歐洲での強國の中の一つの支配者であつた。彼女の「正義に対する愛」についてジェスイット教徒のマンネルシャイトは述べている。

「彼女は正義を實踐するに當つて、甚だ嚴格であり、法によつて死刑を宣せられた者に、

Emleitung 最終頁のカット M, Gray画



恩赦を与えるよなことは滅多になかつた。」この滅多になかつた中の一例を述べよう。何となれば、この一例は当時やつと二十才になつたばかりの若い女王の持つ粗野というよりは洗練された残酷さを証明するからである。ターレマン・デ・レオウは、彼の史書の中で次のように述べている。

「一人のストックホルム生れの若者が、現在のスエーデン王（当時皇太子）カール公の部下の一人と喧嘩してその男を殺してしまつた。北國の例外ない慣習として、彼は王の居城の牢に繋がれた。そして死刑が宣告された。彼は或る後家さんと婚約していたので、彼女は当時、習慣的に与えられていた死刑囚の猶余

期間中に、若者に会いに来た。若者は自分の婚約者に「若し、女王が許しを与えてくれて貴女と結婚して後に死刑になるなら、こんな嬉しいことはないのだが」と語った。そうして彼は婚約者の許しを得て、裁判官を通じて女王に請願書を提出した。意外にも女王は、その請願に許可を与えた。というのは、女王はそうした状態の下での男女の性交を見る事に好奇心を動かしたからであつた。しかし、若者は死を意識していないかの如くに見えた、その上、彼は女王の姿を見つけて、許可を与えられたことに感謝の辞を述べた。女王は常になく感動して、猶余期間を（通例四日間であつた）一週間更に延期してやつた。彼は結婚し、処刑の日には迫つて来た。その時誰からか當時女王に会見に来ていたロシアの大使を通じて助命の嘆願がなされた。大使は女王に「若き粹なる君主は、愛することを知つた若者の命を助けることに喜びを感じるだろう」と述べた。女王は若者に同情を持つてはいたが殺人に対して厳格である法をまげること躊躇していたのだが、ロシアの大使の言を一つ

の機会として、遂に例外的に若者の命を助けてやつたのである」

以上記述の内、ターレマンの説はクリステイーヌ女王に「同情」という感情をなすりつ



HAÜSLICHE ZÜCHTIGNG

或る支那画家の作より

にせよ、宣告の刑が女王によつて倍加されたことは屢々あつたからである。即ち助命は単に對ロシアの政治的な判断によつて、奇蹟的に実行されたに過ぎなかつたと云えるのである。歐洲の最も弱小国の

さゝやかな女主人達にも何時でも此の残酷な刑罰を執行する用意があることについて、権威ある週刊誌であるミュンヘン報知新聞（一六九九年発行）の或る備忘欄が語っている。

引例（七）

マダム・オルシーニ

彼女の支配下にあつた或地方の知事を迎えるに缺礼した一巡查が、オルシーニ夫人の命で「ガレーレ船漕手の刑」に処せられた。彼は刑の宣告までの八日間、やはり夫人の命令でパンと水以外何も与えられなかつた。（著者註、ガレーレ船漕手の刑とは通常罪人が死ぬまで逃れられない最も恐しい刑であつたということを考える時、その判決を下す人間の心は真に残酷でなければなら

けることによつて、歪曲されている、何となれば助命は同情や憐みから行われたのではなくまして、女王が法の定めた刑をまげることが拒む理由がなかつたのである。というのは、スエーデンの法律によつて死刑を宣告されても、女王の署名さえあれば如何様でも取り計らえたからであり、減刑の事実は少なかつた



ヴィクトル・マゾットの作品 毛皮をきたヴィクトル・マゾットの挿絵 G. Bakalowicz 画

ない)

引例(八)

ニールスの女王、マリア・カロリーネ
彼女は夫であるフェルディナンド四世を使
い易い道具のように使つて支配権を揮つた。
こゝで彼女が、如何なる史家も讃辞を惜しま
ないマリア・テレジア(オウストリヤ女王)
の娘であつたことに注意せられたい。十八世
紀の末にフランスの影響でニールに革命が
起つた時、王とマリア・カロリーネはイタリ
アのパレルモへ亡命した。英国のネルソン提

督の助力でニールの市は又王の支配下に戻
つた。そこで現代の観念では不快な程の刑罰
が始つた。この恐ろしい懲罰は当時駐在の英
国使節の夫人エムマ・ハミルトン(ネルソン
の恋人であるのは有名である)と怖ろした女
王カロリーネの合作であつた。女王は市から
離れた所から、ハミルトン夫人に親書を送り
指命していたのである。女王は国家裁判所の
開設に當つて、寛大さを予想される判事の存
在を嫌い、態々パレルモから判事のみならず
刑吏までも派遣した。彼等は叛徒に判決を下

し、同時に刑
を速やかに執
行した。女王
の不在の間に
ルネソンと共
にニールの
無冠の女王で
あつたハミル
トン夫人に宛
てた女王の手
紙は興味深い
ものである。
中に次のよう
な一節がある

「叛徒達を赤くやいた鉄で焼き殺しなさい。
彼等の起した不幸を感じるならば、彼等には
それが一番よいお仕置です」

女王は更に夫人に不屈の厳格さと、親切心
の休止を希い、彼等の惹起した不幸だけにっ
いて考えるように勧めている。同様な、そう
して、さまざまの文書の往復が引例出来るの
であるが、記述を簡明にするために、それら
を割愛したことを記しておく。

【読者通信】

(投稿歓迎)

「男性被縛写真と男性ヌード」この一頁が小
生には他のどの記事より有難く思われました
編集の方々の御好意に厚く御礼申し上げます
女ヌードにしましても責めの写真にしまして
も種々の雑誌その他には当然の事の様に掲載
されて居りますが、男性のそれは待望久しく
して遂に奇ク十一月号によつて望みが達せら
れました。一步退いて小生の様な傾向の者は
別としても女性のものに対する男性のものは
当然同一の割合で然るべきと考えます。これ
を非常に嫌悪せられる方の投書も見えた事もあ
りますが小生に共鳴して下さる方も決して少
くないことを信じます。どうぞ毎号の企画に
引続き御配慮下さる様お願い致します。

(兵庫 会員番号 二五一〇番)

サディズム小説

感^{かん}情^{じよう}教^{きよう}育^{いく}

(二)

吾妻

新

栗原

伸・画

三、最初の試み

章三郎のサディズムの発展(?)をふりかえつてみると、縛るまでが第一段階、猿轡をはめるまでが第二段階、その後の複雑な深化が第三段階と分けることができる。一と二は単純なものだが、暴力的に相手を屈伏させようとしない彼にとつては、そう簡単なものではなかつた。

交通に便のわるい郊外の一軒家(といつても畠に面しない側は五六間おいて隣家があり、そこから駅までボツボツ並んでいるのだが)を選んだのも、風変りな性の講義をしたり、裸にして寸法を計つたり、いきなりズボンを穿かせたりしたのも、すべて由紀から常識的因習や偏見を取り除くためだつた。おなじような理由から、彼は結婚して三日間、由紀を処女のままにしておいた。

戦後の若い人たちはそんなこともなかるうが、当時はまだ大抵の純潔な娘は程度の差こそあれ初夜に恐怖をおぼえる。章三郎はその

シヨクを取り除くために、夫の権利をふるうことを差し控えた。いまひとつは、女のよろこびは徐々に成熟するという事実である。美しい薔薇の花は、朝顔のように急激には開かない。これは女の純粹な熱情とは一応切りはなされた肉体のメカニズムである。彼は接吻や抱擁をくりかえし、過度の羞恥心をやわらげ、だんだんに緊張をといていつた。だから由紀がはじめて妻の関門をくぐつたとき、彼女はほとんど苦痛も恐怖もなく、エクスタシーに達することができた。

その理由を四日めの朝になつて説明してやつたとき、由紀はじつと夫の顔をみつめてたずねた。

「世間ではみんな、そこまで奥さんの気持を考えるの?」

「まず反対だね。自分の欲望にしたがつて行動するだけだよ」

「じゃ、あなた一人だけなのね!」

そう言つて彼女は飛びついてきた。

明らかに由紀は感動したのだ。この効果は想像以上に大きかつ



た。彼女は夫の優しさやデリケートな気づかいに感謝したばかりでなく、セックスの知識をすばらしく高く評価するようになった。その結果、自分の知らないこの世界で夫のやることはまちがいない、どんな変ったことでもそれは愛するため、おどろいたりするのは自分の無知のためだと信じこんだ。こうした心理的基礎が出来ていればこそ、これから述べるようなことも可能だったのである。

さて、純粋な愛情で結ばれたわかい娘がひとたびエクスタシーを知ると、どれほど一図に熱情的になるものか、経験した方にはおわ

かりだろう。まして章三郎の場合には、サラリーマンでないから毎日家にいるし、孤立した家に姑も親兄弟もいない二人きりの巣ごもり生活である。彼の愛撫は力強く、どんなはげしい要求にも応ぜられるエネルギーマをもっている。条件は揃っていた。由紀は片時も離れたがらなかった。あの憎らしい書齋さえなかつたら、朝から晩までへばりついていたら。ただ洋間の書齋だけは神聖で、絶対に冒してはならないことになっている。それで、今までは彼が書齋に永くこもっている、由紀は紅茶を運んできて、彼の気を惹くという作戦をやった。これは大抵の場合うまくいって、息ぬきとかなんとか言いながら、彼のほうから茶の間に出てきたものである。

ところが新婚一ヶ月めの六月十五日、章三郎は思うところがあつて朝から洋間のドアをしめ、全然出ようとしなかつた。昼飯のときにもさつさと済ませると、恨めしそうな彼女の視線を無視して、すぐに席を立つてしまった。間もなく由紀は紅茶を運んできたが、見むきもしなかつた。夕方またお茶を持って入ってきた由紀は、椅子の背にもたれて、顔を近付けながら原稿をのぞきこんだ。

「ずいぶん今日は熱心なのね」

「ああ、少し追われてるんだ。お茶はもう要らないよ」

おかしさを耐えて、わざと不愛想に言いすてた。彼女はしばらくモジモジしていたが、全然相手になつてくれないので、じよんぼりと部屋を出ていった。

夕食のとき、とうとう我慢できなくなつて、由紀は切り出した。

「お仕事、まだ終わらないの？」

「今まで怠けちやつた罰だよ。あと十枚以上残っている。ことによると徹夜かな」

「どうしても、そうしなきゃならないの？」

「油が乗つてゐるからね」

「いいわ、それなら私も徹夜するから」

「手伝える仕事じゃないから、一緒に起きていたつてしかたない。

君はさつさと、さきに寝たまえ」

「いやよ」

「どうして？」

「わかつてるじやないの」と、うるんだ大きな眼をむけた。

「さつさと寝ろつたつて、どうせ眠れつこないじやないの。一日じ

ゆう私をひとりぼっちにして寂しくつて」

「何言つてゐるんだ、子供みたいに」

笑いかけると、バグマンみたいな口唇がへの字になり、いきなり箸を投げだして両手を顔に当てた。彼は傍に寄つて、その肩を抱きしめた。

「しようなないお嬢さんだなあ！……よしよし、もう哭くんじやない。原稿はもうやめた」

「ほんと」

と、涙ぐんだ眼でニツコリ笑う。

「ちえッ、現金な奴だ。その代り、条件があるよ」

「なあに、条件なんて」

「せつかく油が乗つたところを無理にやめさせたんだから、今夜は

すこし苛めるよ」

「ええ、いいわ、いくら苛めたつて」

これは章三郎のトリックだつた。なぜなら、彼は今までに愛撫するとき、よく「苛める」という言葉をつかつたからだ。だから、由紀が感ちがしいしたのは全く自然なのだ。

「よし、じゃあ、早くパジャマに着換えてきたまえ」

「ハイ」

いそいそと立ち上ると、食膳もそのままにして茶の間を出ていった。やがて、章三郎が茶をのみ、タバコを一服していると、いつもの夜の服装に身を包んだ由紀が微笑しながら入つてきた。

ここで細かな説明をするのを許していただきたい。そのパジャマは貧しい彼の家計にとつては贅沢な注文仕立なのである。女のパジャマはその頃でもデパートで安く売つていたが、夏はタオル、冬はネルと相場がきまつており、上衣もズボンもだぶだぶしたものだ。が、いま由紀の着ているのは淡紅色の無地のポプリンで、上衣の袖は細く、袖口は巾のひろいゴムテープを入れて、あまり強くはないが締まつている。襟は芯を入れて可愛らしい支那襟にし、胸から胴にかけて細くしてあるから、ズボンをその上に穿くと（彼は必ずそうさせた）乳房がびんと張つて、胸の中央に淡い影を落す。ズボンは入念に身体に合せてつくつた。腰、尻、腿の附根のあたりは乗馬ズボンのようにピッタリして曲線を浮き出させ、膝の上から膨らみをもたせて足首まで同じ太さにつづいてゐる。足首にも袖口と同じゴムテープを通して締めた。そしてズボンの腰口は章三郎の好みで、そこだけ真紅の布バンドをつけた。だから上衣の上からズボンを穿いてそのバンドをしめると、一見上下つづきの服のように見える。

これをつくつたのは新宿のM店で、由紀が羞しがるので最初はわざと身長や腕などを計らせ、一度店を出てから章三郎だけ引返し、腰、腿、尻廻りなど微細に分けて計った寸法書を渡すような手の込んだことをした。おそらく店ではあとで散々噂をしたのであろうが彼は頓着しなかつた。ただし金のある道楽息子に興味とも思つたらしく、想像以上に高い値段だつた。

これを着たときの由紀は、露骨な言い方を許してもらえれば、性的魅力そのものだつた。均整のとれた肢体は密着した服装のために裸体を想わせる。だが、強烈な胸と腰のアクセント、わずかな膨らみに動くシワやヒダ、淡紅色と真紅のバンドの色彩効果などで、裸体よりも美しく、刺戟的である。章三郎の友人でズボン穿いた由紀を見たものは沢山あるし、それが評判になつたほどだが、パジャマを見たものは一人もない。なぜなら、これこそ彼だけに許される悦楽の泉なのだから。

「はい、着てまいりました」

おどけて由紀は、足首を合せ、直立不動の姿勢をとつた。

「ようし、二等兵由紀はその姿勢で立つておれ。上官の命令あるまでは動いちゃなんぞ」

と、彼も笑いながら立ち上ると、まず玄関の鍵をかけ、廊下の戸を全部しめた。それからダンスをあけて、由紀の腰紐をとりだした。彼女は結婚するまで和服だつたから、腰紐だけでも沢山もつてゐる。殆どがメリンスで巾が一寸から一寸五分、三つ折の袋縫いになつてゐるので、縛つてもシワはよらず、痛くもなく、しかもよく締まつて理想的なのである。念のために言うと、彼はずつとそれを用いつづけ、荒縄や麻縄を使つたことは一度もない。

「そんなものを引張りだしてどうするの？」

由紀はふしぎそうな顔をした。

「いいから両手をうしろに廻して！ そう、じつとしているんだよ」

「いやよ、そんなの。縛るのなんか、いやよ」

「ふざけてやつてみるんだよ。強く縛りやしないから、安心したまえ」

実際、途中で厭がらないように、注意して両手首を縛つた。それから屈んで、今度は足首を別に縛り、それを一尺ほどの間隔で結びつけた。

「ねえ、どうしてこんなことをするの？ 私を縛つて、どうしようつていうの？」

「さあ、どうしようかつて考えているところさ。お尻でも叩くところか」

「いやだわ、そんなことして苛めちゃ」

「なに言つてるんだ。苛めると言つたら、いくらしてもいいつて答えたじゃないか」

「あら、ちがうのよ、その意味！」

「ダメダメ、君が承知した以上は観念するんだ。大体、仕事の邪魔をしたんだから、可愛がるまえにその位のお仕置きは当然だよ。物には順序があるからね」

両手をうしろに廻し、足もつながれ、困り切つて返事もできずにゐる美しい由紀の姿は、正直に言つてちよつと堪らない魅力だつた。章三郎はむさぼるように眺めつづけながら、あくまで本気でないことを示すために微笑をうかべてしゃべりつづけた。

「さあ、そろそろ始めるかな」

「やめて！お尻なんかぶつちや厭よ」

身をよじろうとして、不自由な足を踏みちがえている間に、章三郎は悠々と左手で腰を抱きこみ、右手で膨らみに一撃を加えた。びちツと鋭い音がして、弾力のある手応えがした。

「いたい」

「うそつけ、加減しているのに痛い筈があるもんか」

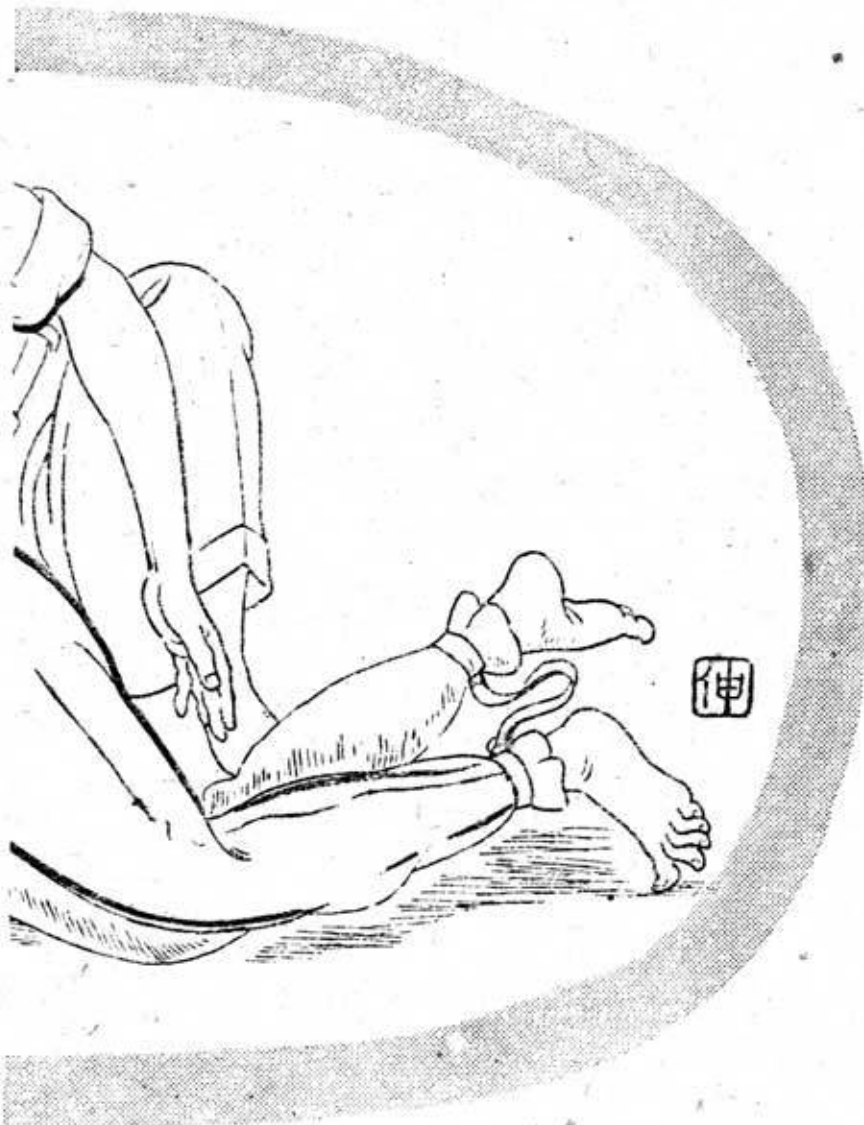
「本当よ、本当にいたいよう」

「さ、身体をもつと屈めて、言うことをきかないと、それこそひどいよ」

どうもやりにくいので左手を離しこんどは背中から捲きこんで二つ折りにし、動けなくさせた。そのためズボンはち切れんばかりに密着して、形のいい豊かな二つの半球と股間に切れこむ線はクツキリした。淡紅色に包まれたこの景觀はうつとりするばかりだった。彼は右手に弾みをつけて、両側を或は軽く、或は強く叩きはじめた。

「あッ、あッ、もういいからやめて。……ごめんなさい！」

腕の下で暖い肉体がもがくのを感ずる度に、彼はしだいに興奮し



てきて、はては右手を奥深くさしこみ、抓つたりこすり上げたりした。

尻を適当に叩けば刺戟を与えることは生理学的事実である。だがそれだけを切り離して考えてはめつたにうまくゆかない。それが成功するのは、セクシュアルな行為の中の一つとして行われる場合である。そして女がそれを意識しているときである。愛撫の一形式としてかろく抓られたり撫でられたりすることは由紀も経験していたから、結局そこに到達してしまふと、それまでのことは一つの過程としてどうでもよくなつてしまふ。つまり、縛られ打たれたことは最初彼女をおどろかせたが、やがて彼女のよく知っている感覚と結びついて、前戯の一部分になつてしまつたのだ。そして、最後によりちよち歩きの恰好で寢室へ引き立てられたときには「苛める」という言葉は今まで通り「可愛がる」意味になつていた。

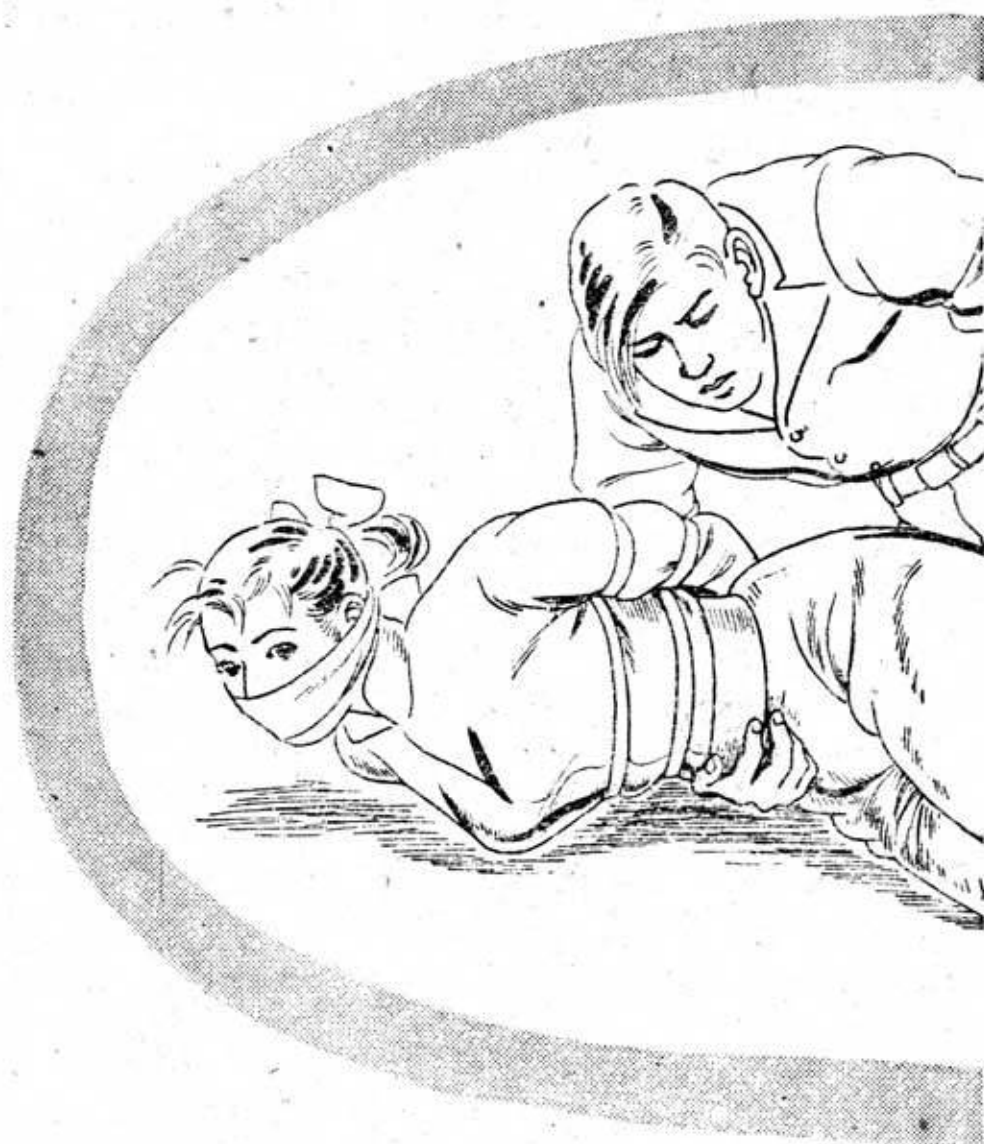
四、猿 轡

こう書いたからといつて、章三郎がすぐ夢中になつて妻を縛り出したと想像してはいけない。そういうことは、結末を急がねばならぬ小説では起るだろうが、實際生活のなかではもつと生ぬるい進行をした。

それというのも、章三郎がサード型サディストではなかったからだ。ただ苦しめ虐げることにはなんの興味が無い。相手も楽しまなければならぬ。そうなると無茶はできないのである。相手がそれに馴れるまで、次の段階に進むことができない。縛ることも濫用しなかつた。強健な二人は一年以上も毎夜のように楽しんだが、その後一ヶ月の間に由紀を縛つたのは四五回位のものだったろう。「紐は一種のアクセサリさ」と、笑いながら彼はよく言つた。そのアクセサリが、愛撫される一形式として完全に彼女の心理に溶けこんだとき、章三郎は猿轡を使つてみようと考えた。

なぜ猿轡の使用を延ばしてきたかは、性質を考えてみればわかる手や足を縛るのは、どちらかといえば単純な遊戯として明るく笑つたり話し合つたりできるが、口をしぼるのは本格的な拘束になるからだ。一緒にふざけることはできず、すくなくとも見た眼には一方的な責めになる。そして息苦しさや、不明瞭な発音や、うめき声などが、切実に無力感をさらけだすことになる。

しかし、それだけにこれは遊びとして最高の誘惑なのだ。たとえ



発音の自由を失つても、夫が残酷な意図をもっているのではないかぎり、それを土台に発展するさまざまなテクニクに由紀の酔える日がきつと来るにそういない。だが最初は、縛るときよりもつとおどろくことだろう。

蒸し暑くて寝苦しい晩だった。

二人は床をならべて雑談していたが、いつまでたつても眠れなかつた。

「おい、いつそのこと起きて、何かして遊ぼうか」

「そうねえ」

明日の出勤のない生活は気楽だ二人は飛び起きて、布団の上にすわつた。

花札を持つてこないか」

「これから六百を教えてやろう。花札を持つてこないか」

「六百つて、どうするの？」

「二人でやる遊びだよ」
父の家から持つてきた小荷物の中に、トランプや花札があつた。トランプは幾度もやつたが、花はこの家では始めてだった。

彼はまずやりかたを説明し、出来ヤクの名前と数字を紙にかいて渡してやつた。

「わかつたね」

「ええ、どうやら」

「単純だからすぐ覚えるよ。君はその紙を見ながらやればいいんだ。ホラ、手が八枚、場が八枚」

熱心に教えながら、二三回やつた。わざと手を抜いて相手にヤクができるように仕向けたから、由紀はたちまち勝つてしまった。

「口ほどにもなく弱いねえ、あなた！」

「賭けないから熱が出ないんだよ。じゃあ一つ、賭けてみようか」

「いいわ、何を賭けるの？」

「僕が勝つたら、苛めてあげる」

由紀はちよつとためらつたが、言つた手前、いやともいえない。それに一方的に勝つてゐるから、自信もあつたようだ。

「じゃあ、私が勝つたらどうする？」

「そのときは、キス十回」

「ずるいなあ」

と言つたが、それきりだつた。

六百にはもちろん運もあるのだが、なんといつても腕がモノを言う。大体が章三郎は将棋初段の腕前だから、勝負事には強い。一回ごとに点数を増していつて、五百八十対ゼロまでこぎつけてしまつた。

「今度できつと勝負がきまるね。覚悟はいいな」

由紀は口唇をかみしめ、頬を紅潮させて、だまつて札を拾つた。

おどかされると、遊びとは分つていても、なんだか怖くなつてきたらしい。真剣そのもののような顔つきで、紙と首つ引きで打ちはじめたが、狂瀾を既倒にかえす由なく、とうとう押し切られてしまつた。

「さあ、約束だよ。両手をうしろに廻したまえ」

「ずるいわ。あなた、人をペテンにかけたわね」

と、手首をつかまれながら、由紀は睨んだ。

「なにがペテンなものか。ちゃんと勝つたじゃないか」

「ううん、さつきはわざと負けたのよ、きつと。そうしておいて、私にあんな約束をさせたのよ。ずるいわよう！」

「敗軍の將は兵を語るべからず。とにかく約束は約束だからね」

両方の手首をしぼると、二巻きほど胸にかけた。それから、布団の上にくるがして足を縛つた。今日は間隔を詰めて五寸位にした。

由紀はさして抵抗もしない。また遊戯がはじまつたと思つたからだ。俯伏せの顔をねじまげて、大きな眼でじつと彼の様子をうかがつてゐる。

そのままにして章三郎は部屋を出ると、茶の間からハンケチを出し、ぐるツと廊下をまわつて、便所の脇の手洗の上にぶらさがつてゐる手拭を引きぬき、戻つてきた。

「口をあけてごらん」

「口？」

「うん、大きく開くんだよ」

「あ、いや、いや。そんな変なこと」

やつと感づいた彼女は真剣な声を立てた。

「変なことじゃないよ。ただ今日は声が出ないようにしてやつてみたいんだ。そのあとのキスは格別甘いんだぜ。さあ、いい子だからおとなしく先生の言うことをきいて」

「だつて、そんなもの詰め込まれちゃ苦しいわよ。……あ、それはどうするの？ お便所の手拭じゃないの。いや、いやだつたら！」

もう仕方ないので、鼻をつまんで入れようとしたが、ちよつと口をあけてはつぐんでしまうので、うまくゆかない。章三郎はテレくさい上に、焦つてきた。

「負けたら言うことをきく約束なのに、君は守らないんだね。よしじやあ君が口を素直にあけるまで、折檻するよ」

彼はうしろむきにパジャマの胸を横抱きにすると、いつもより力をこめて尻を叩き、腿を抓りはじめた。これは愛撫の限度を通り越しているから、由紀は悲鳴をあげて足をばたつかせた。

「ああ、痛い、痛いわよう」

「だから早く言うことをきくんだ」

「だって厭、あんな汚ならしい手拭なんか持つてくるんだもの」

「こうなっている間だけ、君は損をするんだ。それが分らないのかい？」

「あッ、あッ、ほんとに痛いから許して。ねえ、……あッ」

「じやあ、猿轡をするか」

「するから」

弱々しい声になつたので、ふりむくと、眼に涙がたまっている。実際に痛かつたに相違ない。度が過ぎたかなと思つたが、ぐずぐずしていると目的を逸するから、急いでハンケチをまるめて口に押し込んだ。ところが意外なのは、それが全部入らないのだ。力まかせに入れようとすると、由紀は顔をしかめて嘔きそうにする。ハンケチなら大丈夫だと思つていただけに少々慌てた。やむをえず、どうやら八分通り押しこんだところで手拭をすばやく鼻と口にかけ、首のうしろで結んだ。乱れた髪が結び目に入つて引き吊れたらしいがやり直す余裕がなかつた。

(やつとすんだ！)

大事業でも成し遂げたみたいに、彼は額の汗をこすりながら、布団の上にあぐらをかいて、横向きに身体を曲げている姿をあらためて眺めた。

まず彼の発見したのは、眼の表情が一段と美しくなつたことだ。猿轡で掩われた顔のなかで生きているのは眼だけである。それが悩ましげに閉じたり開いたりしている。その訴えるようなまなざしは詰物された口のあたり、頬に食いこんだ布の線と相俟つて、完全な無力感にあえていっている。第二に、猿轡あつてはじめて、手と足の緊縛が大きな意味を示すようになった。今までは、手は手、足は足と、拘束の感じがバラバラだつたが、いまでは全身が拘束されつくしたという印象をあたえる。これは人間の発音や顔の表情がいかに大きな役割を持ち、自由を強調しているかの証拠である。

由紀もそれを感じたらしい。その無力感に反抗しようとして、絶えずうめいたり、もがいたりする。この場合に足と足とが固定しないのも効果的だつた。すこしでも自由が残されているのはそこだけだから、動かさずにはいられないのである。だからズボンに浪打ちの淡紅色のヒタが寄る。しかも間隔はたつた五寸だから、みせかけの自由は絶えず裏切られ、つながれた紐を意識せざるをえない。

見ているうちに章三郎は酔つてきた。はじめての経験だつたからいささか自制心を失つたのも無理はなかつた。(と、あとで自己弁護した。近づいて俯伏せにころがすと、猿轡が強く布団に押えられるのを嫌つて、由紀は顔をよじつた。かれは馬乗りになつて、両手でその顔をはさみ、まっすぐに戻して布団に押しつけた。

「うう、うう……」

うめき声を立てて、足を激しく動かす。伝えたくても意志を伝えられない状態が、彼にとつてはあたらしい刺激だった。今度は馬乗りの向きを変え、すぐ眼の下に揺れるピンク色の尻を存分に打ったり、こすったり、抓ったりした。その度に押し殺されるような意味のわからない声が洩れるのだ。もういいだろうと思つて身体をどけると、由紀は全身の力をこめて仰向けになり、起き上ろうとする。それに刺戟されて、また俯伏せにころがし、しばらく弄びつづけた。

これは今迄でいちばん時間も永かつたから、もしもこれだけで終つたならば、もちろん二度と彼女は猿轡を許さなくなつたろう。しかし章三郎は例によつてこれを徐々にキスや頬ずりや抱擁にもつていつた。猿轡を解くまえに、その上から口づけるのである。

たわむむれの折檻から本格的な愛撫への移動は、章三郎のかなりずるテクニクである。それは極めて情熱的でも巧妙だからすべては広大な前戯のなかに溶けこんでしまい、由紀は不平を言うことを忘れてしまう。こうして、猿轡をはずし、紐を解いたときには、双六は上りを待つばかりとなつていた。

五、演技として

注意しなければならないのは、章三郎はこれらのサディズムを、夫婦の交りの絶対条件とはしなかつたということである。それは二人にとつて義務ではなくて権利であり、必要条件ではなくて、おまけとして彼等の快樂に与えられた人生の薬味であつた。だからどこまでも複雑な遊戯の性質をおびていた。一般の未経験の人たちが空想するような、日常生活を荒ませるものは何もなかつた。また彼ら

のデリケートな愛撫がそのために傷つくこともなかつた。これは一年や半年の話でなく、十九年の永い体験の結果、言えることなのである。

章三郎はその秘密を知つていた。つまり、サディズムをどこまでも遊戯の線に置いておくことだ。これが根本的な点だ。舞台でどんな役割を感情こめてやる俳優も、それで自分の人生の他の部分を冒されはしない。それと同様に、彼らはある意味で演技者だと言うことができよう。ただその演技には見物人がなく、純粹に自分たちだけの快樂のために行われるにすぎない。

それを理解しなければ、あれほど尊敬し愛し合つている二人が、どうしてあんなことを行えたか、いや、月日がたつにつれてもつと深いやりかたに何故習熟するに至つたか、全く信じられないに相違ない。

章三郎はサディズムに関する文献、小説、告白などをよんだ。だがごく一部のものを除いては参考にならなかつた。なぜなら、それを実行するには大邸宅や金のかかる設備が要るだろうという点を別にしても、永い人間生活の上で満足を与えないように思われるからだつた。

もしも単なる残忍を追求するとすれば、つねにマゾヒストを探し出せるわけではないから、金か暴力で犠牲者を手に入れるしかない。だが金や暴力で行えることは、飢えた男がパンパンを相手に得るほどの満足もひきだせないであろう。一方的な快樂は常に皮相的である。このようなサディズムにはデリケートな工夫をこらす余地がなく、自棄酒に陶醉するように、しみじみとした陶醉を落している。それが夫婦の場合だつたら、彼はまず暴虐を揮うことができる

ために、日頃から相手を奴隷にしておかねばならぬだろう。これは一方が粗野で一方が愚かな場合にのみ、成り立つように思われる。かりにそんなことができたとしても、主人と奴隷が手をたずさえて社会的に立派に活動することは不可能ではないだろうか。

少くとも章三郎はそう考える。それに性愛だけの生活ではなかった。勉強や、仕事や、語り合うことが、質的にも時間的にも大きな部分を占めている。そうした面を無視してお互いが幸福になることはできない。とすれば、夫婦の自由と平等は高遠な理想ではなくて、二人がいつまでも楽しく暮してゆくための、現実の核なのだ。章三郎は由紀がいじけた無気力な妻になることを露ほども好まなかった。だから彼のサディズムは全人間関係ではなく、享樂のときにかぎって許される演技であつた。いかに永くてもそれは前戯の一

アブノーマル・フェアリー

Abnormal Fairy

三島俊夫

○ 裸にされる事、

処女の性的興奮——男が煙草の火をする。女は袖でマツチの火を覆つてやる映画のシーン。

○ 人妻の性的興奮——腰巻を捲くられる事、ブロースを脱がされる事、(性感を味わいたい為にわざとブロースをはいて寝る人妻もある)

婦人の髪が乱れ、肌はむき出し

部分で、最後には甘い愛情のエクスタシイのなかに完結した。

財産もなく、広い家も持てず、特別の寝室もなくで、しかも来客の多い章三郎の場合には、ものものしい設備や器具はとうてい不可能である。ところが、彼はそんなものを必要だと感じたことさえなかった。細いしなやかな革の鞭が有ることはあるが、それさえ滅多に使わなかった。彼にとつては、生きた指先で足りるのだ。そしてそれらの設備や器具よりもっと重要なものは、縛りかた、折檻の内容やテクニク、服装や猿轡の利用法などだった。

今まで述べたことは、結城章三郎のサディズムの第二段階までだった。これから私は、第三段階に入つてゆこうと思う。いわば彼の本領の発揮されるのは、この段階からなのである。

(未完)

にされ、あられもない姿にされて、いるのを見て無抵抗な女が積極的兇暴なる男の欲望の餌食にされたものと想像する時。

○ 緊縛され鞭打たれる時は相手が

異性なのが効果的、異性の前に腰巻を脱ぎ手足を縛らせて鞭打たれたくなる。

○ 縛られた女を見る女性の心理は

処女時代は戦慄であり恐怖である自分に力があつたなら縄でも解い

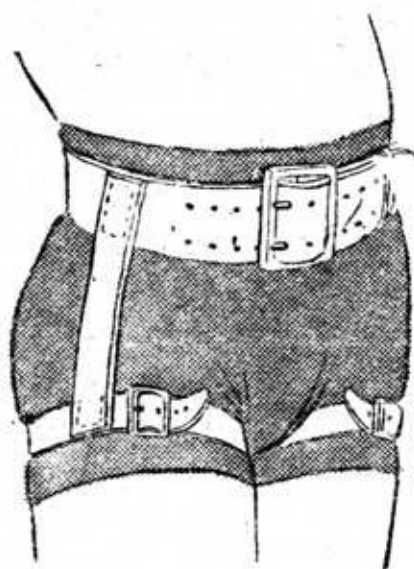
てやりたい憐憫と同情の念しかわかない。中年以後になると、愉悅味を感じるようになる。セックス・アツピールを覚える者千人中千人なり、実行に走る者千人中二人なり

○ 縛られる女の心理、——処女は最初是不快を感じるが、然し反覆して縛られている中に遂には愉悅味を感じるようになる。或る乙女の告白——なんだか変な感じがしたわ、妙なおかしい感じがしたわ、一寸はいい感じがしたわ、

MS バンド (Masochism Band)

獄 收 一

MS バンドとは Masochism Band の意です。それを略して M・S・B つまり MS バンドとなつたわけです。これは自縛バンドのことです。私のように少年監獄へ投獄され、拷問を受けてそれが動機となつて Masochist になつた方は少いと思いますが一度少年監獄といふますか牢屋といふますか、世間より隔離された特別な雰囲気の中で緊縛され快感を味えましょう。でもそれを忘れる事が出来ず、結局今になつても正反対の性癖を有しているか

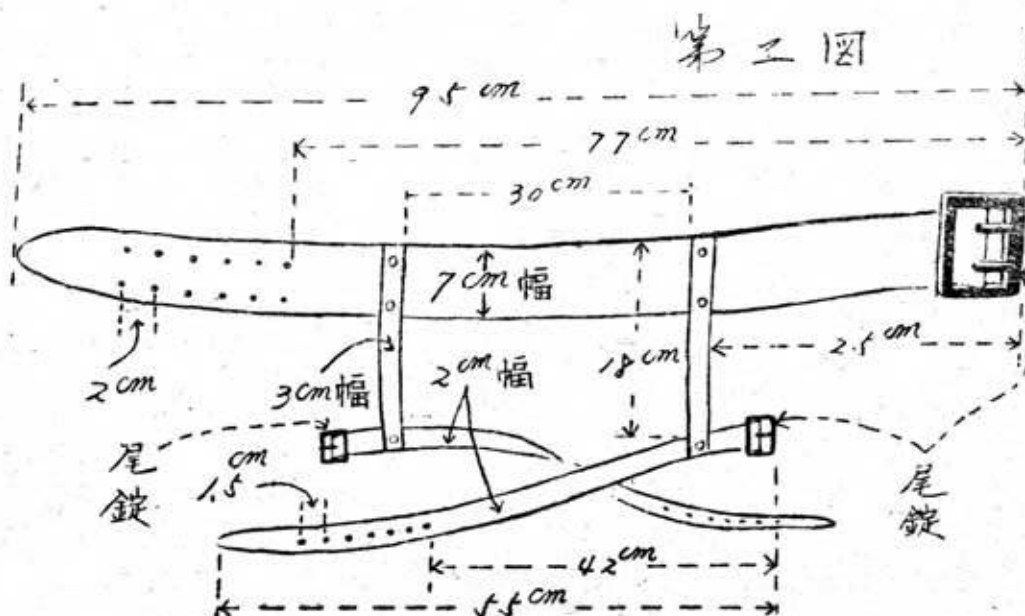


第一図

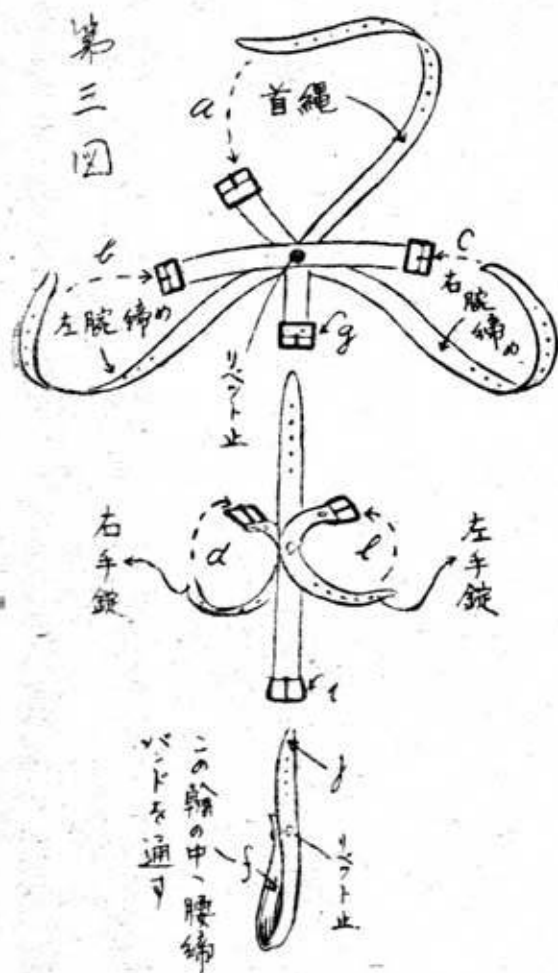
又は同じ傾向の人を探し、そしてアブノーマル・プレイを行つて見たいと思いますがそう簡単に相手が見つかるわけがありません。人間は誰でも一面には社会人であり、いつもはノーマルな生活をするのが大部分であつていわゆるアブノーマルな事を行えるのはその生活中の十分の一位の時間でしょう。

普通の日にいさゝかアブノーマルな気がもたげても各人が社会人である以上理性によつてぐつと押さえられてしまうでしょう。考えによ

つてはそれでよいのであつてこの理性によつてアブノーマルな気が適当に制御出来れば、いわゆる変態性慾者として特別に世間のさらし者にされなくても済むのではないのでしょうか。理窟はさて置きいさゝかアブノーマルな気持が起きてくる可能性の多いのは私の場合、何といつても銭湯



第二図



に行つた時とランニングシャツを着たスポーツを見る時で同性の体格のよいのを見ると、これを縛つて見たら、又縛つて貰えたらと思うことが屢々あります。又中にはアブノーマルな同傾向の人でしょうか、よく見ると二の腕等にうすく捕縄の跡のわかるものもありますが見ず知らずの他人にいきなり貴方はマゾヒストですかなんて云うわけにもいきません。第一そういうことが的中していても、それで「す」と云うわけがありません。ですから特別な場合を除いては相手がみつかるのは幸運？であつてみつからぬのが普通です。仮にみつを つてもアブノーマル・ブレイをする場所がなかなか問題です。この点、奇クのモデルが撮影されるのも大変だろうと思います。お

互に気のすむ迄ブレイをするには外部から覗かれない事が第一で次に音が外部へ絶対もれぬ事が必要です、次第に興奮して答でも使うとその音で家人に知れたりしますから場所が大問題です。

以上の事より自縛装置を作る事が一番必要で安全なわけです。自縛にはいろいろの方法がありましようが、私の場合、KK通信の何号でしたか、某氏と同様腿をしめるととても快いのがMSバンドを作つた原因でした。この腿をしめる事は例の少年監獄にぶち込まれていた時、拷問の一つで「もゝじめ」というのがありました。之は二本の頑丈な柱がたつていて（この柱は囚人をつないだり拷問したりする柱です）その間に横木を通し之を柱にとめる仕掛けの所へ連れていかれ、先ず全裸体にし（何故か云うとこの拷問はとても苦しいので物を吐いたり放尿、脱糞等のことがありますから囚衣を全部とるのです）そして両手を水平に挙げさせられ横木を丁度胸の高さに調節され両手首、二の腕、胸を横木にきつく縛りつけられます。足はきちんと揃えら



第四図

れ足首には嚴重に鉄鎖か足枷をかけられます。そしていよいよ拷問にかけられるのですが太いロープを持つて来て先ず乳の下を二度縛り、後へ木を入れてねじり、締め上げるようにします。次に腰、両もゝと計四ヶ所ねじり、木を入れたロープをかけられ先ず大きく息が出来ぬ程度に胸を締められ（こゝは余り締めない、余り締めると早く気絶して少しも苦しくありません）次に腰、そして「もゝ」と締められるのです。そして「もゝ」と腰をくびれる程締められて三十分もすると両腕は肩より全く感じがなくなり「もゝ」から下もしびれ始めて来るのです。此のしびれ始める所がこの拷問の大切な所で全くしびれゝば直ぐのびてしましますので、付添看守は一寸ゆるめたり等して一番苦しい所を少年囚に味わ

すのが目的です。私
の場合は先の拷問で
快感を味つて以来ど
ういうものか〃も〃
〃を締められ〃ば締
められるだけ快感が
甚しく……するので

看守がとてもおこり、益々締めるのですが、
遂には快感の極に達すると同時に気絶してし
まいましたのでそれ以後これにはかけられま
せんでした。(それ迄二度この拷問をくらい
ました)一般の少年囚は一時間もすれば放尿
するやら吐き出すやら呻くやらでとても見て
は居られぬ位苦しむのですが私は正反対でし
た。

出獄後何とかしてアブノーマルな気持を満
たそうとしていた矢先、某雑誌に第一図のよ
うな健康帯の広告をみつけた時は正直な所〃
ぞくつ〃とする程嬉しく思いました。早速内

第五図

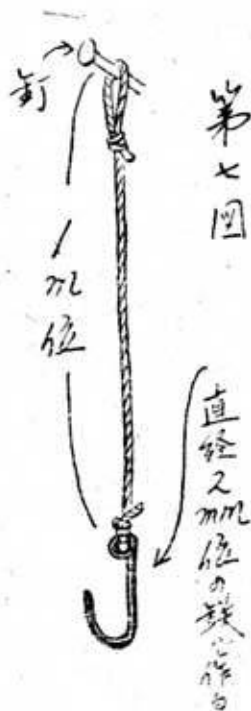


第六図

緒で之を購入したのが
MSバンドの始めです
このバンドは健康帯と
してはあまり効果が無
かつたのかその後また
れてしまい、現在は無
いようですが私にとつ
ては実によい健康帯?

で今でも何時も肌
に着けています。他人に見られた時は〃一寸胃
腸が弱くて〃と云つてごまかせばよいのです
しかしMSの目的以
外に常時使用してもな
か〃普通の時は丹田
に力が入つてよい時も
あります。同傾向の方
に御使用をお勧めしま
す。(パンツの下へかければ外からは全くわ
かりません)第二図に寸法を書いて置きまし
たが革で作られ〃ばよいでしょう。特にMS
バンドとしては腰を締めるのも大切ですが
〃も〃〃を締めるバンドと之を腰に吊つて
いる所が大切です。も〃〃を締めるバンドは
特に丈夫なもの、例えば背囊の負皮等使用
すればよいでしょう。しかしズツクでもよ
ろしい、健康帯と異なる所はも〃〃を締めるバ

第七図



ンドだけですが、前面に前手錠をかけるよう
にバンドをつけて置けば更によいでしょう。
KK通信の某氏は特にこのバンドを用いられ
ては如何でしょう。も〃〃を締めるだけ締めて
うんと力んでごらんさい、それだけでも素
晴らしいです。私は此のバンドを刑帯と名付
け、腰のバンドを〃腰締め〃腿のバンドを〃
腿械〃と名付けました。

次にいよいよ体を自縛する装置について述
べましょう。私の場合は相手にきちんと縛つ
て貰い、そして各部の

寸法をとつて置きまし
た、そして後手にした
時手の働く範囲に継ぎ
め(び錠)を持つて来
るよう細いバンドを構

成したのです。必要な寸法は、例えば私の大
好きな十文字陽を例にとれば背中、繩の集る
所より

1、くびまわり(繩の集っている所よりく
びを通してもとへかえつていいる長さ、
くび繩の長さ)

2、左右腕まわり(繩の集っている所より
左右の二の腕を通してもとへかえつて
いる腕じめの長さ)

3、吊り縄の長さ（縄の集つてゐる所より

両手錠の位置と両手錠より下の腰を締めてゐるバンド迄の長さ）

4、両手首の長さ

以上の寸法を縛られている体で測つて貰うのです。縛られている時は体の形が一寸違つてゐますので普通の体ではいけません。そしてその長さへ適当な余裕をつけた長さを加え「例えば右手にバンドをかけ縄の集合点の尾錠へ（第三図g）かえるには相当の余裕がなくしては出来ません」まあ全体として二〇糎位みておけばよろしいでしょう。そして後で適当に切るのです。又、縛られた時の寸法の所を中心としてバンドに穴を二糎置き位に付けるのです。例えば十文字陽のバンドは次のような型となります（第三図）之を着装したのが第四図です。

これは見られてもわかる通り「吊り縄」を

締めると刑帯が一寸上つて充分締まらぬ

ので刑帯の中央より

前へ向けてまたじめ

を付加したものです。

ではどのようにして

かけるかに就て述べ



第 四 図

ます。

一番始めに第二図の刑帯をつけ、腿^{ももかぜ}杖^{ばう}をきつくかけ、またを通したバンドを締めます。この時第三図の（5）を忘れてはいけません。次に左右の腕締めを一番ゆるくし（一番大きな寸法にする）之を後より両腕へもつて来て右を肩まで持つて来そして首縄のバンドを吊り縄の尾錠（第三図g）が後手にして右手が届く所まで下るように締めます。そして左右の腕締めを正しい位置へもつて来ます。（二の腕の一すくびれた処）

今度は吊り縄をとり（a）を右手首へきつく締め、吊り縄の（h）点を右手で握り（g）の尾錠へ通し締められるだけ締めとめます。これはバンドを手でひっぱれば尾錠が簡単にかゝるようにして置く事が必要です（hの孔を大きくすること）これで右手だけ後手に縛

られたわけです。

（i）の尾錠へ（

j）をとめます、

そうすると後へ反

る形となりこれだ

けでも相当よい気

持になります、あ



第 五 図

いている左手で充分あちらこちら締めます。そしていよいよ左手を縛るのですが之は第七図のようなフックを用意します、このフックは後で解く時必要です。これを立つて左右の手を後手にした高さより一寸高い位の位置にとめます、この場合ロープは一米位が一番工合がよいでしょう。先ず第三図の（e）のバンドを尾錠へ予め通し、このバンドの先へ大きい位の穴をあけ（大きくないと解縄の時苦勞する）之を第七図のフックへかけます。そして左手を後手にして第三図（e）の輪の中へ左手首を入れ、そのまゝの体形で一寸前へ出るとフックをとめているロープのため（e）が締められます、此の時右手の人さし指を働かせて（e）の尾錠をかけるわけです。孔を大きいめにあけて置けばわけなく出来ま

す。そしてフックを外せば完全な後手錠です。多少練習を必要としますが二、三度やれば大抵自由に出来ましよう。この形で床の上

をうつ伏せになつて一回転してごらんなさい
それは素晴らしい事でしよう。

私は図のように在監少年だった頃のように
赤のパンツとシャツで納屋の中へ作つた牢屋
の中で一人自縛して床の上を転がり、素晴ら
しい気持を味つています。解く時は左手で
(h)を引つぱると直ぐ吊り縄がはずれ左右
の後手が下り、次に左右の腕締めバンドの
先を引つぱれば直ぐ楽になります。後手錠を
解くにはやはり第七図のフックへ第三図(e)
(左手)の先をかけ前進して解くわけです
何れにしても相当練習が必要です。バンドの
穴は出来るだけ大きくあけて置くことです。
第八、第九、第十図は胸を締めるバンドを附
加したもので女五方より取つたものです。か
け方は前と同じ様なものですが略させて頂
きます。

第十一図は私の大
好きなもので形帯を
きつかけ捕縄を併
用したものです。

バンドは何れにせ
よ自作しなければな
りません。幾らなん
でも何処かへ出して作

る訳にはゆきません、

それには細くて軟か
いバンドを多く買つ
て来てアルミのリベ
ットで留めるか、又
は金物居へ行き、小
さい真鍮のボールト

・ナット(一分の)を買つて来てとめるとよ
ろしい。私は両方使用して作りました。MS
バンドの長所は少々きつかけても捕縄の
ようにひどい跡がつかない事、捕縄は締める
時全体を解いて締めなければならぬがMS
バンドは局部的な締め加減が出来る事、バン
ドさえ軟らかい皮を使用すれば体に縛創がつ
かない事、最大の長所は自縛、解縛が自由に
出来る事です。缺点としては、捕縄のような
縛創はつかないけれど、迫力と痛さの無い事
ですが、独りでマゾ

ヒズムを満喫出来る
のは最大の長所でし
よう、他に服の下へ
着けてもわからない
MSバンドも作りま
したがこれは又発表
させて頂きます。

第十一図



最後に申し上げ
ておきますがもし
このMSバンドを
作られる方があり
ましたら実験され
る時は万一の失敗
(解けなくなつた
ら大変です)を考え「はさみ」を用意して置
く事もお忘れにならぬ様にして下さい。又く
び縄は出来るだけ始めは締めない事です、息
でも出来なくなつたら大変ですからね、とに
角練習して安全と自信がついてから御使用に
なる事です。同好の方の御批評をお待ちしま
す。

愛川晃子様

御愛読厚く御礼申し上げます。八月号では貴
重な事実お知らせ有難うございました。若し
差支えなくばお友達の方の日常、遺書、状況
等出来るだけ詳しくお知らせ頂けませんでし
ようか。得難い記録と存じますので厚かまし
いのですがお願い申し上げます。

尚、若し拙稿(34569各月)及びその
他切腹に関する記事読物に就ての御感想併せ
てお聞かせ頂ければ幸甚に存じます。
本誌気付にてお返事お待ちしております。

中 康 弘 通

第十図



觀々堂手
柄話の内

怪^{かい}奇^き曼^{まん}陀^だ羅^ら教^{きよう}

緑

猛 比 古

生皮を剥がれた女体

隅田川に漂着の事

「大、大変だ、先生ッ！ 隅田川の回向院の辺りは、江戸始まつて以来の大騒ぎですぞ。」

商売柄、殺しには見飽きる程立会つて来たが、こんななあつし
も全く始めてだ、いやもう何とも、むごたらしいじやありませんか
い、頭のとつぺんから足の爪先まで、綺麗さっぱり皮をひん剥かれ
た、いなばの白兔同然の、赤裸の女の屍体が御舟蔵前丁の船杭に引
つ掛つていたんだから、騒ぐなと云う方が無理なくらいだ、こいつ
は先生でなけりや、何ともわつし等の手には負えねえ一大事なんで
——。ええ先生、いつ迄も寝そべつていねえで、ちつとは身を入れ
て驚いちやどうです？」

お馴染の観々堂先生の陋宅に飛び込んで来るとせつかちの源六、
豆鉄砲の様にポン／＼と立て続けに喋り立てました。

残暑のきびしさも、漸く一雨毎に涼しさを増してきた今日此頃、

これはのどかな江戸の初秋を驚倒させるに充分な獵奇的事件でした
「正に驚いたネ、旦那のその権幕には全く驚きましたよ。で、なに
かい、その赤裸、よく女と分つたものじやな」

「チエツ、いくら一皮剥いたつて、男と女じや出来が違ひまさあな
第一、乳の辺りが生々しく張つてゐるし、それにそれ、道具立てだ
つて、男じやまさか割れてもいめえよ」

「なーる……。それで当然素性は分らぬだろうな」

「訊ねる迄ありませんよ、白くふやけてぶよ／＼した肉の塊りが
どこの誰様と分りや世話はねえ」

「いやにポン／＼云うじやないか、つまり出掛けりやいゝんだらう
行くよ／＼。旦那の頼みとあれば、是非もあるまいよ」

「おつと、そう来るのを待つていたんだ、仏はその儘、先生のくる
迄菰を蔽せて寝かせた儘なんで、御蔵前迄ちつと遠いが、それじや
一挺駕籠でも奮発して、出掛けるとしましうかい」

既に源六は手配をしておいたのか、飛出すと、すぐさま二挺の駕籠をとんと軒先に並べ、「さあ乗つた〜」と先生を押し込むや、一目散に両国を指して、宙を飛んで行きました。

黒山の人だかりを掻き分けて、御舟藏前の川つぶちに現われた先生は、早くも犇々と辺りを固めた町方や検屍の役人に一礼して、静かに仏に蔽せられた菰をめくりました、成程源六の言葉通り、それは余りにも無惨、酸鼻を極めた屍体でした。

皮を剥がれた人体は、まさしく一個の肉塊と化して、白くふやけて靡爛した肉は、触れば、ぞろりと骨を離れて崩れ落ちそうで、無気味なことこの上もなかつたのです。

鼻を蔽い、眼を背け乍らも、この肉塊を見んものと犇く群衆をじろりと見廻し乍ら、流石の先生も手掛り皆無のこの肉塊には些か困惑を感じました、吐気の催す悪臭が辺りに立罩め、いつしか夕闇の迫る川辺に先生は、源六が引き連れて来た屍体の発見者、三囲^{メグリ}辺りの船宿の船頭、喜六と云う男にその時の模様を無意味乍らも訊ねました。

「いつもの様に客を送つて、厩橋から新大橋辺に漕ぎ下つて参りますと、急に船足が重くなりやしたので、妙に思つて、竿で船端をつゝいて見ますと、船底からヌルリとこれが現われましたんで……いやもうその時の魂消た事と云つたら、全く生れて始めての驚きでしたよ」

こう云つて、いなせな船頭喜六は、気味悪そうに尻込みをするのでした、これでは何の得るところありません、その時鋭敏な先生の耳に、微かに呟くしわがれ声が、鼓膜を貫ぬいて聞えて来まして「……気の毒に、哀れないけにえじや、成仏なされ、南無……」

ハテと耳を済ますと、たしかにそう聞きとれたのです、一道の光明を見出した先生の視線は、急がしく辺りを取巻く弥次馬に流れやがて或る一点でピタリと止まります。

妖しい銀髪の老婆、突嗟に先生はそつと源六の袖を引きました。

「旦那、どうやらガンがついたよ、チヨイト耳を貸しな——」

何事か密かにさゝやくと、活々と源六の眼は輝きます。

「ようがす、流石先生だ——。へッ途端に嬉しくなつてきましたぜ——。」

頷いた源六、ぐろりと弥次馬の後ろに廻ると、素知らぬ風で老婆にピタと寄添いました。

非人の手によつて戸板にのせられた肉塊が、番所に運び去られて行くと、散々伍々弥次馬は散つて行きました。その中に、例の銀髪の老婆を密かにつけて、源六の懸命の追跡が始まつた事は申す迄ありません。

神罰立ちどころに現われ

銀髪の妖婆毒矢に射殺さるの事

翌日の朝まだき、寝不足の眼をシヨボ〜させて、気の抜けた姿で源六、先生を訪れました、待ち兼ねていた先生。

「旦那、昨日に引換え、今朝は又莫迦に神妙じやないかえ、してどうじやつたな、何か掴めたであろうが……」

「ところがいけねえや先生、とんでもない失敗りで、実は……」

と源六、スタ〜と急ぎ足に、黄昏を縫うて万世橋から駿河台へと辿る老婆をつけているうちに、老婆はフト後ろを振向くと、いきなりバタ〜と走り出して蓮長寺の墓地に飛び込んだのです、今は

これ迄と続いて墓地に駆け込んだ源六、数間先を、裾を乱して逃げる老婆めがけて、突嗟の捕縄サツと投げ掛けて、うまく足に絡んだと見るや、素早くたぐつて、老婆を引き寄せ、ぐいと羽搔じめにしました。

「おいつ、神妙にしろよ、すつかりネタは上つてゐるんだ、赤裸の土左衛門は一体何者だツ」

「と、とんでもない、何で私が知るもんかね」

「チエツ、知らねえ者が、何故バタ／＼と逃げだしたんだ」

源六、こゝを先途と、縄をキリ／＼としぼり、老婆の手を捻じ上げました。

「隠し立てすると、痛い眼を見なけりやならねえぜ、さつさと申し上げな」

散々脅したり、痛めつけた挙句、こらえかねた老婆が、

「く、くるしい、云うよ／＼。実は、あの女は、神様の思召によつて、生き乍ら腹を

たち割られて生皮剥がれた、いけにえなんだよ」

驚いた源六、

「えッ！で、その神様と云うのは？」

「神様は、四ツ谷……」

老婆がそこまで云つた途端、何処からか一矢の白矢が、風を切つて飛来したかと思



うと、源六の小髻をかすめて、狙いたがわず、老婆の心の臓に、ぐさりと深く突き刺つたのです。

「呀ッ！」と慌てゝ見廻した一丁目許り先を、スツと怪しい男が闇に消え去りました、白矢には猛毒が塗りつけてあるのか、老婆の顔色は忽ち紫色に変じ、斑点が点々と顔をしまどると、カツと血を吐

いてその場に息絶えました、矢尻に白く、何か結んであるのに気付いて、外して見ると、一枚の結び文——。それに血文字で一行

〃神罰はおそろし、手を引くべし〃

「と、これ、この様に書かれてありましたんで、全くとんでもねえ神罰だ。」

「フム、さては旦那のあとをつけた者があると見えるな、老婆が正に口を割らんとしたので、そやつは一矢のもとに老婆を射殺した上、わしらに手を引けとの警告を発したわけじやな、仲々に相手もさる者じや。して、老婆は、最後に、たしかに四ツ谷と申したか。」

「肝心な点は聞きのがして面目ねえが、四ツ谷だけは間違いないねえ。」

「いや、それだけでも大成功じやつたよ、四ツ谷、隠亡堀のほとりの、讃岐屋の別邸が、近頃妖しい怪教の魔窟と化して、讃岐屋嘉兵衛は、一にも二にもその怪教に帰

依しているとの噂も洩れきっている——」

「あつ、そいつは曼陀羅教……」

「とか、申すそうだな、丑の刻詣りをなす者は、不治の万病が治癒するとかの、あらたかな靈驗を売物に、しきりと栄えておるそうだが、信者の名は絶対に秘密を保たれて、教主以外はお互が、隣り同志に座つていても、その相手を知らぬそうじゃ、参詣の信者は一様に白衣、紅巾に包まれており、万一神事を外の者に洩らした時は、神慮立ちどころに降つて、神罰を与えられると聞いているよ。」

「なるほど、こいつは滅法臭いねえ——」

「思い切つてやるか旦那——。邪教をはびこらしておくやと碌なことがない、手段は一つ、こうじやよ源六、チト耳を貸せ」

先生は源六に、何事かひそくと囁やきました。

四谷隠亡堀の曼陀羅教

繁昌をきわめる事

安永年間、十代將軍家治政を顧みず、酒池肉林に耽溺し、執政田沼意次私慾を専らに肥やして、しかも江戸には次から次へと天変地異が起りました。

度重なる天災は、人々の心の安寧を乱し、不安に脅えた生活を送るその隙間に乗じたのが、数々の邪教怪教のたぐいで、神興宗教の抬頭は凄じく、寺社奉行の眼を潜つては、迷える小羊の群に、妖しい神の息吹を拡げていつたのです。

修験者の加持祈禱、巫子おろし、稲荷の靈驗もあらたかなものであると信じていた盲信の人々の間に、四谷大番丁辺りに忽然と、彗星の如く現われた曼陀羅教の、淫美と神秘に包まれた雰囲気は、見

る——波紋の様にその噂を拡げて、信者筆頭讃岐屋嘉兵衛の大別邸が、曼陀羅教の本殿として改造されてからは、押しも押されぬ新興宗教の黒馬的存在として、その勢力を四谷周辺から牛込、赤坂の方へと延ばして行きました。

しかし乍ら一度、教団の門を潜ると、その脱落は死を意味する恐ろしい鉄則に心の迷いで入教したものゝ、正体を知つて、その怖ろしさにこゝを逃れようとして、あたふた人命を失つた人々も、すべてが闇から闇へと葬り去られていたのです。内部漏洩を防ぐ淫虐な手段として、神慮にかこつけて、惨殺を行うこうした怪教も、取締りの網をぬつて間々存在していたのです。

教団の放つ多くのさくらの、勿ともらしい数々の奇蹟を語る言葉信じて、それでも迷える小羊は後を断たず、毎夜の如く、人眼を憚る丑の刻の入信参詣が続いていたのでした。

増上寺の鐘が、鬱々たる余韻を残して、丑の刻を知らせ終る頃、何処からともなく、白衣紅巾に身を包んだ男女の群が、隠亡堀に臨んだ、曼陀羅教本殿の奥へと吸い込まれて行きます。

人の魂をとろかす甘美な薫煙の立ちこめた本殿に静々と信者は座を占めて、深更に始まる教主の妖しくも不思議な奇蹟を今や遅しと待ち構えていました。

恐らくこの中の何人が、真の奇蹟を感得したでしょうか……、巧みな誘導と、人伝ての奇蹟話を信じて、同教のもつ妖しい雰囲気の中で、その殆んどは自己陶醉に陥り、知性を麻痺せしめて、只管異様な法悦に酔い痴れていたに違いありません。

白木造りの四本の柱で囲まれた祭壇の前の台座が教主の位置でその下にはくさくさの供物が山と積まれ、今や教主の降臨を待つ許り

になつております。何処で打鳴らすのか、陰に籠つた摺板の音が響き始めると、信者は一齊に題目を唱え始めました。

その合唱が高潮に達する頃、突如神殿に家鳴り震動が起り、蒙蒙と白煙が立昇つて、それが薄れると台座に忽然と、金色の法衣、真紅の紅巾に顔を包んだ教主が降臨していたのです。

陰凄酸鼻を極めた私刑が、それより行われるとも知らず、半刻許り、信者の懸命な、そして熱心な礼拝が続きました。

裸女大俎板に縛られ

生皮を剥がれんとする事

「神の御名の下に、神に背ける者を裁く、八十六番のもの、とくと祭壇に現れ出でよ！」

陰にこもつた不気味な教主の声に応じて、恐る／＼人々の後より立上つた一人が、震える脚を踏みしめて、教主の前にひざまずきました、教団の秘密が一部漏洩したのを逸早く知つて、深更の神罰が信者の八十六番にふりかゝつたのです。

「汝、既に神の呪いをかけられたり、面を上げい——」

八十六番が何者か、教主の外は知る者としてなく、信者一同は固唾をのんで成行を見守つておりました。

教主の手に握られた水晶の珠数が、ゆるゆると軽く、八十六番の眼前で揺れ動き、それに連れて、魂を抜かれて行くかの如く、八十六番の躬は右に左に揺れます。

「汝、神慮を知らずして、巷間に神の御名を悪伝せり、己れ自身にて亡す神慮なるぞ。え——いッ」

教主の一喝につれて、八十六番は不思議や前にバツタリとのめり

ました、ついで音もなくスツと立上ると、教主の微かに呟く呪言に應じて、奇怪な行動を始めたのです。

今で云う催眠術でしようが、男は先ず四ツ這いになりました、妖しい唸り声を発し乍らく／＼と祭壇の前を這い廻ると、続いて白衣をビリ／＼と破り捨て、紅巾の覆面のみの裸体で、宙に躍り、跳ね廻つて、いつ果てるとも知れぬ狂態を続けるのでした。

恐ろしい神の怒りを眼の辺りに見て、信者は畏怖と驚愕に、一層声を高めて、題目を唱えつゞけるのです。

裸者の狂態が弱まつて来た頃、一条の太縄がスル／＼と男の前に垂れ下つて来ました。首を突込む程の丸さに結んだ輪の先が地下に垂れると、男は待ち兼ねた様に太縄に飛びついて、首をグイと中に差し込みました、と見るや教主の手が拳がると、呀ッと云う間もなく、縄はたぐり上げられ、男の重味で、首の輪は自然に強く締めまりバタ／＼ともがく手脚が宙を掴んでダラリと伸び、衆の面前で男は自ら縊死を遂げて、その裸の浅間しい屍体をまざ／＼と皆の眼前にさらしたのです。

教主の命をうけた一人が前に進み、男の肛門を覗き、その菊の花が開ききつてゐるのを確めるや手を振りました、男を宙に吊り下げた太縄は上へ上へと引き上げられ、本殿からその醜くい姿を、宙天に抹殺してしまつたのです。

「神の神慮は九族に及ぶ、とくと八十六番の娘出でよ——」

既に一人の命を呑んだ、妖氣漂よう神前に、かぐわしい白煙が立ち昇つて薄れると、一人のうち若い娘が打伏しておりました、恐らく八十六番の男の娘でしょうか、打震える肩も痛々しく、紅巾に包まれた中から黒髪が長くこぼれて乱れています。

「汝、父の霊を慰さめる為に、いけにえとなりて、万病に悩む者に生血を捧げよ——」

教主の覆面の奥から光る両の眼が、きら／＼と輝いて、妖しい呪文が口から洩れると、声もなく娘はふら／＼と立上つて、魂を抜かれた生人形となつて、その場を右に左に風に靡く木の葉の様に揺れ動き始めました。覆面の奥から覗く黒い瞳は焦点を失つて檻の中の動物の様に神前をさまよいます。寂として声もなき一座に溜息が流れ、ざわ／＼と拡がつて行きました。

その時娘は突然、白衣を破り捨て、緋鹿の子の帯を解き、晴着もパツと脱ぎ捨てました。なまめかしい真紅の肌細も引きむしると赤い腰巻に手がかり、羞恥を何処かへ置き忘れたかの如く、その最後のものまで惜気もなく外し、一糸纏わぬ女体を正面きつて一座の眼前にさらし、徐ろに面を包んだ、禁制の紅巾すらスル／＼と解き出したのです。

結締の髪を乱した、年は二九にも満たぬ、器量抜群の浮世絵からぬけ出した様な美女が、息づく度に揺れる胸の隆起もなやましく、彫像の様に立はだかつているのです。

神慮の間に間に、神罰を蒙つた者の、こうした赤裸々な、又と見られぬ光景ある為に、財産を擲



ち、恐怖に戦き乍らも、信者の特権と心得て、秘かに獵奇にむせかえる曼陀羅教に帰依する者も、中にはおつたに違いありません。

神前にその時大きな白木の組板が運び込まれて来ました。

猥らな、その癖甘酸っぱい数々の痴態を衆前で演じた後、娘はさも嬉しげに大組板へヒラリと飛び上ると、自ら仰向けに、長々とそのむつちりした裸体を横たえました。娘はその体を両手で支える様になると、その肉体を上下に揺れ動かし始めました。豊かな乳房が激しく振動し、奇怪な運動に紅潮した頬は桜色に彩られて、数分後に起る無惨極まる私刑も知らぬげに、娘は肉体の運動を終えて、靜かに眼を閉じました。

大組板の四方には、それ／＼二つず／＼の穴が穿たれてあつて、組板に近づいた二人の者は、娘の両手足を大の字に押し拡げると、馴れた手付で、その穴に鎖繩を通して、それぞれの手足を犇々と組板に括りつけます。

教主は立上りました。と同時に夢から醒めた様に娘は正氣づいたのか、突然魂切る悲鳴をあげて、手足の鎖をならせて必死に悶き始めました。術の解けた娘は、我が身の位置に、慄然として救いを求めて、羞恥に五体をくねらせてあがきました。

教主の右手には、何時の間にか

鋭い両刀の短刀がふりかざされて
おりました。

「今より一同は、来りて神のいけ
にえに祈りを捧げよ。病める者は
その病める個所を、いけにえの場
所にあてがうべし、我れも亦祈ら
ん……」

ぞろ／＼立上つた信者は、列を
作つて哀れないけにえを取囲みま
した、彼等は一人／＼ひざまづい
ては、己れの悪き、病める個所を
大組板の裸女のその個所に接触さ
せては祈つて行きました、顔には
顔、唇には唇、胸には胸、腹には
腹、そして羞恥の個所には羞恥の個所を当てがつては、随喜の涙を
流しつつ、この余りにも卑猥なる生身御供への祈拝は次々と続けら
れていったのです。

生気の既に失せた娘の肢態は、諸々の諸病の洗祈をうけて、ピク
／＼とうごめき、声すら立てる元氣もなく、惜しみなく裸身を大組
板に曝しているのです、長い洗祈が終りを告げた時教主の左手が
娘の胸から股の附根まで一気にスーツと撫で下げました、この娘の
生皮を剥ぐ興奮を愉しむかの様に、教主は右手の両刀の短刀をとり
直すと、衆目を浴びて、重々しく低い声で祈りを始めたのです。



剥製の女体の部屋で

先生と源六

おとし穴に落込む事

「叱ッ！ 女の悲鳴が聞えた様じ
や——」

「そう云えば、確かにありや若い
娘の声らしい様で……」

話は少し戻りますが、それは丁
度娘が正気に還つて発した悲鳴だ
つたのでしよう。

それより先、かねて調べておい
た手筈通り、白衣紅巾に身を包ん
で、丑の刻前まんまと忍び込んだ
観々堂先生と源六、うまく一同の眼をかすめて、素早く本殿横、奥
に通する廊下へ、拔足忍び足に潜入して行つたのでした。

「大変だ！ 先生、見付かつちまつた、御覧なせえ、向うから二人
あつし達と同じ様なのがやつて来ましたぜ！」

成程、源六の言う通り、暗く澱んだ廊下の向うから、二人の白衣
紅巾の者が近附いてくるのです。

「待て／＼、慌てるな、あれは水銀と云うくすりを使つたギヤマン
じやよ、己れの姿をうつす舶来の大鏡じや」

「なんでえ、じやあつしら二人なんで……」

尻つぱり腰に近附いた源六、鏡をそつとなでみてホツとした様に
「なるほどネ、こんな仕掛で、廊下へ侵入する者を脅かしていたん

ですネ、己れ自身の姿で、追つ払うとは考えやしたね」

「旦那、これを見るよ、こいつを押せばどんでん返しに鏡がくるりと廻る仕掛に違いない」

いかさまその片側をどんとつくと、大鏡はくると廻転して、二人を中へ吞込んでしまいました。

本殿の裏側へ来ると、嚴重な扉がその行手を遮ぎつております、先生は手早く十数本の鍵の束をとり出すと、間もなくその一本が合つたのか、ギーツと軋みを立て、扉は開きました、教主始め主だつた者すべてが本殿へ出掛けたのか、辺りはシンと静まり返つて、針の落ちる音でも分る程の静寂さです。

オランダ渡りの火附木が、シューツと硫黄の臭いを発散させて辺りをボツと照し出しました、ガランとした殺風景な部屋の一角に更に扉が閉されており、謎を秘めて固く錠がかけられてありました。躊躇せず先生はつか／＼とそれに進み、更に合鍵で扉を開きます途端に鼻持ちならぬ臭気と、香木の薫煙が入り交つて、ぞく／＼する様な妖気が流れて来たのです。

部屋に入り込んだ瞬間、二人は思わず、呀ツと声を立てる程の怪奇を眼の辺りに眺めたのです、それは何と云う異様さでしょう。二人の眼前、数尺の壇上には、四人許りの女が、身動きもせず、あらゆる方をにらんで佇立していたからです。

生身の人間の佇立、それは恐らく考えられません。とすれば、等身大の人形か？

何の為——、でないとすれば、……瞬間、先生の脳裡にまぎ／＼と回向院下の皮を剥がれて漂着した赤裸の屍体を憶い出しました。

考えるだけでも恐ろしい人間の剝製——。正に先生の考えに間違いはありませんでした。

生身さながらに、頭髮、腋毛、恥毛そのまゝの、生けるが如き若い娘の剝製が四体、仄白く、火附木の光にボウとボウと浮び上つてあたかも二人をにらむ様に立つておりました。

恐らく隅田川に漂着した肉塊もこのうちの一人でしょう。

生気のない裸像の群は、そく／＼と鬼気迫る部屋に、不気味な屍臭を撒き散らして、胸から股下一線、縫い合した針跡も鮮やかに凄まじい迄の妖気をみぎらせて、蒼白く断末魔の苦痛に歪んだ凄惨な顔から、その唇から、今にも恨みの言葉を吐きそうに生々しく迫つてくる様に思えました。

その時、後方で、ガタリと扉のしまる音——。

失敗つたと扉にかけよつた時は、扉の外側からかゝつたかんぬきでビクともせず、二人を完全に剝衣室へと閉じ込めてしまいました「イヒヒ……、神罰じや、呪われてあれ——」

陰々と、いずこからともなく、ひきつゝた様な哄笑が聞えてくると、二人の立つていた床がパツと二つに割れて、呀つと云う間もなく、先生と源六の姿は奈落の底深く吞まれてしまつたのです。

屍骸の山をのりこえて

九死に一生を得ること

痛む腰をさすりつゝ、突嗟の火附木で辺りを照らすと、その場には、これぞ地獄と云わんか、累々たるいけにえの死骸が山をなして既に白骨化するものあり、腐肉に化しつゝあるものあり、臭気は息苦しくなる程鼻を襲い一見肌を粟を生ずるこの世ながらの地獄の墓



場に、流石剛胆な先生も呆然と立竦んでしまいました。既に生色のない源六を励ましてむんぐと屍臭を充滿する地獄の底で、今こそ先生は、生か死かの岐路に立ち到ったことを悟りました。

「これッ源六。しつかり致せよ」

「先生——、こ、こしが抜けちまつて立てねえんで……」

「おやッ、あそこで屍体がうごめいているぞ」

「ヒヤ——ッ、本当ですかい。」

「冗談じゃ。立つたであろう。旦那、いよいよこうなれば生きるか死ぬかの瀬戸際じゃ。この源内、一生一度の智慧を絞る事にするよ……。」

いかさまこれは、不世出の才人平賀源内の一生を通じて、生死の境を彷徨した最も生命の危機を感じた事件だったでしょう。

「まるで、地獄の一丁目にさまよい込んだ見てえな案配で……」

「この世乍らの地獄じゃよ。人ひとり殺めてもお仕置になる時代にこれだけ多くの人間を殺したとなると、お仕置のしようがないわいな。」

「なんとも、これじやまるつきり、地獄のえんまも顔負けですぜ。こいつはどうあつても捕えずにはおかねえ……」

「いきみなさん旦那、先ず、こゝを脱け出すのが当面の問題じゃよ」

「へエ——」

意気こんでいた源六も、屍体に囲まれた現状に、青菜に塩の如く萎れてしまいます。

火附木を絶やさぬ様子を配りつゝ、先生は揺れる炎の先きを凝視しました。これは、洞穴、風穴、古井戸等に陥入った場合の定跡で炎の揺れで風の来る方向を見定め、そこに何らかの空隙を見出す方法で、こうした場合、残された唯一の手段でありました。

「先生——」

「心細い声を出すな。何じやな……」

「へイ、あの端つこの屍体がどうも讃岐屋の主人そっくりなんで」

「ウム、やつぱりやられていたかな。うまく騙されてこの邸を奪られた上殺されたと見えるな」

「よく、こんなに殺されていて、今迄分らなかったものですな」

「行方知れずが相当出ている筈じゃが、秘密を保つこの曼陀羅教じ

や。恐らく闇から闇へ葬られたのであろう」

その間にも、先生のかざす火附木はあちこちと必死に揺れておりました。

「源六！ 望みがあるぞ。これを見い。古井戸には必ず横穴がある筈じや、炎の先が風で揺れている。その先をよく確めて見い——」

成程先生の云う通り、石垣の一方から、僅か許りの風が流れ込んで、炎の先をゆらめかせます。頭の高さまで火附木を持ち上げると炎は一瞬激しくゆらめきました。

苦心の末見出した横穴の石を外すと、ポツカリと人ひとり通れる程の穴があいて、漸く這い昇った二人は腹這いに、躊躇せず、暗黒の風穴へと遮二無二突込み駈んで行きました。

教主の正体曝露され

信者一同の私刑にあつて亡ぶ事

「いけにえによろずの病移りて、万病治癒は疑いなし、さらば万病の根源たるいけにえに聖なる刀礼を行う……」

既に数十人の者はよつて、その肉体のあらゆる部分に忌むしい接触を受けた娘は、半ば意識を失つて、大姐に大の字にくつたりとなつておりました。教主は妖しく光る諸刃の刃をかざして、歩一步と娘の裸身に近附きました。

両の乳房を軽く撫で胸から腹へ、そして股の辺りまですーつと撫でざげると、教主は右手の刃をさつと高く振り上げて、正にくさりと胸に突き立てんとしたその刹那、一条の捕縄がする／＼と空中に弧を描いて伸びたと見るや刃振りかざした教主の手に見事に絡んでぐいと上に引揚げました。一瞬、蜂の巣をつゝいた様に立騒ぐ信者

を尻目に、捕縄はピンと張つて、教主の片手を虚空に吊し上げて、そのものがく体はスル／＼と天井へと消えてしまつたのです。

忽ち激しい家鳴り震動が起り始めました。それが鎮まると、空中より太々しい声が天恵の様に聴えて来ました。

「よくきけ皆の者——。斯かる邪教にまどわされて、家業を捨て、肉親を殺され、あまつさえ己れ自身を亡ぼす曼陀羅教の真の姿を皆に伝えてとらず。今ぞよく見よこの教主の正体を……」

その声が終つた途端、覆面の紅巾を剥ぎとられ、裸体にむかれて後手に牽々と縛られた教主が、みじめにも浅ましい姿でスル／＼と天井から吊り下つて来たのです。逃げ腰の信者一同は、衆前に曝された教主のその正体をまじ／＼と眺め、思わず慄然としました。

始めて曝された教主の顔、なんとそれは顔と云えたでしようか、顔面は一面に腫みつぶれ、抉られた様に凹んだ眼底の奥に、微かに光る眼は赤く濁り、鼻は缺け落ち、しかも肉体を点々と彩る紅斑と醜い結節、それはまぎれもなく癩の末期的症状を示していたのです。

信者の驚愕は、激しい怒りと変り、群衆心理は爆発して、男も女も手に手に紅巾をかなぐり捨て、どつと津波の様に吊された教主に殺到して行きました。器物が飛び、凄惨な恨みの私刑が教主を襲つて、瞬く間に彼の肉体はなますの様にズタズタに寸断されて、一個の肉塊と変り果てて行きました。

数々の生血を吸つて、人体を吊り上げたろくに腰を降して源六と先生は撫然として、下界の狂乱の有様を眺めていたのです。教主の相棒として、ろくろを操り、家鳴振動を起させ、しかも先程先生と源六を剝製の部屋に閉じ込めて、陥穴にはめた教主の片腕の男を

木製の歯車に縛りつけた儘、やり切れぬ面持ちで、先生は源六を促

がして立上りました。

(了)

【切腹通信】

(投稿歓迎)

▽…………△

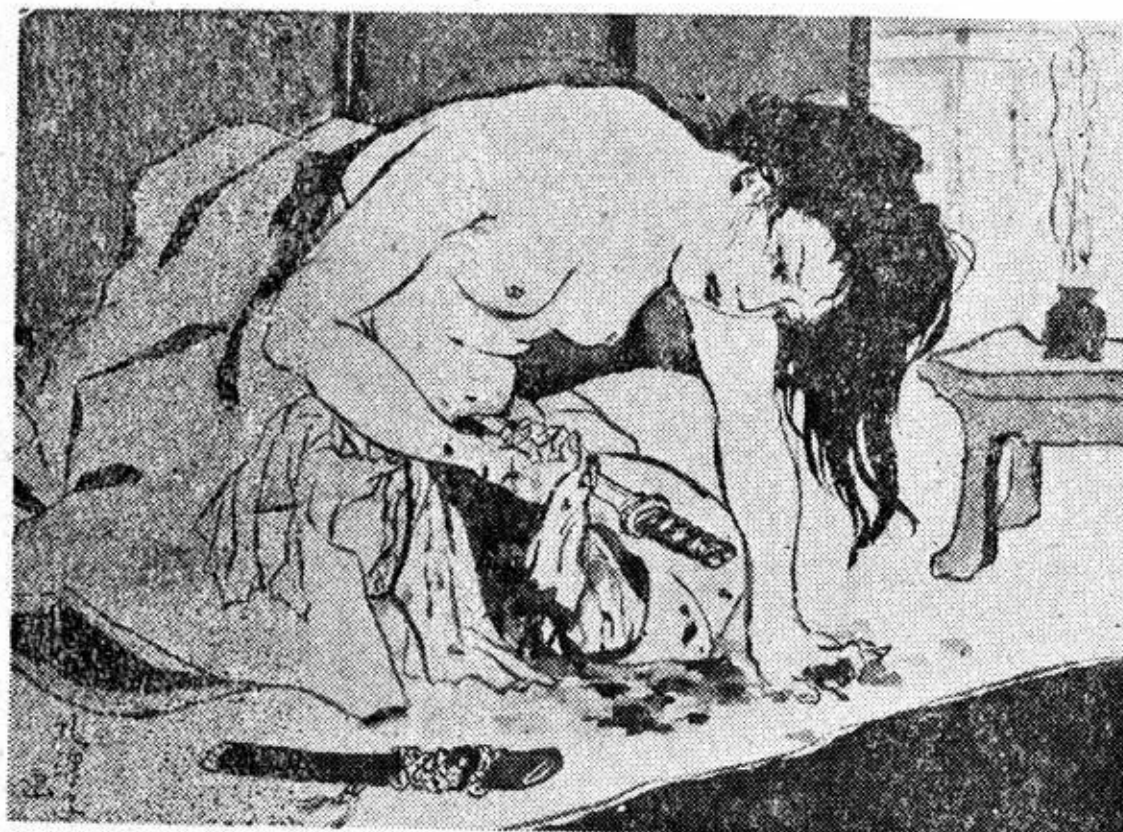
私は今年の三月号を囚らずも拝見いたしました。その後愛読を続けております、それと申しますのは中康先生の切腹の記事からでございます、これまで女性の身でお腹を切る等と恥しい願望に苦しい夜を過してまいりました。今年三十才で脂肪の多い私の体の中には或る動機から自己加虐の習慣がついてしまいました、ところが御誌を愛読致しますに従つて意外に多い同性の悩みが

は駄目ですが、私は油絵を数年来、上野の美術館へ出品して居ります、自分の姿を鏡に写して書いてみたのです、私自身シュールリアリズム的作風ですので、つい癖が出ますせいか下手なものになりました、ほんとうに私の切腹の趣味を理解して下さるモデルがあつたらと只々残念でなりません、若しこんな絵でも御参考になれば、何枚でもお送りいたします。

—後略—

賤機礼 津子

十一月号誌上で御連絡頂きましてありがとうございます。私の切腹写真を送れとの仰せ、ついあんなお便りをしてしまつて飛んだことになつてしまつたと悔んで居ります。なんぼなんでもお恥しくて御目にかけれません。顔は何と御批評いただいてもいゝんですけれどもあまりにもお恥しいポーズなんですもの、……………中略……………その時にはブロースを穿かないんですもの、そんなわけであつた一枚だけお目にかけてもと思うのがありましたので御笑覧の上お捨て下



さいませ。その中、写真そのまゝを引写した面をお送りいたすつもりですからそれにおゆるし下さいませ。
十一月五日
川合伊都子

蜘蛛と蝶々 (三)

——不運なニューフェイス——

飛田良二
方金三・画

(一)

人の運命というものの程わからないものはありません。恐らく他目には「素晴らしい幸運」が御川里枝の身の上にも訪れてきたのです。里枝が躍ヒロインに抜擢された日から三週間後、Y監督の早撮りで完成した「堕ちた花」は全国の封切館で公開されました。映画興行の成績は封切つみなければ解りません。——そして、たま／＼デビューした新人の将来にも、その映画の成績一つが大きく左右する場合があります。順風に帆をあげるか？逆にかげろうの様に消え去ってゆくか？



里枝の場合——成程口のうるさいスタジオ雀共がやかましく羨やんだのも無理もない程でした。会社が大作として力を入れ、又多額の宣伝費を掛けたもう一つの戦記物と抱合せ用に撮られた里枝がニユースターとして登場した性典映画に御盆休みの観客の足が動員された形になりました。当然多くの映画ファンの前に、新人御川里枝がクローズ・アップされたのです。

勿論、その最後の収入の数字が解り、会社側がその興行成績に驚いたのは後日のことでしたが、然し、少くともその映画が全国で封切られた日には御川里枝の輝やかしい出発が約束されたのも同然でした。撮映中にY監督の目に認められた里枝、そして封切られた当日までには、次の大作の主演としてY監督のメモに記録されていたのです。

今迄大部屋にくすぶって、何の変りばえのしなかつた御川里枝の上に訪れた幸運は何の風の吹きまわしだったでしょうか、それは今までのニユースターには求めて得られなかつた特別の持味？——彼女の身の上に加えられた深刻な打撃を知る筈のない会社側やY監

督が買いかぶつてしまつたのかも知れない。

もしそうだとすれば、御川里枝の幸運は皮肉にも、瀬田や滝尾たちの力が預つて大きかつたともいえるのです。そしてそれは、所詮目に見えぬ巢に掛つて空中に固定され蝶が夢中で羽ばたき悶え逃れようとする無残な美しさでした。忽ち燃えつきる運命の花火の美しさでもあつたのです。

たつた一日の差が、これ程までに大きくその尊い人生の総てを左右してしまうとは運命の女神の悪戯を慨かすにはいられません。こんな里枝にされてしまつた二度目に瀬田を訪れたあの日、若し瀬田たちの連絡がなかつたとしたら、いや一日でも遅れていてくれたら里枝はこんな宿命を背負わなくてもよかつたかも知れません。Y監督の呼び出しの方が一日遅れた形だつたのです。早撮りで有名なY監督が三日も里枝の出勤を待つていてくれた事は異例のことであつたかも知れません。しかし、もう一日早く里枝を呼び出していてくれたら、里枝は決して二度と瀬田の宅を訪れなかつたでしょう。たつた一日の間違い、そして、それがすべて後の祭となつてしまつたのです。

(二)

あの日、遂に逃れることの出来ない刻印を押されてしまつた日

瀬田の家のスタジオで意識をとり戻した里枝は、ベッドの上で一人で寝かされていました。室には瀬田も滝尾も見えませんでした。

傍の机の上には、今朝初めて着て出た新調のワンピースや帽子等が揃えてありました。下着だけになつて四股は自由でしたが疲労が全身に残っていました。手首に痛々しい縄目のあとが無残にも今

日の苛虐をまぎ／＼と刻んでいました。夢ではなかつた！そう思うと里枝は新しい戦慄が身内を走る思いでした。ワンピースをつける慌てゝスタジオを飛び出しました。広い瀬田の家には人の気配もありません、駈ける思いで国電の駅に出ました。終電に近い車は割合にすいていましたが、それでも里枝はレースの手袋を一ぱいに引きあげて縄目のあとを人目から避けるように隅に小さくなつて坐りました。〃死〃という想念がぐる／＼と重く圧えつけられるような頭の中でかけめぐりました。辿りつく思いのアパート、一睡も出来ないうちに夜はあけてしまいました。

朝になつても、どうしても撮映所へ行く元氣はありません。入所以来、始めて無断欠勤してしまつたのです。そしてそれから三日目そこへY監督の呼び出しがあつたのです。里枝のアパートの扉を叩いたのはY組の助監督で童顔のMという長身の青年でした。

「どうした？ サツチン（里枝の事）部屋の人たちも心配してたよ」扉を開けるなりMの童顔が笑つていました。里枝はうろたえてしまいました。心の整理が出来ていない所へ突然訪問を受けたからです。

「サツチン、お芽出とう、さあ行こう、Y監督が待つているんですよ」

一瞬、里枝は自分の耳を疑いました。

もうとても駄目だと締めていた映画出演の話。お盆映画に間に合わせる為、昨日からはじまつている「堕ちた花」に出演が決つたというのです。寝ていながら、ぼんやり故郷へ帰ることを考えていた里枝は、手も引きかねないMに待つていた車に乗せられてしまつたのです。

そして直ちに「本読み」に入りました。

里枝は撮映所をやめるつもりだったのです。やめてどうするという事はきまつていなかったけれど、他の仕事を探すにしても、故郷へ帰るにしても、このチャンス、一度でも映画に出てからにしたかった。だから総べてを忘れて夢中になりました。次の日から撮映になり、徹夜、徹夜が続きました、しかし今の里枝にとつては、この数日は何によりも救いでした。あのいまわしい生々しい記憶を忘れる瞬間だったからです。

真夏のスタジオはライトのむせかえるような物凄い暑さです。連日の重労働、馴れない里枝は何度もダメが出ました。ヘトヘトになる毎日、しかし、それでも幸福でした。

(三)

生き甲斐のある幸福、しかし、それは余りにも短か過ぎました。

地獄からの使者、岩木が再び瀬田の呼び出しを持つてきたのです。「来なければ此方にも考えがある」と云うのです。フィルム的事です。欺された上とはいえ、あんな羞しい姿を撮られてしまい、それを証拠に握られていては、今の里枝には死んでも死にきれない思ひでした。信用出来る相手ではなかったのだ、何をされるかわからない——と思うと里枝はどうしてよいかわかりませんでした。

「とにかく、もう一度来い」と云われれば、いやでも顔を出すより仕方ありませんでした。そして、やつと撮映から解放された一日里枝は屠所にひかれる思いで瀬田の家を訪れたのです。

（私は何故、此処へ来なければならぬのだ！なんで此の様な侮辱を受け、汚辱のどん底でもがき呻めき、泣き叫ばなければならぬな

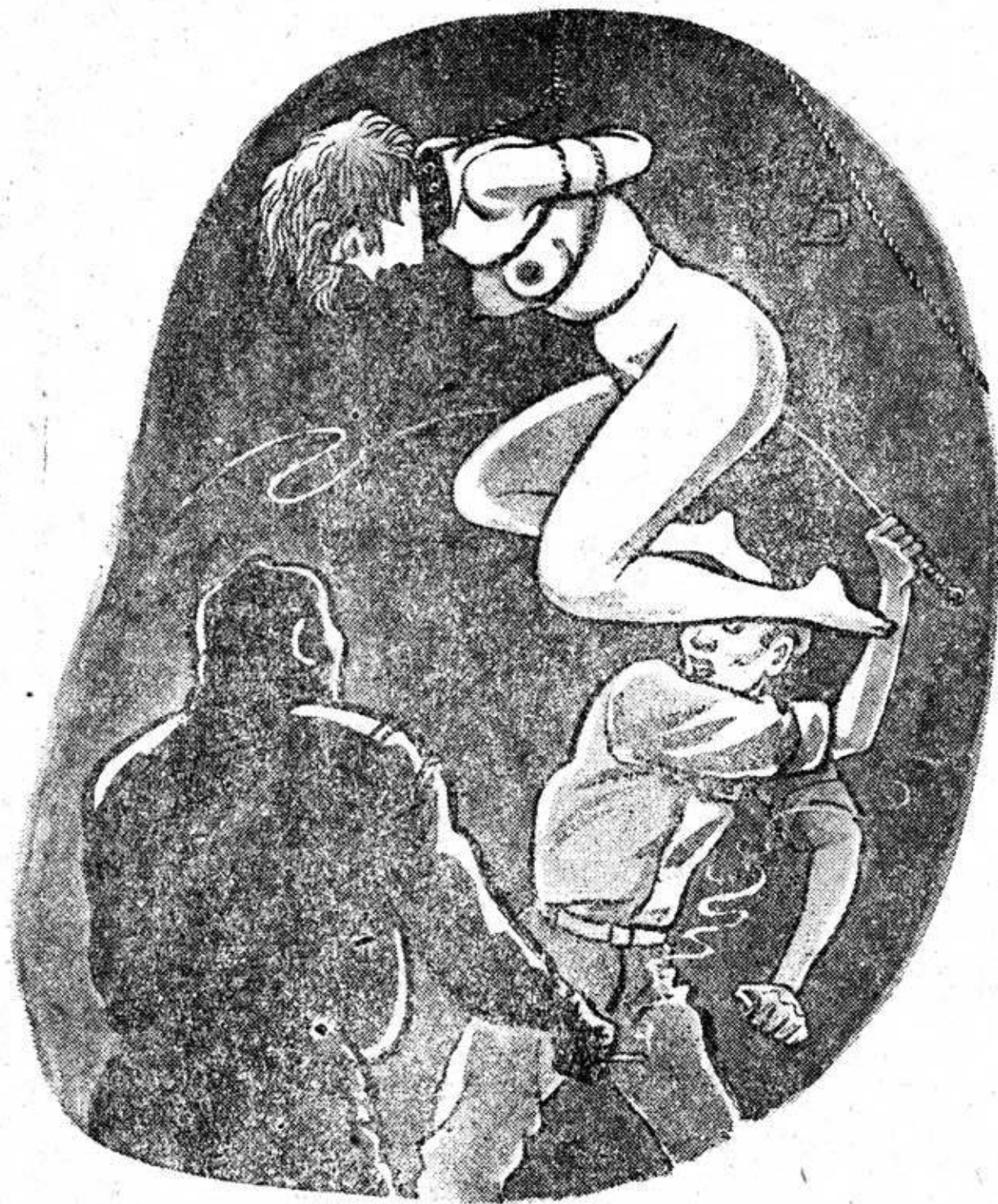
いだろうか？私はどんな罪を犯したというのだ、私は私の義務を果たした。欺まされ、押しつけられた羞しめではあつたが、それでも私はその苦しみを耐えた……それなのに……）

さつき、瀬田に許え投げつけた言葉を空しく里枝は胸の中で反芻していました。あれからどの位の時間が過ぎて行つたでしょうか。すぐ応接間で話して帰ろうと思つた里枝の考えは浅薄すぎました。結局二階のスタジオに上げられてしまつたのです。いくら彼等の勝手をなじつてみても、又自分の都合を云い張つてみても、最初からそれを計算に入れている彼等にはすべて無駄でした。こんな結果は予期出来ないことではなかつたのに、分つていながらも、どうにもならない罠に完全に陥つてしまつたのです。

「俺たちとの関係とはどんなものか、今日は一つ徹底的に思い知らせてやる」

滝尾の声で今迄続いた瀬田との言葉のやりとりを終止符が打たれました。そして彼等は愈々それが彼等の本領であるところの直接行動に移つてきたのです。必死で逃れようとする里枝の努力も、二人の男の力にはかなう筈もなく、床の上に転され悲鳴を挙げての抵抗も、彼等にしみれば、これが本当の剃玉子の快感だったのでしょうか。髪は乱れ、ぼたんがとれ、息もつかぬ疲労に呆然とした頃には里枝の身を包んだすべてのものが失われていました。そこだけが白く輝くような裸身へ後手に縄が喰ひ込み、床へ投げ出された里枝は歯を喰ひしぼつて涙をこらえていました。瀬田は最後にはぎとつた里枝のズロースを彼女の眼で振つて見せました。

「坐禅というのを知っているかい？修業の一つだ、生意気にも俺たちに反抗した罪を今日はゆつくりと償つて貰おうか」



「俺たちはすっかり待ちくたびたよ、一眠りするから、その間、しつかりと考えて頂こう、そして返事を聞かして貰おうじゃないか」矢庭に滝尾が後手にされている里枝の縄尻をぐいと引き上げるとそのまゝ引きずるようにしてスタジオの中央まで行くと、瀬田の操

作で一本のロープが天井から下りてきました。そこで今度は二人掛りで彼等のいう〃坐禅〃の姿へ、里枝の意志も羞恥もまるで虫けらのように無視して、まず後手になった縄目に手をかけて持ち上げました。自然前屈みになった里枝は、いやでも坐禅を組む形に足をひろげさせられると嚴重に縄で固定されてしまつたのです。

すらりと形よく伸びた里枝の脚は、ニューフエース時代に受けた基本体操のお蔭で柔軟なしなやかさを持つていましたので、屈曲させられることには、さしも苦痛を感じませんでした。その羞しさは耐えられない思いでした。

「あゝ許して、許して！」

夢中で口から悲しい声が洩れました。

「駄目、駄目、口先だけでは承知出来ん、今日はゆつくり教え込んでやる」

瀬田の声はすっかり淫らな興奮にふるえています。そして彼にはそれが早く使つてみたくて仕方がないものがあつたのです。だからニヤ／＼笑いながら持ち出していました。大きな犬の首輪なのです。厚い皮で巾が一寸余りもあります。ボツ／＼と尖つた鉄の頭が無数にその皮の外側を飾っている重い頑丈な品物でした。ジャラ／＼と派手に鳴る太くて長い鎖が付いています。このどつしりとした重量感を里枝の華奢な白い首にはめ込んだ姿を想像して、わぎ／＼

探してきたものなのです。ロープに鎖が結ばれると高さが調節されて、愈々その首輪が里枝の upper body を固定するためにはめられたのです。「雑念を去つて考えてみるさ」

滝尾は黒い厚手の布で里枝の目を掩つてしまいました。

「ペソをかくとみつともないでなア」

今度は瀬田が猿ぐつわをはめてしまいました。もう何も見えない声も出せない。たまらない羞しき、そして長くしていると苦しい恰好を一本のロープへ托した犬の首輪によつて里枝は全く無抵抗な姿にされていきました。

「いゝ恰好だ」

「俺たちは一眠りしてくるから、ゆつくり一人で苦しむんだ」

そんな里枝の哀れな姿を満足そうに眺めた二人は口々にそう言つてスタジオを出てゆきました。咽喉から手の出そうな御馳走はゆつくり味うに限る。その間を待つ快感を愉しみ、その間、刑の執行を目前にした受刑者の苦しさを一層激しいものにする効果を彼等は十二分に考察に入れていたのです。

救いと呼ぼうにも声も出せない、いや呼吸さえ苦しい程猿ぐつわが喰い込んでいます。又たとえこの猿ぐつわがなくとも、今の里枝にはとても声を挙げて他人を呼ぶ勇氣はなかつたでしょう。然し、この猿ぐつわ一つにしても里枝を羞しめる効果は大きいのです。その上視界まで失つてゐる。眼に不自由のない者が突然目かくしされただけで、その心の中に不安に募らせるのに十分です。相手を見る事も出来ずに、これから加えられる責め、その想像も出来ない恐ろしさを、こんな恰好で引き据えられたまゝで待たされてゐるだけでも、もう発狂しそうな苦しみなのです。

組合わされた足が苦痛を越えて、もはや感覚もなくなつてゆきました。手首の縄目も同じでした。せめて仰向けにころべたら、しかし無残な犬の首輪がそんな僅かな自由さえも許さないのです。精神的肉体的な枷が、も早やどうしても逃れる事の出来ない里枝の身の上にしつかりと加えられてしまつては、ただ観念しては彼等二匹の毒蜘蛛を心ゆくまで愉しませてから解放されるまで堪え忍ばなければならなかつたのです。

(四)

突然ドアの開く音がしました。たつた一つ残されてゐる自由、その耳へいよ／＼彼等の足音が迫ってきます。ぞく／＼とする戦慄がすつかり観念しきつてゐる筈の里枝の背すじを走りました。

チリンチリン、と鈴の音が近ずいてきます。どこまで此の哀れな犠牲者の精神的な苦痛を愉しもうというのでしょうか、瀬田らしい手でかなり大きな鈴が里枝の首輪に結びつけられました。ちよつと動いても、チリチリと無邪気な鈴の音が一層里枝の羞恥心をかきたてるのです。

(悔しさ) 齒ざりしたい思いも、詰め込まれてゐる布切れにさえぎられて舌をかみ切ることも出来ない。滝尾はさも面白そうに、そんな里枝の前へそろりと屈み込むと突然むき出しになつてゐる………を………した。予期し覚悟してゐる身とはいえ目の見えない里枝には恐ろしい不意うちであり、耐え難い屈辱でした。とび上る勢いで里枝は悲しくも鈴を鳴しました。

二匹の毒蜘蛛共は自分たちの思いつきにすつかり満足して淫らな笑いを含みつゝ、その悪戯を止めようとはしませんでした。首輪に

つけられた二つの大きな鈴は、絶えるような里枝の悲鳴と共にいつまでも鳴りつづけていました。

「さア、ニュースターさん、悟りがひらけたかね、俺たちの命令に逆つても所詮無駄だということがわかったかい？」

・里枝は只力なく頭をこくりとさせるばかりでした。今の彼女にはもう一刻も早くこの羞しい苦しい苦しい恰好から解放してほしいかつたのです。

「そうかい、わかつたかい、それなら言つて聞かせるが、君は俺たちにとつては単なる玩弄物で一匹のかわいゝ小猫といった身分なのだ、俺たちが御主人様なのだよ、ニュースターも大スターも結構だが、俺たちの命令があつたら何を置いてもとんで来るんだ、いゝかい、そして俺たちの命令通りになつて愉しませるんだ」

(何という事だ、里枝は苦痛よりも、その屈辱に怒りたくなつた。誰がこんな奴らに)

だが、彼等はそんな一瞬を待つていたので。相手が屈伏するまで責め続けねば飽き足りぬ彼等であつてみれば、ほんの序の口の今のちよつとでも責めへの糸口が必要なわけだつたのです。

「フン、そうかい、いやならいやでいゝんだ一責めさせて貰おうかさア立つんだ」

「立てッ」

とても立てる恰好ではありません、そこで一旦足の縄が解かれましたが、感覚を失つてしまつている両足は自分で動かすことさえ出来ないのです。

「よし、立たせてやるか！」

瀬田がロープに連る滑車を通したスタジオの隅でハンドルを廻し

はじめると、いやでも里枝の首輪は鈴を鳴らしながらソロ／＼と身体全体を吊り上げてゆくのです。やつと爪先だけが床に残つた高さでロープが固定されると、その抜けるように白い肌へ悪魔の触手が襲ってくるのです。先ず鳥の羽根と尖つたペン先が里枝を夢中で裸踊りさせるのでした。

「どうだい、そろ／＼お許しを乞わないかい？」

滝尾はやつと気付いたように猿ぐつわと目かくしの布の結び目を解きました。眩しい光線にくら／＼とする里枝の目に、正面に鞭を手にした滝尾の姿と煙草をくわえた瀬田の姿がありました。あゝ思はず里枝は自分から目を閉じてしまいました。新たな悔し涙が溢れたのです。

「さて、返事を聞かせて頂くかね、可愛いゝペットさん」

滝尾は手にした鞭を空中で鳴して寄つてきました。

「素直に言う事を聞けば早く解放してやるぜ、明日は撮映があるそうじゃないか、今度は大役だつてね、結構な事だ、しかし、此処ではあくまで俺たちの奴隷だよ、いゝかね」

瀬田は近々と寄つてくると、いきなり里枝のうつむき加減の顎をカギにした人差指でぐいとつき上げました。

「どうだい、わかつたら承知しました、といつてごらん」

つき上げてくる悲しみと胸も張りさけるばかりのいきどおり、でも里枝は弱々しく哀願しました。

「とにかく縄を解いて下さい……」

「まだ／＼、返事をきいているんだ、痛い目に合わんとわからないんなら、それ／＼、この鞭が飛ぶんだぞ」

滝尾の自信に満ちた毒々しい口調、

（誰がこんな鬼共に、もう口もきいてやらない、死んだつて自分から……）
「おい、瀬田、此奴、案外強情をはるらしいぜ、面白いじゃないか、一責めやるか」

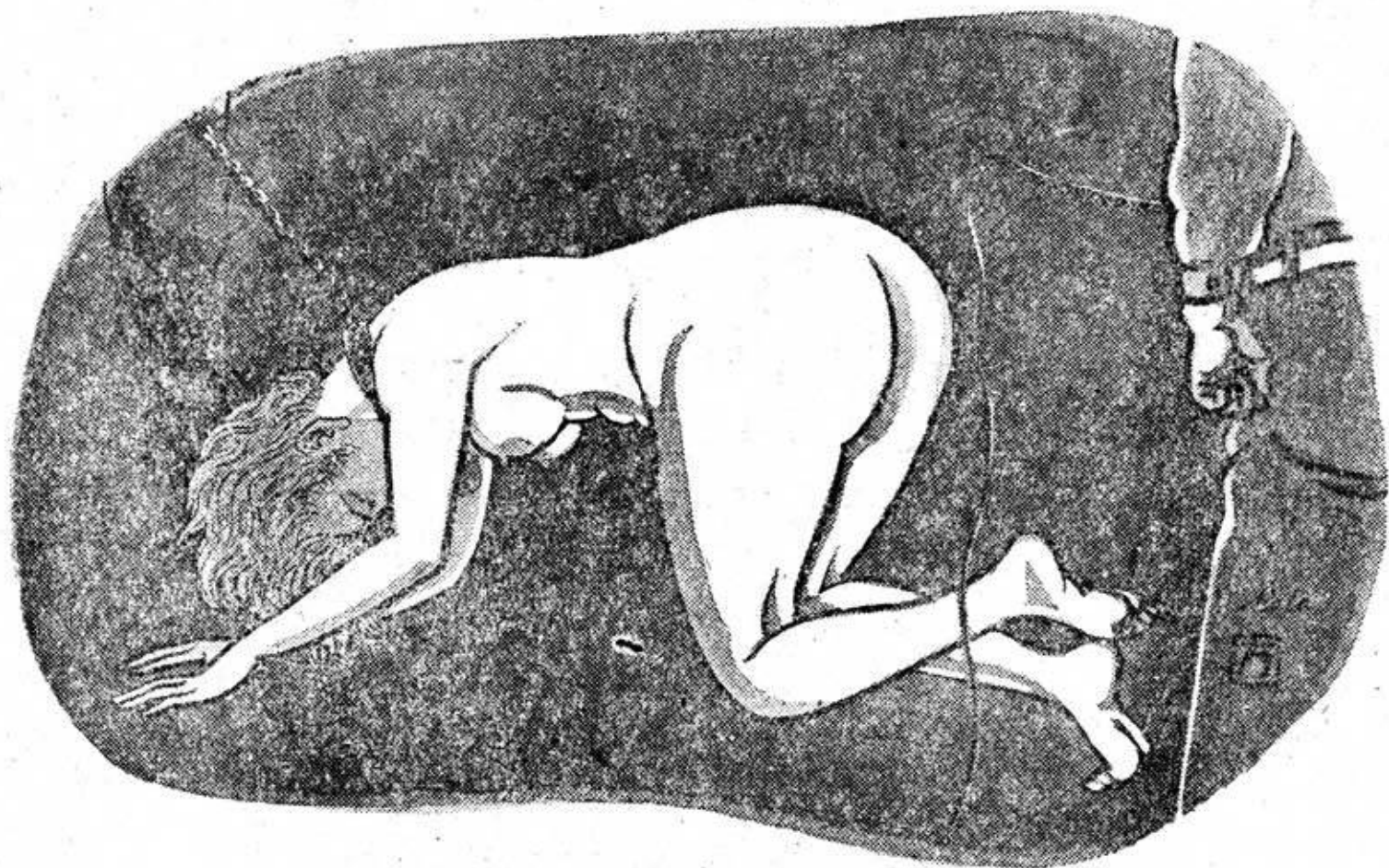
滝尾は残忍な手段を早くやりたくてうずくしているのです。瀬田はどちらかといえば、ゆつくりと時間をかけて馴れしもうというのです。然し何れにしても二匹の毒蜘蛛たちは典型的なサディストなのでしよう。

ギリギリとにぶい音がして里枝をつないだロープが天井との距離を縮め初めました。伸びきった両足先が床を離れ、両手首に全身の重量が掛つてきました。喰い込む犬の首輪、

「う、う、う、」

里枝は苦痛に呻き、かすかに首輪の鈴が鳴りました。捻じ上げられた腕が今にも抜けそう、肩のか細い骨がうずく。……

「痛い、痛い、ゆるして、くるしい」
「どうだ、もう降参か？ それッ」
パシリ！ 鞭が床の上で大きく鳴りました。



「あ、あゝゝゝあゝゝ」

瀬田がロープをゆるめ、床にくずれ落ちた里枝の両手を自由にしながら言うのです。

「それ、言わん事じゃないぜ、痛い目を見た拳句、あとが残れば撮映所どころじゃなくなるぜ」

「苦痛から逃れたい、——という本能の叫びでした。涙と嗚咽に舌をからませながら、里枝はとうとう「呟やくように言いました。」

「承知しました」

「ダメだ、泣き言はダメ、それに自由にしてやつたじやないか、両手をついて頭を下げてはつきり云つてみる！」

滝尾は里枝の首輪から続いている鎖を片手でぐいと引いて、その鳴る鈴の音を愉しみながら里枝の屈辱を更に激しいものにしようとするのです。涙にかきくれないながらも里枝は言われる通りするより仕方ありませんでした。

やつと坐り直して、……それは耐え難く屈辱の泥沼でした。

「よし、それでは今日から俺たちの云うことは何んでも聞くんだよ」

「主人のいう通りどんな芸当でもやつて見せるんだぞ、いゝか！」
二人は不釣合に厳丈な首輪をはめて長い鎖を引いた白いペットを心地よさそうに足下に見下すのでした。

「ハイ、といえ」

里枝はたゞ頭を下げて見せるばかりでした

「何故ハイと云えないんだ、鞭がとぶぞ」

「ハイ」

里枝は泣声で答えました。又鈴が鳴りました。

「よし／＼いゝ子だ、水を一ぱい飲ませてやるぞ」

瀬田が立ち上ると部屋を出てゆきました。すぐ下から水を大きな水のみなみ／＼と運んできてグラスに移すと先ず一杯を里枝に与えました。殆んど夢中で里枝は冷たい水を味わいました。一ぱいのグラスの水は悔しさを通り越して彼女には有難く思えました。

「さあ、一息いたらカシコイ犬だ、三べん廻つてワンと言つてみな」

滝尾は容赦なく次を急がせました。屈辱が又新に襲つてるので里枝は躊躇しました。(いや！とでも、そんな……) 溺れる者の心理で里枝は哀れみを乞うように瀬田を見ました。然し瀬田はそんな里枝を面白そうに眺めるばかりです。そして

「さあ、お嬢さん、いやワンちゃん、鞭がとんでこないうちにやつて御覧、そのかわり、もう一杯水をあげよう……」

「早くやれ！」

滝尾は鞭をふり上げて叫びました。もはや何も考えることもなく思わず、たゞ彼等の云われるまゝになるより仕方がありませんでした。悲しい諦めが里枝を犬のようにグル／＼と廻らせました。鈴が

チリ／＼と鳴つて太い鎖が三巻き首にまきつくつと、「わあッ」と後は激しい泣きじやくりとなつて里枝は床の上に泣きくずれてしまいました。

二人の毒蜘蛛共は顔を見合せてほくそ笑みました。滝尾は笑いを噛みこらえながら、おどかさ様に大声を立ゝ責めたてます。

「ワンと鳴けないのか、さあ、どうした！」

「さあ、水をあげるよ」

瀬田が親切そうにそのあとをとつて水を押しつけます。一つ責めると水になります。滝尾が鞭を振るかわりに瀬田は水を押しつけました。瀬田は一層狡猾な企てを持つていたのです。里枝が次々に受けるはげしい汚辱、その責苦に流す汗の量をオーバーして充分に水分を貯えさせ次に起る生理的反應を待つているのです。最初は瀬田の好意と解釈するまでもなく、里枝は大きなコップで幾杯かの水を飲んでしまつたのです。

羞しい動作を強いられながら、滝尾の難を逃れるために又水を飲まされ、水を飲むのがたまらなくなつて、又激しい疼痛をその皮膚に与えられねばならなかつたのです。

そして――とう／＼口に出せずに我慢していた生理的な苦痛、その内臓的な苦しみを辛抱しきれなくなつてきた里枝は意を決して遂に瀬田に頼んでみました。

「トイレへ行かせて……下さい」

待つていた言葉だつたのです。思わずにニヤリと瀬田の顔がほろこびました。

現代文芸に現れた責め

村田 誠 一



前号に掲載のものは、大分好評だったと聞いて嬉しかった。それ丈け後のものゝ発表がむづかしくなった。あゝあの作品かといわれるものでは、余り能無し猿ではないかとおもうと、余計に筆が重くなる。今回は舟橋聖一氏の作品を観賞してみよう。

○解説

舟橋聖一 明治三十七年東京に生る。

東大卒業。「文学界」の同人として、好評悪評に包まれた問題作家。鼻つ柱の強いところが、適役で文芸家協会理事長をつとめ作家の反税闘争の元締だった。二代目菊池

寛の声が高い。氏はもと戯曲を書いていた(戦後水谷八重子と市川猿之助を接吻させた「滝口入道の恋」の戯曲をものした事は、諸彦の記憶に新しい処だろう)後小説に転じて、その特有のねばり気の強い筆致で、多くの作品を書いている。氏が戯曲を書いていたという事は、氏の作品を多く視覚的にしている。人物や場面の動きを、氏の様に眼に見えるような鮮かな印象をもつて、描く人は少ないであろう——(川端康成著小説の研究、其他)——

○作品観賞

情婦の手帖

昭和廿七年十二月
小説新潮社上梓
A6版 二三二頁
装禎 猪熊弦一郎

主人公の名は、葦子。何んでも一度は、「いや」というのが口癖。垂井貿易会社の社長の子二号になつてゐるが、美貌で、仲々のインテリ女性、しかもしつかりした思想の持ち主である。恩師に寄せた思慕、それが初恋だったらしい。かつて女学校に在学中、赤の嫁で警察にあげられた時、月余に亘つて自分を強要され、その手段として、本格的?の責

めの洗礼をうけた。その生々しい責めの思い出は、ぬぐつても、ぬぐいきれず、随所に現われ、閨房の生活に迄現われて来て、気持をいよ／＼冷たくしてしまふ。

本誌昭和廿八年四月号の、泉辰之助氏の「妓の影」にも、KK通信第十三号の神野孝作氏の「女性拷問を見る」にも、一寸記されてあつたが、全篇に亘つて、仲々素晴らしい情景がある。

最初「小説新潮」に掲載され、其後単行本となり、最近、現代長編名作全集——講談社版に収められている。

★

★

★

遠い思ひ出が、蘇る。

葦子の女学校、若林女学院は戦争中、軍部の弾圧で、突如、閉鎖された。葦子は、当時五年生の級委員長をやつてゐた。級主任は冬川先生であつた。……中略……

閉鎖の断が下つて間もなく、葦子のクラスの文化研究会のメンバーが、五人程、検挙された。当然葦子の身辺にも危険はせまつてゐた。当時、特高の拷問は、身の毛のよだつやうなものであつたから、検挙されたが最後、処女の誇りも何も、一切が失はれることはわ

かつてゐた。……中略……葦子は下宿先から、検挙されたのだつた。

葦子にとつては冬川先生は、初恋の人であつたのかもしれない。が、その頃、葦子は、男と女が、どうして愛するのかを知らなかつた。葦子がそれを知つたのは、刑事の取調べを受けてからのことであつた。まつ裸にされ股をひろげた恰好で、椅子に縛られたまま卑猥な言葉が浴せられ、肉のやはらかい腿の部分、太い筆の尻で、摩擦されてゐるうちに、フーツと気が遠くなつていつた。それでも葦子は男と女がどうするか、知らなかつた（一読暗然とする、ありし日の特高、憲兵等の赤や、スパイ嫌疑の責めは随分苛酷なものであつたらしい。うら若い女性がこんな責め方をされたのでは……一ヶ月以上も毎日の様に、責め道具がもち出されて葦子は責められた。文の順序は狂うが、警察での責めの個所を、つゞいて抄出してみよう）

「冷いよ。普通の女は、もつと、盛んに炎えるのだ。こんなに、いつまでも、冷静なのは僕を愛してゐないからだ」

「あなたが、勝手にさう考えてゐらつしやることは自由だわ」

「では、君としては、僕を愛してゐるといふ認識があるんだね」

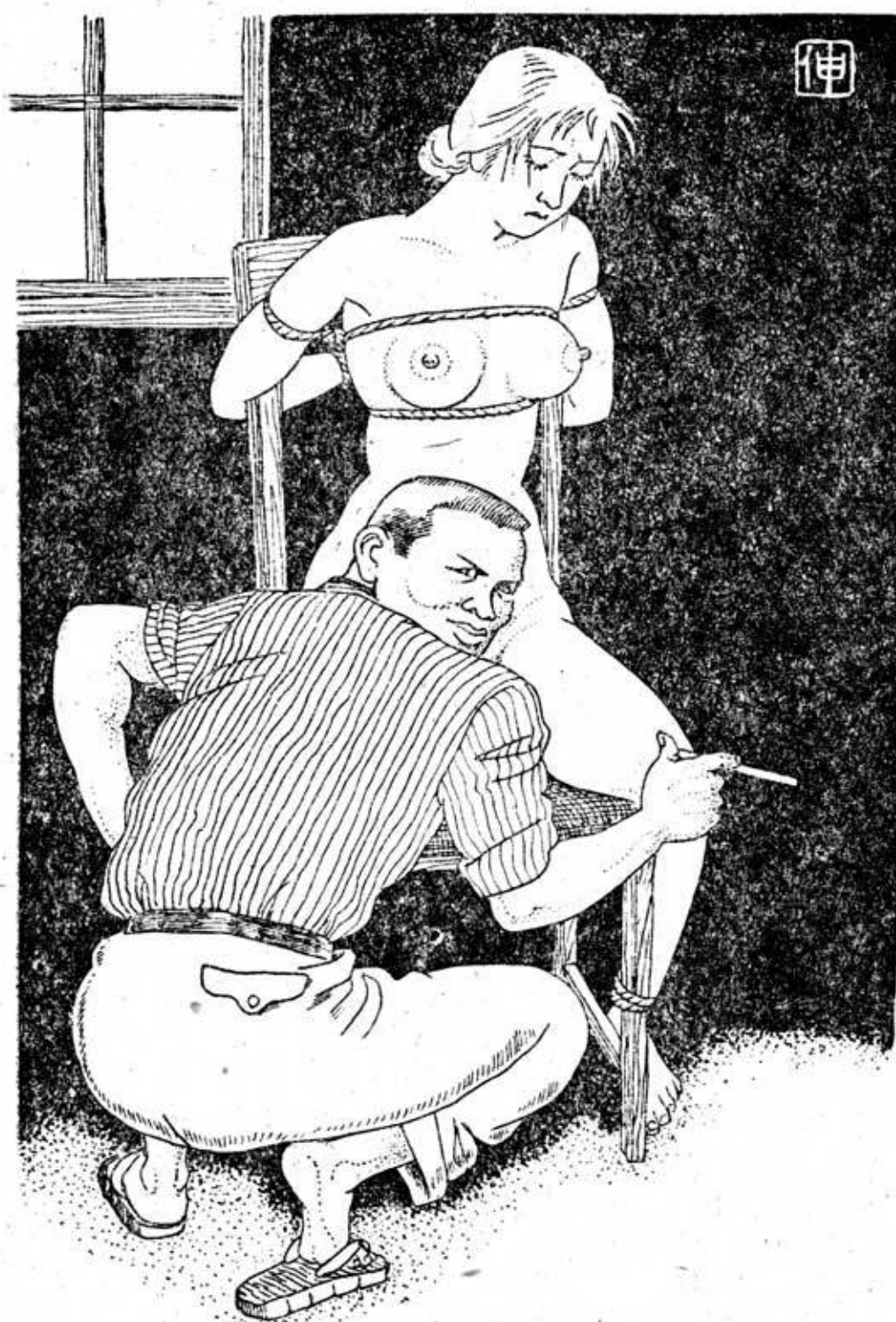
「あゝ悲しいわ」

と葦子は、泣いた。垂井は、髪をふりみだして、泣いてゐる女の腋の下へ首を入れた。昔、特高のデカの、杉又に、それをされたことがある。いくら「くすぐりたい」といつても許してくれなかつた。文化サークルの玩具のような組織を自供するまでは何をしてもいい、特権が彼にはあたへられてゐた。職権を笠に着た人間の、あの弱虫の高慢チキが、葦子に反抗心をたかぶらせた。裸になつて、のたうち廻つた。わざと、股倉をひらいてやつた杉又が羞恥を拷問の枷にするなら、逸早く羞恥を飛ばしてしまふほかはない。するとあの下つ引の職業的な目の色が変わつてきた。段々に、正常になり、正常からやがて、うづくやうにドロンとなつて、平凡なシレリツヒな、豚のやうな目になつた。誰だつて、みんな同じなのだ。僅かに職業意識だけが、チラツと目の色を冷くしてゐるにすぎない。

「あなた」

「何だ」

「そんなことしちやいや。あたし、そんなことされると、昔の刑事部屋を思ひ出すの。せ



「かく忘れてゐたのに」

「では刑事はこんなことまでしたのか」

「もつとしたわ、もつと、もつと、いろんな事を」

「刑事は、君に惚れてたんだ」

「あたしの身体は、今より、もつと美しかったわ。素っ裸になつたとき、刑事があつていつた位よ。きつと、はじめて見たンだわ」

「今だつて美しいよ。今だつて美しいよ」

「といひながら、垂井は又かぶりつくやうにした。」

「でもね、そんなときは、処女だつたのよ。男と女が、どうするのかわからなかつたんだわ。誰にも触らせたことのないお乳を、あいつがはじめて、触つたんだわ」

「ウン——畜生！」

「私は、毎日、引っぱり出されたわ。あんまりつらくツて、調べ室で、気狂のようになつた事もあるわ」

もつと、もつと、人にいへないやうなことが沢山あつた。杉又だけが知つてゐる。垂井の知らないこともある。垂井でさへが、ふみこんでこられない女の秘密を、杉又のやうな男に見せてしまつたのは、何たる皮肉だらう。杉又はそのたびに、「アツ」「アツ」といつて、嘆声を發したものだ。はじめは何の嘆声か、葦子にはよくわからなかつた。然も段々に、その意味がわかつてくると、葦子は、それが待遠しかつた。表現力の足りない知性の低い杉又は、葦子の美しい処女の身体の魅力に対して、「アツ」「アツ」といふ外はないのであつた。着物をぬがせるたびに、拷問するたびに、悶える裸形を見るたびに、杉又の鈍な目にも、その美しさは、わかるのであつた。そういう原始的な感動が、異性の心におこるのを、葦子は漠然と期待した。杉又が「アツ」「アツ」といはない日は物足りなかつた。「アツ」といはせようとして、わざと身を悶えたわけではないけれど、何もかも、女の秘密を見せてしまつた勢ひにのつて、葦子の心にもデカタンのかけらがなかつたとは

いひきれまい。

「今夜も、氣狂ひのやうにおなり、なぜ、なれないのか」垂井が吠えるやうにいつた。「サア」これは、葦子にもわからない。調べ室で受けたやうな羞恥は、二度とこの世にないものであつたのか。あの時の羞恥と亢奮で、葦子の心に炎えつくしてもまつたわけでもなからうに――。

「葦子――氣狂ひのやうになつておくれ。僕ばかり、こんなに夢中にさせないで、君も夢中になるのだ。我を忘れるのだ。何もかも、なくなるのだ。どこにあるかも忘れるんだ。ところが君は、いつまでも正気なんだ。君の目は澄んでゐる。君は、冷静だ。葦子――冷い冷い、こんなに冷い」

と垂井は、葦子の頬のあたりへ、横顔を押しつけるやうにして、ポロポロ涙をおとした（実によく描けている。垂井と寝ている葦子の艶めかしい姿。デカの杉又に拷問されてゐる葦子の凄惨な姿（どこか艶つばい処をともしつた）春知らぬ花はずかしい乙女が、かくも無残な責めに会うのはたとえ小説にしる義憤と痛々しきを感じて。罪なくしてこの様に蕾の花を散らされ、堕ちていつた女性も可成あつたらう

と思う。「人物や場面の動きを、氏の様に眼に見えるような鮮かな印象をもつて描く人は少ないであろう」という、川端康成氏の文は正に肯綮に當つてゐる。

垂井は、まだ離さず、頬と頬をくつつけたまゝ、

「葦子、死ンぢやいけないよ。僕を捨て、死ぬなんて、そんなことがあつてたまるか。サア、元氣をお出し。昔のやうに……サア、昔のやうに」と少し新派調の台詞もどきになる。葦子は、たゞチツとしてゐた。

昔、杉又に、拷問をかけられるときも、こんな風に無表情になつたものだ。苦しがつたり、悶えたり、あばれたりするのは、実は芝居にすぎない。ほんとに拷問されるときは、無感動なものである。冷い石になる。悶えて見せてゐるうちは、まだ相手に甘えようとする心理がうごいてゐるからである。葦子が、冷い石になると、杉又は口惜しがつて、苛々して、一汗をかいだ。葦子はそれを手応へにした。一汗かけば、杉又の方が情をとげた男のやうに、フラフラになるにきまつてゐたから――。

「病人に元氣を出せつたつて、むりなんだわ」と葦子は、搦みつくものに、無抵抗のまゝ、四

肢を投げ出してゐた。

（女を責めたあとの男の状態が「杉又の方が情をとげた男のやうに……」と、氣味よく描き上げてある）

昔は、特権と強権が、女を裸体にした。葦子もぬがされた女の一人である。それは一方的な恣意に拠つて行はれた。つまり、裸にする自由だけが許され、裸にならざる自由は認められない。葦子を裸体にしたのは垂井と杉又だが垂井は特権で、又杉又は、職権濫用の役得で根こそぎ彼女の着物を剥いだ。この例は無数だ。たとえば葦子の友人の、穂積さかえは、劇研究会のサークルがシンパであげられたとき、調べられるたびに全裸にされて、その後発狂した。F病院へ収容されてから、いくらか、着物を着せてもすぐ、脱いでしまつた。寒中でさへ裸である。誰が入つていっても恐怖して、「ぬぎますわ、ぬぎますわ」といひながら、病室の隅へいつて、サツとぬぐ。着物をきてゐると、拷問にかけられ、竹力で殴られるからといふ強烈な心因性妄想に憑かれてゐるのだつた。

これこそ、病的で異常で、そして、ワイセツだつた。葦子でさへ、正視出来ず、ベツ

の上に、足をひらいて、倒れてゐる全裸の穂積を捨てて、病室の廊下へ逃れ出たものだ。

古い保守が、かつて勝手に演じたワイセツ行為は、まだほかにも沢山ある筈である。然しそれは不問に付されてゐる。

(女性、しかもうら若い女性を、取調べるのに、その都度全裸にして責める。信じられない様だが、事実だったとしたら実に驚嘆させられる)

丁度、その頃、ひよつくり杉又が訪ねて来た。会ほうか会ふまいかと葦子は迷つたが玄関へ下りて行つた。

「どうしたの？何にしにやつて来たの？今頃」と頭ごなしに云つた。杉又は汗じみたワイシャツ姿で、

「あんたが、家を探してると聞いたから」

「いくら家に困つてゐるからと云つて、杉又さんの世話にならうとは思はないわよ」

「昔のことは忘れて下さい」

「忘れませんよ、忘れられるもんですか」

「終戦後、ひどい目に会ひました。さんざんでした。人間扱ひをされませんでした。もういゝ加減に許して貰ひ度いのです」

「私は許しませんよ、絶対に、永遠に」

「多分さう云ふだらうと思つてゐた」

「あんたから受けた傷手は深い。それが完全直るまではあなたも許される道理はないでせう」

「しかし私は、主任さんの命令でやつたのだから。やれと云ふからやつたんです。自分の意思なんか全然ありませんでしたよ」

「さうはいはせませんよ」

「主任さんは、残忍な男でしたよ。あいつは面白がつてやりました。二人や三人は、殺してますよ。あゝいふ助平な主任の下についてのが、私の運が悪かつたんだ。人に拷問させて、あいつは窓からソツと覗いてゐやがつたんです」

「そんな弁解は無用よ。あんたこそ、助平よでも、かうして見ると、人相まで変つたわね」

「へえ？さうですか」と杉又は頭をかいいた。たしかに相が變つてゐる。昔は、ギロギロに光る目玉と、今にも噛みつきさうな歯があつた、

「おくさんだつて、大層美しくなつた。外で会つたら、間違へます。私ら、寄りつくことも出来ない」

強権が背広についてゐる時の人の顔と、それが取外された時の顔とは、かうまでも違ふのだらうか。

さう思ふと、今、時を得顔にやつてゐる悪税吏も、いつか又、この杉又のやうに、哀れをとどめる日がくるのだらう。

「さうよ。ほんとうは、あんたなんか、寄せつけるわけにはいかないのよ。あたしをそんなに苦しめた奴なんだから。かうして会ふんだつて特別の沙汰よ」

(卑劣な奴だ。杉又というデカは。自分の行つた事は、主任の命令だという。そうかも知れない、が、それを易々諸々として、現実にやつたのは自分ではないか。——誰です、その当時のデカになりたかつたつて囁いてゐる人は……)

女が男のために、炎えつくすことを、葦子はまだ知らない。

一晚、家を明けたことで、果して、垂井の折檻をうけた。一枚、ドレスを、滅茶々にした。それは垂井の十八番の水責めで、ドレスのまま、葦子は水をかぶせられるのだつたその代り、垂井はそれをしたあとで、葦子を狂愛する。乾いたタオルで、摩擦して、子守唄をうたひながら、葦子を抱いて、部屋中を歩き廻るのである。

「葦子、お前は、ほんたうに僕を愛してゐるか」



「愛してるわ」

「嘘だ。お前は、心の芯から、冷い女なのだ。僕はお前の欲しいといふことは何ンでもした。ところがお前は、僕に、何ンにも与え

「とほしないんだ」

「与へてゐるわ」

「何を」

「かうして、自由を——私になつて、あなた

の仰有る通りになつて、ドレスも台なしにしてしまつて」

「何枚でも、買つてやる」

「これ以上、女が男に与えるなして、ありやしないわ」

「もつと欲しいのだ。もつと、もつと、お前の全部が」

「これがあたしの全部ぢやないの、かうして、あなたの掌にのつてゐるンぢやないの、まるツ裸で。——冷い水をぶつかけてられても、黙つてる。これでも、お気に召さないの」

「……」

「……」

(垂井十八番の水責め

——。ドレスの儘女を水責めにする、いかにもブルヂュアらしい責め方だ)

その晩、垂井は、一晚中、葦子を眠らせなかつた。垂井の十八番である子守唄がはじまると、「寒い」といつても、肯かなかつた。厚い、ゴリゴリの大タウルを鞆から取り出しそれに葦子をくるンで、ゆつくりゆつくり部屋中を歩き廻つた。

ねんねん よう おころり よう

葦子はいいい子だ。

ねんね しな 葦子のお守りは

どこへ いた あん山 こえて

里へ いた。

里の おみやに 何に もろた

デンデン 太鼓に 笙の笛

それから又、それをくりかへす。段々声をはりあげるの、女中か番頭が起きてきはしないかと葦子はハラハラした。

(これは一種の「うつゝ責め」ではないかしら)

この外有名な「雪夫人絵図」にも、昨年の十二月上梓の「裾野」にも、又富豪の家庭にまつわる多岐多恨な愛慾の悲劇を書いた「墨田川物狂ひ」にも、美貌の夫人の姦通に絡まる夫人の虐待事件を書いた「黒いあぢさゐ」にも、まだ資料は多分に残されている。次回
は誰?

アブニストの記

らぶ・すれいぶ

(完結編)

LOVE SLAVE

鬼山 絢 策

方 金 三・画

春美は私の心の裡を憎い程見抜いて居ました。

あんな餌を見せびらかすような真似をしなくとも、私は大概の入院費は出してやるつもりで居ましたから、間違ひなく持つて行つてやるのに、春美から見れば、その上にも、あゝしておけば私が来ずに居られない事を知つて居るのです。

でも私は春美の心情を決して憎みはしませんでした。憎むどころか、美しい女王に対して、哀れな奴隷が、心をこめての贈物をする喜びを味あう氣持だつたのです。

春美が私の家から出て行く時何を言つたか

「もうお前にはハナもひつかけてやらない」

と言いました。漢さへひつかけて貰えない哀れな奴隷、鞭の一打さえ貰えない奴隷は、どんなに生き甲斐のないものかこれは奴隷の身になつて見なければお分りにならないと思ひ

ます。

それを春美は兎も角私との縁を繋いでくれたのです。

私には又新しい希望に燃え立つことが出来るのです。たとえ私の渡す金が、私の生涯で最も大敵の医療費にあてられ、その金のために、再び私の女主人は、私を後脚で蹴つて姿をかくしてしまふ因となつたとしても、私の信仰する女神の御託宣である以上、私はことの如何に関わらず、無条件で服従するのが義務だと考えました。

然し私の心の中に住む「打算」と言う名の悪魔は私に斯う囁くのです。

「大槻のあのひどい御面相はどうだ。片眼は潰れて飛び出し、頬は鍵裂きにされた。今迄の彼御自慢の「私は女殺して御座い」と言つた看板のノツペリ面はあとかたもなく踏み潰されてるじゃないか。あゝまでになつた大槻に春美は



もう操をたてるものか。只さえ浮気な腰軽る女の春美が、今度はお前の勝だよ。春美はまだあの顔を見てないから、大槻を愛して居るのだ、僅かに繻帯の中から覗いて居る昔の儘の大槻の片眼と唇だけに惚れてるんだよ。今に彼女は愛想を尽かすだろうよ。

と言つて笑うのです。

私は銀行の出納係に頼んで、新しいお札ばかりで三万円を受取り、セロファンで包んで、赤いリボンで帯をしました。それを更に上質の洋封筒に入れて、靴の中に入れました。

私が学生時代に「憧れの女王」として敬慕した春美の許へ贈る品物に、あれこれと細かな神経を使つた頃を思い出しました。

これを持つて行つたら春美がどんなに喜ぶだろうと胸をときめかせたあの頃の純情な気持ちに立帰つて居ました、私はその他にも病人に何か持つて行つてやろうとデパートであれやこれやと買物して病院に電話して見ますと、例の看護婦が出て、春美は勤めの都合で晩の九時頃に来ると言うのです。

で私もそれから映画を見たり食事をしたりして時間を潰して、九時過ぎに病院を訪れました。

春美はもう来て居ました。

「おそかつたのね。持つて来た？」

私は黙つて靴の中から金の包みを差出しました。

春美はひつたくるようにして受取ると、乱暴に封筒を引裂

り、セロファンに包んだ札束を見ると、

「ハ、ハ、何さこれ。このリボン何のまねさ」

爪を立て、セロファンをかき破り、リボンを引ちぎつて、足許に捨てると、刃物のように鋭い札のコバを器用にパラパラと勘定しました。

せめてニツコリ笑つてでも受取つてくれるかと思つて居た期待も、足許に散らばつたセロファンのように破られて、私のはがかりしました。私の純真な感情を、彼女は勿体ぶつた扱かいと誤解したようでした。春美は無難作に札をベツトへ投げ出すと

「サブはね、あんたから金を受取るなつて言うのよ。フ、」

春美はそこで始めてニコリと笑つて見ました。

「傷はまだ痛むかね」

大槻は繻帯した顔を此方に向けて、生気を失つた片眼で警戒するように私を見上げました。

「こんなになつた男と戦つても、俺は敗けるのかしら？」

私には今の彼女の微笑を得て、何かしら心の中に闘志と自信が沸き上つて来ました。

「よし、お駄賃をあげるわ。」

春美は立つて扉の鍵をおろしました。

「看護婦はもう帰したのよ。」

窓のシェイドをおろして、私をながしめに見て春美は又笑窪をつくつて見せました。部屋の中はシットリと落ちついて、あたりは深夜のように寝静まつて、物音一つしませんでした。



春美は反対側のベツトに腰かけると、

「此処へいらつしやい」

と冷厳な調子で命令しました。そして傍の風呂敷をボーイと自分の足許の床に投げて、

「それを敷いて、そこへお坐りよ」

私は大槻のベツトに背を向けて、風呂敷を拡げて、そこへ跪きました。春美は私の眼の前に足を突きつけて

「フム、これ！」

私は眼の前のハイヒールを脱がせました。

「靴下もよ。」

春美は片手でスカートをパツと捲つて、ガ・シーの喰い込んだ遅ましい太股のつけ根を露出しました。

私は何日このあたゝかいふくよかな肉体に触れなかつたのでしょうか。今迄毎晩愛撫したなつかしい恋しい円柱。私は何年も会わずに居た恋人を迎える気持でした。

「早くさ。何グズ／＼してるのよ。くたびれちゃうじやないか。」

私は恐る／＼ガーターを外し、クルクルとナイロンのストッキングをホツれぬように剥いて行きました。

「フム、此方も！」

片方の脚を差出すべく、脚を組み替える時、二本の肉柱の合流点がチラリと覗けました。彼女は予めこれから与える「お駄賃」に用意してか、そこには自然の繊維せんいが僅かに見えるばかりでした。

「フフ、どこを見てるのさ、バカ！」

春美の裸足になつた足が上つて、私は頭を蹴とばされました。

「サ、ベツトの上にお上り！」

春美は私をベツトの上に仰向けに寝かせると、胸の上にドツカと発達したお尻をのせ、両足を頬の両脇にひらいて、上から私を見下して

「サブはね。お前の来ることを歓迎しないんだよ。お前が妾を奪りやしないかと惧れて居るんだよ。可哀想だろ。妾はサブがこんなになつたつてお前の処へなんか行きやしないよ。それを言つてきかせても分らないのさ。妾はまだお前に少しでも愛情が残つてると思つてるのさ。妾はお前なんかに愛情なんてこれっぽかしも持つちや居ない。妾にやお前の顔が豚のように見えるのさ。だからサブに妾がその気持を實際にやつて見せて安心させてやろうと思ふのさ。サブを慰めるためにもさ。分つたら、お前はどうせ妾の奴隷だから、妾の言うことは何でもきかなくちやだめだよ」

春美は両方のくるぶしで私の耳の下をおさえると、

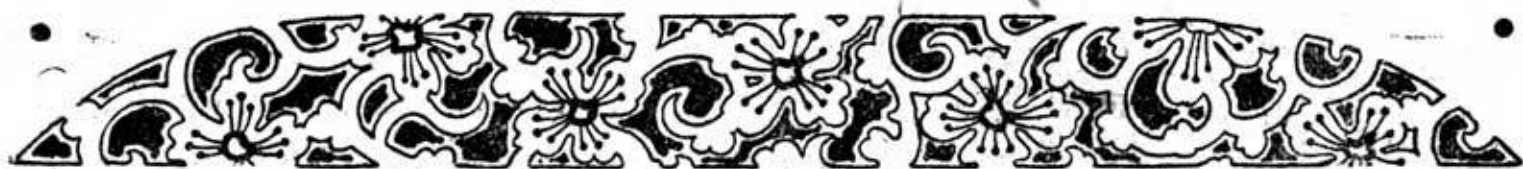
「妾にやお前のこのそっくり返つた鼻が豚に見えて仕様がないのさ。」

彼女は右手で私の鼻をちぎれる程に捻りあげました。

「アアアアツ」

と私が悲鳴をあげると

「些つとは痛いかい。サブはもつとひどいめに合つてるんだよ。これ位何だい。ヤイ豚野郎！今日のお駄賃にお前の好物をたんと喰わせてやるよ、サブ、見える？」



春美のあの弾力のある太股が銀狐のえり巻のように頬に捲きつき、香ばしい匂いさえ吸わせる余裕も与えず、口一ぱいに、さるぐつわを咬まされてしまいました。

その夜春美は狂気の如く暴慢でした。

約二時間と言うものの、ひたすらに愛の奉仕を強制せられました。その間息つく暇も与えず、さまざま角度から私を圧迫しました。

時には洞穴に首を突込んだように眼の先を真暗にされてしまうこともありました。その闇の中で

「サブ、妾は、お前に操をたてゝ居るんだよ、お前の寝て居る間一度だつて他の男をくわえ込んだことなんかいたよ。だから今夜はいゝはけ口をみつけたのさ。」

と囁いて居る声が天の一角から聞えました。

それは事実だつたでしょう。彼女の……と、沸き出でる……が、あとから……



へ移されて行きました。

あまりひどい汗に、一寸風を入れて、タオルで拭いては、更に新しい汗を求めて春美の肉体ははずむのです。

どこかで十二時を打つ音がかすかに耳に入りました。うつ伏せになつて休んで居た春美は、漸うやく私を解放すると、

「今夜はお駄賃を余計やりすぎちやつたね。お前も堪能したろう。お退き！」

私もクタ／＼に疲れて居ました。頭をあげるとフラ／＼しました。今にも溺れ死のうとした者がやつと助かつた時のような気持でした。

「ネエ、分つたろう、妾の気持が。え？サブ」

「ウムわかった」

サブは力のない眼に満足の色

を浮べて居ました。

「最後にもう一つお仕置きをしてやるよ。此の上じやだめだ下へおりろ。」

春美は私を突きとばすようにして、床の上に下すと、



「そこへ寝ろ！」

と命じました。洋服のまゝ床へ寝るのを一寸躊躇して居ると、

「早く寝るんだよ、馬鹿野郎！」

ベッドから足をとばして、私を蹴倒すと、ベッドからはだしの儘飛下りて、私の顔を大きく跨いで

「これは徹の奴にやつてやるんだけど、お前で間に合してやるんだ。サブにやつたお返しだよ」

私は顔中に春美のあたゝかいシャワーを浴びました。

「もうお前にや用はない。サツサと出て行け！」

春美は私の肩の下へ足の甲を突込んで蹴り起し、扉の鍵を廻して扉を開けると冷酷無惨な表情で、私に退場を命じました。

二

翌日私は池崎を訪ねて、春美に合つたこと、春美の要求を叶えてやつたこと。春美の態度、大槻の気持などを、大体ありのまゝに伝えました。池崎は私と春美の特異な性関係に就いては春美を通じて知つて居るので、私も話しよいのでした。

私は春美の私に対するほんとうの気持を知らなかつたのです。そのために恥も忍んで池崎に昨夜のことも或る程度細かに打明けました。池崎の意見も聞きたかつたからです。

「私にはもう愛情の一片も春美には残つて居ないように思えるのだがね。勿論今度の事件が起きたからと云つて私を憎んでとは思えないが、私には未練と言うか、もう少し違つた言葉で言えば興味と言うか、そう言うものの一切を失つて居る

と思うんだよ。」

「サーね。……」

池崎はキヤメルの煙を大きく吐き出して一点を見つめて考へて居ました。

「僕の推察を率直に言おう。春美さんの現在の気持は、兎に角大槻に非常に同情して、その同情から一種の変化が出てるんだと思うね。春美さんは多分に淫蕩的な、所謂多淫的なところを持つて居る反面に、愛する者に操を立てると言つた貞女的な面も非常に強いんだよ。それに持つて生れた勝気が意地を張つて、大槻の現在の状態から、他人に心を移すと言うことは、良心的に許さぬものがあつて、それが反撥的に君に当つてるんだと思う。そこへもつて来て。徹の奴が又更にあんなことをやつたもんだから、もうムシヤクシヤして傍に居る者の誰にも当り散らしたい気持になつてるんだと思う。確かに君に対する愛情は今の処、影をひそめて居るかもしれない。だが僕は春美さんの心の底には大槻に劣らぬ愛情を君にも持つて居ると思うんだ。

下条君、女と言うものは、非常に刹那的な感情しか持つて居ないもんだよ。現在々々を見つめてさきの事は考へないんだ。

それに春美さんはまだ大槻の負傷がどの程度なのか、繃帯をとつた所を見て居ないんだろう。大槻の顔を見たら、或は失望して気持が変るかも知れない。

下条君、君は毎日でも春美さんに会いたいだろうが、こゝ暫らく堪えて会わん方がいゝよ。春美さんが来るなと言つた



んだらう、恰度いゝ、暫らく会わん方がいゝ。その代り僕が春美さんと会つて見よう。僕を信じてくれ給えよ。僕は春美さんの心情を観察し、そこに変化の起きた時、君とひき会わせる。その間の情報は僕から君に伝えよう。

僕は二度と再び君に顔向けの出来ぬような真似はしないから安心し給え」

これが池崎の意見でした。

彼の考え方は飽く迄も常識的で冷静な理詰めの考えでした。私は彼の意見に従つて、病院行きを二三日控えて居ましたが、おさえきれぬ春美への思慕と、私は私流に、どこまでも至誠と情熱をひたむきにして春美にぶつかつて行けば、春美の心を動かすことができるのではないかと思へて、余程会いに行こうかと思つたこともありました。然し女に経験の深い池崎の言つたことが真実のようにも思へて、じつと辛抱して居ました。

池崎に其の後会つたときの話では、

「面会謝絶でね。看護婦が出て来て、誰にも会わせないと云つてゐるんだ。強いて会おうと思へば、春美さんが来て居たよ。うだし、春美さんにも会えたんだが、まだ会わん方がいゝと思つて帰つて来た。」

と言うのです。私は池崎と春美とが又焼捧抗に火がついたようなことになりはしないかとの疑いがチラリと浮びました。が池崎の澄んだ瞳を見るとそれは直ぐ消えました。

「下条君、一人で暮してゐるのも退屈だらう。徹があれきり社を辞めてしまつたし、又君に手伝つて貰えないだらうか。春

美さんの方は必らず僕が話をつけるから委しとき給え。それ迄僕の所へ泊つてたらどうだい」

私は池崎の友情に感謝し、彼の家に泊ることに決めました。私の家には、私の寝室には、またあまりにも春美の体臭がよどんで居て、私を悩ませるばかりでしたから、私はこの際気分転換した方がいゝかと思つたからです。

私は休んで居た会社に正式に辞表を出して、又池崎の仕事を手伝うことにしました。

朝は池崎と共に彼の社に出て、元私が坐つて居た椅子に腰かけ、手馴れた編集に返ると、春美のことを忘れようとして、仕事に対する熱も出て来ました。

社を終つて池崎の家へ帰ると、麻雀友達などを呼んで、池崎は少しでも私を一人にしておかぬようにし、色々に気を紛らわせることに努力してくれました。

三

そんな具合で一ヶ月程経過しました。

「大概はもう退院したらうね。」

私は或る夜池崎と家で飲みながら聞いて見ました。

「あゝもうとつくに退院したよ。半月位になるだらう。」

池崎はケロリとした顔で言つてニツコリ笑いました。私はあれからも春美はどうして居るだらうと忘れたことはなかつたのですが、昼間は仕事、夜は人が居るために、つい池崎に聞く機会を逸して居たのでした。その間に池崎は私にも話さずに大概と春美の行動を監視して居たものと見えます。

「で、春美の居所は分つてゐるの？」



「ウム、築地の煙草屋の二階を借りて大槻と一緒に居るんだ、春美さんはゴルドンと言う酒場へ出てるよ。」

「君はその後春美に会ったかい？」

「昨夜会った。春美さんは僕の顔見ると、一瞬かくれようとした、が観念した風で僕の所へ来ると、お金を取りに来たの。と聞くんだ。例の十萬円の件で僕が来たんかと思つたんだらう。僕は、あの金は下条君から返して貰つたよ」と言つておいた。だから君もそのつもりで居てくれ給え。」

「有難う。金はそのうちに返すが君の友情に感謝する」

「するとね、春美さんの顔色が変つたよ。そして、清二さん

は妾のこと怒つてゐるでしようね」と聞くんだ。「怒るところか、君が一日も早く帰つて来てくれよ、それはい、と、そればかりを願つて居るよ」と言つたんだ。春美さんはシンミリしちやつてね。「妾悪い女ね」と言うから「君さえ帰る気があるなら下条君はどれだけ喜ぶかしれないよ」と言うかね、今更君の所へ帰れた義理でないと言うんだ。だからそりやおかしい、あんたが下条君に対して済まないと思うなら、同情する気があるなら帰つてやりたまえと言うと、どうしても帰れないと言うんだよ。それから約二時間ばかり飲みながら話合つたがね。それで春美さんの気持がすっかり分つたよ。君



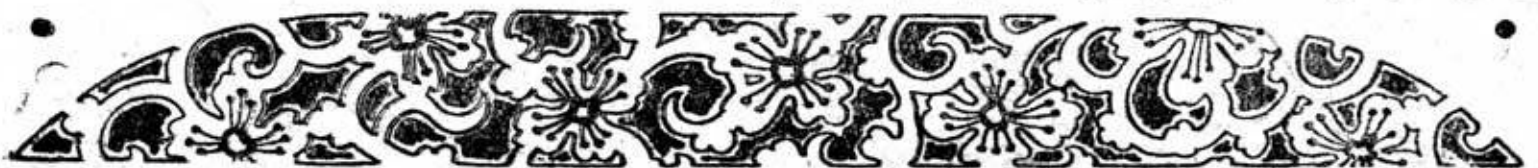
hata ㊦

にそれを話すと不愉快に思ふかも知れないが、春美さんの真の気持が分らない限り、春美さんと今後生活を共にすることは出来ないと思うから率直に言うよ」

「言つてくれ給え。」

池崎はウイスキーのグラスを舐めて、語を継ぎました。

「春美さんと言うひとはね。セックスと言う面を離れては、君を一番愛して居るんだよ。君の永年にわたる誠意と熱情に打たれたん



だね。然し春美さんは決して君の想像して居るような、サジストではなかつたんだ。春美さんは、只君を虐待したり、玩具にするだけでは所詮彼女のセックスは満足できないんだ。その点極めてノーマルなセクシャルデザイナーの持主なんだよ。そしてノーマルではあるが多分に淫蕩的なひとなんだね。それがために徹だの僕だのに手を出した訳なんだ。殊に大槻は初恋の相手であり、彼の肉体そのものにどうしても断ちきれぬ愛着を感じて居たんだね。最初はどうかして君をノーマルな夫にしようとしたようだね。だが君はそれが不可能だった。そしていつしか君の傾向に春美さんの方でひきずり込まれて行つてゐることを覺つたと言うんだ。その反面大槻の逞ましい肉体が忘れられない。そこに春美さんの深い悩みがあつた訳なんだ。君が理想の妻を得られたと思つて喜んで居た頃は春美さんは、そのシレンマに陥つて懊悩して居たんだよ。」

池崎の瞳が私を正面から見つめて居ます。私は彼の視線を受けかえすことが出来ずに下を向いて居ました。

「そのうち、君の特異の愛撫が春美さんには段々好ましいものになつて来た。春美さんは次第にサジストになりつゝある自分に気がついて、このまゝで行つたら、終にはどうなるだろう、これだけでやつてゆけるだろうかと言うことに真剣になつて考えた。がどうしても彼女には逞ましい男性のシンボルが必要なんだ。そこで君には悪いと知りながら早晚君から離れて大槻と一緒にゐるつもりで居たと言うんだ。それが徹とあんなことがあつたために、春美さんもその時機を早めた

訳で、あの時を機会に君から去つた訳なんだが……」

池崎は私のグラスに酒をみたしながら

「ところがね。君と分れて見ると、君の居ないことに、一種の物足りなさを感じたと言うんだね。君から離れてさえしまえば自分はノーマルな女に立帰れると思つて居たのが、大槻に毎夜愛されて居ても、今度はそれだけでは物足りなくなつてしまつたんだ。やつぱり君と言う人も必要になつてしまつたんだね。君の感化がいつしか春美さんの心に深い根をおろしてしまつたんだよ。そこへ来て大槻が怪我をした今は一応治つた形だそうだがね。彼はひどい容貌に変化したと同時に肉体もハツキリ衰えてしまつたと言うのだ。そうなると大槻の存在価値と言うものはゼロになつてしまふ。で、現在では近く大槻とも分れる心境になつて居るんだ。大槻もあの執拗な迄に春美を独占して来た意慾が、容貌と体力に自信を失うと同時に消滅して、今では腑抜けのような男になつてしまつたそうだよ。春美さんは、何のためにこんな男と同棲しなければならぬのか、どうしてこんな男のために君に意地を張つて来たのか、今考えれば、馬鹿／＼しくて話にもならんと言ふんだ。大槻に対しては、春美さんは何の義理もない、経済的にも自分の方から注ぎ込みこそすれ、大槻から援助を受けたいと言ふことは一度もないのだからね。まあ身体も一応治つたし、僕から持つてつた十万円をそっくりくれてやつて分れようと思つてると言うんだ。そこで、そんなら下条君の所へ歸つてやり給え、と言うとね、君が許してくれるなら歸つてもいいと言う所迄、話はついたんだよ。」



「えッ、そりやほんとうかね。」

私は身体中の血がザワ／＼とわめき立つ程の喜びに燃え立つのを感じました。

「だが喜ぶのはまだ早いよ。春美さんは君の所へ帰るに就いて二つの条件を持ち出したんだ。それを君が承知してくれるなら喜んで帰ると言うんだ」

「どんな条件なんだ。僕は何でも容れるよ」

「まあおちついて聞き給え。一つは、今迄のことは一切水に流して何もなかったことにして、何事も忘れたことにして自分を迎えてほしいと言うんだね」

「そりや勿論だ。そんなことは当然だよ。」

「それはいいとして、次が一寸難物だよ。前にも言つた通り春美さんは段々君の好みの型に嵌りつゝあるけれども、それだけでは生理的に辛抱できない。そこで春美さんの恋愛の自由を認めてほしいと言うんだ。恋愛と言うのは当然かも知れん、生理的の処置の自由を認めてくれと言うんだよ。」

「……………」

「ま、露骨に言えば浮気を公認してくれと言うんだ。」

春美は大槻に代るものを求めて居るのです。私は一瞬沈鬱な感情に掩われました。が、よく考えて見ればそれはあのベツドの下で悟り得たことだったのです。あの時既に割りきつて居るつもりだった事柄でした。

「……………仕方がない。認めよう。」

「それさえ君が承知してくれたら、喜んで君の許へ帰る。そして、再び君の所から出るようなことはしないと誓つたよ。」

春美さん自身ではそれを両立し得ないと思つて居たようだった。それが君から一度離れて見て、ことに依ると両立するかも知れないと言う可能性を見出して、僕を通じて、君に話してくれと頼まれたんだ。」

「わかつた。承知した。」

「そうか。この秘密は僕が固く守ることを約束しよう。ではこれから春美さんと会つて見るかね。」

「よろしく頼む。」

池崎と言う男はまことに活動的な男です。思い立つたことは躊躇なく直ぐその場で実行に移る質の男です。その点が私と正反対であり、その対蹠的な性格が、却つて性の合う原因かも知れません。

四

「ゴルドン」と言う酒場は銀座五丁目の狭い露路を入つたゴチャ／＼と小さい店の固まつてある中の一軒でした。

入口の狭い割には広く、入ると直ぐ右手にスタンドがあつて、そこで一ぱい飲めるようになって居ましたが、腰をおちつけて飲む客のために、その奥にかなりぜいたくなセツトのソファが並べられてありました。

池崎はスタンドでジンを一口飲んで、店の女に

「エリちゃん居る？、池が来たと言つてくれよ。」

春美はこの店では「エリ子」と名乗つて居るようです。

間もなく奥から黒いドレスに例の蜘蛛のブローチをつけた春美が出て来ました。

「あら……………」



春美は私を見て仰山に驚いて見せ、ニツコリ笑いました。

「連れて来たよ。」

「ようこそ。奥へいらつしやいな。」

春美はクルリと背中を向けて、白い背筋の露わな肩を見せて奥へ入つて行きました。池崎に続いて私は暗い室へついて行きました。

春美の服装と言ひ、メイクアップと言ひ、態度と言ひ、それは僅かの間にすっかり玄人になりきつて居ましたが、それは、又今迄よりも更に妖艶な美しさを漂わして居ました。ボーイの運んで来たジンの壺とグラスを受取つた春美は私にグラスをすゝめて、

「その節はありがと。」

と言つて例の微笑を浮べました。池崎は笑つて

「バカに他人行儀じゃないか、旦那さんを捕まえてさ。彼氏どうしてる？元氣になつたかね。」

「彼奴のことは言いつこなし。それより清二さん、少し瘠せたわね。」

「当り前だよ。皆君のためだよ。ところで昨夜の話ついたよ。下条君は総てを水に流して君を迎えようと言つて居る。勿論君の条件もいれてくれたよ。」

「フ、ン。可愛い、坊や。淋しかった？」

春美はいきなり露わな二の腕を私の首に捲きつけ、腋の下を私の頬から唇にベツタリとつけて抱きかゝえました。そして耳許に口をつけて

「淋しかった？ ゴメンよ。……」

と小声で囁きました。私はムツと襲うなつかしい春美のあまい体臭に酔つて、思いきりそれを鼻に吸いこみ、腕の下の匂やかな皮膚に接吻しました。

「おい、他人が居るんだよ、他人が。まだ早いよ。家へ帰つてやつてくれ。」

「いゝじゃないのさ、あんたお酒飲んでなさいよ。今夜は妾がおごるわよ。」

「当り前だよ。見せつけられて金を払わせられちや堪らないよ。じゃ春美さん、帰つてくれるね。」

「今夜から？」

「勿論さ。」

「それじゃあ僕の役目も済んだ。下条君、君は今夜から君の家に帰る方がいゝ。僕は失敬するよ。」

「まあいゝじゃないか。僕の家へ一寸来てくれないか。」

「君達がおちついたら改めてお邪魔するよ。じゃ今度は円満にやつてくれよ。」

「待つて。池崎さん。」

春美はつと立つと、池崎の首を抱えて

「お礼のしるし……」

と池崎に接吻しました。

「困るよ。下条君に約束したことがあるからね。」

「いゝじゃないの。恋愛は自由よ。ねえそう言う約束だったでしょ。ハ、ハ、ハ、ハ。」

春美は私を見て笑いました。

池崎は、一寸テレくさそうな顔をして出て行きました。春



美は私の傍へ坐るとジツと私の顔を覗き込むようにして
「あんたつて人も余つ程お馬鹿さんね。妾のような女が好きになつちやつてさ。」

「バカでも何でもいゝ。もう何処へも行かないでくれ。」

私はソツと春美を抱擁しました。

「可哀想な人ね。あんたは。もうどこにも行かない、だけど妾はあんたに詫まつて戻るんじやないことよ。池崎が何て話したか知らないけど。分てるわね」

「分つてる。」

「でも妾はあんたに同情して戻るんでもないわよ。妾は同情心なんてこれっぽちもない女よ、あんたが好きだからあんたと又一緒になるの。その代り今迄通り妾は女王様、あんたは奴隷よ。それが第一条件よ。」

「勿論だ。」

「じや再びお前を下男にしてやるから、挨拶をおし。この靴の先へ接吻するのよ。」

春美は私の膝へドシンと片脚をのせました。私は身を屈して彼女の足先を両手で持つて、黒いハイヒールの先へ唇をあてました。

「だが大槻が黙つて引下るかしら。」

「大丈夫よ。あいつは見違えるように意気地がなくなつちまつたのよ。あんたの十万円をそっくりくれてやれば諦めるわ。自信を失つてしまつてるのよ。妾も彼には失望したわ、癪にさわつてあんたよりひどいめにあわしてやつたこともあるわよ。それでも反抗もせずにおとなしくしてゐるわ。けれど

池崎から聞いてるでしよ。妾は第二の大槻を見つけるかも知れないわよ。但しあんたの傍からは絶対に離れない、それでいゝんでしよ。」

「あゝそれで結構だよ。」

こうしてその夜から春美は再び我が家の女王として君臨することになりました。

大槻は春美が一人で行つて話をつけてきました。私は暫らくの間は、又やつて来るのではないかと心配して居ましたが、私にかくれて来るような気配もなく、遂に私は大槻に勝つて春美を手中に得ることが出来ました。

池崎はその後、とき／＼やつてきます。彼と春美との間にはまた関係が生じたようですが、私は知らん顔をして居ます。これは約束ですから。それでも現在の私は幸福そのものです。

これで私の告白に一先ず筆を擱こうと思います。(完)

新年号より堂々連載

アブニストの記

痴迷 (ちめい) …… 鬼山 絢策

一年ぶりにカムバックした

悪の部屋 …… 二俣志津子

敗戦後の満州での凌辱体験記

流浪八年 …… 沖野恵美子



The Sweet Surrender of Alice

甘美なるアリスの降伏

— 第五回 —

珍書紹介

寒川 緑 訳

第七章 最初の屈伏

恐ろしい程の悲鳴がアリスの紅唇を迸り流れ激しい痙攣が頭から爪先を押し揺すりしました。自由を求める徒勞に筋肉という筋肉が収斂しました。背を弓なりに反り返苦らせ、狂気のように縄目を引き乍ら一方に身を俯せようとなりました。次いで反対側に、彼女は羽根を避けられる限りの凡ゆる手段を尽しました。けれど何一つとして成功は期し得ませんでした。悲鳴を挙げて悶えしめば苦しむ程、私の受ける喜びは大きかったのです。

アリスの言いようもなく艶めかしい光景は握り締めた拳や半ば閉じられた眼、波打つ乳房や鼓動する胸、跳ね返りのたうつお尻、痙攣する腿、狂おしく悶え蠢めき、きれぎれに舌足らずの叫声を上げ、金切声の祈禱を捧げているばかりでした。私は休養を与えて気分の転換を計った方がよいと考えましたので、羽根を彼女の肉体からそとと撤回しますと、静かにその痕を……やりました。

「あゝ……あゝ……」

彼女は目を閉じて半ば無意識の裡に呻めくのでした。静かに彼女を寝かせておきました。が、眼だけはしげ／＼と彼女を離れませんでした。

した。程なくその眼は夢見るようにうつとりと見開かれ深い溜息をつきました。私は再び操りを開始する気配を見せました。

「いや……いや……」

彼女は弱々しく小声で申しました。

「もう、いゝの……私、辛抱出来ません。」

もう操るのをお止めになつて！」

「ふゝん、すると降参するんだね？」

私は尋ねました。一瞬、彼女は口を噤んでしまいましたが、やがて心の葛藤を忍ばせて云いました。

「えゝ」

羽根を開かれたアリスの両足の間に落しなす、前に屈んで両腕に抱きとりました。

「此処の所は一寸の間違もあつてはいけななんだよ、アリス」

私は優しく言いました。

「君は僕の希望する事には、万事進んで云いなりになるかい？」

半ば眼を開きますと、承諾の印に頭をコクリさせました。

「そして、僕の希望に対しては何んでもすると約束するね？」

彼女はためらいました。

「私にどんな事、させるお積りですか？」

「それは判らない」

私は答えました。

「然し、たとえそれがどんな事であれ、君は従わなくてはいけない、約束するかな？」

「はい——」

洪々ボツリと答えました。

「では、キスなさい。講和の調印として正式にキスするんだ」

耳に囁やいて唇を合せました。彼女は甘い接吻をくれました。同時に私の熱烈な答礼を受けました。それが済むと、私は抱擁を解い

て二つの乳房に………めました。

「まだ起きてはいけませんの？」

彼女はモジ／＼身体を動かし乍ら鼻を鳴らしました。

「良い娘だ、もう一寸の辛抱だよ、君をそんなに苛めたんだから、慰めてあげなさい一寸不公平だと思ふんだ、それに僕には判るんだ君は約束したとはいつても、その通りにはやれないとね、ただ、経験がないためさ、慰めてあげるまで此のまゝにしておくよ」

「何をなさろうと言うの？」



彼女はうろた

えて答えを迫りました。明らかに何かの予想に怯えているのです「いゝ娘だね君の体中にキスして、うんと寛いだ気分にしてあげるんだよ、さあ、おとなしく寝ていなさいそうすれば、女が味わえる最大

の喜びに浸ることが出来るんだ、而も処女のまゝでだよ」

彼女は顔に一層の紅を散らして、それから私の仕草を甘受するのでした。再び両腕を

………ならないでしよう。

「止めて！ あゝお願い、止めて頂戴！」

彼女は何をされるか判つたものではないという不安に半ば怯え困惑して声を振り絞りました。それでも私の動作は止みません。絹を裂くような悲鳴が上りました。

「後生よ！ やめて下さいッ」

アリスの遣る方のない苦悩の跳き、これは神への饗宴です。それで彼女の感極まつた様な哀願には更に頓着せず

遂に二つの蕾は………早熟の果

汁を絞る結果となることを教えていました。

「嫌よ、嫌よ！ あゝ止めて！」

避けようとして無茶苦茶に暴れ出しました。無理もないことでした、彼女のネンネの心にも真実の拷問の目的が那邊にあるか判り始めてきたのです。私は彼女をそのまゝ疑心暗鬼の状態にはおきませんでした。

ピチ／＼跳ね返るのを抑えつけ鎮めるべく両手をアリスの………

……感知し、恐怖に駆られた彼女は張り裂ける様な悲鳴を上げました。そして狂人のように身を転々とさせて、執拗に追い迫る………しました。

すつきりと麗わしい両腿の筋肉が硬直しているのは、逃れようとの必死の奮闘を知らせるものでした。微妙な刺激は既に彼女の………換起していましたが彼女は苦悩の余り此の事実には思い及ばなかつたのです。こゝに至つて犠牲の時が来たのです。そして生贄の準備は出来たのです。………

素晴しい眺めでした、彼女は其処に最奥の美を曝け出してこの瞬間の官能の美酒に酔い痴れていました。相續いて起る発作に脈打ち震え、眼は閉じ、唇は半開きに………凡て彼女を蔽い包んだ感動の激しさを象徴していました。しばらく彼女はこうしてグツタリと半喪心状態に陥つていました。

程なく私は彼女の筋肉の弛緩を認めました。次いで深い息を吸い込み、夢見る様に眼を開きました。そしてぼつたり眼が私の視線とからみあいました。忽ちに凡てを思い起したのでした。自分の意志を裏切つて淫情に敗北した結果、浅ましくも私にその忘我放心の

態を目撃されてしまつたという意識は、そうした顔、胸にサツと羞恥の紅を溢れさせました。モジ／＼と身動きして今一度頬を染めて目を外らせました。

私は屈み込んで咽せるような熱いキスを注ぎますと、黙つて縛しめの縄を解きほぐして寝椅子から起して身を支えてやり乍ら脇掛椅子へと連れて行きました。彼女は其処に恥しい顔を両手に埋めて小さくなつていました。

第八章 鞭 打 ち

読者はこゝで、私が着衣のアリス、又裸体のアリスに親しく接し乍ら必然的に心身両面に燃え上つた情炎の焰の推移に当然奇異の眼を向けられた事と思います。

勿論木石ならぬ身の私はアリスの裸体の美が顕現されたその時から非常にエロチックな雰囲気の中にありました。ですが、どうにか辛うじて抑制していたわけです。私は堪えられるだけの間はアリスをヴァージンのまゝにして置きたかつたのです。何となれば、私は未だ乙女の肉体に加えた隙に二重の風趣と色情を煽る拷問と愛戯の慎重に仕組んだプログラムの序の口にあつたからです。

言う迄もなく、彼女には口があります。手

があります。乳房があります。けれどもアリスは余りにもノンネに過ぎ無経験でもあり根気を要することではありました。どれを取り上げても私を失望させるのみで、彼女にとつて容易なものは何一つないでしょう。途中で罪もなく懊悩して完全に楽しみの芽を摘み取つてしまう結果はわかりきつていました。只一つ可能な方法はお尻でした。そして私は熱病に罹つたようにその適否について考えました。

無邪気なアリスの身体の動き、必然的な姿態の変化、急に開けるムツチリ艶めかしいお尻、その見事な双曲線、焦燥も忘れて思わず私はその豊麗なる膨隆に見れとるのでした。そうだ、アリスを………ることにしよう。

ですが、果して彼女が言いなりになるでしょうか、実際の所、なんであれ、彼女は私の気儘になると誓つたばかりなのです。とは言え、汚れ染まぬ彼女の心は、よもやこんな企図を予測することは出来なかつた事でしよう。おとなしく言う通りにならないとすれば、私の計画は水泡にきしてしまふのです。この時、卒然と或る残酷且つ素晴らしい着想が私を捕えました。そして私は直ちにそれを実行に移したのでした。彼女は先のまゝ脇掛椅子に

丸まっていた。肩に手をかけました。彼女にはハツとなつて私は仰ぎました。

「もう十分休んだらう？さあ、立ちなさい、元通りにして貰いたいんだ」

私は……指差して続けた。

「君はなんとか、この苦しみを取り除いて呉れなければいけない、丁度僕が君を優しく慰めてあげたようにね」

彼女は痛ましく真紅になつてしまいました
「君はその……か……を使えば事足りる事だ、さあ、早くどつちか言いなさい」

彼女は両手で顔を隠しました。

「嫌よ！ 嫌よ！」

押し殺したように絶叫しました。

「嫌！ あゝ嫌です。出来ません。ほんとに私、出来ません！」

「しなければいけない」

充たされない思いにイラ／＼してきた私は幾分激しく答えました。

「先刻したばかりの約束を思い出すがいゝ、さあ、言うんだ、どつちがいゝか言いなさい」

彼女は私の足先に倒れ伏して哀願しました
「お願い、ジャツク、私はもうこれ以上苛め

ないで——」

「駄目だ！」

私は身を屈めて彼女の肩を掴みました。

「君はたつた今、僕の氣に入つた事はなんでもさせるし、又言われた通りの事はなんでもすると誓つたんだよ」

「両方共出来ません、ほんとに出来ません」

彼女は泣き声で言いました。私は彼女の拒否にあつて、これから文句なしに腕力に訴えることが出来るわけです。私は彼女の身体を引つ捕えると、半分抱え半分引きずるように機械装置のピアノ連弾椅子に運びこみました。その上に無理矢理腹這いに振じ伏せますと、抵抗を手の中に楽しみながら、ゆつくりと革紐を両手両足首に括りつけてしまいました。彼女は死物狂いになつて跳きましたが、やがて機械が発動すると彼女は平たく俯向けに、椅子を跨がされた恰好で寝かされ、両手両足は椅子を頑丈に支えている木脚に繋がれたのです。肩や胸は上げることが出来ず、出来る事といえば両足に力を入れて、お尻を僅かばかり持ち上げることだけでした、この姿勢は私の目的にピッタリ合致していました。

アリスは全く無防備のまゝ、その尻を裸出してしまつて居るのです。私はやおら一本の

乗馬鞭を取り上げました。痛いことは痛いですが皮膚には傷痕を残さない様に考案した奇体な柔かい材料で出来ており、大変よく撓う代物でした。私はこれ以上、力づくで目的を達することに疲れたのです。彼女に約束不履行の報いを思い知らせた方が効目があると考えたのです。女の子の目を醒させるには、出来るなら裸に剥いで、ウンという程鞭で叩き据えるのが一番の方法です。そして、此処にはアリスが裸になつて、鞭打ちのお仕置には又とない恰好を曝して縛られているではありませんか！

鞭を手にして戻ってきましたと、彼女は忽ち自分の運命を覚りました。逃げ出そうと必死に跳き、悲鳴を上げて許しを乞いました。その哀れな悲鳴に傾ける耳もなく、彼女の身体と線と直角に立ちはだかると鞭を振り上げました。そして最も肉の柔かいふつくらと盛り上つた部分にはつしと筋交いに振り下したのです。凄まじい悲鳴が湧き起りました。間髪を入れず、激止、／＼、／＼、と打撃を加えました。アリスは苦痛の呻きを上げてクネクネと全身をうねらし、その都度、縄目の固さを思い至らされるのでした。

私は今迄にも腰々鞭打つ者の醍醐味につい

て本で読みもし、人から聞きもしたのでありますが女性を鞭打った経験はありませんでした。けれど実際の所、それは私の逞ましい想像を遙かに凌駕するものでした。而も私が今鞭打っている相手はアリスなのです。私の慾望の的であり、私を見捨てた女であり、私が心身共に屈服させようとしている女なのです。

私は歓喜に氣もそぞろ、苦痛にたえかねた絶叫も上の空でした。いや、私の耳には妙な幻想の調べだったかも知れません。同時に身悶えと反転するお尻の舞踏は私の眼を魅了しつくし、この世ならぬ被虐美の世界へ誘い込むのでした。けれど、あゝ、余りにも早く彼女の力がその肉体から徐々に遊離して行つたのです。悲鳴は次第に細まり、囁言に変わりました。こうなつては、もうお仕置を続けて得る歓びは殆んどなくなつたわけで残念乍ら中止しないわけにはゆきませんでした。

アリスはあれ程、烈しい鞭の洗礼を受けたのですが、皮膚には一点の傷痕も留めませんでした。その肌は赤ん坊に似て、色はそれよりも稍ピンクに色づいて居り、清潔感に溢れピチ／＼していました。右手をお尻にのせて苦痛を和らげ慰撫するようにさすつてやりました。戦慄はやがて収まり、息使いも次第

に規則正しくやがて常態に復してきました。

「さて、もう馬鹿な考えは鞭が追い出してしまった事だろうね、アリス」

私は冷やかすように尋ねました。彼女はビクツと身震いましたが応答はありません。

「何？ まだだつて？」

私は感違いした様に大声を上げました。

「もう一仕事しなけりやいけな

いのかい？」
私は冗談に鞭を振り上げました。

「違います。違います！」

彼女は心の底から怯えきつて叫びます。

「もう、結構です」

「それなら、静かに寝て、大人

しくしているんだ！」

私は鞭を部屋隅へ放り投げると、抽出からコールド・クリームを一瓶取り出した。私の一寸した動きにも、こわごわ眼を配っていたアリスは、ギョツとして叫び出した。

した。

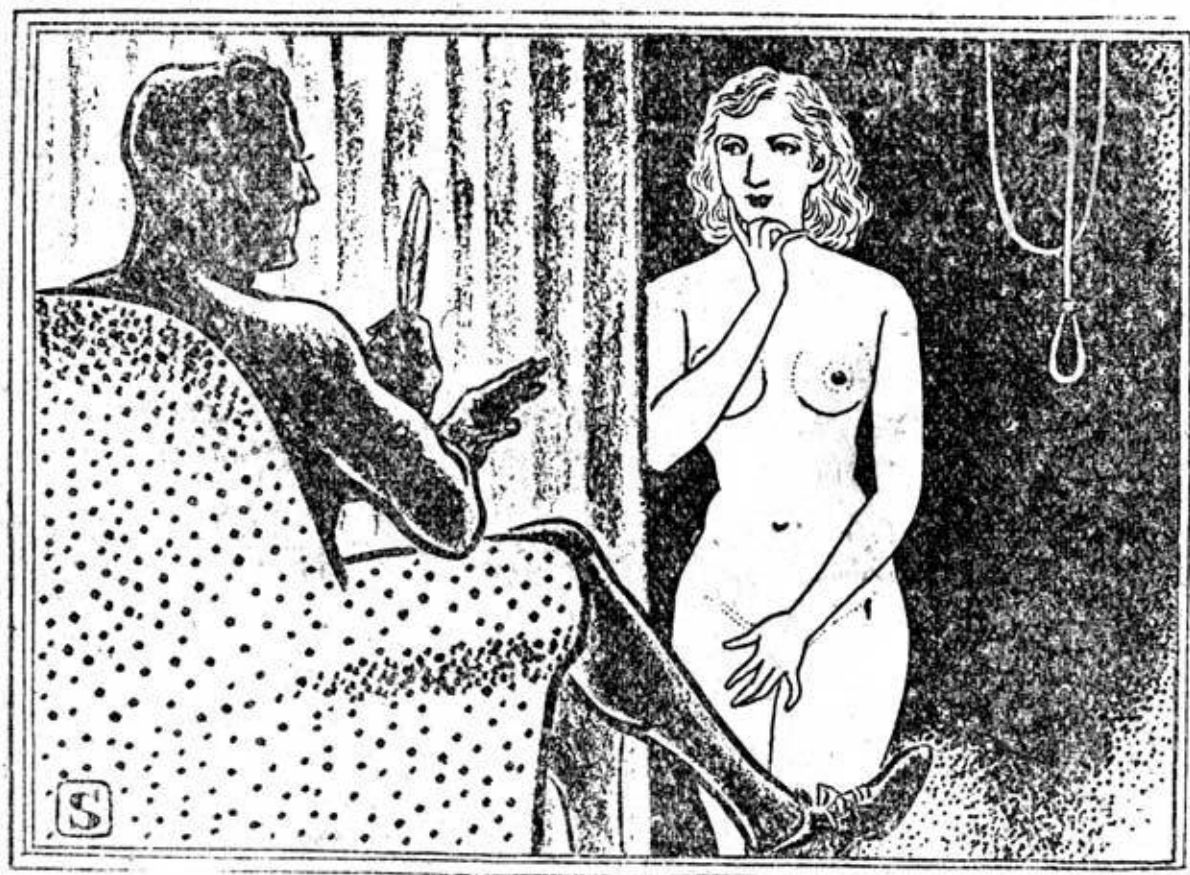
「ジャツク、私をどうするおつもりですの？ ねえ、教えて頂戴！」

私の返答は只一つ、アリスの……

……した。

「判つたね、お嬢さん」

正しく彼女は察しました。一瞬恐怖に打たれてヒツソリ黙っていました。だが、やがて逃げ出そうと躍起に暴れ狂つた末、叫びました。



「あゝ、かんにんして、嫌よ、ジャツク、嫌よ、私、死んでしまふ」

「驚かなくてもいいよ」

私はブルブル震えるお尻を愛撫してやり乍ら優しく言いました。

——約原稿紙十枚削除——

第九章 凌辱のいけにえ

待つ程もなく、アリスの姿は衝立のかげから現れました。身体を淨めた彼女は、非常にいき／＼として見えました。彼女はこの機会に先程の激斗でバラバラに乱れた頭髮もキチンと直して来たのでした。その顔からは悲しみの色は消え、そして不思議にもそこには何か満ち足りた色が伺えたのです。それというのは、私達の眼が会いますと、彼女はニツと笑つて同時にほんのり頬を染めたのです。そして左手を前に当て、隠し乍ら私の近くへ歩み寄つて参りました。私は左腕を彼女の腰に廻して肱掛椅子へと引き寄せました。腰を下して両腿の上に彼女を坐らす、右腕を私の首に巻かせました。私はじつくり長く楽しみたいと考えました。そこで直ぐと耳に囁やきました。

「もう一度、さつきのを繰り返えしてみたく

ない？」

身震いを感じられました。一瞬黙つていましたが、やがて、ソツト聞くのでした。

「もつと、お仕置するという意味ですの？」

眼をそらしたまゝで顔が少し紅潮しました

「あゝ、そうじゃない、全然、これは君の〃お仕置〃のためじゃないよ、僕の言うのは、一寸した間奏的な意味さ」

アリスはボツと赤くなりました。私の首に巻きつけた腕に力が加わり、一そう私に身体をすり寄せて参りました。

「全部は、いや」

彼女は蚊の鳴く様な声で申しました。

「じゃ、どのくらい？又どこがいゝの？」

私は再び囁やきました。

「まあ！ どうして、私に、そんな事、言えらと思つて？」

彼女は囁やきますと、私の肩に頭を落して身体をこすりつけてそして左腕を私の身体に廻してきました。私は暗示を読みました。

「いゝんだね？」

——約九枚削除——

アリスが再び姿を見せる迄の間、私は大問題と取組んでいました。今度は彼女に何をしたらいいでしょうか、ジャジャ馬馴しに成功

した事は疑いのない所ですから、私の意志を告げればよく、彼女がそれに応じることも間違いのない所でした。ですが、この彼女を全くの服従状態におく、という考え自体は私が期待していた快楽を破壊してしまう様に思われるのでした。疑いもなく今迄続いた一連の風趣、あらん限りの力を振り絞つての一貫した必死の抵抗を振り伏せて、好芳淫靡の限りを尽した欲望を甘受させる感興は消え去つてしまふのではないでしょうか、忽ちに、彼女は動きの鈍い、無抵抗で高漫な、肉感的な女の代表格となつてしまふのです。若しプログラムをそのまゝ続行するとなれば、實際、死馬に鞭打つ破目ともなる事でしよう。

ですが、此処に決して看過出来ない一個の体験があります。その経験は色欲は申すに及ばず、私の復讐の頂点、彼女が甘受しようとも、又することも出来なかつた一つの屈辱、彼女が一度の異議も、否定も表明しなかつた此の上ない一つの凱歌を構成しているのです。そして、それは………でした。……強奪でした。

アリスは、もう十分の訓練を受けて、一個の少女が女になる過程の意味を細大洩さず品味したのです。

「そうだ、これから、午後の残りをアリスの………に捧げよう！」

アリスは何時になく手間どつて姿を見せませんでした。私がこの大決定をした途端、アルコールから出て参りました。私の視線に恥しそうにチャーミングな困惑を示し乍らカーテンを出かねて、モジモジ尻込みしていましたが、見違える程、すっかり生々として艶めかしく見えました。手招きしますと、素直にオズ／＼近寄つてきました。両腕を腰に廻してキスしました。テーブルに導いて、小コップに満たしたシャンパンをすゝめました。

これは余程有難かつた様です。彼女が飲み乾しますと、私は寝椅子に横になつて休もうとやさしく囁きました。

「さて、ねえ、アリス、いよ／＼君は僕の花嫁さんになる時が来た様だね」

「帰らせて、ジャック………もう、こんなにも思い知らせてくれたじゃないか」

そして、起き上ろうとするのです。私は彼女を………

「そうしている所を見ると、花嫁として扱つて貰うよりは、掠奪してほしいんだな、至極結構だ！」

「………でも………でも」

第十章 甘美なる降伏

幾多の曲折を経た終局の今、アリスは愛の褥に横たわつています。

「其の戦士は正に熱闘を試むべく馬に跨りたり、今ぞ女神は真に恋の幌の内に入りぬる」
ヴィナスとアドニスよりアリスはもう私の自由でした。アリス、憧れも久しいアリス乙女の中の乙女、私の渴望の的………

「宣かつた？」

彼女は頷いて微笑しました。彼女は私の支配の下に身を屈したのです。

やがて、アリスが囁きました。

「もう、着物、着てもよくつて？」

「うん、その方がよかつたら、こゝに着物を持つてきて上げようか？」

彼女は嬉しそうに頷きました。着物を集めて渡してやりますと、それを身につける彼女を残してその場を去りました。

成功裡に終つたアリスの純潔に対する復讐の成就と、勝利を祝して、私は無言の中に、けれど躍る歓喜を秘めて、一人シャンパンを乾しました。そして、アルコールに退き衣服を着けました。

十五分程して、アリスはすっかり身装りを整え、帽子を冠り、手袋をはめて現れました。

私はドアを開けました。彼女は一言も喋らず、ただ、思い出に残る午後を過した此の部屋の隅々にシミ／＼した眼を投げて出てゆきました。辻馬車を呼んで、彼女に座をとり駅に送つて汽車がくるまでの寛いだ時間を過しました。馬車の中でも彼女はひっそり黙つたまゝでしたが、私が両手を取つてソツト触つても、抗うことはありませんでした。汽車が動き出して、私は日頃の習慣で帽子を上げました。彼女もいつもの通り、優しい調子でこれに応えました。

この二人の別れを目撃した、誰が、あの少女とも見える愛らしい婦人が、物静かなあの紳士風の男に赤裸々に剝かれ、恐ろしい屈辱の泥沼にのたうち廻されたのだと想像したでしょうか。

私はこうして、たゞ、私を見捨てた乙女に存分の復讐をしたばかりでなく、その眠つていた感情を呼びさまして、私を愛するようにさえしたのでした。

告白

凌辱の 幻想と 期待

古川裕子



麻縄が肌に喰いこみ、両手首は背中に固く固く括りあげられ、口の中には一杯の布きれ、口と鼻とをしつかりと蔽うている厚い猿ぐつわ。一切の自由が奪われ自らの身体のあらゆる細部を自由に異性のもてあそぶまゝになっている。何という屈辱、何というはずかしめ！しかしこれこそが女である私の憧憬の姿であるとは何という宿命でありましょうか。

八月号で佐治氏は私にしみじみくも宣告なすつた。「貴方は永久にマゾの牢獄にうごめく女囚だ」と。「囚衣のレイコンートのフードをまぶかにかぶり、マゾの刑場に今日も、とぼとぼと歩いてゆく宿命の女囚だ」と。

本当に、あゝ本当にその通りです。私はこの牢獄から脱走したい。あらゆる努力と、あらゆる意志の力をもつて、私を本当に縛っている「マゾヒズム」という鎖から、手枷から足枷から脱けだしたい。そのために私は今迄どんなに努力をしたでしょう。夜寝床に入つてからの妄想をたち切るために、死ぬ程多量の睡眠剤を用いたこともありました。エネルギーを肉体的に運動の方に転化するために、倒

れるまでテニスの練習を幾日も続けたこともありましたが。高貴な心のために、西欧の近代文学や古典音楽に一切をかけて没入しようと努めたこともありましたが。それから——いや、もうこの上は述べますまい。ただ、そのどれもが一時的には効果があつたとしても、結局私は故郷のように、またマゾヒズムの泥沼へ落ちこんでしまうのです。いつか無惨に括られた猿ぐつわ姿の自分を想つて身もだえをしている破戒僧のような自らを発見しただけだつたのです。

あゝ、この宿命から私は一生逃れられません。じたばた苦しむのだけ無駄なようです。私はやはり囚衣をまとい深網笠をかぶらされ手錠足枷の女囚以外の何ものでもないのです。

此の頃私の心を去来する想いは、もうこのほかにはなくなりました。

私はごくつまらない女です。特別な才能とでもごさいません。人並以上の美貌も持つてはおりません。ハウスキーパーとしても特に自信があるというわけではありません。何か美点を、と特に考えても、悲しいことに自ら挙ぐべき又誇るべき何ものもないのです。私はマゾヒスト。もし私のようなものを好んで下さる方があったら、（私は女ですので「愛して」と云いたいのですが）それはサディストの男の方以外ではありませんまい。そのようなかたに満足を与え得る——それがたつた一つの私の取り柄かも知れません。

私は今悩んでいます。私自身の宿命の血にはあきらめました。私をこのまま受け入れて下さるかたはないでしょう。私は喜んでその方に仕えます。どんな折檻でも、どんなお仕置でも、それはあなたの御自由です。私はその方のドレイになるのですから。私の前夫は、私を一週間以上も鎖でつなぎました。二日間も縄で括り放しに

しました。衆人の前に後手首縄姿の私を引き出し、狂暴性を持つ狂人として、歩かせました。あらゆる凌辱とあらゆる拷問を私に加えしました。後手錠を嵌め十日間も顔にびつたり吸いつくゴムの袋を、私の頭からかぶせ放しにし、呼吸は鼻孔にあたる部分の二つ小孔からさせ、食事の時だけ口まで袋をあけて食べさせ、二十四時間決して取つてはくれませんでした。こうして十日目に私はやつと幽暗の世界から陽の目を見ることが出来たこともあつたのです。

鞭を受け、くすぐられ、女の門にあらゆるいたずらをされ、一切の反抗は許されませんでした。私は完全に屈伏していたのです。その一部は本誌九月号の「長期刑」にてお察し下さいませ。このような生活は決して私は不愉快には思いませんでした。むしろこれがあるために生きがいを感じていたと云つた方がよいでしょう。気の狂つた女——そうです。私自身すら冷静な時の自分には、このような私が解りません。私の中には二人の女が居るのです。そして支配力をふるつているのは——疑いもなくこのマゾの女です。

こんな気狂の女を受け入れてくださる男のかたはないでしょうか。私はありのままを申し上げます。私の異常な性癖につきましても、一切をかくさず申しあげます。これを御承知の上もし、ものずきにこのような女を拾いあげてやろうと思召すかたがありましたら、御連絡下さい。私は喜んでおそばに参りたいと思います。

ただ、一つドレイの私からお願いがござります。気にかゝりますので先に申しあげましょう。それは——私は先程申したように、屑のような女です。たゞ、これ以上人様に御迷惑をかけたくありません。もし私に、お目をかけてくださる方がありました時は、どうか私の出現のために、その方の周囲に不幸になる人が出来ないように

——齒に衣させず申せば、私のために奥様やお子様を苦しめぬように、これが私の願いなのでございます。

私にお目をかけて下さるについては、勿論籍などはどうでも宜しいのです。法律上の妻になろうとは望みません。正式の妻にしたいだけならば、それ以上の幸はないのですが。これは私から求めてゆくことではありませんまい。しかし形式はともあれ、實際上私のために、お悩みになる女の方が出来るなら、私は余りに罪深いことと思います。罪はこの無惨なマゾヒズムだけで沢山です。そのような事態に立ち至つたら、私はおそばから逃げるより他ありません。これが私の最後の「良心」と云うべきものです。

それから、もう一つだけ——もう一つだけお願いがあります。それは私に子供をつくることだけは、御勘弁願いたいです。私は恐ろしゅうございます。私の赤ん坊に、私のこの異常な血が伝つたら——あゝ何と恐いこととございましょう。たゞこのことだけのためにその児の母親は一生囚獄にうごめくと同じになつて居るのです。私も女です。何んで赤ん坊が可愛くなくないことがありましょう。特に私は人一倍子供好きで、よそ様のお子さんでも、どんなに鼻たらしでも、可愛いくて仕方ないのです。それだけに、私はどうしても自分の子供は恐しくて持てません。これがせめて私の母としての愛情でございます。どうぞお願い致します。ドレイのくせに勝手な事を云うと、きつとおつしやると思いますが、どうか、これだけは——どうかこれだけはお約束下さいませ。

その代りこれだけ守つて下さるならば、私は私の精神と肉体の一切を挙げて、あなたに捧げます。どのように取り扱われようと、どのような折檻を受けようと一切私は文句を申しません。いやそれど

ころか悲しいことに「私の女」は歡喜の呻きをあげることでございましょう。

私は大正十一年生。ですから満三十一才になります。身長は五尺丁度、体重は十三貫、色は白く、肌は同性の方々からも羨まされております。全体はまるい感じですが三十過ぎてから、以前より幾分脂肪がつて来たようです。東京の官吏の一人娘に生まれました。元來親類は非常にすくなく殊にあの東京大空襲で父母が死んでからはこの世に身よりと云うものは一人も居なくなつてしまいました。終戦の次の年に縁あつて亡夫に嫁ぎました。もつとも戦争中、日本橋のさる食料品問屋の跡とりに殆ど名ばかりの嫁となつたことがございます。これは三ヶ月で円満に離婚致しました。離婚の理由は表むきは私の「不感症」と云うことになっています。たしかに「不感症」だつたので、正常の交渉には殆ど全く興味を持ち得なかつた私の異常がその原因であつたことを正直に申しておかねばなりません。

亡夫との出会い、その結婚生活については昨年十二月号の本誌に「囚衣」としてお伝え致しました。その当時のことについては、これを御参照下さいませ。こゝには、本当にありのままその間の事情を書きました。ともあれ、夫は昭和二十六年十二月突然の自動車事故で死亡しました。身よりのない私は、止むを得ず東北の田舎のある病院の事務長をつとめる、亡夫の実兄を頼つて田舎に参りました。夫の死後半年、一年、一年半、その間のいろいろな出来事についての一部は、本誌上に書きました「続・囚衣」を御覧になつて下さいそれはまことに恥しい出来事です。私は自分のやつたことについては、嘘を申したくございせん。たゞ誓つて申しあげますが、文

中のS氏とは記載の如く二夜に亘つて交渉がございましたが、その他の方々——つまり私がシヨウにひき出されてからは、何もございませんでした。いや、いいえ、いいえ、たしかに文字通り肌は殿方たちの手で汚されました。——（あゝ私は娼婦！自分を泥の中になげうちたい思いでございます。）でも、でもそれは文字通り肌でございました。お信じ下さいませ。どちらでも同じことだ！とお怒りの声が耳もとにきこえるようでございます。でも、私にとつては、文字通り肌であつたことが、せめてものの一つの慰さめなのです。

この事件以外にも多くの誘惑がございました。浅間しい私は、この誘惑に対して身悶えいたしました。「続・囚衣」中にちよつと書きました大阪のH氏とはどうなのだ、とおつしやるのですか、そうです。佐治氏も「古川裕子に与う」の文中で、このことを御指摘になつていられました。お答えしましょう。私はH氏のもとには参りませんでした。いや嘘です。嘘です。大阪までは——遂に耐え切れず（数十日の夜毎の懊悩があつたのち）大阪までは参つたのです。しかしH氏のお宅までは参りませんでした。私の意志の力は、やつとこゝで踏みとどまつたのです。十二月の中旬のことでした。私は遂に義兄の家を脱け出しました。東北の十二月は雪にうもれていました。私は厚い外套を着て、大きく厚いマスクをして、そしてあの革カバンをもつて、しよんぼりと夜行列車の片隅に身を寄せていました。私は静岡より西にゆくのは生れて始めてでした。ですから大阪などは西も東も皆目見当もつかぬ大都会なのです。心細い寂しいしかも悩ましい旅でした。関東平野に入ると雪がなくなり、東京駅の朝の乗り換えには、骨の髄まで凍るような空つ風がブラットホームにピュウピュウと吹きまくっていました。私はうなだれ、マスクの

中に身をひそめるようにして東海道線にのりました。夕刻、もう短かい冬の日がとつぷりと暮れはてた頃、私は大阪駅に降りたちました。H氏への連絡の手紙は、どうしても決心がつかず、その時までまだ外套の内ポケット深く入っていました。大阪駅前には流れるような人の渦でした。十二月の夜霧がしつとりとおおりて、沢山のネオンがにじむように光つた晩でした。私は心の底まで泌みとおるノスタルジアを感じました。何のために、いつたい何のために私はここまで来たのだろう。私の女は喘ぎました。「性慾のためさ！」「お前が何とごまかそうと——いや何にもごまかしようもあるまい。性慾のため、たゞ性を満足させるだけのため、お前はこゝまで来たんだよ。立派な女だね。さあ何をぐずぐずしている。サイはもう投げられている。H氏の連絡場所の電話番号はハンドバッグの中だ。詳しいうち合せはしないでも、お前の前便でH君はおまちなかだ。お前はいかにも氣を持たせるように書いたじやないか。全く立派な女だ。さあゆけ、行つて縛られる。口には息の根をとめる程の猿ぐつわを嵌められる。急所を責められて床の上を悶え廻れ、呻き声をあげる。そのためにお前が生れてから一度も来たこともないこの土地に、はるばるやつて来たのじやないか。さあ何をうろろうろしているのだ。被虐の美酒を盃の底まで味いつくせ。身もとりけるようなマゾヒストの遊びを何故味わない」

私の中の女は髪をふりみだし地団太をふんで私の下半身の中で荒れまわっていました。目ぐるましい経済都市大阪の師走です。しよんぼりと夜霧の中に立つている女などに最初は目をくれる人もありませんでした。私はたゞボンヤリと阪急や梅田映画劇場の屋根にくるくる廻るネオンを見ているばかりでした。

「おい、おネエちゃん、誰をまつてはるのや」私には解りにくい大阪弁でこんなことを声をかけてゆく人が出始めました。私はそのたびごとに「ギクリ」として何か悪い事でもして追われるように、たゞうろろと無意味に大阪駅前のごみごみした横丁から横丁へと歩きつづけていました。頭の上の赤いネオンが梅田新道と光つていたのだけ、今でも私はかすかに覚えています。

何と酔った男の人に声をかけられたでしょうか。「大きなマスクしくさつて、風邪でもひいたのかいな。わいと遊ぼや」「おい何ぼや」「マスクとつてお顔をちよつと見せいな。その上できめまひよ」

いきなり私の手をにぎつてひっぱるものもおります。私はたゞオドオドして小娘のように逃げまどう有様でした。

結局その夜は梅田附近の阪神荘と云う旅館にとまりました。門表には温泉マークがついていました。旅館の女中は、大きなマスクをした女一人の私を、露骨にウサンくさそうにじろじろ見つめていました。

「おつれはんは？」「あとからくる筈なんですけど」私はマスクの下で蚊のなくような声で答えました。この答が女中を納得させたのでしょうか。私は狭い部屋に招じ入れられました。そこには片一方は三畳ばかりの畳敷の間と、奥にはダブルベットと洋風の鏡と洋服タンスがある寝室がついていました。部屋の一方には洗面所があり、窓は形だけのものでした。従つて、おそらく昼間でも、この部屋は夜のように電気をつけておかねばならないでしょう。

畳の方には、なまめかしい赤い鏡台と朱塗の小机がおいてありました。全体如何にも媚しい雰囲気が漂っていました。家から余り出たことのない私などは、勿論このようなところに一人でとまること

など始めてでした。S氏につれられていつた札幌の宿は、もつとマトモな普通旅館でした。

部屋に入つてからも、女中は尚私を不遠慮に眺めていました。何処か自殺でもしそうな女と見たのかも知れません。

「おつれはんは何時頃に来やりますつか」

「もうすぐ来る筈ですけど」

「お風呂は、おつれはんがきやはつてから御一緒によろしまつしやろ」

「ええ」

女中は一人でのみこんだように、まだマスクをかけたままの私の顔を見い見い意味ありげな口ぶりでこう云つて出てゆきました。私はやつと一人になつて入口のドアに鍵をかけました。さて、そのくる筈のない「おつれはん」を何といつて女中にことわろう。さし当つて心配はこれでした。

その夜は、赤い派手な羽根布団をかけたダブルベットに、私は一人で寝ました。夜おそくまで電車や自動車の走る都のどよみがきこえ、私は仲々寝つかれませんでした。疲れすぎていたのかも知れません。

それは何時頃でしたらうか。そう、十二時すぎていたと思います私の隣の部屋に二人づれの客が入つた気配がしました。私が兎に角女中に「おつれはん」が来ないので仕方がないから一人でこゝへ泊ると云つたときには、この旅館は余り客がなかつたようです。あつても私の部屋とは離れた所に数人の人々が居たにすぎません。十二時すぎてこの老人らしい声とやゝ泣声だが、しかし若々しい女の声の不遠慮にもつれあつて、壁ごしに私の枕もとに侵入して来るまで

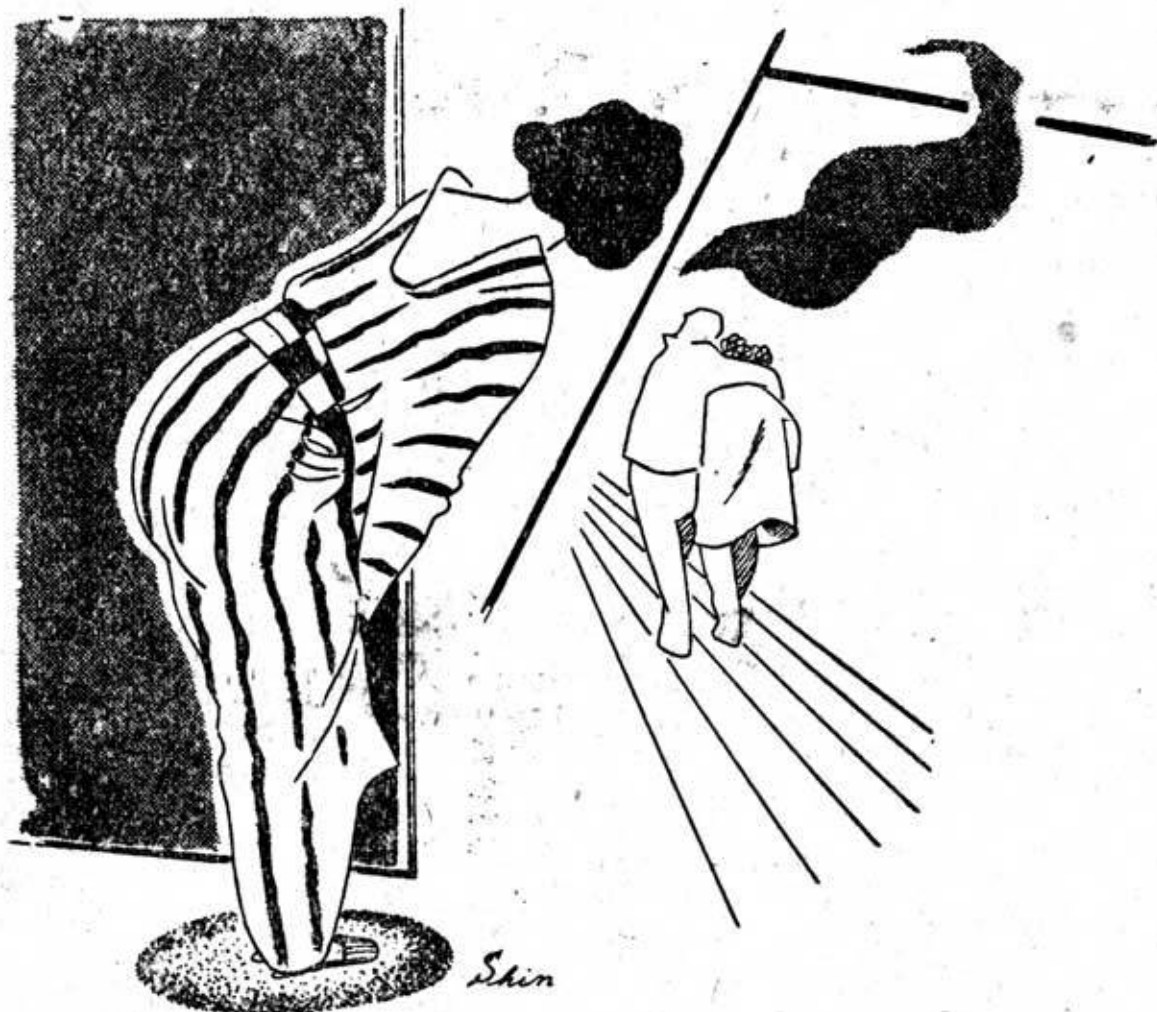
は、殆ど孤独と云つてもいい寂しさにおそわれていたのです。

二人とも酔つてゐるらしく、かなり卑猥な言葉のやりとりが盛んに行なわれていました。

しかし、ひとしきりその騒ぎもおさまつて、私もうとうとした頃、私は苦しそうな女の呻きを聴きました。私は殆ど本能的にそれが猿ぐつわから洩れる声であること

をさとつたのです。蛇の道はへびと
いつた感じでした。私は睡気も醒め
果てました。耳をすますと床の上を
もがく音まで聞こえます。その合間
に押しこらしたような老人の音がき
こえます。私はその部屋で何が行
なわれているか、目に見えるように
覚りました。

私は全身を耳にして隣の気配を、
うかがつてゐるうち、何とかしてそ
の場の情景をのぞき見したいと云う
慾望に耐え難くなりました。浅間し
いことです。私は一生懸命自分を圧
えることに努力しました。しかし女
の人が便所にゆきたいと意志表示を
したらしく、老人が「そんなら、わ
いがそのまゝつれてつたろ」と云う
声をきき、暫くして入口のドアが開
く音がした時、私の中から一切の理



性が消えました。いそいで私も自分の部屋のドアを細目にあけて見
ますと、寝しずまった旅館の廊下を黒いガウンを羽織つた女の人と
これもパジャマ姿の老人がお互に肩を寄せあつた後姿が見えました
老人のかなり太い腕はガウンの上から女の背から肩にかかり、私は
突然、以前に見た英国映画「巖窟の野獣」の一場面を思い出しまし

た。あの映画と同じように、この女
の人のガウンの背中がもりあがつて
いて、明らかに後手に縛られた上か
ら、それをかけてあることが見てと
れたからです。猿ぐつわは嵌めたま
まか、どうかは後姿ですから解りま
せん。私は二人が廊下を曲つてしま
うのを見とどけて、するすると隣の
部屋のドアの中にすべり入りました
素早く室内を見廻しました。部屋は
私のそれと殆ど同じ様な構造、同じ
調度品がそなえられていました。私は
ダブルベットをおいてある部屋の洋
服ダンスをあけて見ました。そこは
空で、彼らの洋服は、三畳の方の衣
桁掛にハンガーでかかっています。
ベッドの上には羽根ペンや毛筆や、
今吐きだされたばかりと見える。じ
つとりと唾液を吸つたガーゼのかた
まりや、黒い巾の広い三尺ばかりの

絹の布やが、シーツの上にちらばっていました。私はそれらを見ると身もだえするような興奮を感じました。三面鏡はわざわざベッドの裾の方に密着しておいてあり、枕もとには女の人のものらしい白い巾ひろいベルトが投げ出されていました。廊下の方で足音がします。私は慌てて、洋服タシスの中に身をひそめ戸を細めにあけて、様子をうかがっていました。

二人は帰つて来ました。ドアにガチャリと鍵をかけると、二人はくすくすとしのび笑いをしながらベッドに入りました。洋服タシスの戸は丁度よい具合にベッドの上だけは細目にひらいても見る事が出来ます。女の人は二十才前後でしょうか。かなりドギツイ唇と眉の描き方は、バーの女給さんか或はダンサーかと思われる風体でした。口紅が無惨にこすれて頬のそこゝに尾をひいているのが煽情的でした。老人は、そう六十才を越えているのではないのでしょうか。パジャマをきて白髪がかなり乱れてはいましたが、何処かの会社の社長さんかとも受けとれる印象でした。老人ではありますが、目がかなり鋭く唇が薄くて何処か薄情そうな冷たさがありました。それだけに逆に実業家らしい近代的な魅力があると云つても良いかも知れません。笑つたときは特に「寂しい」と云える程の特異な表情でした。女の人は反対に肉付が良く唇なども化粧でかくしてはいませんが、可成り厚く全体妙に身体の線が崩れて決して「清純」と云う感じはしませんでした。

私はこれだけのことを観察している間に女の人はベッドに座られ、ガウンをとられていました。想像通り彼女は後手に縛られていましたが、麻縄ではありませんでした。特別に作つたものでしょうか、細い黒い革紐で乳房を出して前の胸に井桁状になり上は首に下

は股にかかつていました。背中手首が頸に吊つて締めあげてあり腰の後には、かなり頑丈な金属製の錠前がついていました。革紐は肌に喰いこんで痛々しく見えました。私は自らが縛られた経験には不足致しません、このように目の前に他の女のひとが括りあげられているのを見るのは始めてでした。私は窮屈な洋服タシスの中に身をちぢめながら、この光景から目を離すことが出来なくなりました。

老人は、「さあ、もういちどゆきまひよ」とつぶやいて、女の後になまりました。

「おとなしゆうするのや、はい、お口をあけて」

老人の影になつて姿は見えませんが、素直に仰向いて口をあけたのでしよう。老人の手はゆつくりとベッドのガーゼを一つ一つとつてゆきました。私はそれがかなりの大量であることを見とどけました。私自身の体験から申しても、この位口につめられるのは余程の事です。やがて「ううつ」と云う呻き声がしました。老人の身体の陰からは黒い絹布の端がゆれていきます。いまこれを齒の間に喰えさせられ更に口と鼻とがこれでしつかりおゝわれ、締めあげられているのでしよう。私の右手の指は思わず私の……しこまりましたズロースも……ようであつたことを告白しなければなりません。

女のひとはやがてベッドの上に仰向けに倒されました。下半身は露出して私の方をむいています。上半身は、うすいブラジャー一枚です。私は寒くはないかと心配しましたが、当人は夢中になつていたのでしょうか、それ程寒そうにも見えませんでした。予期通り、顔半分は黒布の猿轡で、これと革紐の黒とが調和して、何か中世の宗教裁判の女囚めいた厳しさと云つたようなものを感じさせました。

老人は女のひとの足もとで暫くは、スポンチゴムのようなものや何か棒のようなものを持つているようでしたが、残念乍ら狭い戸のすき間からでは、どうもはつきり確められませんでした。……

ときどき女のひとが「ううつ、ううつ」と呻きます。やがて老人は女のひとの………つきました。それからの光景を詳しく申しあげるにも及びますまい。女のひとの口からは、ためいきとも呻きとも何ともいいようのない低いなり声があの嚴重な猿ぐつわから洩れてきます。時には殆ど泣き声のようにも聞えました。

老人は、「静かにしいな。隣りに聞えるやないか、まだ猿ぐつわのしようがたりんのかいな」と時々低くたしなめます。ものの一時間もこうして揉み合っているうちに、老人に深い疲労が見え始めました。遂に女の人のお下半身から顔を離しました。両足はだらりとベットの布団の上に投げだされ、時々びくりびくり動いて如何にも、まだまだ不満足気でした。

私は当然次にくるものを予期していたのですが、ことはそれで終りでした。

兎に角老人はゆつくりと白髪を直し、パジャマの襟をととのえ、殊更のようにゆつくりと、女の猿ぐつわ姿の顔を両手で挟んでじつと眺めていました。そして右目の上にキツスを一つしました。それからやつと猿ぐつわの結び目に手をやり、何かのこりおしのように黒布を解いてゆきます。取り終つて上半身をベットの上面におこしたところを見ると、目の下から頬にかけて又口の両側から耳にかけて深く絹布が喰いこんだ跡がついています。口紅が乱れて浅間しくなっています。老人はその猿ぐつわのあとを、いとおしうに柔く手でなでていました。それは大事なものの感触を楽しんでいるか

のように見えました。ずい分長い間さるぐつわの跡や革紐の喰いこんだ皮膚をさわつて楽しんでいましたが、漸く鍵をとり出し革紐の錠をはずして両手首を自由にして首からその革をとり去りました。ベットの上面におかれたのを見ると、これはむしろ草柳とでも云うべきものです。よく見ると数ヶ所に尾錠がついておつて、これを首からすつぽりかけて、手をねじて後に廻し、素早く尾錠をかけさえすれば、容易に女は身うごきも出来ぬようになってしまふのです。これはこの人たちの（いや老人の）苦心の作でしょうか。私も私たち（亡夫と私と）でいろいろお仕置用具を工夫致しましたが、この草柳が便利で、又心理的にも刺戟に富んでいる点で、感心しました。見たことはありませんが、刑務所で重謹慎の囚人に用いると云う後革手錠に似ているのかも知れません。

ともあれ、こうして自由にされた女のひとは、パーマネントの髪をふりみだして老人の胸にしがみついて、殆ど何も云いませんでした。そして二人で抱きあつて、接吻をし合つたりしていました。間もなくベットの掛布団をかけ、スタンドを消しました。私は余り今迄の状況が刺戟的で私自身興奮しきっていましたので、この幕切れが、恐しくあつさりとした、もの足りないものに感じられました。しかし事實はそれでお終いだつたのです。真暗ななかにももの三十分も我慢をしていますと、二人の寝息がきこえ始めました。

私は落ちついてくると非常な不安と寒さを感じ始めました。いったいどうしてこの部屋を脱け出す？老人というものは目ざといものです。脱出の途中で気付かれはしないだろうか。それよりも入口のドアの鍵をどうやつて暗い中に入れて？不安がつるに従つて寒さが身に沁みて来ました。同時に生理的な要求も必然的に

こつて来ます。私は本当に困りました。しかしこれは自業自得と云うより何か何を云うことがありましよう。耐えきれなくなつた私は真暗な中で手さぐりで入口のドアに近づきました。私の部屋と同じ構造になっていることが大変な神の助けでした。私はどうやら気付かれずドアのところまでゆきつきました。そこにはもう一つ天の助けか、この卑劣な私を待つていました。鍵が鍵穴に挿しこんだまゝ



だつたのです！私はそつと鍵をまわして廊下にすべり出しました。暗い中から明るい廊下に出たとき、どんなに面映ゆい思いをしたでしょう。私は私のベットに帰り、あらためて便所につけかけました。私は深い疲労を感じました。頭は妙にトゲ／＼しくなつていくくせに、身体だけは深い穴に落ちこんでいくような疲れでした。それなのに今見て来た光景の、あらゆる場面が代る代る頭の中にクロージアアップされて来て寝れません。翌朝、隣室の人々が

ドアの鍵が開いたまゝになつてゐることをどう思うかなどと想像するいとまはありませんでした。時計を見るともう四時近くになつていました。だん／＼と気がおちついてくると、あのような他人の秘密をのぞきに入つた私がたまらなくなつてましくなつて来ました。どんなに、嫌らしい目をして私はあの有様を見ていたのでしょうか。あゝ何という女！いつものように私の中に身を裂くような悔恨がわきあがつて来ました。私は夜明の六時頃から泥のように睡りました。そして女中が本当に怪しんでおこしにくるまで、私はこんこんと睡つていました。

ドアを殆どあららしくと云つた程度に女中に叩かれておこされたのは午前十時頃でした。疲れが身体中に残つていました。がつくりと気落ちして、明るい冬の朝の大阪を私は洗面所の窓から始めて見ました。濃いノスタルジアと不安、そして私がいっただい何しにこゝまで出掛けて来たかを、その時あらためてもう一度はつきり思い出しました。この考えは疲れ切つたその

日の朝の私を叩きのめしました。もはやH氏に会う元気が失くなつていました。

帰ろう！ この恥すべき土地から、一刻でも早く！「帰りなんいざ、田園まさに蕪せんとす。何ぞ帰らざる。」荒れ果てたのは田園ではなく、疑いもなく私の心だつたのです。私は、明るい大阪の街の朝のどよみを聞きながら、ほつと溜息を洩らしました。

その日の夜行列車で私は大阪を離れました。いや、もう一言申しとおかねばなりません。私は何となく奇譚クラブが発行されている堺と云う街が見たくなつたのです。「如何なる理由があつても、直接御訪問はかたくお断り申しあげます」と云う嚴重なことわり書きはよく知っています。だから特に発行所を探し当てようとしたのではありません。たゞ何となく堺に行つて見たくなつたのです。地理に不案内な私は、人に聞き聞き、それも耳馴れぬ大阪弁に悩みながら阿部野まで市電にのりました。窓から見える大阪の街は、何の気とりもない質実な街でした。これに較べると東京は何と云うベダンテイツクな街でしょう。私の胸の中には、こんな感慨がわきました。アベノで電車をおりた私は、堺方面の郊外電車に乗りました。ところが降りた駅は「堺金岡」というところでした。こゝはどうやら堺市のはずれらしく、私は電車を乗り違えたらしく思われました。しかし何れにしろ堺市の一部には間違いありません。刑務所が見えました。私はたゞ呆然と何の目的もなく、ぶら／＼歩きました。全身抜けるような疲労感にひたされていました。その時、ふと目についたのは仁徳陵への案内標でした。私はふら／＼と仁徳陵の壮大な規模の古墳の前に立つていました。そしてその周囲の百舌鳥古墳群を見てあるきました。林の中の古代への愛は——原始の感情を私に

呼びおこしてくれました。遠い古代の人々の喜びや悲しみが胸に迫るようでした。冬空は深く晴れ、風はかなり寒かつたのですが私の住んだ武蔵野や東北のような痛烈な厳しさはありませんでした。何か肌触りの軟かい風でした。あたりの冬景色も線が柔かく、やはり「国のもなか」と云う感じがしました。私はだんだん落ちついて来ました。（かんのんのせにそうあしのひとものあさきみどりにはるたつらしも）

ふと今津八一博士の歌が胸に浮んで来ました。昨夜の悪夢のような光景や身体の中にうごめいていた、官能のしびれるような思いがだん／＼とうすれてゆくのが目に見えるように感じられました。心がすこしつづつ明るくなつて来ました。私は誰にともなしに祈つていました。それは古墳に眠る先祖に対してだつたかも知れません。又私の心の中に思い出された古い仏たちに対してかも知れません。とにかく私は心から何ものかに祈つたのでした。「私は汚れた女ですがしかし私はこの泥沼から抜け出られません。どうか私をお救い下さい。私は弱い人間で自分ではこの囚獄から脱けだせないのです。このままで——汚れたこのまゝで私をお救い下さい。さもないければ、私は地獄へ落ちるほかありません。あゝ、何卒、私をこの私のままでお救い下さい」と。

こうしてこの夜私は大阪の地を離れました。これでおしまいです。佐治氏にお答えすることは、これより外ないのです。まことにつまらぬあつけないこととお思ひになるかも知れません。しかし事實はこれ以外にはなかつたのです。

一時より私は落ちついて来ました。大阪へわざわざ出掛けたことも、今では、何はともあれ、全部が全部無駄ではなかつた。今まで

自分の行為だけを見つめ、ひたすらに罪悪感に追いつめられていたのに、恥ずべきのぞき見であつたとは云え、たしかに他の人の所業もはつきり見とゞけました。「お互いに悲しい人間なのだ」との想いが私の胸の中に泉の様にわいて来たのです。

そして又今の仕事に私は本能の充足感、自分の性癖に対する。今までは、とらわれない観方を学びとりました。私はつまらぬ汚れた女です。しかし私はやはり人間の一人であつて、誰でも持つてゐる内臓をもち、誰とも同じ生殖器を持つてゐるのです。情感の動きが相当以上一方に偏してはいますが、しかし程度の差こそあれ誰でも多かれ少なかれこのような感情は持ち合せてゐるものなのです。

このようなことが此頃の私に実感としてわかつて来ました。これは私の進歩と云うべきでありましょうか。

私は自分を正直にさらけ出しました。言にくいことも敢て申しました。要するに私は強いマゾヒズムの女です。縛られ鞭打たれ吊され露出され猿ぐつわを嵌められる。そのようなことを無上の歓喜と感じ、又それなしでは——その幻想なしでは生きていけなくなつてゐる女です。そして妙にゴム布のスベスベした冷たい感触に官能をそゝられ、口をふさがれ、呼吸を苦しめられると、強い本能の興奮をもつ特種な感覚を有しています。従つて裏にゴムを引いたレインコートを好み、厚いマスクを愛好し、猿ぐつわに憧憬するのです。

私は今考えています。こんな女を好んで下さる方はないでしょうが、マゾヒストとしての官能の世界は勿論、処世の上の種々の生活に於ても、私は人間としての誠実をそのかたに捧げることは云うまでもありません。一生私は虐いたげられる幻想と期待とをふりすてることは出来ないでしょう。そのことはもうあきらめました。私

は私のまゝで、私に出来る限りの誠と奉仕をお約束いたします。前にのべました二つの希望事項を聴きとゞけて下さるかたなら、それ以上何も望みません。年令も地位も財産も。貧乏ならば二人で働きましよう。そして二人だけの世界をきずきあげましよう。たゞ私を「愛して」下さるかたであるならば、私には望外の幸と云うべきです。これでこの長い告白をおわります。雨の多かつた今年の夏も終わろうとしています。今晚も外は雨の音。風が出て来たのでしよう。吹き降りの雨の音にまじつて、暗い庭に樹々のざわめきがし始めました。今夜は一夜いつもより潮騒の音も高くきこえるでしよう。お休みなさい。今は午前一時、マゾヒズムの女も今は筆を擱いて寝床にゆこうとしています。そして、寝巻にきかえるために帯を解きかけてゐるのです。(終)

女性の異常告白集

裕子の夜ばなし 猿ぐつわと私……古川 裕子
サド女の処女期 ダイヤナ夫人……乗杉貴代子
性的虜囚 檻の中にて……若杉 早苗
奴隷の手記 監禁十日間……北山カオル
女囚私刑体験記 私刑に泣く未亡人 小坂多美枝
序章を終えて 蜘蛛と蝶々 飛田良二

愈々佳に境入る 感情教育……吾妻 新

益々充実を加えた
新年号の威容

昨年十二月号、本年新年号に錯乱の倫理を発売して斯界に問題を投げた近東規矩也が再び放った巨弾、内容の深刻さの為発表を見合していた問題作一年ぶりに次号新年号誌上へ堂々発表、作中の主人公こそ作者の自画像さじすちつく 犯された女……近東規矩也
或るマゾヒストの手帖から (38ゾラの小説、39犬と猫、40犬好きの女と猫好きの男) (外に論説告白、手記、文献、読物、口絵、写真等多数掲載)

女腹切八景

婦 道 一 路

ふ どう いち ろ

亀 岡 絃 七 郎

「ほんに、もう、お前さまほど憎いお人は無い」

一時の歎びの名残りが、未だ眼許を、ほんのりと色付けている、半ばは覚えていながら、半ばは夢見心地のような、その、小近の朱い唇が、悪戯つぽく阿嫺に反る。

「何を云わしやるやら、つい先刻は、可愛うてならぬ、と仰せたに」

文吉は小近を、ぐつと抱き寄せると、静かに指を彼女の身体へはわせるのであつた。

「ちいッ、いやじゃ、大きらいじゃ、お前さまのような女殺し」

ちらつと嬌瞋を含ませた黒瞳が、また、じわじわと溶けるように媚を盛る、彼女の体は文吉の指によつて、また開いて行くのである

「なあ、おばさまは何と申うてであろう、そなたを掌の珠とも申うて居らるるに」

「えい、おばさまにかこつけて、妾を見棄てよう気なら我慢ならぬ、明日から来んでおいで」

「また其のような、わやくを云わしやる」

「どうせ妾は姉さま、そんな不実な男より、

いつそ独り笑いの人形に、此の体の燃えるのを静めて貰いますわ、さあ売つて頂きましょう」

「さようなもの、扱つては居りませぬ」

炬燵を抜け出て、小近は戯れかゝる。

「うそ、又そんな嘘を云う、小間もの商うお前さま、持たらぬはずが無い」

「そなたに嘘を云うて何になるう」

苦笑いする文吉を流し目に見て、じりり、

小近は文吉の荷に近付いた。

「何時も開けて見せぬ、こゝが怪しい」

さつと引開いた一番下の抽出し、

「あッ」

小近は息を呑んだ、墮つた瞳が美しい。

南蠻鉄の鐙も、がっちり嵌つた一尺八寸の業もの、一口が其の奥深く秘められていたのである。

しどけなく乱れかゝつた着物の胸を掻き合せ、豊かな乳房を抱くようにして、女は膝で寄つて来た。

「文さま、お前さまがたゞ人で無いと妾は夙くに思つていた、たゞの商人で無いと思えばこそ、帯紐解くまで打解けたのかも知れぬ。

妾を好き心の女と思つては情無い、妾も元は武士の娘、何ぞ大きな頼を立てゝおいでなら妾にも苦勞を分けておくれでないか」

つい一瞬前までの妖治な痴態は影をひそめて、額も白んだ爪実顔が、すつと文吉の胸に迫るのであつた。

若い文吉、たお／＼と身をもたせかける女の情熱に、今にも崩れそうな心の扉を、いやならぬ勘忍するはこゝぞ、と引き締めた。

「何をまた、それ此の先のような、怖ろしい目に会つた時の、それは身だしなみ」

此の先のような怖ろしい目、というのは他でもない、此の小近と、文吉こと文之助の馴れ初めは、花咲き鳥唄う、ではない、ちらほらと早咲きの桜笑み、人酔い痴れる頃の、こゝに一場の物語がある。

何ごとぞ花見る人の長がたな

風流を真似るは知つて、やがて酒に吞まれた艶奴、無惨に手折つた桜の太枝を肩にかけた、腰には朱鞘の落し差し、さながら浮世の花道に六方踏まんずる勢いであつた。

ちらちらと花に浮かれ歩く人々を、よしなく追い散らし喚き罵り、天下の往来許されて歩くは我ら二人、と云わんばかりの難儀へ、折悪しう通り合せた文吉、小間物の荷を負うたまんま、小腰をかゝめて最寄りの軒端に身を潜めた。

「生つ白い野郎、ふん、男にも数有るものかな」

てらてらと酒焼けした顔も厭味な、血走つた眼に角立てゝ当てこすりの一言に、文之助さつと顔色の変るのを、いや大望有る身のよしな喧嘩に巻き込まれまいと、抑え抑えた背後から、

「若しえ、あの、針、糸の類、見せて貰いま

しょうか」

声は、身を潜めた家の軒近く、吊るした簾を通して届いて来て来た。

ふつくらと頬の豊かな、年の頃なら二十か一、町家の浮いた風も見えず、さりとて武家の娘とも見えぬ、田舎町も外れの草深い辺りには似合はぬ、艶めいた女であつた。

「本当に危いこと、まあお入りなされ」

六十ばかりの老女も出て来る。

強ちに濃からぬ眉さえ愛嬌づいて、小近といつた其の女の面影が、文之助には忘れられぬものとなつた。

翌る日、匂い袋を礼に贈つてからは、一層打ち解けた。三度目、老女が寺詣りの留守に何方が誘いかけるともなく、肌を濡らした仲とはなつたのである。

文之助も未だ十九の若さ、十余年付け狙う親の仇が当時此の出羽の国は庄内藩に匿まれて有りと聞いて、小間物売りにやつ身ながら、思いがけず小近と馴染みを重ねて来たのであつた。然し、所詮女子と小人は養い難しとか、肌身は許し合うても心の底まではと文之助、そこは口を旨く外らした。

「いゝえ、お前様は其のような淡いお心で有

ろうと露知らず、契つた此の身が恨めしい。生命までもと思ひ込んだ妾が愚か、文さまに疑い抱かれるからは生き甲斐も無い、自害して果てまする」

云うより早く小近は唇かみしめ、いきなり脇差を引き抜こうとする。

「待ちやれ」

「いえ、放して、死なせて、死んで此の情なさを晴らしまする。」

桜色の頬が緊張に蒼ざめていた。

「小近どの、許して下さい、何ごととも包みはせぬ」

はつと手をゆるめる小近から、文之助は脇差を取り上げ、坐り直して言葉を改めた。

文之助の父は吉見久馬とて、丹波国福知山にて御納戸役千石取りであつた、同役猪飼重四郎とは、殿のお覚えを競い追腹の名誉を争う仲であつた。

久馬三十二才の秋、主君朽木紀貞が病没した、追腹は固く停止のこと、と御遺言にも有つたので、久馬も重四郎も世嗣ぎ殿に御奉公を誓つたのではあつたが、さはさりながら――

こゝに葬送の儀厳めしく取行われ、お家に重立つ人々より順に焼香の次第が進む折しも

重四郎、久黒、何れが先とも知れず座を立つて同時に香箱の蓋を開け、焼香の順を競り合つた、こゝは奉公の意地づく万一の失態を慮つた年寄の指図で香炉を今一つ並べ、並んで焼香は首尾よく終つたのであつたが、さて終つて立ちさまに重四郎、不覚にも袴の裾を踏まえ、はたと後ろに転んだ、はつと立直る時思わず一座を見渡した眼に、久馬が笑みを含んで家来の者に何やら言う素振り。

忽ち屈辱感が憤怒を交えてくわつと重四郎の胸に燃え上る、先刻順を争わねば斯かる無ざまも無かりしものを。と、己れの不覚は云わず、一因に久馬を怨んだのは、重四郎よくよく歪みねじけた性根と云わねばならない。

武士の一分立ち難し、と其の日、野辺送りの帰途、有無を云わさず久馬を討ち、それ切り逐電したのが、丁度文之助七才の時であつた、仇討を思い立つたのが九才の秋。

以来、兄の武之助と若党二人供に、諸国を経廻ること十年、猪飼重四郎が妻女の縁を頼つて出羽は庄内に有り、と聞いたのが、つい半年ほど前のことであつた。

「兄者は薬売り、若党二人は塩や葎を売り歩く、此の辛苦もすべて重四郎ゆえ、仇を討た

ねば郷国へも戻れぬ、ながら、小近どの、そなたと契つた今では、武士でさえなくばと思わぬでもない、重四郎に廻り合つて、苟且に^{かりそめ}も返り討なんどに会つたならば、せめて線香の一本も上げてくるるか」

「文さま、そのお人なら存じ居りまする、御家老柳田長太夫さまを頼んで、出崎の下屋敷に置まわれている人に相違ない、用心深うて御門も二重三重の厳めしさ、さりながら妾存じ居る仔細は、此の秋の出替り時に御沙汰あつたなれど、何とやら怖ろしうて祿を捨てたまで、そのお蔭でお前さまとも不思議な御縁を結び申しました。文さま、生命はお前さまに、と申したことに二言は無い、春の出替りに奉公しよう、手引きも致しまする」

思い詰めた女の頬に、また血の色が鮮かに上つて、文之助に緊と寄り添う。

文之助も瞳をうるませ

「忝けない、その志し、二世までも忘れはせぬ」

「姉さまでも、妻と思うてくれやるか」

「思わいで何としよう、小ちか……」

「えゝ、もつと、……いつそこうして」

小近は耐え兼ねたように身を震わせ、文之助の手を己が乳房に押し付ける。

抱き合つた二人の体は燃え上り、炬燵の火の立つて行くのも知らぬげであつた。

二

秋風がさわさと穂薄を渡つて行つた、薄く色付いた林の続く片山かげに、屯する二人の若侍、路はこゝで三曲り目、光明院という山寺へ一とすじである。

「文之助、遅いようだがよも間違ひはあるまいな？」

文之助は凜々しい瞳に兄を見返つて、「たばかりような女とは思ひませぬ。」

「うむ、然し彼奴も用心はして居ろう、怠るまいぞ」

文之助は肯いて又眼を転じた。

小近は約束通り、春の出替りに重四郎の許へ奉公に出た、美貌と才気を賞でられ、首尾よく聞へ侍る身となつたのである、そして昨日、彼女の使う不女が密書を齎した。

「何しろ御門が煩そうございます、髪の中をお改め遊ばして」

と見れば島田に結つた髻の中に、小さく折りたゝんだ文があつた。

明日は重四郎の父親の命日、仏具を入

れるべき長持に潜んで、己の刻、光明院に詣らるる、妾もあとより駕籠にて参りまする、首尾を祈り上げまする。

是だけであつた。

そして今日、主従は身支度して辰の刻過ぎた頃から待ち伏せていたのであつた。

若党の角助が小高い見晴らしから走り下つて来た。

「参りました、たしかに長持を三人ほどで護つて居りまする」

「よし」

今一人の若党の三右衛門が高見に残つていたが、もう掛け声が足許を近寄りつゝある、鯉口を切り、文之助は兄と顔を合すと、ふつと微笑し合つた、頬が硬くひきつれ、笑つたようではなかつた。

エイ、ホウ、エイ、ホウ、

静かな山道を、声は次第に近付いて来る。

「待てッ」

文之助が抜き放つた大刀を提げたまゝ、鼻先へ出た、続いて武之助、若党二人は、さつと背後に廻つて退路を絶つてゐる。

「何をッ」

仲間の中で一番年の若いのが、いきなり文

之助に切つてかゝる、それが合図のように、残る二人も刃を揃えた。

次の瞬間、文之助の大刀が大きく陽に光り「トウツ」

赤土道に、どす黒い血が迸り、文之助は身を引いた。どさりと、生命の無い物体が、自ら土に叩き付けるように倒れた。

二人になつた仲間達は、もう唇まで白かつた、眼が檻に入れられた獣のように落着きを失い、陰く光つてゐる。

じりじりと後ろにすさりながら、「キエーツ」

一人が捨身で突いて出た。

軽く外した武之助、さつと身を沈めたかと思つた、刎ね上げるように斜め下から刃を揮つた、また一人、血汐を撒く。

残つた一人もう体を斜めに退き腰であつたは、彼が背後を振り向きざま走ろうとした時角助が突きを入れた、崩れたまゝの姿勢から、

「グウツ」

人声ではなく、

押し潰したような唸り、それ切りであつた。

長持は、ひつそりと静まつてゐる

三右衛門が、ず

いと棒を抜き、蓋を刎ね開けた。

中に坐つてゐる

重四郎、未だ四十

を少し出た許りな

のに、もう胡麻塩

というよりは一寸



容彦画

ばかり白い、額には脂汗が浮いている、紫色になつた唇が縦皺を刻んで震え、十二年前の美丈夫ぶりは、嘘のような惨めさ。

「重四郎、久馬が伴武之助、只今怨みを晴らしに参つた、いざ尋常に勝負致せ」

ぱくぱくと口を開いたが声にはならなかつた、瞳に灰色の絶望が浮かんでいる。

「角助、三右衛門、お出し申せ」

肩を両方から担ぐようにして引きずり出されながら、重四郎、へたへたと坐り込む。

逃れられぬ、とは知つていても、大刀打はする勇氣もない。

「是非もない、時刻移つては面倒、さ、文之助」

兄の目ばせに肯いた文之助、ぐつと重四郎の胸を刺し貫く、がくんと摩したまゝ敢えなく眼を閉じるのを、武之助が首を打つた。

秋の明るい陽射しの中で、血が虹を描いて奔騰した。

「おめでとうござります。」

角助、三右衛門同音であつた、涙が陽に焦けた主従の頬に光る。

「忝い、其方たちの辛勞の甲斐」

武之助も言葉を呑んだ。

清水は近し、永居は面倒と、血汐の跡は洗

い流した、勿論仲間達の死骸は谷底へ、重四郎のは長持へ、かくて四人は手足を清め、若党二人が長持を担いだ。

光明院では、家老の掛り人とあつて、重四郎を待ち受けている。

「是は是は、警固も御苦労、さて今日はよい日和でござつた。そのまゝ此方へ」

長持は若い僧達が持ち添えて控えの間へ、武之助兄弟も随いて上る。

「では、もう出て頂きましようかな」

住職が気軽に寄るのを、文之助、

「いや、御寮人の参られる迄お待ち下さい」

「左様か、したが」

「もう直ぐお着きでござろう」

一寸手持無沙汰になつた。その時、山門を

一挺の山駕籠が潜つた。

小近であつた。

彼女が控えの間へ入つて来た時、文之助は顔を伏せた。

「おう、是は是は、さあ御主人にもお待ち兼ねであらう」

長持の蓋を住職が開いた。

「あッ」

首の無い、血まみれの骸が静かに横わつて

いたのである。

「首尾よう御本懐、ほんとうにおめでとうござりまする」

文之助にとも、武之助にともつかず、小近は頭を下げた。

「小近どのとやら、此の度の御援助、言葉には尽せぬ、是此の通り」

武之助が手をついた。

住職は真蒼になつて双方を見比べていた、眼がガラスのように空虚であつた。

「御住持、我らは重四郎殿に親を討たれた者今日十二年の念願を果し申した、お騒がせ

したが公許の仇討でござれば、お宥し願ひたい」

「それは、それは」

住職は言うべき言葉が見付からぬふうであつた。

「妾、主人と別れを致しとうござりまする。」

文之助さまだけお残り遊ばして」

武之助は氣付いて住職と座を立つた。

小近は重四郎の遺骸に合掌した。

「お許し下さりませ、妾も直ぐ参りまする」低い声であつたが文之助は、はつと聞きたがめた。

白い顔を文之助に向けると、

「文さま、是でおくにへもお戻りになれましよう」

「そなた無くば叶わなんだ望み、何と申してよいやら」

「文さま、最後のお願い、ちかはこゝで自害仕りまする、お見届け下さりませ」

思いつめた声音が然し澄んでいた。

「何と申す、また何ゆえ」

驚く文之助に小近は、淋しげな微笑を唇許に漂わせた。

「文さま、たとえ方便とは申せ、夫の仇に肌を許し、刺え、胤を宿した此の身、お前さまお許しなされますか、また一つには、夫のためながら一旦身を委ねた人を、欺いて殺す手引をした妾、所詮生きては居れませぬ」

「小ちか……」

「女の我が身が怨めしい。文さま、妊つてからというもの、奥方さまと呼ばせらるゝに付け、いつそお前様を返り討ちに、と、はかない女の浅智慧、お腹立ち下さりませ、お恥ずかしうござりまするが、もう今で三月、若し此の腹のやゝを生んで了うたなら、それこそ情けが絡む、腹は惜りもの貸したものの、妾の操はお前さまの他に立てる人もなし、と観念

した今日の仕儀」

文之助の苦しげな表情を瞞める小近の瞳にじわじわと涙の露が盛り上り、唇が震う。

「文さま、お前さまにも重四郎どのにも、おわびは一つ、此の身を捨てて他は無い、なれど決してお二方とも怨んで居りませぬ、世の中にさむらいの義理、女の義理、是有る限りは妾は死なねばならぬ道理、せめてもの罪亡ぼしは、重四郎どのの脇差」

言いつゝ長持の中から取出した一尺二寸の脇差、

「是で腹のやゝ諸共、死んでみせまする」

たゞ一言、文之助が、武士は捨てる、そなたを妻に、と云えばよいのであつた、然し云えなかつた、仇の胤を妊んでいる女、それが自分のためではあつても、武士の道として今更妻には出来なかつた。

止めるべきではない、死なせてやるのが彼女のためだ。彼は、愛する女が自ら刃に伏すのを止めることも出来ぬ、武士の道の苛酷さを、しみじみ思つた。

小近は細腰に結んだ帯を、ぐつと押し下げた、淡い水色の地に紅葉を散らした晴着を、思い切りよく両肌脱いだ。

肩が、乳房が、快くくびれた胴が、皓々と

した艶を放ちながら文之助の眼の前で露わにされて行つた。

二十一の女盛り、円く滑らかな胸乳のわきから、悪戯っぽく腋毛の仄見えるのさえ艶めいている、三月という腹の膨らみが、妖しいまでに熟れ切つた女体の美しさを容まゝに見せ、形の良い臍が深くくぼんでいた。

端座した左の膝下に左の袖を敷き込むと、右袖で小近は、抜き放つた脇差の刀身を包んで、切先を三寸ばかり出した。

しごくように撫で下す左手につれて、膨らんだ腹の皮膚が、波を打つように弾みを見せた。白い顔が、しんと冴えた美しさである。

下腹へ力をこめた小近は、文之助の緊張し切つた眼の前で、張り切つた左の脇腹へ、ぐさつと刃先を突き立てた。

「ウウツ」

と呻き声を立てたが、押し耐えて唇をかみしめ、左手を伸ばして柄頭を押した、刃は吸われるように一寸余り腹に刺さつた、血がタラタラと流れると、左手を右手に持ち替え、臍の真下を一気に刃を引き廻した。三寸四寸と傷口は大きくなり、血が紅葉よりも色濃く着物の膝を染めた。

文之助は脂汗にまみれて苦悩と戦つていた

が、やにわに小柄を抜くと、髻を握り、ふつと押切った。

「小ちか、許してくれ、拙者今日限り武士は捨てた、是がせめてもの手向け」

呼びかけるといふより叫ぶようであつた。

切り取った髻を懷紙に載せ、血の溢れている小近の膝許へおいた。

「う、うむ」

呻きながら右脇迄六寸ほども切り終えた小近は、殆ど俯伏した姿勢で、ほつと苦しい息を吐いた。

「お、起して、抱いて」

切れ切れの呻きに、文之助は彼女の背後に廻り、そつと胸を抱くようにして起した。

乳房が青白く燃えるように脈打っていた。

黒ずんだ乳首は、苦痛の陶酔に張り切つて突つ立つている。

「苦しいか」

彼は最早死期の迫っている小近に、是以上の苦痛を味わせたくなかつた、小柄を左乳の下に突き立てようかと思つた。

然し小近は首を振つた、髪がはらはらと乱れた、微かな痙攣が文之助の体に伝つた。

「お、遅かつた、でも嬉しい」

遅かつたとは、彼が武士を断念するのが遅

かつたという意味であつた。

「小近、わしの妻だ」

肯きつゝ、ぐいツと右脇で一とえぐりした彼女は、刃を上に向けて、それでも、

「うむ」

と呻きつゝ切り上げようと焦つた。

片手で確り左の乳房を抱きながら、文之助は手を持ち副えて、彼女の右脇腹から斜めに左上へと切り上げた。

厚い脂肪層を切り裂く手応えが、切なく文

本誌にK通信の旧号在庫

本誌の旧号は左記の通り在庫しています。

昭和二十七年

○十月号○ 特集 切支丹迫害史

○十一月号○ 特集 宗教刑罰戦慄画譜

○十二月号○ 惑溺の愉悦特集号

昭和二十八年

○新年号○ 特集 縛つた女を描く

○二月号○ 責めの本説特集号

○三月号○ 特集 東西拷問くらべ

○四月号○ 錯倒の告白特集号

○五月号○ 特集 男性MASO

之助の手を痺れさせた。

掌の中で、硬く凝つた乳房が激しく痙攣し小近は抱かれたまゝ、がつくり首を落した、血が膝から畳へと溢れ落ち、彼の髻が血に浮いているようであつた。

文之助は小近の鳩尾迄切り上げた刃を握つたまゝ、涙を彼女の白い首筋へ落した。

文之助は其の夜、故郷へ帰る武之助の一行と別れ、高野への旅に立つた。

○六月号○ 特集 松井女史を囲む座談会

○七月号○ 特集 猿ぐつわ五態

○八月号○ 特集 被縛女体の研究

○九月份○ 特集 秘められた手記

○十月号○ 特集 偽らざる告白の記

○十一月号○ 特集 あぶまにやの手記

昨年九月份以前の分は売切れしました。各月の詳細目次は十一月号以前の誌上に発表してあります。旧号御入用の方は昨年度の分は一部送共九十円にて、本年度の分は一部送共百円にて急送申し上げます。

KK通信の旧号は第六号より第十四号迄在庫、一部送共二十円、六回分百円にてお送りします。目下第十五号発売中

吾妻新氏に最後的に答える

沼 正 三

吾妻新氏の「最後的な回答」なるものを讀んで、私も正直の所困つたものだと思つた。というのには、氏は「論すべき点が更に増えて讀者にご迷惑」という口実の下に、論争を回避され、前と同じ誤解を繰返して「回答」とされたからだ。一般的興味のないことに誌面を占領すべきでないことには全く同感であるから、以下氏と同じ位の誌面を借りて、短い記述をなし、私も本誌利用を打切る。要約のため非礼な言葉が生じても許して戴きたい。

七月号の私の文に対し、八月号に吾妻氏の文が出た。十月号に載つた私の文は、(編集の都合で十月号になつたが、)本来吾妻氏の文を見て一夜で草したもの、措辭に不充分の点はあつたかも知れぬが、然し虚心にお読みになる方には明らかなように、七月号の私の文を氏が誤解していることを指摘したものである。回答はその点に欲しかつたが、氏は回避された。のみならず、今度は十月号の私の文をも誤解されたのである。

例えば、「私(吾妻氏)」にマゾヒスティックな傾向がないかとお疑いだが」というのは十月号の私の文の九節冒頭をそういう趣旨に読まれたのである。けれど九節全体のコンテラストからいつて、そんな風に読めるだ

ろうか。自分から「マゾヒスティックな傾向皆無」という人を、そういうけど嘘じゃないかと疑つたつて仕方がない。第一「風流責各態」の筆者にマゾヒスティックな所などあるもんか。私が疑つたのは、自分からそんなことをいう人、即ちマゾヒズム心理に全く理解のない人が、「女のズボンを喜ぶものはマゾヒスティックであり、特にその姿に惹きつけられる人にはマゾヒストが多い(両語を区別している点後段参照)」というような、マゾヒズム心理に関する私の立言を否定する資格があるかどうかということなのだ。だからこそ吾妻氏でなく讀者中のマゾヒスト読者に、この主張の当否を判断して欲しいと書いてあるのである。もう一度よく私の文を讀んで下さい。

「マゾヒスティック」ということばの使いようにしてもひどい誤解がある。成程マゾヒスティックはマゾヒストの形容詞であるが、一般的にはマゾヒズムという性科学上の嚴密な概念の内包をなすいくつかの契機をおしひるげて広い外延を持たせて使っている。例えばフロベールの「サランボオ」が「サディステイツク」な小説であることは文学史上定評がある。しかしそれを氏のお好きな「クリスチ

ーナ」などと一緒にして「サディズム」小説というラベルを貼るわけにはゆかない。同様にジョイスの「ユリシーズ」は決してマゾヒズム文学ではない。然し主人公の性格や娼家における幾つかの場面を知る人は、それが紛本たるホメーロスのオディッセイよりも遙かに「マゾヒスティック」な作品であると断言するに躊躇しまい。この際あれは断じて「マゾヒズム」小説ではないと力んでも始まらない。右のような両語のニュアンスを当然の前提にして、アメリカのマゾヒスティックな性格を説いた私の言に対して、アメリカが決してマゾヒズム国家でないことを、母権社会や平安時代まで持ち出して、力説せらるる氏の議論は、このニュアンスを故意に(?)無視しておられるのである。滑稽である。第一私は前からそこを気にして、十月号の文の八節の終りでも特に、「私は現代がマゾヒズム世界だなどという云い方はしていない」と断つたのであるから、回答は、そこを区別した上で、滑稽かどうかを見て欲しかつたのである。

私は初めから、象徴としての女のズボンを説いているのに、それを因果関係の問題としてしか考えておられないのもひどい曲解である。服飾史家としての氏には因果関係以外は分らぬのかも知れないが。ジャンヌ・デュヴァルという黒人女をいくら歴史的に研究しても「悪の華」は分りはしないのだ。然し、もう止そう。一々あげて論駁追及するための紙幅を編集部に要求するだけの勇気がない。又

自分の書くものには森鷗外からDon Breunus Aleraまで引用しながら、人の文中に自説に都合の悪い引用が出ると「引用癖はおよしい。」と決めつけるような勇気を有する人とこれ以上議論する勇気もない。

けれど根本的なことで一ついつておきたいのは、「専門家の色眼鏡」ということだ。氏はギルの「衣裳論」も、花森安治（パーマはかけてるがスカートはいていない管）も、非専門家である。ジャーナリストであるという理由で、専門の衣服研究家たる象牙の塔の頂上から、一発で射ち倒してしまおう。そして多くのデザイナーは、気の毒にもスラックスということばを私と一緒に使ったが為に、氏によれば全く専門家でないのである。

私達は勿論専門家を尊重する。二十五年の研究暦には敬意を表しこそすれ「かんにさわり」はしない。然し、専門家の議論に専門家なるが故のひとりよがりがないかどうか。そしてそれが専門外のことにも関係する時、専門家なるが故の偏見を生じないかどうか。これは留保しておきたい。例えばチャタレイ事件の控訴審はあの小説を猥褻文書と判決したが、私達は判事が法律の専門家なるの故を以て、その判決に服しはしないのである。何故ならそれは判事の専門でない文学に関するからだ。女のズボンについても事情は同様である。十月号の文でも既に書いたように、私は

女がズボンを穿くのは暖くて活動的という合理的理由からであつて、性的理由に基くのではないという氏の論旨を認めるのに躊躇しない（氏は今回も又長々と書かれたが無用であつた）。氏をまたずとも、女についての著者である衣服研究家（但し昭和二十二年に研究暦十五年と書いているから、吾妻氏より四、五年研究は浅いが）村上信彦が、以前からそういう議論をしている。然し問題はそれが性の分野において有する意味なのである。それも象徴的意味なのである。ところが氏はエスキモーの服まで引用して、女がズボンを採用した本質を説明しようと努力される。滑稽である。ここでは氏の衣服専門家としての経歴と自負とが、却つて問題の本質を見ることを妨げているのだ。丁度判事の法律眼がチャタレイを正しく理解し得なかつたように。

いや、性の方面でも自分は二十年の研究暦ありと吾妻氏は反論されるかも知れない。然し残念ながらそれはサディズム研究の二十年であるらしい。私の問題に正しい把握を示す資格としては、その研究暦の長いほど、この場合にはマイナスでしかないのだ。氏よりも研究暦は浅くとも、アブノーマルな点の全くない村上氏などに比し、吾妻氏の論が偏よつてくるのは、結局衣服研究とサディズム研究と、二つの専門家の色眼鏡をかけておられるためではないだろうか。

勿論私もマゾヒズムの濃い色眼鏡をかけている。すべての現象をこの眼鏡で見るとどう見えるかについて「手帖」をかいている。それがたまたま吾妻氏の興味を喚起しえたらしいのは私として光榮至極であるが、元来はマゾヒズム党の読者のための文字である。スラックスに限らず、私の文にはすべてマゾヒズムのライトがあてられてゐることは、指摘されるまでもないし、読者はそれを承知で読む人ばかりである。ただ私はどこまでもマゾヒストとしての立場を守つて物をいつてゐる。

反対のサディズム領域のことにはまで客観的専門的立場から口を出したりはしない。氏は私に謙虚になれと諭されるのであるが、私はそれだけの謙虚さはもつてゐるつもりであり氏もそれはお認めになるであらう。最後に私は「茶碗」以外にどれだけの家具が、家庭内において「武器」として使用しうるかに深甚なる関心（利害）を感じてゐるものであることを附言し、吾妻氏へのお答えと致したい。

◎吾妻新氏及び沼正三氏を煩しましたズボンスラックス論争は本号にて一応打切ることと致します。両先生の該博なる知識と冷徹なる論理は読者諸氏にとつて大いに参考になつたことと思ひます。編集部から両氏へ誌上を以て厚く御礼申し上げます。

女奴隷の手記

北山カオル

私、女囚五一二号は、只今じめ／＼した監禁室のコンクリートの床にじかに坐つて薄暗い電燈の下でこの手記を書いています。女囚となると同時に自由人としての権利は剝奪され、生殺与奪の権を持つ奴隷商人兼看守の監視下に置かれる私は、現代法治国の女囚でなくかつての西欧の伝統的奴隷生活を強いられるのです。その不自由さ、苦しさ、恥しさ、総てが甘く私の胸を締めつけ、この生活の総てが私の身内をたぎらせるのです。私は今ブラジャーとパンティだけの素肌に、粗く厚い麻の奴隷衣を着て、手首足首に鎖のついた厚い革の輪を嵌められています。正坐している足の痛みもさることながら手首の鎖は十五糎位、ペンを動かすのがやつとですのに私の所

有主は書くのが遅いとか文章がまづいとかを理由に一定の時間毎に廻つて来ては私を鞭うつのです。奴隷衣は所謂南京袋の厚さですから可成の強打も、奴隷衣がチクチク肌をさすこと程耐えられなくはございませんやがて足蹴にされ打倒された女奴隷は体中を駆けめぐる熱い血に身を委ね、暫くの間眼を閉じてうつとりと妻、女囚、女奴隷の生活を回想します。縄の味、鞭の味、汗を流し涙を流し悶え呻いた数々の拷問、お仕置。あれを想いこれを偲ぶと、勃然と書きたい意慾が

湧き起つて再び机に向います。

朝早く起き鞭に追われて労役に服すと、すぐに窓一つない監禁室に入れられ外から錠をおろされます。食事は差し入れ、用便は持ち込んだ便器に足して、時間の観念の全くない世界に一日放置されます。

女奴隷の所有者が寝入っている奴隷を文字通り叩き起す時、はじめて一日が始まるのだ



と知り、便器を始末し朝の労役に服すのですが、この日課は全く単調で鞭で打ちのめされうつとり回想に耽ける時以外、かつて知つたどの長期刑にもない耐えられない苦しきです。一日の執筆時間が終ると外からスイッチチをひねつて灯を消されるので、窓一つない息苦しいまでにむし暑いこの真暗闇の中を女奴隷は手探りで片隅の藁と蓆の寝床へ這つて行きます。

三日に一遍の入浴と毎朝の冷水浴が許されますから健康と清潔は保てますが、夜になればやはり異様な「女」の体臭に悩まされむせび悶える私なのです。

今まで夫と二人きりの生活を他人の前に展げることなど考えてみたこともございませんでした。唯今こうして筆を執つていても、これを読まれる方が示される反応のほのかな期待よりは私のマゾの女囚の生活が他人に知られてしまう淡い感傷が先に立つのです。

思いに耽りながら書いている私の筆は遅々として進まず、やがて女奴隷の所有者が鞭を持つて現れ、私にマゾの歎びを身を以て味わせてくれることでしょう。

私は中流家庭の生れでした。私が今の所有

者に総てを捧げて奉仕を誓うようになる迄は特に目立つたマゾ的性向はなかつたようです。小学校を優等で卒業し、近くのC女子学園に入学しましたが私はジミな性質で生家と同じ様な中流家庭の主婦として、二人か三人の子供を育てることに生甲斐を感じる様な生活を夢みた、極く家庭的でありふれた娘だったのです。

二年生のお正月、お友達のお家で行われたカルタ会で私にも「お姉さま」ができました。四年生のマユミさんという方、お友達の雪乃さんにも「お姉さま」でありながら、

私にもいろいろ女の生理を教えて下さいました。私は「マユミお姉さま」が学校を卒業翌年の春お嫁に行かれる迄可愛がつて戴いたの。グループの中でも私と雪乃さんとお姉さまは特に仲が良く三人の秘密の楽しみを持つこともありました。お姉さまは今思うとマゾ的傾向があつたようですが雪乃さんも私もサディストではありませんからお姉さまは自分がサディストになつて私達を対象に楽しんでいたので。大体おとなしい私がヒロイン、雪乃さんが恋人、お姉さまが悪人になつて私と雪乃さんのどちらかが囚われ、助けられると同時に悪人を亡ぼしてハッピーエンドとな

るのです。私が三年から四年にかけては思い切りロマンティックな筋書を作り簡単な衣裳も手製で、時には英語のセリフを使つたりしました。その内に私は悪人に捕つて縛られ責められることが何とな、恥づかしく、それでいて嬉しく体中がほてつて来るのを感じるようになってきました。

三年生の十一月、学芸会に私達のグループで演劇をやるという話が出ました。お姉さまは御自分が悪い大臣をやり一級上のMさんの侍従長と二人で王女の私を責める場面の挿入を主張したのです。

柱に縛りつけられた私が王子の居所を白状せよと迫られて頬を打たれ革の鞭で打たれる処でお姉さまは床を打つ筈の鞭で本当に私を打つたのです。私はじつと耐えましたが思わず涙があふれ、助けに來た雪乃さんに抱かれた時は本当に泣きながら劇をしていました。だつて大勢の前で鞭打たれたのは初めてだったんですもの。この劇中のヒロインになりきつた錯覚、涙をにじませたあの瞬間が強く心に烙きついたので、私のマゾヒストとしての出発だつたのでしょうか。

翌年私達のグループはまた劇をすることに決め、既に卒業なさつたお姉さまが演出をし

て下さいました。

私の扮した従軍看護婦が某国の特務機関に逮捕され責められるのですが日本軍の機密は遂に漏らさず、やがて救われて雪乃さんの将校に抱かれて死んで行くという軍国美談でした。拷問係にはMさんが扮し、お姉さまの演出で容赦ない拷問にかけるのです。練習の時に友達や先生方の手前スポンジを着込んだり打つ蹴るは真似だけですが、当日は皆がトリックと思い込んでいる舞台で私は本当に締木に架けられ、鞭で打たれ、足蹴にされ脂汗を流し涙に濡れながら必死に演技を続けました。Mさんはお姉さんの影響で本当のサディストになつていたそうで、こわい程眼を光らせて私を責めました。この真に迫つた責め場のため私達は「変態グループ」という名を頂戴してしまつたのです。私はヒロインの悲劇的生涯が好きで被虐の欲びなどと云うものはまだ殆ど判りませんでした。責められることは厭でもなく、大好きなマユミお姉さまの愛の表現と思つて却つて欲び位の気持がありました。それでもこの程度のことはマゾの発芽位のもので、只今の様なマゾヒストになつたのは私の総てを捧げ尽くしてからのごさいます。

私が五年生の春、マユミお姉さまは結婚、そしてそれを契機に私達のグループも解消しました。そのお別れの時お姉さまは私にお友達を男性を紹介して下さいました。何でもお姉さまとは演劇関係のお知合なのだそうです。どちらかと云うとやせ形ですが筋肉質の体で細面色白の優しそうな方でした。この方が今の女奴隷カオルの御主人です。テニスが御上手で今でも時々御相手をするのです。お姉さまの御紹介と、それ以上にその北山さんという方の立派な人柄にうたれて私は急速に近づくになりました。半歳も御交際すると私はすっかり北山さんに惹かれこの方の妻となつて家を守り子供を育てたいと夢みるようになりしました。それでも私は生来の内気から北山さんに告げることができませんでした。女学校を優等で卒えた時、私は両親に北山さんへの愛を打明けました。母は反対でした。というのは北山さんには両親がないので昔氣質の母は親の無い者へ娘はやれぬと反対したのです。結局仕方なしに私は母の氣が変る迄待つ心算でN女子大へ入学しました。

或日私は思い切つて北山さんの氣持を打診しました。

「僕が結婚できる女性はその人一人だけなんだ。」私は居たたまれずマユミお姉さまの処へ行つて泣きました。するとお姉さまは「馬鹿ね。それは貴女のことじゃないの」と云うのです。

「ね、お姉さま。私、あの方の処へ行きたいの。」

「貴女がその氣なら北山さんの処へ行つてあの方を誤解したお詫びをしていらつしやい。」

「私、いゝ奥さんになれるかしら。」

「ただね、あの方はサディストなの。私もあの方を愛しているけれど、私にはとてもついて行けないし、あの方はずっと前から貴女を見そめて待つてゐるから、私は諦めて今の結婚をしたの。淋しいのよ、私。でも貴女の成功を祈つてゐるわ」

私の謝罪を聞いていた北山さんは

「やつと僕の氣持が通じたんだね。有難う。」

だが僕が誤解されたことは許せない。それ相應の罰があるけれど覚悟はいいだらうね。」

「えゝ、どうぞ。」

「よし、服を脱ぎ給え。」

「えッ。」

「服を脱げと云つてゐるんだ。」

瞬間私は本能的に処女の貞操を思いました

が、負け嫌いな私は思い切つて服のボタンをはずしました。泣きそうな顔で全裸になった私に北山さんが下さったのはグリーンの袖なしのワンピースで、両肩はホック、背筋から下へチャックでとめてあるものでした。 ※



す。全裸でないのがせめてもの慰めでした。「僕がよしと云う迄、姿勢を崩してはいけな

※「これが仕置着さ。マユミさんもよく着たんだ。これなら上から縛つても簡単に脱がせられるからね。それから仕置の時は僕が許さない限りズロースをはいてはいけない。」

て許されたのですが、その間僅かの姿勢の崩れも容赦なく背中を力一杯打たれました。その瞬間私はマユミお姉さまとの劇を思い出しました。劇中のヒロインになりきつた気持、何故かしら身内が熱くなるようなあの思いでに胸を衝かれたのです。

「こんな愛し方しかできない僕がやはり好きかい？」北山さんが私を縛つたまゝききました。

「えゝ、好きよ、好きよ、大好きなの」私はうわ言のように呟いていました。

「僕と結婚したつて普通の妻になれないよ。結婚なんて事実上の隷属なんだからね。」

「えゝ、いいの。私は貴方の奴隷になつて何でも云うことをききます。ね、いいでしょ」

「君は奴隷が主人を裏切つたらどんなことになるか知つてる？」私は暫く考えて、

「その時は貴方の存分にして下さい。殺されてもいいわ。」と云つたのです。

「君を殺したりなんかできないが……。とにかく僕は何をしてもいいんだが僕の妻は隷属と奉仕以外は許されないのだ。それでよければ結婚して貰いたいんだよ。」

私は熱い体温を感じながらじつと北山さんの言葉を聞いていました。いつのまにか私は

マゾヒストになりきった錯覚に陥っていたのです。

「それでいいの。ね。私を貴方の奴隷にして……」「そんなに女奴隷になりたいの？」
「女奴隷」
「女奴隷」という声が快い響きで胸をうちます。

「ね、許すと仰しやつて」

「君のお母さんが反対しているからなア。向う一ヶ月、君を奴隷にして訓練しよう。そしてその間に君のお母さんの承諾を得られなければ、時が来る迄お預けだ。」

「やりますわ。きつと。だから結婚してね」
それから一ヶ月私は奴隷になるために通いました。学校は家政科ですから左程負担にならなかつたのですが、毎晩の調教にそして母の叱言に、肉体的、精神的疲労は非常なものでした。このことの心労が原因でしようか母は心臓マヒでぼつくり亡くなつてしまつたのです。幸か不幸かこうして私達は結ばれました。

間もなく学校もやめ、完全な女奴隷になつたのです。奴隷といつても女ですから、つまり夫の玩具なのです。時には重労働に服することもあります。私が相当寒気には強いので始終薄着でいますから、大した理由もなし

に唯罵られるのです。仕置中御不浄へ行くのは夫の許可が要り、後手に縄かけられたまま夫の手で用を足させられるのです。いくら夫婦でもその時の恥かしさは口では表せません大切な場所や丸く張つたお尻が無防備で夫の前に晒される時の心細さ、恥かしさ、お判りになりますかしら。

入浴も同様に行われます。夫が弄ぶのに最も都合のよい姿態に縛られ繋がれているのです。自分以外の手で衣服が剥がれ、体の隅々まで洗われる裸体、しかもそれが浴室の鏡に映つて総てが私の眼にはいるのです。縄の喰込んだ裸身が消え入りたい位恥かしくそれでいて眼をそらせられない私。

でも結婚後父が亡くなる迄は、私はお仕置を受ける妻でしたから総てが甘く楽しく奴隷妻への責めもお仕置も、呻きや叫びで苦痛を紛らわさなければならぬようなことはありませんでした。これが被虐の欲びなのかと思つた程私は幸福でした。

結婚後一年程たつた時、父が脳溢血で倒れました。二日間意識不明のち亡くなつたのですが父は女中相手に暮していたので、その間の看護や後始末のため私は一週間程家を離れたのです。父が倒れた報せを受けた時、夫

は、

「十日程淋しくなるかな。その代り君が帰つて来たらその分も一緒に償わせてあげよう」
「いいわ。私だつて貴方と離れているのは辛いんですもの。だから充分に可愛がつてね。」

私、どんなお仕置でも受けますわ。」

「その言葉を忘れるんじゃないよ。」私は誓約書を書かされました。

父が亡くなりさゝやかな葬儀も済ませ、女中にも暇を出してあと二、三日で家に帰るという晩、様子を見に来た夫はこう云いました
「もう二、三日の辛抱だね。すっかり準備をしておくから覚悟して帰つておいで。」

私はにつこり笑つて

「どうぞ。やつとお父さんの御送りもすんだし心残りなく帰れるんですもの、どんなお仕置でもいいわ。」天涯孤独の私は唯一の支柱を頼もしく仰ぎました。

それから三日目肩の荷のおりた思いで私は家路に急ぎました。夜八時頃、夫は私を玄関に立たせたまま急いで戸をしめ錠をおろしました。そして自分だけ上へあがり、冷然とこう云いました。

「北山カオル。お前はこの八日間主人のもとを離れて自ら誓つた奴隷の奉仕を怠つた。そ

れに關してはいかなる理由があろうと重大な犯罪であることに間違いはない。勿論相当の覚悟はしていると思うがお前の罪は死刑に相当するものだ。逃亡した奴隷は総て八ツ裂ということになっている。お前も本来ならば到底免れ得るものではないが、お前が女であることと所有者の特別の要望で死一等を減じ懲罰一週間の後改悛の情の認められる迄晒に処し、その後の健康状態により奴隷として所有者に下渡される。よいか。」

「あの、一週間も続けてお仕置?」

「そうだ。」

「そのあとはいつまで?」

「それはその時になつて決めるのだ。」

「――」

「これから収容するから早く仕度しなさい」

「はい。」私が着更えに行こうとすると、

「どこへ行く。ここに逮捕状もあるのだ。早くしなさい。」

「では、せめて御不浄だけ。」

「だめだ。」

夫はこんな芝居をあくまでも冷然と続けるのです。私は観念して足袋を脱ぎ帯をときます。長縄絆になると夫は腰紐と腰巻を剥ぎ取り縄をかけます。和服の時は腰が線の崩れる

のでブロースをはいていけませんから紐を締めない長縄絆では前が乱れ下半身が外氣にふれる度に何とも云えない戦慄が全身を走ります。奥の監禁室で一旦縄をとかれ囚衣に着かえます。囚衣の色はピンク、これは赤に次ぐもので囚衣の左の胸には女囚一号と私の名札がつけてありました。私が女囚になつたのはこれが最初だつたのです。その晩は手首足首に初めて鎖をつけられ監禁室の席の上で一夜を明かすことになりました。扉に鍵をかけ電燈を消して夫が行つてしまうと、窓一つない真暗

〔編集通信〕 (寄稿家への連絡)

○川合伊都子さま○ お手紙並に切腹の写真有難うございました、とんだお願いで果して聞き届けて頂けるかどうか案じていました。が早速お送り下され恐縮でした、大変参考になりました、膝頭から乳房へかけての豊麗な身体つきはまことに見事です、お腹が凹む位突き刺つている短刀の尖はすりつぶしてあるのでしょうか一度このポーズで試みてみましょう、絵も是非お見せ下さい

○沼田扶二世さま○ 原稿度々有難う、内容が大分きわどいので編集部にて検討していますから御承知おき下さい。

○桜井美知子さま○ 続篇只今受取りました。移り気遊戯は誌面の都合で掲載延期しましたがこの分と一緒に纏めて改めて組み直

闇の中で私はぼんやりと、亡くなつた父やマユミお姉さまを思いました。夫の許へ帰つた安心感からか私はいつのまにやら眠つてしまつたのです。

翌日から十日間、私が夫以外の存在を考える余裕がなくなつた、あの長期刑が始まつたのです。

したいと思ひます、お送り下さるお写真に差支えあるようでしたら顔の部分だけ缺で切り捨て、お送り下さつたら如何でしょうか。

○大井津子さま○ 女医の手記は掲載候補作品としてお預りしております。

○責めのアイディアを多数お送り下さつた吉崎氏及び樋上氏へ○ 写真をお送りしたいと思ひますので一応御連絡下されれば幸いです。

○宮下五郎氏へ○ 貴方のアイディアで撮映しましたので写真をお送りした所返送されてきました、何分の御連絡を待ちます。

○辻一二氏へ○ 御批評大いに参考になりました、厚く御礼申し上げます。



中共引揚者の手記 前島 芳雄

(一)

牡丹江市から東安に移された時一緒に行つた者は総勢二十二二人、李とは二度ともう会う事も無いだろうと一人物淋しい気持ちにくれた。それもその筈、牡丹江と東安は日本里にしても約百里近くあり、汽車でまる十二時間かかる。

私は同行の者と離れて只一人去り行く思い出多い牡丹江をじつと食い入る様に眺めて居た。戦後まだ十分修理のできて居ない鉄道はガク／＼と大きく揺れるので、私の身体中未だ癒えない傷の痕が、震動につれて腫物をもむ様な痛さ、そして瘡をさする様な心地良さ。一揺れごとに私はうつとりと夢心地の様

な自己麻醉に、誰とも言葉を交えず、只窓外の豊かな秋景色を眺めていた。

東安に着いたのは美しい秋の入陽が空を金色に染めて居る午後八時頃だった。その晩は駅の近くの工場の大倉庫で一泊、次の朝私達はトラックで街より約六十華里（約八里近く）離れた昔の開拓団部落に連れて行かれた。

周囲を一望の下に見渡せる小高い丘、西の方かすかに連々と重なる山、東はゆるやかな起伏を見せて眼の届く限り、何処迄も／＼続いて居る畑、澄み切った秋の空は果し無く広く高い、私はその雄大無辺なる丘に立つて心から快哉を叫びたくなった。いやそればかり

が私の歓喜ではなかった。なつかしい日本人が居るのだ。それも二人、噫こゝ一年と云うものは一度として日本人と会った事も無く、又顔を見た事も無かったのだ。

今後の注意だとか、仕事に対する心構えだとか、稲刈りの注意だとか、色々うるさい話があつた後、私はすぐ別の棟に居ると云う日本人を訪ねて行つた。炊事場で働いて居る二十七八の無精鬚を生やした男、岸本と云う名前だそうだが、何処か少し足りない様な、陰気な男、一言二言話したが私は何の親しみも感じなかつた。もう一人は場長の給仕をして居る三角光男と云う子供、やつと十四五になるだろうか、眼のクリ／＼した愛らしい顔、話をしても大人の言葉がまだ十分わからず、満語なら一人前だのに私との会話中、所々いぶかしい眼色をしてポツリ／＼と話す姿、異性よりも同性を求める私の心は、いやが上にも頭をもたげて来るのだつた。思い切り両手で抱きしめたい衝動にかられながら、私はじつと心を静めて出来るだけの優しい言葉で始終微笑を見せ乍ら話し合つた。こんな辺鄙な所で日本人とて少なく、すぐに良い友達になれて、やがては私の慾望を満足させてくれるだろうと思つたからだつた。

それから毎日朝は五時頃から夕方八時、時には九時頃迄水田の稲刈りに追い使われた。真夏は過ぎたとは云え、満洲の残暑はシリ／＼と皮膚をやき、渇りに咽喉がヒリ／＼する。腰をかきめて刈る一鎌一鎌に、汗は玉となつてした／＼り落ち、眼がボーとかすんで来る。しかし私はその苦しい労働の中で常にはのかな慰めを求めて居た。朝昼夕、三回とる食事の時はきつと光男と一言二言交すことが出来た。そして一日々々経つ中に次第に私に対する親密の度を増してくるのがはつきり感じられた。薄暗い灯りの中に無気味に露出して居る両丘の肉塊、肉に強く食い込んで紫色に稿が織りなされて居るグロテスクな被縛体私の疲れた身体は、夜眼をつむると李の姿を追求めて悶えた。稲刈りもどうやら終りに近づいた時、上級からの指示があり、私を連れて同行十二人、稲刈りが終ると同時に六十華里ばかり離れた山へ伐採に行けとの命令だった。

噫、その時の私の悲嘆の仕方、ようやくにして光男と親しくなり、今では彼を夕涼みという名目で、薄暗がりの野辺を散歩に引っぱり出したり出来るようになったのに。しかし何とも仕方がない。私は飽迄も囚人あがりだ

つた。それに伐採は一冬だし、又此処が農場本部になつて居る為、よし山へ上つて居ても時々連絡やお正月等で下りて来て光男の顔を見る事も出来る。明日出発と決つた夜、私は光男をさそつてダラ／＼と田んぼの方へ下る畔道を歩いて行つた。暮れるに遅い満洲も九時を過ぎると、星が一面に美しく輝いて居る。私は云うに云われぬ淋しさに只黙々と細い道を光男と肩を並べて歩き続けた。円い愛くるしい少年の顔は夜目にも白く、私の心をかきたてる。

「前島さん、どうしたの？」

何時も色々と少年の好きそうな話を面白く話すのに今日は黙りこくつてばかり居るので不思議そうに聞くのだつた。

「別にどうもしないよ、しかし明日山へ行くのかと思つたら、急になんだか淋しくなつちやつた。」

そう云い乍ら私はそつと光男の手を握つた。少年はちよつと引つこめそうにしたが、私が離さないのので別に強く引こうともしない。軟い細い指、気持良い感触が伝つて来て私の全身を血管の様にかけ廻る。夢の様な氣持で尚も暗い畔道を求で歩いて行くと「もう帰ろうよ、大分遠くへ来たから」

光男が云つた。

「うん、それでももう今晚で終りだから、明日はお別れだよ、お前とも暫く会えないからね」

私は恋人にさ／＼やく様に答えた。

「けど、あんまり遅くなると変に思われるよ」

ビクツと私の背筋を冷いものが走つた。そうだ、私は未だ完全に自由になつてないのだ、獄から出たとは云え、囚人と同じ待遇を受けてるんじゃないか、彼の手をとつて素直に廻れ右をした私は、只じつと欲望に負けそうになる心を押えつけていた。

電灯の設備とてない辺鄙な部落、かすかな灯油ランプが小さい窓にチラ／＼と揺れてゐる。どこかの絵にでもあり、そんな夜の景色、宿舍の百米程手前だつたらうか、私は無意識に光男の前に立ちふさがるように身体を押しつける。両腕を大きく拡ろげて抱きしめた。

あんまり不意だつたので光男は暫くの間、ボカンとしていたが、熱い私の息を頬に感じて必死に切り抜けようともがいた。然し所詮十四才の子供の力、叫ぼうとする唇を私の厚い唇がびつたり上から押えていた。固く歯と歯とを噛みしめているのを強い舌の先が押し開いてゆく。カツフエインの様な唾、なめら

かな少年の舌先にふれた時は氣も遠くなりそうだった。

変態的な生活はしては来たが、まだ女に接した事とてなく、初めて味う接吻、両腕の力が夢のような中で弱つたときに光男は私の手からぱつと離れて駆け出そうとしたのへ

「光男、もう何もしないよ、逃げなくたつて」

ようやく捕えた片腕を強く握つた。光男は頬をふくらませて怒っている。いや怖えていゝというのが本当だろう。

「光男、怖がることなんかないよ、俺はお前が可愛いくて可愛くて仕方がないんだ」

「知らん、知らん、前島さんたら、変なことばかりして——」

「かんにん、く、悪く思うな、な」

私は少年のポケットへ、スパイ容疑で捕えられる前から持つていた虎の子の二万元（現在の邦貨で約一万七八千円）をそつと押し込んだ。

「これ、光男にあげるよ、山へ入るのに金なんかいらんからナ、お前、なんでも好きなものを買えよ」

「お金？ そんなものいらんよ」

ポケットから出そうとするのを私は上から

しつかりと押えつけて、

「良いから、構わんよ、俺はお前が本当の弟みたいな氣がするんだから」

光男は今しがたの私の野獣のような行動も忘れたかのように「有難う」と一言いつてさつさと歩き出した。

(二)

山へ入つた私は、まるく六カ月というものは厳寒零下五十度、六十度という中で、コチ／＼に凍つて棒で叩いた位では割れない位固い雪と戦いながら、日夜激しい重労働に服した。

けれど私の唇に残つた光男の唇の溶けるような甘い感触、牡丹江で牛馬のように鞭の下で蠢いているであろう李との思い出、それは現実が苦しければ苦しいだけ楽しい夢として私に生きる喜びを与えてくれた。何とかして早く山を下りたいという考えが樹を倒し、炭を焼き乍ら、雪が解けて大地のやわらかくなるのを心待ちに待った。

三日に一日は暖く、太陽の輝やきにもいつしか春の訪れを思わせ、一日一日と消え去つてゆく雪の下には此の一冬の苦しさを耐えに耐えた青い草の芽が枯草の間から顔をのぞかせてきた四月の末、私は子供のよう嬉々と

して山を下りた。頭の中は光男のことで一杯になりながら。

しかし人間というものは変なものだ、いざ光男と会つてみると、別に取り立て、言う言葉も見出せなかつた。

「おう、元氣だね、光男」

私はたつた一言そう言つただけだった。

「ええ、前島さんも雪焼けして前より元氣みたいだナ」

光男は私の心の中の悪魔なんか知らないから親し味深い言葉をかけてきた。

月日の経つのは早い、特に大陸は春になつたかと思うともう夏だった。そして夏も過ぎ早や晩秋となつた。私は相も変わらずその農場で日夜変化のない日を送つていた。変つたといえは私が炊事場の勤務になつたこと位だった。

此の頃では光男とも兄弟のように親しく話し合いふざけ合うようになっていた。夕暮のひととき、黄昏の中を光男の手をとつて散歩するのが私の幸福の絶頂だった。以前あのような残酷な行為にほのかな喜びを感じていた私にとつて、それは大きな変化だったかもしれない。然しその理由としては光男が日本人だったこと、余りにも年少だった為かもしれ

れない。

冬が目前に迫った北満の夕方は気温も五、六度に低下して薄い満人式の夜具ではストーヴを燃やしてない部屋は身ぶるいする程寒い。もうみんな布団にもぐり込んで寝ようとしている夜の十時頃だった。

「前島さん、今晚此処で泊めてよ」

光男がそう言つて毛布一枚持つて私の所へやつてきた。

「あゝ、いゝよ」

その時の私の顔をはつきり見たら、光男も変に思つたかも知れない。余りの嬉しさに私の胸はドキドキと音をたてゝ鳴つた。

「毛布一枚じゃ寒くてやりきれんよ、二人一緒に寝ようよ」

「うん、そうしたら此の毛布、上から掛けとくよ」

光男はそう答えると手早く裸になつて布団の中へもぐり込んできた。勿論寝衣といったものとしてなく、皆満人式に裸で寝るのが習慣になつてゐるのだ。まだ完全に發育しきつていない身体、筋肉に締りというものがなく、腕にも肩にもどこか女を思わせるような丸み



K.S.

「今日、どうしたの？」

私が聞くと

「今日、場長さんの所へお客さんが来たんで僕の寝るところがないんだ、それで前島さんのところへ行つて寝るつて言つてきた」

光男はこゝで寝るのがあたりまえといった口吻だった。

「今度からお客さんがなくつても此処で寝たらどうだ。そうしたら毎晩面白い話をしてやるんだがなあ」

「本当？じや一度場長さんに話してみよう。」

日本人同士だから、勉強教えてもらふといつたら、きつといゝつていうから」

「そう、それがいゝ、そうしたら本当に勉強も教えてやるよ」

光男は先に述べたように、日本人の学校もほんの少ししか行つて居らず、又日本人との交りも少く、従つてだん／＼大きくなつてくるに従つて最近特に日本語の勉強をしたいと口癖のように言つていたのだ。昔の伝記小説や映画の筋等を聞かせてやると目を輝かせて、いつまでも聞きたがつた。その晩も、もう他の者が寝しずまつた中で、ぼそ／＼と声を落して二時間程も「家無き子」の話をしてやつた。寝たのは十二時過ぎだったろうか。――

私は花園をさまよう美しい夢を見てハツと眼をさました。何時頃だろうか、美しい月が南の窓から差し込んで私と光男の寝ている所だけをクツキリ照らして居る。二人一つ床で寝て居るとお互いの体温が温かく、そつと向う向きの光男の肩にさわると、かすかな汗さえかいて居る。思い切り両腕に抱きしめたいなる衝動を押えて、私はそつと布団を持ち上

げて見た。肩も腰も胴も、フツクラとして私のゴツ／＼した身体つきとは全然違つた感じの可愛らしい曲線、そして寝てから暴れでもしたのかたつた一つ穿いて居るパンツがずり下つて、青い月の光に搗きたてのお餅の軟かさを思わせる様にもり上つた両丘、私はうつとりとそれを眺めて居た。心の隅からそつと悪魔が誘惑する、外の者も光男も皆スヤ／＼と氣持のよい寢息をたて、昼の疲れで熟睡を貪つて居る。私は自分の心に叱りつけた。光男は日本人なんだぞ、そして僅か十四才の子供なんだぞ、お前はそつと一つ床で寝た事だけで満足してれば良いんだと、しかし悪魔は反駁する。何云つてゐるんだ、こんな機会が又とあるものか、お前は毎日々々こんな日のある事をどれだけ夢見て来たのだ、さあ早く／＼と、

私の頭はもう何も判断する余裕がなくなつた、完全に悪魔に敗けてしまつたのだ、息のつまる様な一時だつた、額からタラ／＼と脂汗が流れる、もう一度じつとして皆の寢息をうかゞつたが、聞えるのは只ス／＼と安らかな息の音ばかり、月の光は窓から部屋の中を照らしていた。……しかし光男は何の抵抗もしないでグッス

リと眠つて居る。余り夜遅く迄起きて居たので十四才の小供では今時分首を斬られてもわからずにと云う程眠つて居たのだろうか、それとも知つて居て眠つて居る様な風をして居るのだろうか、私はもう、そんな事を考える事もしなかつた。そして温かい布団の中で満たした、骨の髄迄とける様な夢幻境に、その晩しつかりと光男を両腕に抱いて眠つた、それは長年も味つた事のない、安らかな／＼眠りだつた。李の時に味つたのと又違う、それは私の良心も、自尊心も、羞恥心も、皆取り去つて天国に遊ばせてくれた安らかな一夜だつた。

光男は、一週間程して本当に布団を持つて私の所へ寢みに来た。

「おうー、来たんかい、場長は良いつて云つたの？」

「うん、良く勉強しろつて。」

「そりや良い、布団は此処へ置いときな」

私は光男の布団をとつて私のと並べて置いた、頭の中は此の前の晩の事で一杯である、光男は知つて居て尚も私の所へ寢に來たのだろうか、それとも全然知らないのだろうか、しかしそんな事はどつちだつて良かった、青空の下で思い切りの大声で唱つて踊りたくな

つた、夜になつてから、何時もなら未だ床にも入らず無駄話をして居る九時頃なのに私はもう床を敷きにかゝつた。

「光男、どうして寝る？」

私は一つ床で寝たいのでつい聞いてしまつた、光男は何の事やらわからず、

「どうしてつて？　どんなにするの？」

「いや、……………」

急に言葉につまつたが、又すぐ、

「うゝん、あのね、此の頃寒いから二人一緒に寝た方が暖かいからさ、お前どうだい」

「どつちでも良いよ」

「じゃこうしよう」

私は心の中の歡喜をなるべく顔に出さない様に苦心し乍ら敷布団二枚、掛布団二枚で一つの床をとつた、こんな生活の中では一人で二枚の布団を持つて居る者なんて居ない、素裸になつた私と光男は厚い綿の中に氣持ちよく転がつた。

「ウワー、フワフワしてとつても良いよ」

光男は大喜びである、その晩も十二時頃迄色々私の記憶に残つて居る興味のある話をして聞かせてやつた。

「もうこれでしまいだ、また明日にしよう」

私が云い終つたか終らない内に光男は早や

スヤスヤと安らかな寝息をたてゝ居る、外の者はもうとつくに眠つてしまつて四囲は静かである、三十分も過ぎただろうか、私はどうしても眠れない、こちら向きになつて居る光男の身体にそつと右手をのせた。……噫、その時の氣持、何かしら心の隅に残る良心の苛責、けれど胸の中をドクドクと音をたてゝ流れて居る慾望の血はどうする事も出来ない。

強姦のスリルと云う事を一部の人は憧憬する、私もそうなのだろうか、何も知らずに眠っている少年を……。

恐らく若し今後妻を娶る事が有つても此の時の様な満足感を味わえないだろう。

(三)

何時しか一九四九年も暮れ行き、五〇年の新しき年を迎えて炊事係の私は日夜忙しさの為にクタクタになつた、中国人の正月と云えば一週間でも二週間でも、毎日々々豚肉の料理を、一度に十五種も二十種も作つて食べるのである、しかし私はそんな疲れの中にも光男との楽しみは一日として欠かさなかつた、此処三ヶ月と云うものは毎夜一人して悦に入つて居たのである、それは何と不思議な事であらう、相手が全然知らずに寝て居る、そ

んな事が有り得る筈が無いのに有るのだから。しかしお正月も過ぎて幾分炊事仕事も暇になつて来た二月、私はそろそろ不満を感じて居る様になつて来た、過去に於て李との変な交際の有つた私、無神経の光男の身体にはどうしても満足し切つてしまえなくなつた。何とかして苦しむ彼を見たい、何とかして抵抗して欲しい、そんな事ばかり考え乍らも光男をやり起すだけの勇氣も出ず三月が過ぎ四月になつた、そして私は又々異動を命ぜられたのである、しかしもう前に牡丹江を離れる時の様な悲観はしなかつた、たとえ何処へ行つたとてきつと又新しい、そしてつと私を満足させて呉れる友を見つかるだろう、と云うほのかな自信さえ持つて居た、別れる時、

「光男、元気でな、又来るよ」

と私が云うと、

「えゝ、前島さんも身体に氣をつけてね」

と云つて今迄の事、夜の悪戯を知つて居る様な眼が私を見る、その時始めてしまつたと思つた。知つていたのなら何んでもつとはつきりしなかつたのだ、それなら思い切り強い愛撫が出来たのに、けれど今はもう別れねばならない、光男の手を強く握つて「忘れたら駄目だよ、きつとな」

わけのわからない言葉を残すと動き出すトラックに飛び乗つた、異動と云つても遠くはない、東安市から此の農場へ来る時に一晩宿つた工場である。

噫、私は何んと罪多い人間になつたのだらう。私がトラックで工場の前に着いた時

「おゝ来たゝ。前島さん疲れたでしよう」

と荷物を受取つてくれたのは前に二三度来たことのある、やはり此処の工場長のボーイをしている眼のぱつちりとした色の白い可愛い、楊白喜という少年だつた。それからの私が楊少年を相手として如何に淫らなそして奇妙な一夜一夜を送つたか、こゝに詳しく書く勇氣はない。こゝ迄書き来つた私は奇くも中国の獄裡で味つた醜態を省てみて、その思ひ出も舞鶴での光男との一夜を最後として消え去ろうとしている。又真剣に生活と闘つてゐる今、そんな事も考えられない。然しそれも果していつの日迄続くだろうか。

自分の身体の中に巣喰つている心の悪魔が怖しい、私の在満中、まだこゝこの外日本憲兵の乱行や中国特有の怪奇な変態行為等について体験は沢山あるが、それは機会を改めて一先づ三回に亘つた私の手記告白を終ることにする。

あるマゾヒストの手帖から

沼 正 三

第三十七 フンデメンシユ (Hundemensch)

標題は「^{フンデ・メンシユ}犬たる人」「犬になる男」の義でシユテケルの用語である。

時は一九一八年。所はオーストリア・ハンガリーの都ウィーン郊外、^{ヘルヴェン・テルツト}精神病医 ウイルヘルム・シユテケル博士の診療室。博士と対座しているのは三十才位の美貌の婦人。

「なるほど、それでは結婚生活としては一年足らずにしかなつていませんね」

「ハイ、丁度結婚記念日の前日が開戦の日でございまして、それから三日目には宅も従軍しておりました。陸軍士官として覚悟はしておりましたことですけれど……」

「フム。御主人の御年齢は？」

「三十四才でございます。」

「賜暇がありましたらう？」

「ございました。従軍四年の間に二度帰宅しました。どうもおかし

く思えて来たというのも、この賜暇帰宅の時なんでございます。」

「詳しく承りましょう。」

「はい、初めの賜暇の時は別に変つたことはございませんでした。従軍前と同じ夫でございまして、同じように私を愛してくれました。」（ここで彼女は顔を赤らめた。）

「すると二度目の時……」

「はい、この前帰つて参りました時でございます。いきなり、「アグネス、僕のことをカロ（Karo）」つて呼んでくれ」と申しますの。

「ハンス、あんた、どうしたの」つて私も吃驚しました。「カロなんて、犬につける名じゃない。いやらしい。」「いや、僕はこの名が好きなんだ。前からこの名で呼ばれたかつたけど、我慢してたのさ。けど今度賜暇が終つて又前線に戻れば死んじまうかも知れないんだ。今の中にしたいことをしておかなきゃね。だから、今日からカロと改名するんだよ。」こう申します。愛しい夫が賜暇で帰つて来たんですから、思い通りの我儘をさせてやりたい気持で一杯のところでございます。こういわれては、返すことばも出ませず、

ハンスつて呼びたいのを噛み殺して、「カロ」つて呼んでみましたら、「ワン」つて返事が喉から出てくるのを抑えて私に聞かせないようにながら、抱擁してくれました。この時が、何か変な徴候を感じた最初でございました。」

「成程、外にも何かありましたか」

「はい、あのう……」（いいかけて、婦人は又真赤になった。博士がそれを助けるように）

「さあ、いいにくいこともありませんが、御遠慮なさらずに……」

御主人とあなたとの運命に関する事ですからね……」

「はい、最初の賜暇の時と違ひまして、一緒に床に入りましても、一向に何しませんのです。」

「フーン。性的不能状態だったのですね。」

「そうでございます。それで、アノ、いろいろと何しまして、やつとしまして、すぐアノ、続きませんの」

「色々技巧を弄しても勃起が持続しないのですね。」

「はい。その時は賜暇三日間でございましたが、とうとう駄目でございますました。」

「フーン。」

「ところで、近い中に、又賜暇で帰る順番が来ておりますの。」



「成程」

「ところが、先生、二三日前夫から手紙が来まして、いろいろなことをいつて参りました。私には夫の気が狂つてしまつたとは思われませんそれで御相談に上りましたわけなのですけれど」

「手紙の内容を伺いましょう」

「書き出しからして今迄のとまるつきり違ひるのでございます。今迄のは「愛するアグネス」とか「僕のアグネス」とかでしたのに、今度のは、馬鹿丁寧に「いとも気高き奥様よ」から始まりまして……」

「フム、実物をお持ちですか？」

「はい、持参致しました。これでございます。」

「拝見しましょう。」

——手紙——

いとも気高き奥様よ

この前の賜暇帰郷の時、奥様がカロと命名されました奥様の愛犬は、近く再び奥様のお傍に参ることが許されました。

奥様、カロを可愛がつてやつて下さい。けれどカロをば彼の身分相応に扱つてやつて下さい。この前カロがお傍に参りました時はカロは奥様の夫ハンス様の格式で迎えられました。カロはそのため恐懼し感激したあまり、遂に奥様をお慰めすることが出来ま

せんでした。

奥様、この度は、カロをカロとして迎えて下さい。奥様の御宅の玄関を入った瞬間から、カロを犬として扱って下さい。これによつてカロは真の自分を見出して、元気よく奥様をお慰めし、ハンス様の御不在を忘れるほどにしてさしあげることができるよう。

カロを犬として迎えるのに必要な道具はあらかじめ買いととのえて下さい。犬屋のベルゲルの店で、グレートデン用の大型犬舎をあつらえ、これを寝室の戸の入つて右側に置いて下さい。犬鞭は訓練用の先が編革になつたのにして下さい。首輪はハンス様のカラーと同じ寸法の十七時半のもので、内側に小さい針の植つてあるのを注文して下さい。この首輪は猛犬を馴らす時に使用するもので、奥様がもしカロにこの首輪を着けさせないと、カロは奥様に乱暴するかも知れませんが、是非御用意下さい。曳綱は普通のグレートデン用のもので結構です。口籠はベルゲルの店では売っていませんので、私が人間の顔に合うように設計したものを部下の器用な男に作らせたのがあるので、それを別送しました。尚食器と水容器が要ります。道具はこれで足りません。

カロがお宅に到着しました時の奥様の取扱心得を申し上げます。この前のように駆迄お迎えいただけなくとも結構です。又二人で外出することも考えていません。カロは奥様のお傍に止まれる全期間（多分此の度は十日間）を家の中で暮します。そこでこそカロは真の犬になれるからです。

玄関に入ると同時にカロは下着丈になり、靴も脱いで床に坐り両手について蹲ります。奥様は首輪を持つて出て、カロの首に嵌

めてやつて下さい。——もし、この指示に従わず、カロをカロとして扱わぬようなことを奥様がなさると、カロは忽ち狂暴になつて、奥様をひどい目に合せるかも知れませんが、御注意下さい。カロは奥様が果して自分をカロとして迎えて下さるかどうかを非常に心配しているのですから。この首輪をはめられるとカロは自分が奥様から犬として取扱われるのだということをはつきりと知りますし、又首輪の針の痛みから、急におとなしくなつて、奥様に対して何の手向いもしなくなります。そして、絶対服従の飼犬となつたしるしに、奥様のスリッパを舐めます。これ以後は奥様がカロにどんなひどいことをなさそうと、カロは少しも反抗致しません。

カロはきつとお腹を空かせて帰ることでしょう。奥様も、この前の時と同じように、一緒に食事するおつもりで待つていらつしやるでしょう。

「カロ、食事よ」

一言おつしやつて下さい。我が家の案内知つたるカロは直ちに食堂まで這つてゆきます。今迄はテーブルを挟んでハンス様の椅子が奥様の椅子と向い合つていましたが、今カロを迎える食堂にはハンス様の椅子はしまわれてテーブルに向う椅子は一つだけ。

カロはテーブルの下に入り、奥様の足の右手に坐ります。奥様は愛犬を遇する道を御存じ、間もなく、まだ肉の可成り残つた豚の片足がカロに投げられます。カロが飛びつくつと、

「お預けよ、カロ」

カロは暫らくは我慢しています。けれど腹の空いた所へ好物の骨を投げられ、その上、テーブルでは奥様のおいしそうな食事の

音を聞かされ、とうとう一口食べてしまいます。

「カロ、いうことがきけないのね、あとでお仕置よ。」

仕方ありません。カロはまだ奥様から本当の訓練を受けていないのですから。十日間の間に、このカロを舐めのよい犬に仕込んでいたきたいものです。行儀の悪かった罰として、カロのお預けは解放されず、奥様の食事が終つて、食べ残しが全部カロの食事皿に空けられても、カロはまだ食べることを許されません。帰宅早々ひどいお仕置を食つたものです。盗み食いせぬよう、カロに口籠をつけさせて下さい。

奥様の食後の散歩。カロの首輪に綱がつけられます綱を曳きつつ部屋から部屋へと家中を奥様が歩かれる。這いられない上に腹を空かしたカロはいつもおくられて、首輪をぐいと曳かれ、喰い込む針の痛みになつて前進するが、どうしてもおくれます。甘くしては舐けになりません。

「何を愚図々々してるのよ」

とうとう鞭がなり始めます。歩き疲れた奥様は寢室のベッドに腰を下して、

「さあ、少し芸を仕込もうかね」

チンチン、お廻り、取つて来い、………ありつたけの犬の芸を仕込んでやつて下さい。

「今日はそれ丈、食事しておいで」

やつと口籠が外され、カロは初めての食事にありつきます。食べ終つて、皿を綺麗に舐め上げた頃、ピューと口笛の音。カロは直ちに寢室に戻ります。奥様はもうお寝巻をお召しになつて、両脚を床についたまゝ、上半身はベッドに仰向け。

カロは心得て舐め初めます。趾の先から始めて、足の裏、くるぶし、こむら、ひざ、外腿、内腿………、右と左を交互に舐めつつ、舌を縦横に走らせて舐め上げてゆきます。このカロの舌先の仕事振りは奥様が充分御期待になつてよいのです。最後にハンス様の愛された箇所にて、奥様に充分の御満足をお与え致します。

奥様、カロをこのように取扱ひ、このように御使役下さい。繰返して申しますが、もし奥様がこの手紙の内容を戯談として、これを実行なさらないと、カロは奥様に乱暴を致しますよ。どうぞカロがおとなしい犬になるように取扱つて下さい。

あなたの愛犬なる「カロ」

— × — — × — — × — —

「成程、仲々変つた手紙ですな。」

「いかがでございますし。先生、氣狂いになつたのじゃございませんでしようか」

「いや、心神喪失して狂暴になるような氣狂いではありませんよ、これは」

「左様でございますか」

「ただ、やはり、この手紙にある準備はなさつた方がよいでしょう。準備してないと乱暴するぞと脅迫していますからね」

「恐ろございますわ」

「いやこの手紙の通うになされば恐いことはありません。乱暴は決してしませんよ。ただ、それじゃ、あなたの妻としてのお氣持が満足しませんね、それが問題です。」

「はい、帰つても、私に接吻もしてくれないようですわ。この手紙

のつもりじや。これが本気なら、先生、それじや一体、この手紙は本気なんでしょうか」

「本気でしようね。これは思いつめて書いていますよ。……先刻あなたはいわれた、「愛しい夫が賜暇で帰ってくる、これが見納めかも知れないなら、思いどおりのことをさせてやりたい」とね。その気持がおりなら、この手紙のとおりになさるのが良い。少くとも、御主人ハンス君を一番喜ばせる歓迎ですよ。」

「何という悲しいことをおつしやるのでしょうか。夫を犬にして酷く扱うのが一番夫を喜ばせる方法だなんて！ 私の強い優しい夫のハンスは戻つてこないのでしょうか、もう永久に？」

「そんなことはありません。ただ十日間の賜暇期間ではどうにもならないのです。どうせ直すのに役立たない期間なら、むしろ本人を喜ばせておきなさい、と申すだけです。戦争後或る程度期間をかけて精神分析治療を施せば必ず直ります。いや戦争が終つた丈でもひよつとするとずつと良くなりますでしょう」

「そんなものでございますか」

「奥さん、あなたは「カロ」という名について何も思い出しませんか」

「いいえ……ハア、あの、そういえば、思い出するような気がします。あゝ、そうです、何故今迄思い出さなかつたんでしょう。五年前結婚した許りの時夫が子供の時飼つていた犬の話をしました、それがたしか「カロ」という名でしたわ。」

「ほう、自分で飼つていた？」

「いえ、ハンスの父が大変犬の好きな人だつたと聞いていますからきつとその犬がカロだつたのでしょうか」

「そうでしょう。それで大体見当が着きますな。恐らくハンス君の御父さんは子供よりもカロの方を可愛がつたに違いありません。ハンス君の御母さんは？」

「早く死んだと聞いています」

「フム、お母さんがいない、ハンス君はお父さんの愛をひたむきに求めたに違いない。所がお父さんはハンス君よりカロの方に關心がある。幼いハンス君は淋しい夜の床で度々カロを羨んだに違いない犬になりたいと思つたに違いない。「もし自分がカロに負けないような犬だつたら、カロ自身だつたら、お父さんはもつともつと僕を可愛がつてくれるだろう」とな……」

「あゝ、可哀そうなハンス！」

「子供の願望は消えたように見えても心の奥底に残っているのです。ハンス君の願望も一時は潜在していた。戦場という異常な環境で、サディステイックな傾向が強く呼び出されると共に、その反作用としての罪障感がマゾヒスムスを育ててくる。ハンス君の場合にはその好適な材料として、潜在していた幼時の願望が出て来たのです。だからサディスムスも伴つています。自分のいうことをきかなければカロは狂暴になるといつて、あなたを脅迫しているのがそれです……」

「……………」

「難かし過ぎますか。だつたらいいのです。とにかく、御主人の神経症は充分治療の可能性があるので、そんなに心配なさることはありません。」

「ありがとうございます、これで一寸安心致しました。それでは近く帰つて参ります時には、お話のように、手紙で申して来たとお

りにしてみますわ。」

「そうなさい。自分の理想の夫が大になり下つてしまふのを見ることは、大きな試練でしょう。あなた自身も愛の天国から墜ちたように感じられるでしょう。御氣持は重々御察しますが、いずれは又樂園を回復できるのだと考えて、勇気を失わないでいることですね。」

「さようなら。先生。」

「さようなら。奥さん。」

×

×

×

これはシュテケルの「男性の性的不能」の症例に基いて多少舞文曲筆してみたものである。書中「男性性能力の特殊条件」の章と、「戦争と性的不能」の章との両所に取扱われている材料である。シュテケルは結局この患者自身を診断していないので、例の快刀乱麻を断つ夢の分析が出て来ないのは残念であるが、この後、この夫から妻の所へ、洪水のように、同一主題の手紙が殺到したこと、結局帰宅した夫が、手紙通りの犬の場面を実行し、クニリングスしてからでなければ性的能力がなかったことを記している。手紙の文章はシュテケルの摘要を骨子として私が敷衍して再構成したのであるが、博士の診断の言葉は原文に基いている。シュテケルにはこれは手頃な資料だったと見えて、堀秀彦訳「近代の結婚」の中にも（第五章）、この話を紹介している。

因に、この「男性の性的不能」はマゾヒストに限らず、鬼山氏のいわゆる「宦官亭主」族にとつては、一読まことに得るところの多い精神分析派の名著であつて、二冊本の英訳も出ているから、悩める人はついて読まれるがよい。

原稿募集

- 一、本誌の内容に適當した興味あるあらゆる作品を募ります
- 一、すべて未発表の作品に限ります
- 一、作品の形式、長短は問いません
- 一、誌上匿名は御自由です
- 一、原則として原稿の御返戻に応じかねますがなる

- べく早く採否或は批評を御返事する筈です
 - 一、採用篇は掲載後作品相応の謝礼差し上げます
 - 一、締切日は特に定めません
 - 一、責絵、写真等についても御応募下さるようお待ちいたします
- (奇譚クラブ編集部)

代理部月報

（待望のアルバム第二集完成近し）
バラエティに富んだ三十二枚の
写真真集、次号に詳細発表

【本月の新版】 今月より新しく分譲を開始したるもの

女が女を責める

(オール・ヌード) (一)

(二女対一女)

キヤビネ版

三枚一組 三百円

女が女を責める

(オール・ヌード) (二)

(一女対二女)

キヤビネ版

三枚一組 三百円

高手小手 三態

豊麗なる女体に掛けた
物凄く緊縛感！
(新人モデルに依る)

キヤビネ版

三枚一組 三百円

(何れも送料共)

一態

(一) 一女の正面ハリ

(二) ツケ 三女の正面と横

面

キヤビネ判

二枚一組 三百円

奇譚クラブの放つ臨時増刊号

(十二月月上旬)
(発売予定)

◆サディズム文学の決定版◆

本書一度出ずれば群小のサディズム小説
眼色なし

美少女に対する折檻と凌辱の世界を描く!

サディ・ブラッケイズ

吾妻新・訳

アリスの人生學校

吾妻新氏の麗筆によつて心に
くき迄執拗に描写された堂々
五百枚に近い長篇サディズム
小説、口絵、挿絵多数挿入内容のあらまし 第一部では孤
児となつた美少女アリスが継母の
ために奴隷のように教育される、
ヴォルテールの「カンディッド」
をこつそり読んで次々と貸したの
が発覚して四人の娘がそれぞれ異
つた型の折檻を受ける、特にアリ
スはこれを契機に徹底的に責めら
れる、第二部では金持のサディス
トへ無理に嫁されたアリスは初夜
の日から激しい汚辱と折檻の泥沼
の中へ呻吟させられる、脱出の企
図が発覚した事から継母と夫の二
人から繰り返えし受ける苛責、そ
して哀れなアリスは、

奇譚クラブが

愛読者の皆さまに捧げ
る最大のプレゼント

括目して

お待ち下さい!

第一部		第二部	
純潔教育	貞操教育		
序章	第十二章 初夜		
第一章 秘密の本	第十三章		
第二章 最初の犠牲	第十四章		
第三章 第二の犠牲	第十五章		
第四章 継母の楽しみ	第十六章		
第五章 アリスの檻禁	第十七章		
第六章 甲斐なき同情	第十八章		
第七章 マリアの誘惑	第十九章		
第八章 小間使の折檻	終章		
第九章 客間の教育			
第十章 マリアの結婚話			
第十一章 継母の最終教育			

◎日本唯一の特色ある雑誌としてその文獻的
価値を高く評価されて居ります本誌は是非毎
号欠号のないようお揃え下さい。

◎直接購読者募集◎

三月分三冊(送料共)三百円
半年分六冊(送料共)六百円
一年分十二冊(送料共)壹千二百円毎月売切れにて御迷惑をかけていますが、御
買渡れのないよう是非直接購読の御申込下さ
る様お待ち致します。半年分御申込の方には
責められる女の写真二枚一組一年分御申込の
方には五枚一組サービス品として贈呈申し上
げます。

奇譚クラブ

第七巻 第十二号
毎月一回一日発行

十二月号 定価 百円

昭和二十八年十一月三十日印刷
昭和二十八年十二月一日発行

編集人 箕田 京二

印刷人 上田 庄之助

発行人 吉田 稔

発行所 曙書房

大阪府堺区内菅原通四ノ三〇

◎本誌所載の記事、挿絵、写真、其の他一切
の無断上映、上演、転載、脚色等を固くお断
り致します。